世界樹の迷宮?　～百日間まってやる～

しゅん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
世界樹の迷宮？　～百日間まってやる～

【Ｎコード】
Ｎ０１４８Ｖ

【作者名】
しゅん

【あらすじ】
刺激のほしい読者向け。次回更新１２月下旬

ある朝の出来事

目が覚めると少女は船の上にいた。

船はちょうど湖の中心にぽつんと浮かんでいる。

少女は目をこすりながら辺りを見回すが誰もいない。

夢の中なのかと思ったが、船の揺れと床板から伝わる水の音がそうではないと告げる。

いつもならベッドの温もりの中にいるはずなのだが。

寒い風が吹き少女は身体を縮こませた。

朝日はかすかに昇り、湖から見える風景は未だ霞んでいる。

なぜ自分は船にいるのだろう。

父と母はどこへいったのだろう。

こみ上げてくる不安から少女は泣き始めてしまった。

後に少女は彼女自身が最後の生き残りであると知ることになる。

第一章　海都への航海

引戸式の窓から四角く切り抜かれた西日が入りこみ、部屋の中を照らしていた。

隙間無く張られた壁からは一切の光も漏れることは無く、大海原と船を立派に隔てている。

甲板から船底への階段を下りきってたどり着くこの空間には日が届かず、窓だけが外日を繋ぐ頼りであった。

そこからの光だけでは四隅は照らせず、影のようにカビが繁殖し何やら不潔な臭いが漂っている。

海流の影響だろうか、はたまた大陸に近づいているため風が強く吹き始めているのか、足の裏だけでしか感じ取れなかった船の揺れが、次第に強くなっていた。

おそらく風の影響だろう。

窓から流れる空気がカビの臭いをやわらげ、この木造船を形作るアテの臭いが届き始めていたのだから。

もっとも、彼女達がアテという木を知っているとは思えないが。

この船は客船ではないが、乗船料さえ払えば海都へ送り届けてもらうことができる。

滞在するのは物置部屋のような一室だが。

椅子や机はなく、代わりにどす黒く変色した樽が並べられ、風が止めばカビの臭いが鼻に届く。

そんな一室に二人の新米冒険者が滞在し、海都への到着を待っていた。

否、新米という言葉は正しくないかもしれない。

なぜなら彼女達は一度も迷宮に立ち入ったことも、魔物と戦ったこともない、新米以前の冒険者だからでである。

心に余裕があるのか、それとも海都に存在する迷宮を見くびっているのか、彼女達は樽を卓上代わりにゲームをしていたのだった。

これからのお話の展開を知っていれば、こんなに落ちついてなどいられないだろうに…。

まぁ、兎にも角にも、第一章をお楽しみください

Ｎｏ１　パイレーツとファランクス

「海都にはいつ頃到着だったかな?チェック。」

「明日の早朝です。」

この船に乗り五時間が経過した頃、二人はこの部屋に置かれていたゲームを見つけそれに没頭していた。

「そうだったな、チェック。」

一人は何の迷いも無くゲームを進めていた。

「そうきましたか。」

相手の女は次が浮かばず、ゲーム版の戦場を睨み始める。

「チェックがかかっているのに考える暇などないぞ。」

「いえ…。この一手で状況が変わるかもしれませんし…。」

「そうか（どこからみても変わらぬと思うが…）」

と。

その様子を見た女は目線を窓へ向けた。

それは部屋に一つだけの四角い窓であった。

彼女の蒼い目に、薄暗い太陽が沈みかけている姿が映っている。

もう夕刻も過ぎようとしている。

今日という『一日目』が終わろうとしているのだ。

（焦っても仕方がない。）

焦る心を抑え、彼女が視線を戻すとゲームが進んでいた。

「整いました。」

悩んでいた女はどこか誇らしげな顔をしていた。いかにも「形勢逆転」と言わんばかりの表情である。

しかしその努力も虚しく、「チェック・メイト。」の声と共に駒は動き、ゲームは終わりをむかえるのだった。

「えっ？」

渾身の一撃が砕かれ（つかの間の回避だが）、腑に落ちない顔で兵士達を睨み始める。

自分の黒い陣営に残っている兵士はたったの二人、うち一人はゲーム開始から動くことはなかった。

「頭が固いぞ、ファランクス？これで私の連勝だな。」

「…。」

ファランクスと呼ばれた女は腕組みをし、ついにはうなり始めるのだった。

何が自分を敗北に追いやったのか大真面目に考えている。

しかし、いくら考えても無駄なことは彼女自身がよくわかっていた。

これは才能の違いなのだと。

考え込んでいる女は『ファランクス』。

全身に防具をまとい、槍の扱いにも長けた攻防一体の冒険者である。

銀の長髪をツインテールにしばり、凛としたその表情は相手の女よりも少し年上であると感じさせる。

対して、そんな彼女を笑顔で見つめる軽装の女。

皮のベストに細いウエストにきっちりとまかれたベルトと、肩から腰にまかれたコートベルトには拳銃とサーベルが差されている。

その姿から、彼女が『パイレーツ』と総称される冒険者であるとうかがいしれる。

海賊帽からこぼれたブロンドの髪と蒼い瞳、まるで人形のような整った顔立ちに、どこか幼さの残るその表情。

ファランクスよりも年下だろうか。

ちなみに冒険者同士は、互いを本名で呼び合うことはない。
戦いの際、自分が徹する役割を常に自覚するため、職業名で呼び合うのが常識だった。
彼女達にも本名があるが、それは語られることはないだろう。

「早く海都に到着してほしいものだ。」

ゲームに飽きたようにパイレーツが言った瞬間、部屋の揺れが一瞬だけ大きくなり、続いて錨が海面へと投げられる音が聞こえた。

「着いたのか？」

「いえ。おそらく他の都市へ立ち寄っているのでしょう。」

交易船は途中でいくつかの都市へ寄り海都に到着する。
そのために停止したのでしょうとファランクスが告げる。

「少し外へ出てみたいな。」

退屈しのぎと、滅多に見られなかった外の世界を見ておきたいのだろう。
パイレーツが立ち上がると「お供します。」と船の揺れをさらに大きくしそうなファランクスが続く。
部屋のドアを開けたパイレーツが、「甲板にでるのは部屋を出て右だったか？」と聞き、すかさず「左です。」とファランクスが案内

係のように答える。

年下にみえるパイレーツに対し、ファランクスは当然のように敬語で話していた。

彼女達の出生を語るのはもう少し先になるが、彼女達が『海都という国へ行き、そこに存在する迷宮へと挑む』という事実に間違いはない。

Ｎｏ２　悪い予感

彼女達の乗るこの船。

様々な国で積み荷を運ぶ交易船である。

季節風を利用し、北は彼女達の祖国から、南は海都まで海を駆ける。

そして現在『ウガリート』という交易都市に停泊し船の側面に開かれた小窓（開の口）から積み荷がのせられている最中であった。

階段を上がり甲板に出ると潮風が二人の頬を撫でた。

彼女達の故郷と違い、夕刻でも空気が暖かい。

暑さのあまり上半身裸で作業する船員がいることに驚いていることだろう。

そして停泊している船体の向こうには、壁が並んでいた。

オレンジの光を反射させる白い壁面に丸い柱が組まれた壁が島の末端まで広がっていたのだ。

そして壁の真ん中には鈍く光を反射させる巨大な門が設置されている。

防壁のような門のおかげで都市の風景は見えないが、屋根瓦のしか

れる建物の頭がかすかに見えていた。

赤い瓦の天辺には、輝くしゃちほこがかじりついている。

『ウガリート』

海都の北西に位置する交易都市。

独自の海域を持つこの都市では、唯一無二の水産物を手に入れることができるため諸外国への輸出が盛んな都市でもあった。

なのだが。

「変わった都市ですね。どんな人達が住んでいるのでしょう？」

「変わっている、というよりも変な都市だな。あの屋根の魚はなんだ？」

「魚にしては美味しくなさそうですが。」

「私の好みではないな。」

ウガリートはボロクソに言われていた。

若い二人にとって初めて見るものだから無理もないが、もう少し言葉を選んでほしいものだ。

「出港――。」

船員の声が甲板上に響く。

不味そうな魚から目を背けたファランクスが、おもむろに働き始める船員達を見ていた。

観察してみると船員達はかなり堕落しているように思えた。

出港と指示がとんだにもかかわらず、柱に寄りかかって談笑している者や、酒を飲んでいる者までいる。

船乗りとはそういうものなのだろうか。

ファランクスにはわからなかった。

そして歩くたびにギシギシと不気味な音を立てる甲板。

そびえ立つマストもどこか頼りなさげに見えた。

（事前に船を確認しておくべきだったか。）

後悔しても途中でおりることはできない。

ウガリートを離れれば、船は再び大海原に孤立するのだ。

不安をかき消したい思いもあり、ファランクスは海図を読んでいる一番まともそうな船員に話しかけ、これからの道のりを訪ねるのだった。

「明日の早朝には到着する。ここから海都まで海流の都合で早く到着できるからな。」

「これから他の国に立ち寄る予定は無いのですか？」

「今のが最後だ。」

「そうですか。」

と答える彼女に船員が話を続ける。

「気になっていたが、今時の海賊（パイレーツ）は船も持たないのか？」

「え？」

「まぁ、海賊なんて昔の話か。あと、あまり甲板に顔を出すな。冒険者って連中は、何かと危険だって噂だからな。」

よく観察してみると上着に隠れたこの船員のベルトの一部分がふくらんでいる。

おそらく武器を仕込んでいるのだろう。

「そもそも女を乗せること自体、縁起が悪いのに。」

「無礼者！」

と怒鳴りたいところだったが、その衝動をなんとか抑えた。

今の自分達は祖国を離れ、地位もないただの冒険者。

それに特別扱いされることこそパイレーツが納得しないだろう。

無礼者は足早にその場を去ると、談笑中の船員達に下知をとばした。

「進路は南へ！両網で帆を張り直せ！手縄を引いて帆桁の向きを変えろ！帆足を絡ませるなよ！」

錨が上げられ渡し橋も撤去されると、足下の揺れは次第に大きくなり、船員達の速度も上がり始めた。

ここにいては邪魔になるかもしれない。

「部屋に戻りましょうか？」

ファランクスがパイレーツに振り向くといつのまにか、彼女は遠く離れた船首の方に立っていた。

船首にはメイン、フォアと続く三番目のマスト、弥帆と呼ばれるマストが立っている。

サイズは小さいため、追い風は弥帆にぶつかることなく流れていく。加速のためではなく、船の針路（進路）を調整するためのマストであった。

その柱の一つ奥には木製の滑車が設置され、メインマストからのびた縄が車輪部分に巻き付いていた。

パイレーツは滑車のさらに奥、船首から棒のように突き出た船頭の付け根に立っていた。

ファランクスは走り回る船員達から体をそらし、パイレーツへと歩み寄る。

半分近く太陽は沈み、海面に見えたサンゴや孤島も見えなくなっていた。

ファランクスは黒い背中へ、刺激を与えないように優しく声をかけた。

「明日の早朝には到着するとのことです。」

船頭から振り返ったパイレーツの表情が少し暗く見えた気がした。

「お疲れですか?」

「疲れてはおらぬ。」

と、海賊帽をかぶり直し彼女は「似合うか?」とファランクスに聞いた。

大真面目な顔で頷くファランクス。

そんな不器用な表情を彼女は笑った。

「ハハ。顔に出ているぞ。」

言うと再び前方を見、彼女はこう言ったのだった。

「無事に海都へ着けばいいが。」

生暖かい風が二人の頬を撫でた。

ゴボン、ボコボンと、彼女達の足元では三角に突き出た船首に、汚れた海水が衝突している。

「悪い予感がするのだ…ファランクス？」

今まで共に生きてきたファランクスにとって彼女の予感は説得力を持っている。

何か不吉なことが起こる前触れなのだ。

「ご安心を。何があっても私が守ります。」

「うん、頼りにしているぞ。」

鎧に差した槍を確認し、ファランクスは前を通り過ぎようとするパイレーツの背中に続いた。

Ｎｏ３　海都の冒険者

「失礼しているわよ。」

ドアを開けると先程の国で乗船したのか、一人の女が部屋に座っていた。

二人から顔を背けると、女は抱えていた布袋の中から手のひらサイズの金属を取りだし布切れで磨き始める。

「何者だ？」

女に言い放つファランクス、随分と警戒してしまっているようだ。

（『何者だ？』って聞かれても。ただの乗客よ？）

威圧してくる鎧の少女に、女は苦笑いで答えていた。

事情を知らない女にとってみればいい迷惑であるが、ファランクスはパイレーツの言葉が頭から離れないのだろう。

女は二人よりも年上の容姿とそれを強調する肌の露出の多い服装。

腰まで伸びた赤毛に、ベルトやズボンにはいくつものポケットが縫われそれら全てが膨らんでいた。

磨いている金属は何かの部品だろうか、少なくとも武器ではなさそうだが。

そしてそれを磨くその手と腕は、少々太めでしっかりとしている。

「そなたも海都へ向かうのか？」

不動のファランクスからパイレーツが割って入る。

そんなところねと返すと、女はさらに袋から別の金属を取りだす。

「アタシはこのボロ船で海都へ帰るところなのよ。」

ボロ船とは少々失礼な発言である。

もし船員が聞いていれば孤島に置き去りにされただろう。

「ハハハ。そうだな。船員は怠け者ばかりだったからな。」

パイレーツは臆することなく、彼女の正面に座った。

その一方で、ファランクスは彼女の行動にオロオロと困惑している。

「ところでそなたは先程、『海都に帰る』と言わなかったか？」

女が熟練の冒険者であることを直感し、パイレーツは女へ問うた。

「冒険者とお見受けするが。」

「そうよ。」

と女は赤毛の長髪をかきあげ答えた。

「アタシは海都のギルドの一員なのよ。さっき通った国に用事があって一人で出張していたの。」

「ギルド？」

パイレーツはさらに女の話に興味を持ち、その姿を見て、女は「やっぱりね」と呟いた。

「あんた達初めて海都に行くのね。どおりで可愛い顔していると思った。」

「何？」

「待て、落ち着け。」

パイレーツがファランクスを落ち着かせる。

「何も盗りゃしないわ。あなたも座ったら？」

「そうだ。安心しろ？」

その言葉にようやくファランクスは部屋のドアを閉めるのだった。

日が沈み、月明かりが頼りになる時間となっている。
船は海流を頼りにここからさらに南を目指す。
「大丈夫でしょうか。」
と船首に立っていた新米が口を開いた。
隣で見張りをしていた船員に「何が。」と聞かれ彼は言葉を続ける。
「海賊（パイレーツ）なんて乗せてよかったんでしょうか？」
それを聞いた見張りは、狭く拡大された視界から目を背け、隣で不安気な顔をする若者を見た。
「安心しろ。海賊が略奪で飯を食うのは昔の話。今じゃ陸地の迷宮に挑む連中ばかりさ。」
「そうなんですか？」
新米は目を丸くした。
驚くのも無理はないだろう。
伝承や書物の中では、海賊（パイレーツ）とは、略奪行為の他、財宝を探し航海する人間達として描かれるが、現実は違う。
彼らは自国から追い出され、または身分が低いため、まっとうな職

を選ぶことができず海賊になる者が多いのだ。

そして海賊に身をおいた彼らが渇望したのは新大陸。

階級や国に支配されることのない、新たな世界を目指したのだ。

しかし現実はあまくない。

国家レベルでさえも難儀する新大陸の発見を、学のない下級層の彼らにできるわけもなく、略奪行為で生計を立てるしかなかったのだ。

海賊の数が減った今ではそうした事実を知らない者が船乗りにも多い。

「海賊なんていわば職につけない人間の集まりだ。昔は『略奪』しか仕事がなかっただけで、今は『冒険者』っていう仕事が選べるからそれに就く連中がほとんどなのさ。」

新米から顔を戻し、彼は再び望遠鏡をかまえた。

「略奪なら捕まるが、冒険者として迷宮で魔物と戦うなら法には触れないからな。」

略奪の他に職があり、それが合法であるとすれば彼らは喜んでそれに従ずるだろう。

それがこの世の現実であった。

「それより問題なのは、あいつらが全員『女』ってことだ。北で乗せたガキ二人と、ウガリートで乗せた冒険者も女だったろ?」

「女、でしたけど。あの人も冒険者ですか？」

「見てわからなかったのか。冒険者だよ。あのどでっかい荷物から察するに、職業は…。」

言葉の途中で見張りが止まった。

「なんです？」

新米が聞き返すも耳に届かないのか、口を開いたまま遥か遠くを覗いている。

しばらくの時間が流れ、船体の軋みが二人の間に流れると、見張りは「見間違いか。」と呟いた。

新米が聞くと水平線に映る影、灯台の影がいつもと違ってみえたというのだ。

このまま南に進めば灯台が立っており、新米もその存在を聞いたことはあった。

そして灯台を過ぎればじきに海都に着くということも知っていた。

「灯台も改築したのかもしれませんよ？」

「ありえないな。あの灯台、今は廃墟になっているはずだ。」

見張りは望遠鏡を新米に託した。

「一応報告に行く。」と言い、船尾に建つ船員室へと向かい始めた。

「あの、どうして女を乗せちゃまずいんですか？」

と離れる背中を呼び止めると、彼は肩越しに振り返り「女を乗せると災いを招く。」と強張った表情で伝えた。

迷信のようなことを真顔で語る先輩に、新米は再び目を丸くしたが、また見張りを始めるのだった。

「ギルドっていうのはパーティーの事よ。かっこよく言えば迷宮を制覇するために同じ志を持った仲間の集まりね。」

最初から興味津々のパイレーツと、肩に力の入っているファランクスを前に話は続いていた。

「あんた達だって仲間同士でしょ？」

もちろんだ、と女の質問にきっぱりと返答するパイレーツと、ぎこちなくファランクスも頷く。

「海都に行けばアンタ達の同業者もたくさんいるわよ。」

同業者、つまり同じ職業ということだ。

海都に集う冒険者には様々な職業が存在する。

戦う事に優れた職業もあれば、仲間を支援することに長けた職業、中には財宝を見つけ出すことのみ優れたものもある。

それらを全て合わせると十二職といわれている。

「ならば私の同業者もたくさんいるのだな？」

「・・・うん。まぁね。」

女は磨く金属に視線をそらした。

パイレーツを自称する目の前の少女だが、あまりにも不自然過ぎると女は思っていた。

ブロンドの髪に蒼い瞳、そして人形のように整った顔立ちでは、海賊にしては不自然すぎる。

「たしか、迷宮探索は五人で挑むことが奨励されているのだったな？」

再び顔を上げた女に、パイレーツは問うた。

「そうよ。多すぎず、少なすぎず。そうすると五人で編成するのが一番バランスをとれるのよ。」

「五人、最低でもあと三人ということか・・・。」

「すぐに仲間が見つかればいいのですが。そう簡単には見つからないでしょう？」

「そうね、簡単にはいかないわ。」

「なに、迷宮に挑み功績をたてれば自然とついてくる者はおろう。」

「それもそうですね。」

意気込むパイレーツの言葉にファランクスが答え、互いに祖国での努力を思い出していた。

しかし。

「死ぬわよ。」

女の言葉に二人はハッと息をのんだ。

彼女は部品を磨くのを止め、冷たい眼差しで二人の目をじっと見つめていた。

「初心者二人で迷宮に挑むことは自殺行為、」

女は磨いていた金属を袋へしまった。

「だから迷宮に入る前に、雇ってでもいいから数を集めなさい。」

袋の口を閉じると緊張を解すためか少し笑ってみせるのだった。

『初心者』。

いかに訓練した気でいようと、迷宮に入った事が無ければ『初心者』

なのだ。

「キツい言い方してごめんね。死亡フラグを立てている新米を見過ごせなくて。」

「・・・いやいいのだ、おかげで地に足をつけることができた。」

「あらあら、それは先輩冥利につきるわ。」

「懐かしいなファランクス？」

「…。」

女が聞き返すと彼女はこう答えた。

「昔、師匠達から冒険談を聞かせてもらっていたのだ。」

「師匠達？」

「海都とは別の国の迷宮に挑んだお方で、こうして二人で座って話を聞かせてもらっていたのだ。」

「ふ～ん。別の迷宮ね・・・。」

「あの！」

「どうしたファランクス？」

突然声を上げた彼女は女を見つめ「申し訳なかった。」と女に頭を下げた。

「何が？」

「その、無礼な態度をとってしまい…。」

「ふふっ。いいのよ。気にしてないから。」

「貴女がいなければ、私達・・・。」

命知らずに高揚するパイレーツと、それに同調したファランクス。

女と話さずに海都へ到着し、そのまま迷宮へ行けば彼女達は命を落としただろう。

「そなたは考え過ぎたぞ？」

「・・・。」

「ふ～ん。いいコンビね。」

女は笑いながら、部屋の隅に丸められていた毛布を引き寄せた。

「冒険談はもうこのへんにして、そろそろ休みましょうか。」

と天井のランプに手を伸ばすが、「待ってくれ。」それをパイレーツが止めたのだった。

パイレーツは帽子をかぶり直すと窓から外を眺め、鋭く目を光らせていた。

どうしました？

どうしたのよ？

と二人の言葉をよそに「あれはなんだ。」と窓の外を指さした。

その先には垂直にそびえ立つ塔のような影が浮かんでいた。

ひっそりと、真っ暗な海の孤島に立っている。

「スカンダリア灯台よ。今は使われてないけどね。」女が答え「よく見つけたわね」と続けた。

『スカンダリア灯台』

海都の北に位置する灯台であるが、現在は使用されておらず明かりを発する物は何も無かった。

にもかかわらずパイレーツは灯台を見つけたのだ。

それと同時に別の影を。

パイレーツはゆっくりと振り返り二人へ言った。

「外に何かがいる。」

「確かですか？」

（悪い予感がする。）

その言葉がファランクスの脳裏をよぎった。その時、船内全体が軋み、部屋が揺れ始めたのだ。

そして次の瞬間、轟音が三人の鼓膜を叩いた。

船が大きく傾き、足下が崩れるのと同時に、部屋に置かれていたあらゆる物が一斉に倒れ始める。

反射的にファランクスはパイレーツの体を抱きよせ、そのまま揺れが鎮まるのを待った。

窓からは海水が蛇のように侵入し彼女の鎧を濡らした。鎧から滴る冷たい海水がパイレーツの体に伝わり、床の上を流れる波が倒れた樽にぶち当たる。

しばらくの間、不気味な軋みは続いたが、船の揺れは次第に弱まっていった。

「臭いわ、この毛布。」

女は毛布で身を包み、難を逃れていた。

「鎮まったか？」

ファランクスがゆっくりと起き上がる。

「ご無事ですか？」

「ありがとう、大丈夫だ。それよりも、」

自由の身となったパイレーツは女に問う。

「そなたはなにか知っているだろう。あの灯台には何かあるのだな。」

「確かなことはわからないけど。でも察するに・・・。」

女は倒れた自分の荷物を抱えその問いに答えた。

パイレーツは答えを聞くと「甲板に出るぞ！」と水浸しの床を走り部屋を出、彼女の背中にファランクスが続いたのだった。

「たいした直感ね。」

二人の背中を見送ると、女は樽の上に荷物を広げ始めるのだった。

Ｎｏ４　真夜中の襲撃

甲板への階段を駆け上がろうとした、まさにその時。

「キィ――――――――――！」

ナイフで耳奥を突き刺し、剣先が頭へと届くような超高音が襲いかかった。

たまらずパイレーツが膝をつくがファランクスが支え、かろうじて立ち上がる。

「なんでしょうか、今の音は？」

「いや音ではない！」

だがこの音、ただの偏頭痛ですむようなものではなかった。

立ち上がるパイレーツの後ろで、支えていたはずのファランクスが突如、膝をついたのだった。

「ファラー！」

彼女に駆け寄り見開かれた両目を見ると、そこにはいつもの頼もしい顔が消えていた。

苦しそうに息を吐いているが、それでもパイレーツに気づくと息を荒らげながらこう言ったのだった。

「ご無事……で？」

聞き返してくる彼女の手を握り「私は大丈夫だ！自分の心配をしろ！」とパイレーツは命令する。

大丈夫と言ったがそれは嘘であった。

彼女も先程の音に危うく侵されるところだったのだから。

そこへ再び音がなる。

するとファランクスは銃声に驚く子犬のように身を縮めるのだった。

「ファランクス！」

慌ててパイレーツは彼女の頬をつかみ（半ばわしづかみ）虚ろになりかけた両目を睨んだ。

「ひ…。」

「よく聞け！」

とファランクスの両目に、蒼い瞳が映る。

「意識を奪われるな！私の声だけを聞け！」

「…はい。」

答える彼女の瞳に徐々に光が戻っていく。

「今から私の航海を邪魔する『敵』と戦う。私に危険が迫った時は守ってみせろ。先程のようにな。」

言うとパイレーツは海水に濡れた海賊帽をかぶり直し、相棒にニヤリと笑った。

「ひ、め・・・。」

「頼りにしているぞ？」

「は、はい！」

立ち上がる相棒と共にパイレーツは階段を駆け上がった。

轟音と奇声が止んだ甲板は静かな余韻に包まれていた。

月夜の静寂の中、二人は息をのんでいた。

甲板に上がれば最初に映るはずの船頭のマスト（弥帆）がちょうど柱の中央で消えていた。

周囲には木材の破片が飛び散り、船体とそれを結んでいたロープがとぐろを巻いた蛇のように滑車の上に落ち、一部は船壁をまたぎ海へ垂れ流れていた。

聞こえてくるは波に揺らされ不気味に軋む船体。

そしてそれにまぎれ、かすかなうめき声が聞こえる。

船員は皆うずくまったまま動かず、ある者は頭を抱え、ある者は苦しそうに息を吐き、皆が皆、怯えているのだった。

そこへ再び奇声が聞こえた。

パイレーツは痛みをこらえ、そしてファランクスは意識を保ち夜空を見上げた。

巨大な影が星々の輝く空をよぎった。

それを捉えるとパイレーツは「怪鳥サエーナ。」と女が教えてくれた名前を唱えた。

『怪鳥サエーナ』

この海域に生息する、鳥の魔物と女が教えてくれた。

「鳥にしてはいささか大きいな。」

「あれが元凶ですね。」

「一刻も早く船を動かしたいが。」

「女だ・・・。」

声に気付き振り返ると、船員達がゆっくりと立ち上がり始めていた。

一人、また一人と、ゆっくりとその数は増えていく。

ある者は震える足腰で、ある者は船壁にもたれるように、そしてある者は落ちていたマストの破片を手に立ち上がった。

「女がいる…。」

「・・・！」

「あいつらを乗せたから、・・・船が呪われた。」

近づく彼らの足取りは、上から糸で吊り下げられた人形のように揺れている。

そしてその眼は、虚ろだった。

「何を言っている？」

「ファランクス・・・！」

そこへ追い討ちをかけるように怪鳥の奇声が響くと、それが狼煙となるのだった。

「あいつらを海に叩き落とせぇ！」

咆哮と共に一人が走り出し、それに続き幾人も彼女達に押しかける。

「く・・・！」

「ファランクス！」

聞き取れない罵声と共に船員が襲い掛かってきた。

次の瞬間、男はもといた方向へ吹っ飛ばされ、後ろに続いていた者達を巻き込みながら床へと転がるのであった。

「ご安心を。斬ってはいません。」

いつのまにか、鎧の背中にあった槍が抜かれていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・！！！！！」

倒れた船員をよそに次々と敵は向かってくる。

「殺すな！」

「しばらくお待ちを。」

ファランクスは槍を持ち変え水平に構えると彼らを迎え撃つべく走り出す。

槍と鎧の壁に押し戻される船員達、重装備の前に小手先の攻撃は一切通用しない。

その間もファランクスは冷静に状況を分析する。

相手は集団、長刀の槍では接近されると不利となり、そして自らの背後には守るべき人がいる。

右足を踏み込ませ、胸の前で構えた槍を右手だけで握り、下段から大きな弧を描くように振り回すとそれにあわせ銀の長髪がクルリと船上を舞う。

そして足をなぎ払われた男達が次々とその場に倒れるのであった。

「キィ――――――――――――――――！」

しかし鳴き声をどうにかしなければならない。

マストを破壊された以外に船と怪鳥が接触したとは考えにくい。

ならばどうして、怪鳥の襲撃と共に船員が豹変したのか。

考えるまでもない。

『鳴き声』。

魔物の中には肉体ではなく五感を攻撃する系統もいる。

（奇声で船員達の意識を奪っている。）

祖国で学んだ知識をもとに策を練るパイレーツだったが、そんな余裕はなかった。

彼女の目に一人の船員の姿が映った。

不用意にファランクスに向かう船員とは違い彼は、距離を保っている。

そしてベルトからある物を取りだした。

その光景に奮闘するファランクスは気づかない。

船員が取り出したもの、それは長距離から相手を殺傷できる武器。

その船員自身が自衛用として所持していたものだった。

その正体がわかった瞬間、彼女は腕を走らせベルトに差したグリップをつかんだ。

つかむと同時に、親指で撃鉄を起こし、弾装を回転させ、指の付け根を目標へ突きつけ標準を合わせる。

わずかに彼女の方が早かったが、相手も標準に目を合わせていた。

男達と、重い足音の中に二発の銃声が聞こえた。

それを聞きファランクスと男達の動きにわずかな迷いが生じ、銃声が鳴ったその刹那、甲板は静寂に包まれた。

銃からは硝煙が立ち上っている。

一発目は彼女の銃声、船員の銃を撃ち落としたもの。

そして二発目、それは撃ち落した銃を破壊するために放たれたもの。

二発とも彼女の手元でなったものだった。

「全員、静まれぇぇぇ！！」

彼女の声が甲板に響き本当の静寂が訪れるのだった。

「……？」

「……痛ぇ。」

「あれ…？」

船員達が正気に戻り始め、倒れていた者も起き上がる。

ファランクスを含め船員達は何事かと銃を握るパイレーツを見つめる。

「よく聞け！先刻から船は怪鳥サエーナによる襲撃を受けている！」

聞き逃す者がいないように船員達の目をしっかり見つめパイレーツは言葉を続ける。

そして破壊されたマストを指差した。

船員達は彼女の指差す方へ目を向けると、そこで初めてこの状況を理解したのか、ざわつきが大きくなるのであった。

「このままではこの船は怪鳥の餌食となる！奴と戦う最中に船を整え、スカンダリア灯台を一刻も早く離脱するのだ！」

「怪鳥・・・。」

「魔物が・・・。」

「お、・・・船は交易船だ、戦うことなんてできっこない、」

不安がる男達を前に、パイレーツは鼻で笑いこう続けた。

「姑息な手を使う魔物とは我々が戦う！そなたらは船乗りとしての使命を果たし、船を発進させよ！」

少しずつ船員達の目が鋭くなっていくのを見届けると、息を整え、「この船はそなたらの誇りであろう？」と悪戯っぽく唇を吊り上げる。

「・・・。」

その場の空気が変わったように感じたのはファランクスだけであろうか。

「そなたらの誇りを傷つけられた屈辱は、私が十二分にして返してやる。」

とニヤリと笑ってみせるのであった。

「さあ、船を発進させよ！」

彼女の言葉が終わると同時に船員達は「応！」と一声上げ走り始めた。

オールを持ち船底へ駆け込む者、破壊されたマストの断片を船体から撤去する者、マストの手縄を引き始める者。

襲撃を受けた船は復活し始めたのだ。

だが一人の船員だけが甲板上に留まっていた。

本来ならば彼がこの船を指揮するはずなのだが。

「あんたは？」

先程銃を構え、ファランクスの中で『無礼者』として認識されている男である。

「私か？私は海都へ向かうために乗船していたのだ。乗船料を払ったのだから、船を動かしてもらえるか？」

「・・・。」

「気にすることはない。そなたは誰も傷つけていないのだ。」

むしろ、彼女が彼を傷つけたのだ。

「…ああ。」

彼女の言葉に安心した表情を見せ、申し訳ないよう一礼すると船底へと駆け込んでいった。

もしかすると混乱時の記憶を覚えていたのかもしれない。

「お見事でした。」

とファランクスが安堵の笑みを浮かべて言った。

だがパイレーツは複雑な顔をする。

握っていた拳銃を突き刺すようにベルトへしまうと、「この力に頼りたくなかったが。」と呟いたのだった。

しかし背に腹はかえられない。

ここで船が沈めば、旅立ちの意味もなくなるのだ。

気持ちを整え、パイレーツは恨めしそうに空を見上げた。

「奴はこのまま見逃してはくれないだろう。」

サエーナはまだ船上を飛行しており、船体の被害状況では灯台から離れるにはかなりの時間がかかる。

『戦う』と船員達に言ったものの、空を飛ぶ魔物にどうすればいいのか。

もちろん手元の銃では到底届くわけもない。

「大砲のような強力な飛び道具があれば、どうにかなるかもしれぬが…。」

と呟くと、「あるわよ。」と足元から女の声が聞こえてきた。

二人が振り返ると、身長よりも長い筒を背負った女が階段を上ってきた。

「そなた…。」

「『バリスタ』？」

「あら。私の職業名を知ってくれていて光栄ね。」

『バリスタ』

迷宮探索を許された十二の職業の一つ。

巨大な砲（銃）を背負い後方から射撃を行う職業である。

その威力は冒険者の武器でも一、二を争うがその反面非常に隙が大きく扱いが容易ではない。

長距離狙撃を得意とする者、己の足を頼りに至近距離で魔物に縦断を浴びせる者、戦闘スタイルは様々だが、幸運にも、彼女は前者のようだ。

「ここからはアタシも参加するわ。」

ＮＯ５　狙撃せよ

夜の大海原。

その中で一隻の船を探すことは、目隠しをしたまま砂場に落ちた金貨を探すようなものと言われる。

では闇夜を飛ぶ怪鳥を探す難易度はいかがなものか。

そして探し出した後に、撃ち落とす難易度は。

それを半壊した船の上で実行しようとする奴らがいた。

「待たせてごめん。加勢しようにも、いろいろと時間がかかるのよ、アタシのエモノは。」

彼女の右腕から肩にかけては手甲のようなサポーターが施されている。

「持ち合わせが小型サイズだけど、あの鳥を撃ち落とす威力はあるわ。」

小型サイズとは言うものの、背負った砲の大きさは二百センチ近くあるが。

バリスタは船尾の階段を駆け足で上り始め、二人もそれに続いた。

船尾は甲板よりも高く設計されておりここに立てば船全体を見渡す事ができる。

バリスタはさらに船尾に建てられていた船員室の屋根へと軽々と登る。

「大丈夫か？」

登るのに苦労するファランクスは、パイレーツの手をかりることでなんとか登っていた。

船上での狙撃は楽なものではない。

水平かつ高い場所が少なく、さらに不規則な波の影響で狙いがズレてしまうのだ。

運良くバリスタ達が登った屋根は水平であり、そして皮肉にも船は停止していたため、足場も安定していたのだった。

「スポッターが必要よ。もう一人こっちに来て。」

彼女は双眼鏡をパイレーツに差し出すと、ゴーグルを装着し背中から砲を下ろし狙撃準備に取りかかる。

「何かあっては危険です、私が行きます。」

ファランクスが双眼鏡を受け取ろうとした、しかし。

「キャアアアアアアアアアアアアアア！！」

これ迄よりも強烈な奇声が海上に響いた。

（まずい！）

再び槍を構えるファランクス。

「「「おおおおおおおぁあああああああ！」」」

甲板にいた一部の船員が豹変し、正気であった者達は彼らを抑えようとするが、そのうちの数人が船尾へと押し寄せて来るのであった。

「案ずるな、私はパイレーツだ！」

ファランクスに笑ってみせる彼女。

船上で戦うパイレーツは敵の位置を探るのが常であり、そのため狙撃のサポートにも彼女が適しているはずだ。

「しかし・・・。」

「急いで！」

バリスタの声に二人はそれぞれに駆け出した。

「御武運を。」

先には行かせまいとファランクスは屋根を飛び降り、階段を駆け上がる船員へ向かった。

彼女の背中を見送りパイレーツは狙撃手の側へと駆け寄った。

船尾へと細長く伸びた船員室の屋根。

足元の一枚下は船員達の居住室である。

客人を船底の物置に閉じ込めておきながらこんな広いスペースで暮らしているとは。

ちなみに下の部屋にはマストの帆桁を上げ下げするための、回転柱（ろくろ）が設けられている。

彼女達の足元には穴が開けられ、それらにはマストの頂上から滑車を通して下ろされた縄が通り、穴に通された縄を回転柱で巻き上げて帆を張るのだ。

そのため屋根の回りには幾重にも縄が張り巡らされ、巨砲を無駄に動かせる広さは無い。

標的を見つけるまで、スナイパーはじっと待機し続けるのだ。

「怪鳥の位置を探って、見つけたら方位を教えて。」

バリスタは屋根の上に立て膝をついてしゃがんでいた。

装備が施された右手を斜め前に伸ばし、指先をグリップに引っかけている。

パイレーツは双眼鏡と肉眼を交互に使い怪鳥を探すが、月明かりの下だけでは確信できる影は簡単に発見できない。

さらに幾重にも張られたロープが彼女の視界を遮っているのだ。

再び怪鳥の鳴き声が響き、下からはファランクス達の怒号が聞こえる。

「ファランクス…。」

「集中しな。しくじれば全員あの世行きよ。」

屋根の上から周囲を見渡すが何も見つからず、それどころか月明かりだけでは夜空と海の境目も判別することすら難しい。

焦ってはいけない、と自分に言い聞かせるが双眼鏡を握る手は汗で滑り視界も定まらなくなっていく。

もしもこのまま発見できなければ。

「キィ――――――――――――――!」

焦る彼女を救ったのは奇声だった。

それを頼りに双眼鏡を向けた。

方向が概ね正しくても高度が合わなければ敵を見逃してしまう。

ひたすら視界を上下していたその時、月夜に浮かぶ影が映った。

「七時の方向！」

それに聞いたバリスタは姿勢を崩さず、立て膝を軸に左へ九十度回転する。

「距離・・・およそ五百！」

そして伸ばした右腕を前に下ろし、引き金を引いた。

爆音と共に照明弾が発射され、放物線を描きながら怪鳥へ向かっていく。

目標周辺の空が明るくなると、パイレーツは怪鳥の翼の動きを確認することができた。

「奴は旋回している、左角二十度で撃て！」

「了解！」

バリスタは弾丸を薬室へ装填する、否、もう終わっていた。

「スナイプ…」

勝利を確信した彼女達。

だがそこへ、全身をなぎ払うような強烈な風圧が襲いかかってきたのだ。

船は大きく揺れ、体勢が崩れる程の暴風に狙撃のチャンスは奪われてしまう。

パイレーツはその場に倒れ、海賊帽が吹き飛ばされてしまった。

光りに警戒し、怪鳥サエーナが巻き起こした暴風であった。

証明弾の光は吹き消され怪鳥の姿は再び闇に同化していく。

「くそ！」

「なんて風だ…。」

張り巡らされた縄々が音を立てて揺れ、そして衝撃波に続き、海面から噴き上げた海水が屋根に届き、彼女達の足を濡らした。

「まだ近くにいるかもしれない証明弾を！」

「すぐには撃てないわ！」

バリスタは証明弾を撃った後に狙撃用の弾丸を装填していた。

証明弾を撃つには薬室に装填された弾を抜き、再び照明弾を装填するという面倒な手順があるのだ。

「ちっ！」

それも使用している巨砲は手動で薬室を開き、弾を装填・破棄しなければならない形状であったのだ。

その隣でパイレーツは双眼鏡を手に取り、三百六十度見回しサエーナを探すが、見えるのは辺り一面の闇とかすかに海面に残る死にゆく光だけであった。

見失ったのだ。

「高度を上げて旋回しているのかもしれない・・・。」

「これじゃ見つけても弾が届かないわ。この砲の射程はせいぜい五百。」

「・・・。」

いっそのこと船が動き出すまで遙か上空に飛んでいてほしいものだが、このままおめおめと逃がしてくれるわけがない。船が動きだせば再び襲いかかるはずだ。

「なんとか誘い出せないか・・・。」

「なに言っているのよ…。」

バカな事をと、バリスタは呆れたように言う。

その時、海原を見回す彼女の視界にどす黒い影が映った。闇夜に浮かぶスカンダリア灯台の影であった。

（灯台？）

そういえばこの灯台に近づき怪鳥が姿を現したのだったと、パイレーツは思い出した。

「怪鳥サエーナの狙いはなんだ？」

「？」

「鳥類の魔物がわざわざ真夜中に船を襲う理由は…。」

パイレーツは双眼鏡でスカンダリア灯台の影を見上げた。

直線な灯台の影を追うと頂上に丸々と膨らんだ影を見つけたのだった。

「わかった・・・！」

「何？」

「証明弾はあるか？」

「ちょっと、質問に答えなさいよ？」

「奴の巣を撃つ！」

「巣を？」

「奴は巣造りの最中だ！だから船を襲い、材料を集めようとしてい

るのだ！」

バリスタも灯台を見上げ、そして察しがついた。

「証明弾で巣を撃つ・・・。」

巣の大きさから考え、怪鳥はかなりの船を沈めたはず。船を襲うことには慣れているにもかかわらず、自分の身を案じてか奇声による攻撃しか行わない。

安全策を取る怪鳥をおびき出すには、巣に危険が迫ったと教える。

そうすれば船が自滅するのを待ってはいられないだろう。

「実弾よりも目立つ証明弾で巣を狙い、逃げるサエーナに船を襲わせるのだ！」

と指示を出すパイレーツに、バリスタは冷静に答えた。

「そうするとこっちも危険になるわね。」

バリスタの言うとおり、この作戦は諸刃の剣である。

おびき出せはするものの敵も勝負にでるのだから。

「やってくれるか？」

パイレーツから目をそらすと、バリスタは薬室の弾を外した。

そして再び証明弾を装填し、銃口の射角を上げた。

「やれなきゃ、地獄行きよ。」

そして引き金が引かれ、二発目の証明弾が灯台頂上の巣へと発射された。

天高く打ち上げられ巣へと降り注ぐ火花。決してそれは攻撃手段ではないのだが、眼下で巣を襲う相手に指をくわえて見ていられるはずがなかった。

巣のさらに上空を旋回していたサエーナは胴右の二枚の翼を振り下ろし、船へと大きく方向転換。

胴を軸にクチバシを海原へ垂直に立てると、大気を切り開き、折りたたんだ翼で風を切り急降下が始まる。

子作りのための巣を襲う憎き船へと迫り、メインマストへとクチバシを向けるのだった。

「来るぞ！十一時の方向！」

バリスタは肩から束状に下げていた弾丸を素早く薬室に挟んだ。

見上げるとサエーナのクチバシが船に迫るのが肉眼で確認できた。
速い。
一度の瞬きでサエーナの影が二回りも大きくなる。
「距離はもう五百だ！」
「伏せなさい！」
狙撃手の眼がサエーナの動きを捉え、それに合わせ巨砲を担ぐ両腕が精密機械のように静かに動く。
『狙って撃つ』を繰り返すのではない、魔物の動きと速度を予測し、一度に『撃ちつくす』のだ。
「スナイプ！」
一発目の照明弾が撃たれた時、ファランクスは己の身体を軸に槍全体をブンブンと回転させていた。
刃先を肩へと回し、柄を反対側の腰へと返す。
相手を攻撃せずに近づけさせないための防御術であった。
混乱しているとはいえ槍の痛みを覚えているのか船員達も迂濶には

近づかない。

この場を乗り切るにはバリスタとパイレーツを信じ時間を稼ぐしかなかった。

威嚇のため一歩近づこうとした時、ガゴンと、船が大きく揺れた。

予測できなかった足元にバランスを崩し、槍の動きが止まるが、一方の船員達は揺れに構わずファランクスへ襲いかかる。

（しまった！）

槍を奪われ、お返しとばかりに彼女の頭へ振り下ろされる。

（ぐぅ！）

辛うじて腕で受け止めるが、今度は背後から膝を狙った蹴りが襲う。

「う！」

甲板へ倒れる彼女を取り囲む船員達。

その時、二発目の照明弾が発射され、囲んでいたうちの数人の意識が船尾にいる狙撃手達へと向けられた。

船尾への階段へと足をかけ、バリスタとパイレーツのもとへと近づき始める。

ファランクスは地面を這い、額に迫る足をかき分け、男達の足を屋根から引きずり落とそうとするが、その手は届かず空を掴んだだけ

であった。

彼女は何もできず敵の背中を睨むことしかできなかった。

しかし幸か不幸か、それから三秒後に、船の重力が反転したのだった。

迫りくるサエーナの奇声に対抗するかのように、四発の銃声が鳴り響く。

奇声と銃声。

それらの空気の振動がぶつかり合い、弾はサエーナを、サエーナはメインマストを貫いた。

引き金を引く瞬間、バリスタはサエーナの目を見、サエーナは閃光と同時に巨砲から放たれた鉛玉を見た。

メインマストの柱頭が打ち砕かれ、船体に破片の雨が降り注ぐ。そして金属製の滑車が墜落し、甲板を砕いた。

船を通過する怪鳥の影により、一瞬だけ月明かりが遮られ船が闇に包まれる。

上空の衝撃波と共に、船頭が海面に傾き屋根から投げ出されそうになるパイレーツの片腕をバリスタが掴む。

彼女はベルトで巨砲を背負い、フォアマストの柱へと腕を巻き付けていた。

ググググ…と、これ以上ない程に船体が悲痛なうなり声を上げる。

これのまま傾けば船体に亀裂が入り、真っ二つになってもおかしくない。

張り巡らされた縄が鞭のように悲鳴をあげて飛び回ると、今度は逆方向に船尾が海面へと迫る。

だが水面をたたく力は弱まり、次第に船は元の状態へと戻っていった。

やがて揺れが収まると、パイレーツは双眼鏡を手にサエーナの後を追う。

「やったか？」

サエーナを追うパイレーツだったが視界に影は映らない。

再び旋回し始めたのか、あるいは真上から急降下するつもりか、月夜を見上げた瞬間、「灯台よ。」と隣でバリスタが見上げていた。

バリスタの目線を追うと、サエーナは両足で灯台の頂上にしがみついていた。

しがみつく身体はブルブルと震え、胴体から流れた黒い液体が尾をつたい海原へと滴り落ちていた。

そして口に挟んだ船の破片を巣の上に運び、「キャアァ…。」と悲しげな最後の奇声を上げ、背中からまっ逆さまに海へと落ちていくのであった。

ざっぷぅんと、波が立ち再び船が弱々しく揺れた。

「倒せた・・・のか？」

「生きていても飛べないわ。狙撃用と違って、あの弾は命中すると体内で炸裂するのよ。」

波紋の立つ水面はやがて収まり始め、きれいな水平性が出来上がっていく。

「終わりましたか？」

見るとファランクスが足下から顔を出していた。
パイレーツが彼女を登らせ、「大丈夫だったか」、と問うとファランクスはかろうじて笑みを浮かべた。

「バリスタ殿のおかげだ。」

「そうですね…。」

「何言っているの、あんた達のおかげよ。」

とバリスタはファランクスを、そしてパイレーツを見た。

「船は壊されるし怪鳥は遙か上空、おまけに船員は皆操り人形・・・。アタシ一人じゃどうしようもなかった。」

と長髪をかきあげる。

「あんた達がいてよかったわ。」

「バリスタさん・・・。」

「本当に大丈夫？特にアンタ、膝が笑っているわよ？」

バリスタはパイレーツの蒼い目を見て言った。

「大丈夫だ・・・。」

とパイレーツが返すが、無理をする彼女の姿がバリスタには痛々しく思えた。

初めての実戦にしては、敵が強すぎた。

それにもかかわらず、よく耐え、そして戦ったものだと、バリスタは感心すらしていた。

そこへ、

「姉さん方、あの化け物を倒してくれたのか？」

見下ろすと船底から一人の船員が顔を出していた。

船が動き出した事を確認し、バリスタはようやくゴーグルを外し巨砲から弾丸を抜き始める。

「もう大丈夫よ。下におりて休んでなさい。」

そうだな、とパイレーツは立ち上がるが次の瞬間、その場に倒れたのであった。

「アンタ・・・。」

「姫・・・。」

ファランクスが呼びかけるも彼女の反応はない。

意識を失っていた。

「姫様！」

彼女の体を抱き寄せ胸の鼓動を確認する。

「どうした、怪我人か？」

「船員さーん！手を貸して。」

バリスタが下へ向かって叫ぶ。そして「やっぱりね。」と彼女達を見つめ呟いた。

No6　海賊ごっこ

―Intermission―

『海都』。

正式名『海都アーモロード』。

国土は狭く周囲の国々との交易を行うことが歳入源という小さな力の国だ。

しかしこの国には周辺国とは相違った『モノ』が存在した。

国の中心に天を突き刺す程に巨大な樹が島全体に影を落とし、樹の根元には地下へと続く『迷宮』が存在したのだ。

この大樹と迷宮こそが、小国である海都が他とは相違うものである。

いつの時代からか、人々はその未知の迷宮へと挑み始めるのだった。

ある者は迷宮に隠された財宝と、希少な資源を求め。

ある者は謎に満ちた迷宮を解き明かすロマンを求め。

ある者は迷宮に巣くう、魔物達と戦うスリルを求め。

抑えきれない衝動に駆られた人間が世界中から迷宮へ集い、海都は繁栄していくのだった。

しかしいくら時が流れても迷宮を踏破した者は現れず、いつしか海都の迷宮は、そびえ立つ大樹にちなみ『世界樹の迷宮』と呼ばれるようになった。

今日も半壊した交易船に乗って二人の冒険者が海都にやって来た。

彼女達が海都の迷宮を挑む理由は定かではないが、彼女達の目的が財宝ではなく、はたまたロマンでもスリルでもないことは確かである。

真夜中の襲撃から半日が過ぎようとしていた。

カビの生えた部屋で待っていた二人へ、船員がパイレーツの様態を告げ、それを聞きファランクスはようやく胸をなでおろすのだった。

船員が、じきに海都へ到着するので、彼女達も上にこないかと聞くが、ファランクスは首を振り、バリスタも適当に返し船員は部屋を出て行った。

「もうお気づきでしょう。」

「そうね、決定的だったのは銃の構え方、かな。」

大半のパイレーツは銃を使用するが訓練を受けた者は皆無に等しく、我流で撃つ者がほとんどである。

しかし彼女の銃の構えは訓練によって洗練されたものだったのだ。

バリスタが二人の後を追い、甲板の様子を探っていた時にその姿を見ていたのだ。

「上手だったけど肩に力が入っていたわ。実践経験はなかったんでしょ？」

ファランクスは黙って頷く。

図星だった。

改めて『初心者』という言葉が頭をよぎる。

「まぁ、言葉使いの時点で怪しいけど。」

それについてはあまり突っ込まないでいただきたいものである。

「それと。あの娘の目を見ていたら、自然とやる気もわき上がってきたからね・・・。」

彼女の蒼い目を思いだすバリスタ。

「そんな能力があるのは、王族の血を持つ人間だけよ。」

バリスタはそこで一端話をきると、射抜くような目でファランクスを見、そして問うた。

「どうして、お姫様がパイレーツの格好しているのよ？」

単刀直入な質問に対しファランクスは黙っていた。上で休んでいるパイレーツは正真正銘、王家の血を受け継ぐ王女であった。

「王女様の暇潰しで海賊ごっこでもしているのかしら？」

「違います！」

姫を思う忠誠心から声を荒げるその護衛、ただ海賊（パイレーツ）の物真似をしたかった訳ではなく理由があった。

だからこそ今まで厳しい戦闘の訓練を受けてきたのだ。

「無理をすれば今回みたいに体力が続かなくて倒れちゃうわよ？」

「…姫様に申し伝えておきます。」

「死にたくないなら、ちゃんと伝えときなさい。」

叱るように言いつつも、バリスタはうっすらと笑みを浮かべていた。

そして荷物をまとめると、部屋を出て行った。

「また、会えるといいわね・・・。」

その言葉は彼女の耳に届かなかったが。

部屋にはファランクス一人が残っていた。

昼にもかかわらず部屋は薄暗く、襲撃後と変わらず乱雑していた。

彼女は樽の上に腰掛け、床の上に転がったゲーム版とチェスの駒に視線を落とした。

すると、部屋を飛び出した時に踏んでしまったのか、キングの駒が砕けているのが目に入ってしまった。

Ｎｏ７　しばしのお別れ

怪鳥サエーナの襲撃を受けたものの船には重傷者はおらず、予定時刻を大幅に遅れたが、船は海都へと到着したのだった。

怪鳥にマストを壊され、さらに貫かれたにもかかわらず、よくまあ壊れなかったものである。

その桟橋にて、パイレーツが空を見上げていた。

「眩しいなぁ。」

南国独自の炙るような日差しと、今の彼女には顔を覆う影はなかった。

「姫様はお疲れでしょう。今日は早く宿の手配を。」

「最初から宿を探してどうする！」

ファランクスが心配するも一喝され、

「一刻も早く我らは迷宮に挑まなければならぬのだ！」

と言い放つ。

「それと。」

と言うと彼女はファランクスの耳元で「姫様とは呼ぶな。」と囁いた。

縮こまる彼女を相手に、パイレーツは腕を組み、意気込んだ表情を見せつける。

内心ではいつもどおりの彼女の姿に、ファランクスはホッとしていた。

「お～い。嬢ちゃん達。」

頭上で誰かが彼女達を呼び、見上げると船から数人の船員がこちらを見下ろしていたのだ。

「あの姉ちゃんはもう行ったのかい？」

姉ちゃんとはバリスタのことだろう。

船員はあるものを二人へ投げ渡した。

ファランクスがそれを受け止め、中を確認すると。

「俺達からの礼だ、少ないが受け取ってくれよ。」

小さな袋の中にはこの世界の通貨『ｙｅｎ』が詰め込まれていた。

それに続き、船からは男達の歓喜の声がふってくるのだった。

「運賃代と礼だ！」

「お前らなら凄腕の冒険者になれるさ！」

「いつか冒険談を聞かせてくれ！」

彼らは船から身をのり出し、声を上げ続けた。

彼らの熱い感謝と祝福を受けパイレーツが見上げて叫び返した。

「ありがたく頂戴する！ちなみに一つ聞きたいのだが、」

その問いに、船員達の声が静かになる。

「世界樹の迷宮に入るにはどうしたらいいのだ？」

パイレーツの質問に今度は笑い声が返ってくるのだった。

船を救ってもらった人間から、こんな初歩的な質問をされるとは意外だっただろう。

「迷宮の前にギルド登録所へ行きな！そこで正式に冒険者として認められるはずだ！」

これで彼女達が最初にどこへ行くべきか決まった。

「感謝するぞ！」

言い終わるとパイレーツは走り出し、ファランクスの隣を駆け抜けていった。

「姫…、いやパイレーツ？」

急いでパイレーツの背中を追いかけようとするが、

「待ってくれ！」

と一人の船員が叫ぶ。

彼はロープを伝って桟橋へ下りてきた。

そして彼女の前に立つと「すまなかった。」と無礼者だった彼は頭を下げるのだった。

その本当の意味がファランクスには解らなかった。

彼女はてっきり、道のりを訪ねた時の態度のことを言っているのかと思った。

「それと相棒の忘れ物がある。」

顔を上げると、彼はあるものをファランクスへ渡した。

パイレーツは港から街道への階段を駆け上った。

そして彼女の前に、海都が広がった。

港を走り過ぎても潮の香りが続き、暖かい風が彼女の頬を撫で、帽子の無くなったブロンドの長髪がなびく。

優しい色に包まれた家々とそれを彩るように窓枠に植えられた赤い花々。

正午間近の極まった日差しのためか、石造りの街道の先が白く輝いているのだった。

その両脇には商品を叩き売る漁師や商人、そして見たこともない冒険者達の姿があった。

町の中央へと続く坂は大樹へとつながり、その枝葉は雲を突き刺す程に高く、青空を遮っていた。

とうとうたどり着いた。

一人興奮する彼女の背後から重たい足音が聞こえた。

振り返ると、ファランクスがこちらに近づいてきた。

そしてその手に、何かが握られていた。

「お願いですから勝手な行動は慎んで下さい？」

ファランクスは手に持っていたそれを彼女の頭にのせた。

「船員の方が見つけてくれたようです。」

「おお、それはよかった！」

のせられた帽子を被り直し彼女は相棒に「似合うだろ？」と言ってみせる。

相棒は優しく頷いてくれた。

「それから彼から伝言を預かっております。」

「伝言？」

『船だけでなく、私を、人殺しの運命から救ってくれてありがとう。』

ファランクスは気づいていなかったようだが彼女を撃とうとした男は覚えていたようだ。

「そうか。」

と首をかしげるファランクスにパイレーツは涼しい顔をする。

（迷宮を制覇し今度は自分の運命を変えてやる。）

胸の中で決意を再び確認し、彼女は海賊帽をしっかりと被り直した。

そして「登録所へ向かうぞ。よいな？」と、蒼い瞳を相棒に向け彼女はニヤリと笑ったのだった。

残り九十九日にして、彼女達の冒険が始まった。

Ｎｏ７　しばしのお別れ（後書き）

第一章『海都への航海』完

ひとやすみ

ファンタジーなのか、アクションなのかジャンル不明の作品ですが、楽しんでいただけましたか。

今更ですが本作品、ニンテンドーＤＳ専用ソフト、『世界樹の迷宮？　星海の来訪者』というゲームが原案です。

原作は『ペルソナ』や『女神転生』シリーズのＡＴＲＵＳさんでございます。

つまり本作品、二次創作というジャンルになるのです。

しかしストーリーはオリジナルですので完全なパクリではありません。

大雑把に、世界樹の迷宮シリーズのジャンルをお伝えしますと、３Ｄダンジョンタイプのｒｐｇゲームというものとなります。

十二職の冒険者の中から、五人パーティーを編成・育成し、魔物が巣くう、危険だらけの迷宮の最深部へ挑むという流れです。

ゲームには決まった『主人公』がおらず、キャラクター達も一切喋りません。

そのためプレイヤーの想像力（妄想力？）によって物語を作り上げることも可能です。（著者のように。）

一言でこのゲームを表現しますと、かなり難しいです。

著者が初めてプレイした時、冒頭のチュートリアルを含んだイベントで、魔物達にボコボコにされ、三回もゲームオーバー画面を拝むこととなりました。

その度に、イライラしながらＯＰデモ見ていたことを覚えています。

難易度の高いゲームですが、それに見合った達成感も得られます。

立ちふさがる敵をどうすれば倒せるか、どの職業なら有利に戦えるか、そして戦わずにして回避する手段はないか、と試行錯誤の末に深部へと進んでいく快感がたまりません。（Ｍな人にはたまりません。）

第一章『海都への航海』（済）

第二章『一攫千金』

第三章『垂水の樹海より愛をこめて』

第四章『王女の過去』

第五章『樽』

第六章『さらば海都よ』

第七章『船はどこだ？』

第八章『いざ皇国へ』

第九章『姫様奪還大作戦』（執筆中）

続きをお楽しみに…、してくれれば幸いです！

第二章　一攫千金

世界樹の迷宮。

一日当たり三人の冒険者が命を落とし、一日当たり四人の冒険者が新たにやって来るという。

落命の理由は魔物による襲撃、遭難による餓死、感染症など多岐にわたり、それらは迷宮内の事故として片付けられる。

しかし命を落とす理由が必ずしも事故とは限らない。

あまり公になることはないが、無法地帯に近い迷宮の中では人災もありうるのだ。

人災。

事件といった方が適切かもしれないが。

今日もその現実を知らない新米冒険者が海都にやってくる。

Ｎｏ１　歌うファーマー

いっかー くせんきーん
いっかー くせんきーん

まずは土地から探しましょ～～

いっかー くせんきーん
いっかー くせんきーん

次は種まき世話しましょ～～♪

いっかー くせんきーん
いっかー くせんきーん

収穫、前にひとかじり～～♪♪

いっかー くせんきーん
いっかー くせんきーん

商売、あくまで正直に～～♪♪♪

いっかー くせんきーん
いっかー くせんきーん

僕は、ファーマー、正直者～～♪♪♪♪

いっかー くせんきーん
いっかー くせんきーん……』

アーモロードの街道にて一人の少年がるんるん気分で歩いている。
歌いながら。
まるでこれからハイキングにでも行きそうな雰囲気だ。
民族風の布の服にまん丸く膨らんだ帽子という軽装備。
背中にしょったリュックから抜き出ている桑にシャベルにｅｔｃ。
彼の服装からファーマーだということがうかがえる。（↑歌の内容からもわかるけどね。）
『ファ―マ―』
迷宮を探索を許された十二の職業の一つ。
これまでに登場した三つの職業
『パイレーツ』
『ファランクス』
『バリスタ』含めた四つ目の職業といったところだ。
農作業を極め、迷宮内の探索や隠れた資源を探す職業である。
しかし武器の扱いに慣れている訳ではなく魔物との戦闘に関して役に立たない。（ドラクエで言うトルネコである。）
そのためか全十二職のなかでも下位にみられることが多い。

ほぼ全てのファーマーが一攫千金を求めこのアーモロードへやって来る。

この少年も例外では無かった。（↑歌の内容からもわかるけどね。）

自らを『正直者』と歌うとは少々痛い子かもしれないが、道行く人々に奇怪な目を向ける者はいない。

この少年の歌に聞き入り、ニッコリと浮かべた純粋な笑顔に思わず笑みがこぼれているのだ。

歌の内容もさることながら歌う彼自身が周囲にほんわかとした和みの空気を発しているのかもしれない。

さて。

彼は一人でどこへ向かっているのか。

『海都アーモロード』は大きく三つのエリアに分けることができる。

一つは海都の南に設けられた港とそれに続く商店街を含むエリア。

港から運搬される商品を運ぶ時間を節約するため隣接して商店が並んでいるのだ。

新鮮な水産物だけでなく迷宮探索のためのアイテムもここに集まっている。

二つ目は海都の中心部に位置する住民と冒険者達が生活している居住区。

宿屋や酒場、ギルド登録所、元老院などの生活の基盤が整う様々な施設が並ぶ。

そして三つ目が北に位置する『世界樹の迷宮』。

大樹が立ちその根が蓄えた養分をもとに草木が繁殖している。

上空から見れば石柱も建ち並んでおり、密林と遺跡が融合していることがわかる。

『ふんふふふんふん。ふんふふふんふん。』

彼は海都のシンボルといえる世界樹の方向へ北へ歩いていた。

ちょうど居住区の境目にさしかかっている。

時刻は昼過ぎであり、さんさんと輝く太陽の下、先程まで歩いた街道では商店が賑わう光景をみれたが、

世界樹へ進むにつれてそういった日常風景が消えていき、静けさに包まれていく。

両脇に建つ建物は少なくなり、草花に挟まれた道となっていく。

舗装のない一本道を歩き続け前方に石の壁が見え始めた。

それが『世界樹の迷宮』の入り口である。

迷宮に関する情報は乗船した船で聞きかじることができた。

『海都の北西にたつ大樹へ歩き石の壁をくぐった先に迷宮は広がる。』

その壁は何十年も前に建てられたのだろう。

いたるところに亀裂が走り、一部は割れて空洞になっており、その中から草木が飛び出すように生い茂っているのが遠くからでもわかった。

そしてその壁の前に一人の兵士が立っているのが見えた。

片手に持った槍で地面を突き刺しもう一方には紋章らしきものが描かれた盾が巻き付いていた。

紋章はおそらく海都の国旗であろう。

船から下りた時、港にも同じ紋章の旗がなびいていたのを覚えている。

兵士はまるで門番のようにじっと立っている。

いかにも通りかかる人へ職務質問をしそうな感じである。

（どうしよう?）

船を下りてからここまで一直線に来ることができたのはあくまで耳に挟んだ情報。

つまるところ彼はそれ以外の情報は何も持っていないのだ。
手続きもなしに迷宮を探索できるのかすら怪しいもの。
そのまま兵士の前を通過しようとするが

「待て。」

（やっぱり呼び止められた。）

兵士が近づき彼の前で立ち止まる。

身長差は彼の倍近くある。

兵士は頭から布を被り、顔と上半身はそれで隠されているがその隙間からは鈍く光を放つ鎧の一部が見えていた。

片手で口元を隠している布を下げ職務質問がはじまる。

「一人で迷宮に入るつもりか？」

「ええっあの…。」

「ギルド名を名乗れ。」

少々聞き方がぶっきらぼうである。

「あの…。」

真上からの言葉にとまどうファ―マ―だったが

「僕は…。」

「？」

「…今日初めて海都に来ました！」

精一杯の気持ちを込めて腹から絞り出すように言葉を投げた。

そのままリュックの肩ひもをぎゅっと握りしめ兵士の出方をうかがう。

まるで叱られている子供のように。

「そうか。」

「はい！」

「力まなくてもよろしい」

「？」

兵士の隠れた口元がどこかニヤついているように見える。

「ギルドに所属していない者に探索は禁止されている。」

「えっ…、ギルドって何ですか？」

「何も知らないのか？」

あきれるように一息入れ兵士は続けた。

「新人君、世界樹の迷宮へ挑むならばギルドへの登録が条件だ。詳しくはギルド登録所へ向かえばわかる。私から話すことは以上だ。」

兵士はもといた場所へと戻っていく。

どうやら探索へ入るにはギルドに登録する必要があるようだ。

「ありがとうございます兵隊さん。」

兵士は頷くだけでそれ以上何も言わなかった。

次へ進むための嬉しい情報を得ることができたファーマーは一礼し道を引き返した。

（あの兵隊さん・・・優しい人だったな。）

緊張がほぐれた反動からか少し気分が高揚していた。

しばらく歩くと都市の風景が戻ってきた。

草花が消えると両脇には小さな家々が並びさらに歩けば宿屋や酒場などが列を作りはじめる。

道も砂や泥が覆ってはいるが徐々に舗装されたものになっていく。

その途中である。

反対方向から三人組の冒険者の一行が歩いて来るのが見えた。

ファーマーは思わず道の隅へよった。

道が狭いわけではないが、その一行のために道を譲らなければならない気がしたのだ。

（冒険者さん達だ。）

彼もあくまで十二職の一つであり冒険者として認められてはいるのだが、武器を握って戦うことなどできない。

そのためか、どうしても引け目を感じてしまうのだった。

すれ違う瞬間その中に異様な姿を見た。

全身は黒色の装束をまとい血のように赤いスカーフで口元を隠している男。

その目は鋭くまるで上空から獲物を探す野鳥のような目付きであった。

（こんな人達が探索に行くのか。）

日陰の中で立ち止まり、その一行の後ろ姿を見送る。

自分にはない独特な冒険者の姿と、一人であることに不安と緊張が心にあらわれる。

『いっか-くせんき-ん、いっか-くせんき-ん
まずは土地から探しましょ～～』

それをかき消すかのように彼は再び歌い出すのであった。

『
いっか-くせんき-ん
いっか-くせんき-ん
次は種まき世話しましょ～～♪

いっか-くせんき-ん
いっか-くせんき-ん
収穫、前にひとかじり～～♪♪

いっか-くせんき-ん
いっか-くせんき-ん
商売、あくまで正直に～～♪♪♪

いっか-くせんき-ん
いっか-くせんき-ん
僕は、ファ―マ―、正直者～～♪♪♪♪……』

歌いながら彼はあることに気付いた。

（ギルド登録所ってどこだろう？）

周囲を見回すがそれらしき目印は見あたらない。

迷宮を目指す際は大樹を目印に歩けばよかったが登録所となるとそ

れがないのだ。

ちなみに海都には看板は無い。

（今の人達に聞けばよかったかな？）

「いっかくせんきん、いっかくせんきん♪」

どうしたらいいかと考えていたその時、誰かが彼の代わりに歌った。

振り返ると二人の男が立っておりその一人がニヤニヤと笑みを浮かべ話かけてきた。

Ｎｏ２　裏のハローワーク

「よう、ファ―マ―。一攫千金を夢見てアーモロードへ来たのかい？」

「はい（？）」（この人パイレーツだ…。）

二十代前半の顔に後ろで結んだ金髪。

シャツの胸元は開かれ首からじゃらじゃらとネックレスがぶら下がり、肩からさげたコートベルトには拳銃、腰のベルトにサーベルが差されている。

対するファーマーは布の服に布の帽子。

「さっき迷宮の入口で衛士の野郎に追い返されていたな？」

パイレーツの男はからかうように話を続ける。

「俺達、お前さんに頼みたいことがあるんだが。」

「やめないか。」

と、その後ろから二人目の男が顔を出す。

詰襟のついた学生服のような衣服をまとったその男。

右肩には恐竜の頭蓋骨のような鎧が装着され、目の部分にはエメラ

ルド色に輝く結晶が組み込まれている。
ちなみに髪は黒。
機械から指先にかけては、数本の細長い金属片がのれんのようにぶら下がっている。
「失礼したファーマー君。私はゾディアック。」
「俺はパイレー…」
「ーコイツの事は無視してかまわない。」
『ゾディアック』
迷宮を探索を許された十二の職業の一つ。
『エーテル』という、大気に存在するエネルギーを集め、炎、氷、雷、等のエネルギーへと変換し魔物を攻撃する冒険者。
天文学や占星学に関する知識を持ち、占星術士ともよばれることもある。
肩の装備はエーテルを圧縮するための『星術器』である。
「私達はある事情がありファーマーの能力が必要なのだ。少し話を聞いていただけないだろうか?」
パイレーツとは違いゾディアックは紳士的だった。

「お話だけならうかがいますけど…。」

そのためかファーマーは安心して彼の話を聞くことができた。

それがこの二人組の狙いでもあった。

「ありがとう。ここでは難だ。場所を移そう。」

二人に案内され連れて行かれた場所。

アーモロード酒場
『羽ばたく蝶亭』

「ヨクモ参りましたな冒険者！ワタシはココのママさんだ！ゆっくりシロナ？」

酒場に入ると少し言葉使いのおかしいママさんが明るい笑顔で迎えてくれた。

（す…すごい。）

小国育ちのファーマーにとって初めて見る都会の女性であった。

顔に関しては少々幼さが残ってはいるがフワフワとしたピンク色の髪と水色のドレスをまとったその姿は彼にとって免疫がまったくなかった。

そしてこの酒場のママさんは体の一部分がすごいのだ。

ダメなことと思いつつも彼の目線はその部分へと移動している。

挿絵がないから上手く説明できないのでどうしても気になる方は原作のＨＰで確認してみて下さい。

ママさんは、すごいです。

「鼻の下を伸ばしているだろ。」

頭上からのパイレーツのからかいに「ちっ、違います！」と顔を赤らめる。

「窓辺の席を。飲み物はアルコールがないもので頼む。」

三人はママさんに案内され席へ座った。

数分後。

酒場を出た三人は一直線に迷宮へと向かい始めた。

と言っても酒場から迷宮まではそう遠くはない。

現に彼ら三人が座っていた席から石の壁が見えていたのだから。

少し歩けば再び石の壁である。

しかし初めて来た時と少し様子が違った。

衛士（ファーマーと話していた兵士）が立っていた場所に人だかりができている。

衛士も立っているのだがそれとは異なる装備の人間が何人も集まっているのだ。

「待っていろ」とパイレーツが駆け出し様子を見に行く。

（なんだろう？）

じっと目を凝らしてみるとその人の隙間から赤く染まった地面に誰かが倒れているのを確認できた。

「『ネコ』の仕業だろう。」

戻ってきたパイレーツが言った一言。

「そうか。」

特に驚くことなく、ゾディアックは答えた。

一方のファーマーは一人震えていた。

（やっぱり恐いな。『ネコ』ってどんな魔物？ライオン？）

リュックを握る両手から汗が流れ始める。

衛士に呼び止められなくてもすぐに探索から逃げ出していたかもしれない。

「私達はアイテムを採取できるポイントまでしか探索をしない。」

ファー マーを察してかゾディアックが言い、そしてニコリと笑い「それほど危険なことはないさ。」と続ける。

あくまで、『それほど』、危険がないらしい。

「怖くなったなら断ってもいいぜ?」

パイレーツの問いかけにファー マーは痛々しい笑顔で答える。

数分前の酒場にて――――。

『探索に同行してもらえないか?』

二人からの話は仕事の依頼だった。

『私達は明日中に海都を離れる用事ができその費用として４００ｙｅｎ程必要なのだ。』

『そこでファー マーの力をお借りしようってわけだ。』

『恥ずかしながら資金不足なのだ。君の能力があれば心強い。』

ァー マーの力があればその野生の嗅覚からアイテムを探すのは朝飯前である。

ファー マーに自信がなかったわけではないがそれでも気分が乗らな

かった。

戸惑う彼にゾディアックはこう続けた。

『登録料は知っているか？』

『登録料？』

ゾディアック曰くギルドへ登録するには一人あたり五百ｙｅｎが必要だというのだ。

『ｙｅｎ』とはこの国の通貨単位であり相場として十ｙｅｎで宿屋にて一泊でき、二十ｙｅｎで回復アイテムを一つ購入できる。

五百ｙｅｎがいかに大金なのかわかっていただけるだろう。

登録料などファ―マ―には寝耳に水でありそんな持ち合わせもなかった。

そこで彼ら二人組が出した提案が

その一、彼ら二人組がファ―マ―の探索への顔をたて魔物から彼を守る。

その二、ファ―マ―に働いてもらい収入を山分けする。

という内容だった。

迷宮を探索すれば少しでも収入があると思いここまで来たが、探索を始めるためにもお金がかかるとは予想外であった。

さらに祖国に帰るための船の運賃も手元になかった。

二人の提案はファ―マ―にとって渡りに船というものだ。

しかし明らかにルール違反的な方法に戸惑ってしまう。

（ギルドに登録していない者は迷宮には入れない。）と兵士に言われた言葉がよみがえる。

しかし

『そんなに深く考えなくてもＯＫだぜ。』

『何か問題があれば我々も他のファ―マ―を探すつもりだ。』

『他の』という言葉には思わず焦ってしまい、

『協力してくれるか？』

『僕もお金が必要ですし、お２人とも急いでいるようですから。』

二人と握手をかわし、

『それでは早速だが今から探索に同行してもらえるかな？』

『またコイよ？冒険者～。』

ママさんに見送られ三人は酒場を出た。

そして現在――――――――――。

（悪いことだよな。）

ファ―マ―の中にあったのは罪悪感。

だがこのチャンスを逃せば海都で生活することすらできないかもしれない。

それが決め手となり彼らの提案にのったわけだが。

しかし。

（商売あくまで正直に～♪）

と祖国で耳が痛くなるほど聞かされた言葉がずっと彼の頭で繰り返されていた。

衛士達が立っていた石の壁を通り過ぎると、さらに二つ、三つと同じような壁が続き四つ目の壁が現れた。

四つ目の壁は今までのそれとは倍の高さがあった。

そして正面に立った時向こう側の景色が見えないほどトンネルが長い。

「この奥が君にとって未体験の世界になるわけだな。」

とゾディアック。

「絶景だぜ。景色だけは。」

「この先は人間だけの住みかじゃない。魔物のテリトリーに入り込むことになる。」

念を押すようゾディアック。

「ここから先は俺が先頭に立つ。ファーマーは2番手ゾディアックは最後尾で不意討ちに注意しろ?」

銃の残弾を確認しながらパイレーツが指示を出す。

「探索の目的はアイテムの採取だ。日が落ちるまでには完了しここへ戻る。全員OKだな?」

「ああ。」

「はい!」

パイレーツがテキパキと指示を出す。

音痴に歌いながらファーマーに近づく姿からは想像もできない姿であった。

「じゃ行くぜ。」

三人は石の壁へと足を踏み入れた。

Ｎｏ３　商売するもの命がけ

トンネルをぬけると樹海であった。

この瞬間までファ―マ―は迷宮の樹海をジャングルのようなものだと思っていた。

凶暴な魔物が徘徊する中を視界を遮る草木をかき分け泥まみれになりながら道なき道をひたすら進んでいくものかと。

しかし現実は違っていた。

さんさんと輝く太陽の光が樹海全体を明るく照らし歩くための道は既に存在、しかもそれは百花繚乱に咲き乱れた花に彩られている。

歩きながら周囲を見ても小鳥や野ウサギ等の可愛らしい小動物の姿が映るだけであり魔物の気配を感じることはなかった。

まるでハイキングコースだ。

トンネルからの一本道を少し歩くと二本の石柱が中央に建つ広間にでた。

石柱といっても屋根はなく、なんのために建てられたのかも不明。

しかもそれらは崩れかけ割れ目からは甘い香りを放つ赤い花が咲き乱れている。

その広間だけでなく樹海のいたるところに遺跡の壁や石柱が残って

いる。

後から知ることになるが、冒険者は地図だけでなくそういったオブジェクトを頼りに探索を進めるのだ。

「目的地はここから北東だ。」

パイレーツが地図を広げながら二人へ説明する。

「まあ確認するような距離でもねえが。おいファー マー何してる？」

彼は二人から離れ広間から見える人工の滝を鑑賞していた。

広間の断崖をはさんで数メートル先に巨大な壁がそびえ立っている。

入り口で通りぬけたごつごつした石の壁とは違いコンクリートのように平らで美しい表面であった。

見上げるとどこが頂点なのかわからない程に高く、見下ろせば底なしの崖の下に永遠と続いている。

地底深くから地上を目指して建てられた塔のようだ。

その壁の一部が崩れ中から水が勢いよく飛び出し滝のように流れている。

しかし水源はどこにあるのだろうか。

「ファー マー行くぞ。」

予想外の樹海の様子と初めて見る絶景にファーマーの心は少し躍っていた。

入口では一人恐怖し震えていたというに。

「勝手な行動は謹んでくれ？」

ゾディアックから注意を受け三人はパイレーツを先頭に探索を始めるのだった。

緑の道を少し歩いたところで、「お二人はどうして海都にやってきたんですか？」とハイキング気分のファーマーの質問にパイレーツが答える。

「俺達が海都に来た理由か。」

「ファーマー君、余計な事を話していないでもう少し緊張感を持ってくれ？」

『余計なこと』と背後から注意の言葉がとぶ。

「どうでもいいじゃねえか？海都で生活していれば目的なんて変わってくるぜ？」

「そうですか？」

「お前が海都に来た理由は『一攫千金』のためだろ？」

「えっ！どうして知っているんですか？」

ファーマーが真顔で驚いた。

冒頭シーンから堂々と歌っていたではないか。

「お前、おもしろいな…。」

「やっぱりお二人は迷宮制覇が目的ですか？」

「そんなことはどうでもいい。今はアイテムの採取が目的だ。」

「ええ～。」

迷宮に入ってからというものゾディアックの態度が冷たくなっているような気がしていた。

だがその原因はおそらく自分にあると思い直す。

あくまでこの二人と同行しているのはアイテムの採取のためだ。

それ以外のことをこれ以上話さない方がいいのかもしれない。

「採取したアイテムってどこで売りに行くんですか？」

「しゃべるな。」

少し話題を変えてみたファーマーだったがその甲斐もなく再び注意を受ける。

だが今度はゾディアックからではなく前を歩くパイレーツからだった。

立ち止まり前方を注意深く見つめ、ベルトへとゆっくり手を伸ばし、グリップを握る。

チッチチ。

と後ろを歩く二人に聞こえるように大きく舌打ちをする。

ファーマーにその意味は理解できなかったがそれを合図にゾディアックが何やらブツブツと呪文を唱え始める。

（これって？）

銃を構える彼の背中から前方を見た。

数メートル先の茂みにガサガサと何かが動いている。

（魔物！）

ファアマーが直感した瞬間パイレーツの銃が火を噴いた。

「避けられた！」

パイレーツはサーベルに持ち替え後ずさりする。

「『ネコ』だ。どこからくるかわからねぇぞ！」

（ネコ？）

入り口で聞いた名前だ。

ファーマーは二人の冒険者にはさまれオロオロしていた。

（どうしよう、どうしよう・・・。）

戦闘能力を持たずそして装備も無い彼には何もできることはなかった。

その時ガサガサと彼のすぐ真横の茂みから音がなる。

「ひっ？」

グルルルル・・・・・。

続けて聞こえてくるうなり声。

思わずその茂みから反対へと駆け足で離れたが、しかし。

グルォォ！！

それが魔物を刺激してしまった。

「まってました」と言わんばかりに茂みから飛び出した巨大なネコ。

その跳躍の高さはファーマーの身長をゆうに超えていた。

『オオヤマネコ』

第一階層に生息する魔物。

太い両腕と爪から繰り出される一撃は並の鎧では防ぎ切れず、この魔物に襲われ命を落とす冒険者は一人や二人ではない。

太い両腕を振り上げ襲いかかってくるオオヤマネコ。

その攻撃に振り返ったファーマーに何もできずただ体を縮めることしかできない。

爪がファーマーの帽子をかすめようとしたその刹那。

一閃が彼の前で生じ、ズンと不気味な音が響いた。

ファーマーとオオヤマネコの間にパイレーツが割り込み、片手に持ったサーベルの剣先がネコの胴体を突き刺していた。

助走が加わったサーベルの一撃にネコの跳躍は軌道を変え吹っ飛んでいく。

そのまま地面に倒れたネコはピクリとも動かなくなった。

「危なかったな？」

震えるファーマーの前でパイレーツが余裕の表情で言った。

「いいか背を向けたら駄目だぜ？」

「えっ？」

刺さったサーベルを抜きながらパイレーツが言った。

ネコの姿を見失った彼はゆっくり後ずさりをするように距離を取っていた。

「狩りをする魔物は背を向けた相手から襲いかかってくる。背中からなら簡単に襲えるからな。」

オオヤマネコは茂みから三人を見て唯一背中を見せたファーマーに襲いかかってきたのだろう。

「そうだったんですか・・・。」と常識知らずの少年はゆっくりと立ち上がる。

「まぁ、おかげでいい囮になったけどな。」

「え～、ひどいですよ～。」

両足が震えている彼にとって容赦のないジョークであった。

「ハハ。ん?ゾディ?何やってんだ?」

戦闘が終わったにもかかわらずゾディアックはブツブツと呪文を唱えている。

星術器のエメラルドに輝く宝石部分が赤く光り始める。

そして二人に聞こえるように舌打ちをする。

二回目となるとファーマーにもその意味がわかっていた。

ザザザザザザザザ。

そして2人の背後から聞こえてくる音。

「星術起動。」

槍のように垂直な光線がゾディアックの右手の甲と手のひらから発生した。

「伏せろ！」

肩の星術器が唸り、のれんのようにぶら下がっていた金属片が翼のように広がり、彼の背中を囲んだ。

「炎の錬成術！」

Ｎｏ４　人災

「『背中に気をつけろ』と言っておきながら不覚だったな？」

「わりぃ、わりぃ・・・」

「でもすごかったです、ゾディアックさん。」

オオヤマネコの襲撃を受けた後、それを見計らったように別の魔物の群れがパイレーツの背後から襲いかかった。

「それにしても歩く魚がいるなんて驚きました？」

「おそらくネコの行動を追跡し仕留めたエサを横取りしようとしていたのだろう？」

幸いゾディアックの星術によって一掃されたがその数は半端ではなく、結果的に周囲の樹海ごと焼き払うことになってしまった。

「ゾディアックさん」

「なんだ？」

「ありがとうございます。」

礼を言うファーマーだったが

「礼は無用とにかくアイテム採取を任せたぞ。」

とそっけない対応が返ってきただけだった。

そんなやり取りをしている間に三人は樹海の採取ポイントに到着。

歩いていた樹海の道よりも広く様々な花や樹木が集まっていた。

「ここだぜ。好きなだけ刈り取ってくれ。」

「了解しました！」

とパイレーツの隣でファ―マ―は目を輝かせる。

リュックを下ろし中から布のベルトを取り出しそれを腰に装着。

ベルトの両脇には革のホルスターが装着され片方には細長い刃のハサミ、もう片方には小型のナタが収納されている

これがファーマーの戦闘モードである。

「準備完了です！」

「お、おお・・・。」

「頼むぞ。」

てきぱきと野草を選別しハサミの先で土を掘り返し根から野草を採取する。

「そいうやファ―マ―はどうして海都に来たんだ？」

「どうしてって一攫千金のためですよ？」

「それなら別の国で仕事を探せばいいだろ？どうして危険を冒してまで海都の迷宮にこだわる？」

「それは。」

帽子を地面に置き野草をその中へ集めながら答える。

「海都の土地です。」

「土地？」

「乗船中に遠くから海都全体を見た時、この大陸には多様な品種が生息しているとわかったんですよ。祖国でも噂は聞いていたんですけど自分の目で見たおかげで確信がもてました。」

ベルトからナタを取り出し今度は付近の樹皮をはぎ取り始める。

「『多様な』って見ただけでわかんねえだろ？」

「いえ、ある程度なら見た目で判断できるんです。」

「ファーマー君、口を動かさずに手を動かしてくれ？また魔物に襲われるかもしれないぞ？」

「あ、ごめんなさい…」

とゾディアックの言葉に口を閉ざす。

（余計な事に時間を費やすな。衛士にでも見つかったら困る。）

（いいじゃねえか少しくらい…。）

「どうしてわかるんだ？」

会話を続けるパイレーツ、そんなお調子者の彼の姿に思わずゾディアックは舌打ちする。

「あ、はい。大樹を中心に、大陸全体が斜面になっている、からです。」

ファーマーは樹皮をはぎ取りながら少し遠慮がちに答える。

「斜めに？」

「はい、平らな土地が多い大陸よりも、斜面の多い、大陸の方が、多様な品種が作られる、頻度が高いん、です。」

たりない身長を補うため、ぴょんぴょんとジャンプしながら樹皮をはぎ取る。

「同じ平面の土地だと比較的同じ品種ばかりが繁殖してしまいます。でも斜面が多いと、一つ当たりの面積が小さいけど区切られた土地の数が多いのでいろんな品種が繁殖できるんですよ。」

確かに海都を図形で表すと大樹を頂点に円錐形になっている。

実際港から海都の中心部へ続く道のりは全て昇り坂であった。

「へえ～。つまり斜面だと土地が分割されているってことか・・・。よっとと。」

ファーマーの身長を補うためパイレーツが伐採を手伝い始めた。

「あ、ありがとうございます。」

「いいってことよ。しっかし木の皮なんて何に使うんだよ？」

「樹皮はいろんなモノに利用できるんですよ？」

木の皮、つまり樹皮は様々な商品の素材となる。染物やコルク、皮や布を作るための繊維原料や薬の原料となるものまである。

「こんなモノまで金になるとは思わなかったぜ。なぁゾディ？」

「ああ。たいしたものだ。」

「えへへ。」

自分の能力と知識を発揮できたことが嬉しく自然と笑みがこぼれる。

「気になっていたんですが、またあのネコが襲いかかってきたりしませんよね？」

「安心しな？魚と違ってネコは縄張り意識が強いから同じ場所に何十匹も生活していないんだ。さっき一匹倒したってことはしばらくお目にかかることはないぜ。」

「そうですか。」

と、少し安堵の表情を浮かべる。

（これなら帰りの事を心配しなくていいかな？）

荷物が多くなると戦いにおいて不利かと思い採取の量を調整するファーマーだったがその言葉を聞き少し量を増やそうと考え始めた。

「もう少し集めてみますね？」

「ああ。」

「頼むぞ？」

採取はそれから二十分程続いた。

「これだけあれば十分だと思いますよ？」

「随分集まったな。」

「少なくとも四百ｙｅｎ以上の値はつきます。」

「四百ｙｅｎ？」

当初の計画はファーマーのギルド登録料五百ｙｅｎと、二人の運賃代金四百ｙｅを稼ぐことだった。

数式

４００
＋５００
―――
９００
→携帯小説だとこんな本文も作れる（恥）。

「お前さんの分け前はいいのかい？」

「僕は余ったお金でしばらく海都で生活します。宿にしばらく泊まって普通の働き口を探そうと思います。」

ベルトを外しながらファーマーは続けた。

「普通のお仕事を探して五百ｙｅｎ分なんとか稼いでみます。」

登録していないのに迷宮で採取するのはいけないことだと、彼はしっかりと覚えているようだ。

「そうか。」

自分には無い、その正直さにパイレーツは感心する。

「祖国に帰ろうとは思わないのか？」

「いえ今のところは。」

「迷宮は君が思う程甘くはないぞ？」

「でも。」

ゾディアックの質問に笑顔を返す。

「自分の力で一旗上げてみせるって家族と約束しましたから。」

「…。」

「えへへ。」

「約束か・・・。」

「『犠牲無くして得る物無し』っていうのも家の家訓なんです。」

と少し誇らしげに語る少年は、数秒後にも同じことを言えるだろうか。

「そうだ、よく考えたら。」

集めた収穫物を見つめ、彼は初めて気付いた。

「どうやって運びましょうか?」

「心配無用。」

「へ?うぅ!」

真横からの蹴りに地面に倒れた。

「収穫ご苦労。」

ズキンと痛む脇腹を支え身体を起こすと、久々にゾディアックの笑

顔が見えた。

ファーマーにも直感できた。

（騙された。）

ゾディアックはファーマーのリュックを開け、中を確認すると逆さ振り下ろし入っていた荷物を地面へ落とす。

「あっ。」

中に入っていた彼の愛用農具が音をたてて地面に散乱する。

「金にならねえもんばっかりだ。」

グチをこぼすように言うとファーマーが集めたアイテムを中へ詰め込む。

（商売あくまで正直に～♪）

今になってファーマーはその言葉の大切さがわかった。

祖国では何度もこの言葉を教えられてきたが、彼はその本当の意味を経験から学んだことはなかった。

今の自分がその教えを破り素性の知れない怪しい話について来た末路なのだ。

「採取完了。」

詰め終えたリュックを肩にかけゾディアックが一文無しのファーマーへ近づき「ありがとう。」と爽やかに言う。

「荷物がガラクタだけなのは悲しいが。」

ファーマーへ顔を近づけじろじろと怯える彼の顔を見つめる。

「最初会った時から思ったけど。」

「あうぅぅ！」

ファーマーの喉をわしづかみ、おびえる表情を間近で見つめるゾディアック。

「お前男のくせに可愛い顔しているよな。」

純心な彼にその意味はわからなかったが、まともでないことは直感できた。

「お前ならそっち系の連中に高値で売れるかもな。」

少年の瞳に笑う悪人の顔が映る。

これも平和な小国育ちの彼が初めて見る映像だろう。

「やめろ！」それを見かねたパイレーツが一喝しゾディアックは彼の首を投げ捨てる。

「う！」

ファーマーに背を向けると、ゾディアックは来た道へと引き返し始めた。

「じゃあな。」

「えっ…。」

「もう会うことはないだろ。」

パイレーツが言い、彼も背を向けた。

遠くなっていく二人の冒険者の姿。

その時、ファーマーの脳裏に入口で見た冒険者の姿がよぎった。

鮮血とぼろぼろに破壊された鎧。

（死んじゃう？）

そして三人だった時に襲いかかってきた魔物の姿。

死ぬ。

（待って。）

全身を覆い始めた死への恐怖。

それから逃げるように二人の背中に駆け出す。

「待って…」

何をするために海都に来たのか。

「待って…下さい！」

祖国の家族と仲間に別れを告げ。

「お願いします！」

一攫千金の旗を上げ祖国に帰ると約束し。

「お願いします！」

途中でつまづき履き物のサンダルが脱げたが、それもかまわず裸足で追いかける。

振り返る二人を前に膝をつき地面にひれ伏すのだった。

「今度からは正直に商売しますから、お二人の事を警察に言ったりしませんから、だから、だから僕も海都に連れていって下さい！」

生きて帰りたい。

儲けを奪われ農具を捨てられても生きているかぎりチャンスはある。

この二人にこれ以上かかわれば無事な保障はない。

だが生きて樹海をでるにはそれしかない。

ファーマーの願いは聞こえたのだろうか。

彼の視界には芝生の地面しか映らず自分の声が反射して耳に聞こえるだけ。

立ち止まっていた二人だったが、何も言わずに彼の前から立ち去ろうとする。

「お願いします！」

離れていく足音にさらに大きな声で叫ぶ。

「…。」

背後からの叫びに後ろ髪を引かれるパイレーツ。

対象的にうんざりしたようにゾディアックはため息をもらす。

「よこせ。」

パイレーツのベルトからサーベルを抜き取りとファ―マ―へと歩を進める。

「待て！」

「星術使うのも面倒くせぇ。」

顔を上げた瞬間、胸元にゾディアックの蹴りがとんできた。

「ぐう！」

反射的に両腕で防ぐが、ブーツの爪先蹴りの衝撃に防御が崩れ、再び仰向けに倒れる。

「痛いよぉ・・・」

「お前を見ていると、イライラする？」

「死にたく…ない。」

「てめえみたいな奴が迷宮に入るとどうなるか、教えてやる。」

ゾディアックはサーベルを頭上まで大きく振り上げ、下ろした。

Ｎｏ５　パイレーツとファランクスと

キィィィ

「大丈夫ですか？」

鎧の人物がファーマーへと振り返る。

白銀の鎧の正体は長い銀髪をツインテールで結んだ女性だった。

凛としたその表情はファーマーよりも少し年上であると感じさせた。

「は…はい。」

彼女は重装備を身にまとい、またその装備を可能にする体力をそなえた冒険者。

ファランクスであった。

「大の男が弱い者イジメとは情けない。」

そしてその相棒とも言うべき人物が、二人の『大の男』の背後に立っていた。

海賊帽からはみ出たブロンドの髪、胸元がレースのシャツに皮のベストをまとい、コートベルトには拳銃とサーベル。

そして人形のように整った顔立ち。

（あの人もパイレーツ？）

不機嫌そうに蒼い目で二人を睨んでいる。

「おいおい。」

サーベルを折られた動揺を隠すためか、ゾディアックは大きくわざとらしい声で話す。

「勘違いするなよ。俺達はギルドメンバーに制裁を下していただけさ。」

「制裁だと？」

「俺達には俺達のルールがあってな。」

そして笑みを浮かべ彼はファーマーをチラリと見、ファーマーは隠れるようにファランクスの背中へしがみつく。

「信用できんな。そなたらは自分の仲間に刃を向けるような制裁を加えるのか？」

「樹海を生き抜くためには必要だ。」

ゾディアックが当然だと言い放つと、女のパイレーツは「その荷物はなんだ？」と、背負ったリュックを指摘する。

「ずいぶんと大量にアイテムを採取できたようだな。それを2人で横領か？ファーマー愛用の農作業具も地面に散乱していたぞ。」

『愛用』のという言葉を聞き場違いにもファーマーは嬉しくなってしまった。

（そうです。それ僕の愛用なんです。）

「他人のことだ。あまり干渉しないでもらえるか？」

睨み合う二人の間に割って入る男のパイレーツ。

威嚇するように相手へ言った。

だが。

「そのファ―マ―は我々がいただく。」

その返答に、場にいた全員に緊張が走った。

（姫様…。）

槍を持ち直すファランクス。

（僕、盗られちゃうの？）

さっぱり意味がわかっていないファ―マ―。

（うざったい。）

さらに苛立つゾディアック。

（好都合だ。）

本来の計画を思い出すその相方。

「それほど大量に採取できるとは素晴らしい。そなたもパイレーツならばわかってくれるだろう？」

パイレーツ同士にとってこれ以上の理由はない。

「『ヨーホー、ヨーホー、略奪なら朝飯前。』っか？」

好都合、と男のパイレーツは考える。

当初の計画はファ―マ―にアイテムを採取させそれらを売りそのお金で海都を発つというものだった。

それは嘘偽りのない事実でありファ―マ―を置き去りにする場所もその安否も、彼らにとって大きな問題にはならない。

「別にかまわないけどな」

と冷静に分析する彼の背後でゾディアックも賛同する。

「だけどよ。」

しかし星術器は赤い光を放ち始めた。

エーテルが圧縮されエネルギーへ変換されているのだ。

（姫様！）

（危ない！）

それに気付くファランクスとファ―マ―だったが間に合う距離ではない。

（うざったいよ、お前？）

「火炎の……」

状況に気づいた女のパイレーツは身構えることなく、叫んだ。

「そなたの出番だ！」

正確には呼んだのだ。

「ー！」

その場からゾディアックが消えた。

「ゾディ？」

彼の悲鳴に振り返るも姿はなく、ファランクスと彼女の背後で震えるファーマーが立っているだけであった。

ファアマーは見た。

茂みからぬぅと黒い手が伸びゾディアックの頭を掴むと中へと引きずり込む瞬間を。

「ゾディ！」

パイレーツが振り返った時にその腕は消えどこからも声が返ってこなかった。

聞こえるのはガサガサと茂みの中で何かが動き回る音だけ。

草木が邪魔で見通しが悪く何が潜んでいてもわからない。

やがてその音も止まった。

「何をした！」

先程までの冷静さは崩れかけ、彼の目から怒りが見て取れる。

「何をしたんだ！」

振り返ると彼の視界には数秒前とは違う光景が広がった。

女のパイレーツとその前に立つ第三の人物。

それはファーマーでもファランクスでもない。

数秒前までこの場にいなかった人間がどこからともなく亡霊のように現れたのだ。

（あの人…。）

その姿にファーマーには見覚えがあった。

赤いスカーフ。

黒い装束。

野鳥のように鋭い目。

迷宮の入口から引き返した時にすれ違ったあの男だ。

そして他の二人の姿（装備）も視界の隅に映っていたことを思いだした。

「てめぇの仕業か。」

納得したように言い「シノビ野郎」と黒い男に吐きすてる。

「…。」

黒い男は何も答えない。

「悪く思うな。」

ベルトへと手を伸ばすが、彼の手は空を掴んだだけであった。

「…！？」

彼が掴もうとしたもの、拳銃がベルトから消えていた。

そしてそれは彼の目の前にあった。

引き金の部分を人差し指で引っかけられクルクルと空中で回転している拳銃。

それはシノビの手元で回っていた。

「ちっ！」

一瞬の動揺もパイレーツすぐには冷静に戻った。

シノビなら敵の武器を盗む程度のことは朝飯前なのだから。

『シノビ』

迷宮探索を許された十二の職業の一つ。

遙か異国の地で修行を積んだ職業。

忍術と暗器といった術や道具を使うことで撹乱戦術を得意とする冒険者である。

乾いた金属音が鳴ったと思うと瞬時に銃が解体され装填されていた弾丸が地面へ捨てられる。

そして銃が地面に落ちるよりも早くシノビが動いた。

早く、そして氷上を滑るように一切の音も出さずパイレーツに急接近する。

直線的な攻撃に対し機敏に右へ左へと横へとかわすパイレーツ、速さはシノビが上だが足腰の機動力ではパイレーツが上か。

一撃に重みはないが狙いは全て人体の急所に集中しており一発くらえば身体の動きを止められるだろう。

固唾を飲んでそれを見守るファーマー。

どちらか一方を応援しているわけはない。

単純にその光景に魅了されていた。

いや。

迷宮で魔物に襲われた瞬間から彼は少しずつ心を奪われていた。

オオヤマネコの急所を一撃で仕留めたパイレーツの突剣。

大量に迫ってきた魚を一掃したゾディアックの星術。

自分の前に鉄壁のごとく立つファランスの白銀に輝く鎧。

そしてシノビ。

初めて海都に来た日にこれほど多くの冒険者達に出会い活躍を見られるとは思っていなかった。

やがて目の前の活躍劇にも幕が下りようとしていた。

シノビの一撃を回転するように受け流したパイレーツ。

頭上から見ればコマのような見事な一回転、遠心力によってアクセサリーやら金髪やらも宙に浮く。

だがこのよけ方では視界から敵が消え不意をつかれてしまう。

「あっ！」

ファ―マ―は回転する腕の先に不気味に光るモノを見た。

（俺の武器が銃とサーベルだけだと思ったら。）

視界に隅にシノビが映ったことを確認し腕を軸となる身体から伸ばす。

「危ない！」

（大間違いだ。）

叫んだ時には遅かった。

回転から戻ってきた右手にナイフが握られ、シノビの下腹部に食い込んだ。

「シノビ！」

遠心力が加わった致命傷を与えるには十分な一撃。

「悪く思うな？俺だって唯一の仲間を傷つけられて黙っていられねえからな。」

幸か不幸かパイレーツのその思いは杞憂に終わった。

ナイフを引き抜いたその瞬間、彼の目に映っていたシノビの黒い装束がユラユラと揺れ始めた。

「何？」

そして凶器の刃に一滴の血も付いていない。

何がおこったのか。

慌ててシノビとの距離をとりその姿を凝視する。

シノビの体は徐々に透明になり背後にあった風景が身体越しに見え始めた。

（しまった！）

「『忍法陽炎』」

耳元で声がしたかと思うと背後から2本の腕が身体に巻き付き喉元には短刀の剣先が突きつけられた。

『忍法　陽炎』

自分の姿をした影を出し囮とする忍術である。ナイフを刺した相手はシノビが直前に出した囮であったのだ。

「ちっ。」

観念したようにナイフを捨てる。

それを確認しシノビは彼を解放し短刀をしまう。

「忍術か…最近まで間近で見ていたぜ。」

Ｎｏ６　矛盾だらけの証言

日が沈みかけた夕刻。

迷宮の入り口にて。

数刻前と同じ場所に人だかりができた。

その中心にいたのは、ネコに襲われた負傷者ではい。

二人を監視する衛士と、三人とファ―マ―を囲む数人の衛士達だった。

数分前――――――。

樹海の中に五人の冒険者とファ―マ―の姿があった。

ファランクスを先頭に、パイレーツとゾディアックの２人が彼女に続く。

そしてさらに２人の背後にはシノビが歩き彼らの動きを監視している。

ぎこちない集団の背中を見て歩くファ―マ―は歩いていた。

「あの、お二人をどうするんですか？」

小声で隣を歩く女のパイレーツに聞いてみた。

「我らはあくまで一介の冒険者だ。犯罪者を裁く権限はない。これから衛士達のもとに連れていくのだ？」

「そうですか…。」

もしかするとあの二人は自分が海都にやってきた責で投獄されるのかもしれないのだと。

複雑な気持ちになってしまっていた。

「そなたは被害者であろう？気にする必要はない。衛士達の前で堂々と事実を話せばよいのだ。」

と命の恩人のリーダーは蒼い瞳を向ける。

「あの。」

「どうした？」

「荷物、ありがとうございます。」

収穫物とファ―マ―愛用の農具は彼と女のパイレーツが分担して抱えていた。

そして現在――――――。

口元を覆う制服の襟を下げ、衛士がファ―マ―に質問する。

「三人の冒険者の証言によると、君はゾディアックに殺されかけたようだがそれは事実か？」

衛士を前に彼は証言した。

「違います。」

「えっ？」

「…。」

「ほう。」

三人が見守る中、彼は続ける。

「違う？」

「はい。」

「では真相を聞かせてもらえるか？」

「アイテムの採取が終わった時、ゾディアックさんは僕が分け前を横取りしようとしていることに気づいて罰を加えようとしたのです。」

「罰？」

衛士が驚いたように繰り返す。

「待ちなさい。私が止めなければ君は死んでいたぞ？」

ファランクスが横から言うが「いえ、僕はそれを承知で二人についていったんです…。」

「なるほど。『制裁』と言ったゾディアックの言葉は嘘ではなかったようだな?」

「ひめさ…（姫様?）、いやパイレーツ?」

「つまり君が横領しようとしたことにゾディアックが気づき、彼は君に制裁を下そうとした。そこへ彼ら三人がやって来たというわけか?」

頷くファーマー。

「ごめんなさいファランクスさん、シノビさん、パイレーツさん。勘違いさせてしまって。」

「あの二人に脅されているわけではないな?」

不自然な証言に別の衛士が質問をしてくる。

「同行する前に制裁について聞かされていたのか?」

頭上からの質問。

「もちろんです。」

「しかしファーマー君。『横領しようとした』。それは事実か?」

「そうですよ？」

「私には君がそんなことをする人間には見えないのだが。」

「そんなことないですよ？（そう言っていただけると嬉しいような）。」

「そうか。」

「制裁を承知で盗みとるとはな。あの採取物なら無理もないか。」

とその衛士は少し納得したように呟き、

「最後に一つ聞きたい。」

とファーマーに聞いた。

「リュックは彼ら二人が所持していた。それは間違いないようだな？」

衛士が女のパイレーツに確認する。

「ではファーマー君。君は横領しようとしたアイテムをどこに隠し持っていたんだ？」

「…。」

ファーマーは黙って帽子を脱いだ。

「それは。」

彼の頭には採取した野草と根に付着した乾いた土がのっていた。

「なるほど。」

「ギルド内で起こった事件なら我らの出番はない。度が過ぎるが彼も同意しその上で行ったことだ。」

早々と結論づける衛士達。

ファーマーを信じているのか。

それとも国の評判にもかかわるため、冒険者による犯罪の検挙数を極力減らしたいのか。

衛士達は二人を監視していたメンバーにも呼びかけ撤収する。

「お騒がせしてすみませんでした。」

帽子をかぶりなおし再び深々と頭を下げる。

「ところでファーマー君。」

立ち去る間際に一人の衛士が話しかけてきた。

「例え登録者と同伴でもギルド未登録者が迷宮に入ることは海都の規律に反することだ。」

「はい…。」

「本来なら刑に処するところだが。」

（牢屋に入れられちゃうのかな？）

「負傷者に目を奪われていたとはいえそれを防げなかったコチラに非はある。」

「えっ？」

「刑罰は免除しよう。以後気をつけろ、新人君。」

Ｎｏ７　見送り

翌日の昼。

アーモロード港の桟橋にて。

「慈悲を願った覚えはない。」

「おいおいそりゃねえだろ？」

「いいんです。僕が正直に商売をしなかったから、お二人を巻き込んでしまったんだと思います。」

桟橋に立つファーマーと船へと伸ばされた橋の上に立つゾディアックとパイレーツ。

「最初に『登録料』なんて嘘をついたのは俺達だ。」

「礼は言わんぞ？」

頭を下げるパイレーツ。

たがゾディアックはファアマーと目を合わそうともしない。

衛士達から解放された後、二人は姿を消した。

一方、ファーマーは三人に案内してもらい収穫したアイテムを全て売った。

そして翌朝。

シノビの嗅覚に協力してもらい二人を見つけ四百ｙｅｎ分のお金を渡したのだった。

本当は三人に反対されたのだが、彼は誰かと一緒に稼いだ分け前を一人占めすることがどうしてもできないようだ。

「靴はあの三人に買ってもらったのか？」

「そうなんです。あの人達が薦めてくれて。」

照れながらファ―マ―が答える。

樹海でサンダルは危険だろうと彼ら3人からのお金を合わせて買ったものだ。

「あの三人のギルドならお前さんも安心できるだろ？」

「せいぜい野良仕事に精を出せ？」

「あはは…。」

「出港――。」

甲板上から船員の声が聞こえた。

時間だ。

「海都に戻ってきたら、この借りは必ず返すぞ。」

「お二人も、お元気で、」

「ふん。」

二人は船へ歩き出す、しかしゾディアックが突然立ち止まり、ファアマーへと引き返してきた。

「おい。」

「は、はい！」

心の中で防御の号令をかけるファーマー。

「あの三人にも伝えておけ。」

「？」

「『オランピア』って女に気をつけろ。」

「えっ？」

「仲間を殺されたくなきゃあな。」

言うと足早にゾディアックも乗船した。

「『オランピア』？」

錨が引き上げられ、真っ白なマストを大きく広げ船は出港した。

「彼はこれからどうするんでしょうか？」

三人は港の見える街道からファーマーの様子を見守っていた。

「何を言っておる？既に我がギルドの仲間ではないか？」

「え？」

「『ヨーホーヨーホー、略奪なんて朝飯前♪』」

その歌を聞きファランクスは樹海での会話を思い出す。

「本気で言っていたのですか？」

「あの採取量はなかなかのものだ。なんとしても我がギルドに入ってもらうぞ。」

「そうですか…。しかし彼は納得してくれるでしょうか？あんな事件の後で。」

「それにあのファーマー料理も得意だと言っておったぞ？」

「なんとしても勧誘しましょう。」

ファランクスが大まじめに答えた。

「そなたもよいなシノビ？」

二人の横に立つシノビは「かまわぬ。」と短く返答。

「しかしそなたが刺された時は内心冷や汗ものだったぞ。まさかあんな忍術を使えたとは思わなかった。」

「左様か？」

「ああ。私も驚いた。」

「では今度から囮を出すと申してから使うか？」

鋭い目を向け大真面目な顔で話すシノビ。

「申すって…。」

「それでは囮の意味がないではいか。」

「みなさ～ん。」

ファーマーが街道への階段を駆け上がって来た。

「足は痛まぬか？」

「はい。おかげさまで。」

息を整え、改めて彼は三人に礼を言う。

「よいのだ。これから我がギルドでしっかり働いて返してもらうぞ？」

「えっ？」

そして、改めて三人の顔を見上げた。

「そなたは先日初めて海都に来たのだろう。所属するギルドが決まっていないのなら、我らと共に来ぬか？」

「で…でも。」

「どうした？」

「僕で、いいんですか？」

遠慮がちに答えるファーマーに「当たり前だ。」とパイレーツは腕を組み堂々と言う。

「拙者も同じく。」

「シノビさん？」

黒い装束の男、シノビは鋭い目を向けてくるものの、最初に会った時よりも彼の目にどこか柔らかい印象を受けていた。

そこへ真剣な面持ちで近づくファランクス。

「ファーマー君。料理は得意なのか？」

「はい。少しくら…？」

「決定。」

「は？」

両肩にがっしりとファランクスの両手がのせられる。

後に彼女の食への執着に恐怖することとなるであろう。

「全員一致だ。あとはそなたの意思で決めろ。」

「は、はい！！」

残り七十二日にて。

ギルド『Ｋｉｎｇｄｏｍ』に四人目の仲間が加わった。

「『いっかくせんきん、いっかくせんきん』。確かに、斜めだよな」

海都から離れる船上にて。

パイレーツの目に小さくなった海都が映っている。

大樹を中心に見事な円錐形であり、初めて海都に来た時には、そんなことに注意をはらうこともなかったが。

「なぁ、ゾディ。お前にしてはあっさりやられたよな、あのシノビに…」

隣に立つ唯一の仲間にパイレーツは聞いた、わざと『シノビ』という言葉を強調し。

「油断したか？」

南風を受け船の速度が上がると、海都の姿が影のように薄く消え始める。

「…うるせぇよ。」

ゾディアックの声は震えているように相棒には聞こえた。

それ以上、パイレーツは何も聞き返さなかった。

世界樹の迷宮。

たった一日で三人の冒険者が命を落とす迷宮である。

ベテランのギルドとて例外ではない。

第二章
一攫千金。
完。

ひとやすみ　ｐａｒｔ２

一応『世界樹シリーズを知らない方にも世界樹を！』をテーマに執筆してはいますが、あのゲームの世界を忠実に再現するのって難しい。

だからこそやりがいもありますが…やっぱり難しい。

船の種類から、南国の気候、海賊の歴史、樹海の描写と魔物の習性なんかを考える時、やっぱりたよりになるのは教科書です。

完成品を最初から投稿できればいいのですが、現状は勉強しつつ世界を作っいる最中でございます。

しっかし読み直して見ると自分の文才の無さが悲しくなってきますね・・・。

シナリオを読む感覚で楽しんでいただければ幸いです。

第三章　垂水の樹海より愛をこめて

北の大陸に三つの国があった。

一つは帝国とよばれ、兵力と戦争術に長けた、力ある国。

二つは皇国とよばれ、天文学や神学等、様々な知識を持つ、紳士的な国。

三つは王国とよばれ、美しい湖と大きな森を持つ豊富な資源のある、平和的な国。

三国は各々が秀でた分野で助け合いながら、北の大陸に存在していた。

しかしある日。

王国が一夜にして崩壊した。

残った二つの国は悲しんだが、帝国だけは内心喜んでいた。

兵力と戦争術を持ち、さらに王国の資源を奪えば、最強の国になれると思ったのだ。

しかしその計画を考えながら哄笑する日々はすぐに終わりを告げることとなった。

王国の中に一人だけ崩壊の難を逃れた生き残りがいたのだ。

それも正真正銘、王国の王家の血を引く幼子だった。

皇国はその人物を引き取り最終的には王国復活の中心人物にしようと育て始めた。

一方、千載一遇のチャンスを壊された帝国は快く思えなかった。

いかに王国の血統を持つ人間であろうとたった一人の幼い人間に何ができるのかと。

しかし帝国も王家の人間が生き残っている以上、王国の資源には手を出すことはできなかった。

それから十一年の歳月が流れ、王国の生き残りは十六才の誕生日を迎え王家として責任を持つ資格が与えられた。

その日から一週間もたたない間に『百日評定』なる条約が、皇国と帝国、そして王国の最後の一人の間に制定されたということである。

Ｎｏ１　毒蜥蜴に気をつけろ

一匹のトカゲが獲物の姿を感知した。

トカゲは体をくねらせ背後へと向き直り獲物の姿を確認する。

青白い眼球で睨みつけ獲物との距離を測る。

獲物は一人、コチラに背を向け一本道の中央に立っている。

トカゲが人間を数える単位を知っているわけないが少なくとも数は数えられる。

トカゲは口から紫色の舌を伸ばすと自身の唇と牙を器用に舐め回し始めた。

体内から分泌される毒素を塗ることで殺傷能力を上げているのだ。

そのトカゲ、『貪欲な毒蜥蜴（ドクトカゲ）』と呼ばれる魔物であった。

名前の通り強力な毒を体内に持つトカゲである。

緑色の体皮には毒々しく赤い斑点が浮所々に浮かんでいる。

誰が名付けたのか知る人はいない。

これまで登場した魔物、『サエーナ鳥』、『オオヤマネコ』といったネーミングとは明らかに雰囲気が違う。

名前を聞き比べただけではなく見比べればさらに納得するだろう。

体高…四ｍ、
体長…七ｍ。

第一階層の中でも一、二を争う大きさを誇る。

オオヤマネコほどの知性はないがその巨体から繰り出される一撃はそれを凌ぐ。

普通のトカゲは地面を這うように移動するがコイツは違う。

四肢の筋肉が発達し象や馬のように走ることもできる。

事実このトカゲは既に走り始めているのだ。

獲物へと一直線に。

ぬかるみの泥水をはね上げ分厚い体皮が道にはみ出す木々の枝をへし折る。

振り回される尻尾が周囲の茂みをねじ曲げる。

獲物が視界いっぱいに映った。

そのまま頭部を突き出し牙を立て、急停止し獲物の感触を確かめる毒トカゲ。

しかし牙には肉の感触はなく口の中に好物の旨みが広がることもな

かった。

「？」

決して仕留め損なったわけではなく確かに毒トカゲの牙は獲物を捕らえていた。

獲物が消えたのだ。

突如、煙のように。

『忍法、陽炎』。

茂みから囮の主であるシノビが飛び出した。

その右手にはひし形の手裏剣―『クナイ』―が握られ、左手には短刀を逆手に持っていた。

混乱している毒トカゲは近づく敵の姿に気づかない。

シノビは上半身を直角に曲げた状態で毒トカゲの尾の付け根へと走り込む。

走り抜ける瞬間、だらりと下げた左手の短剣で二本の後ろ足のかかとの腱を斬りつける。

悲鳴をあげる毒トカゲ。

続けて右手のクナイを地面に深々と突き刺す。

ちょうどそこには太陽によって照らされたトカゲの影が映っていた。

その作業を行う瞬間も足は止めず上半身は直角状態。

そして茂みへと飛び込み身を隠した。

シノビを追うとするが後ろ足の腱を傷つけられ動きが鈍化、そこへ白銀の鎧が毒トカゲの前に立つ。

ファランクスだ。

魔物の頭部を標準に槍をかまえ、だが決して攻撃せずに毒トカゲを牽制する。

眼下に迫る槍にたじろぐ毒トカゲに合わせ、右へ左へと素早く足を回りこませる。

その隙を逃さず新たな冒険者が加勢に入る。

威嚇するファランクスの右手からパイレーツが現れ毒トカゲの頭部に狙いを定め、トリガーが引かれ銃弾が発射される。

一発目。

狙いは毒トカゲの背後にたつ樹木に命中。

射角を調整し二発目。

毒トカゲの頭部の角に命中、雄叫びを上げながら首を振り回す毒トカゲ。

そこに槍の払いの一撃が加わり頭を痛めつけられる。

銃の狙いは頭部から胴体へと変えられ三発目、四発目と続けて撃ち込まれる。

たまらず毒トカゲが後退する。

「今だ！」

その機を逃さずパイレーツが合図を出すと枝の上でそれを待っていたファーマーがナタを下ろしロープを切った。

ロープは石柱とファーマーの乗っているのとは違う樹木の枝が結ばれていた。

本来それらはとても離れた位置に存在していたものだ。

ロープが完全に切られると風を切るように固定されていた枝がもとあった場所へと走る。

合図を出したパイレーツは地面に屈みファランクスも同様の姿勢をとる。

ぶうぅぅぅん、と枝が毒トカゲの側頭部へぶち当たり巨大な拳に殴られたような衝撃を受ける毒トカゲ。

そこへ回転式拳銃の最後の二発が両前足に放たれる。

頭を封じられ命令のきかなくなった足とそこを襲う鉛玉。

四肢の力が保てなくなり、毒トカゲは地響きと共に地面へと膝をついた。

間髪入れずそこへ飛び乗る黒い影、握った短剣を高々と振り上げ毒トカゲの頭部へと振り下ろすのだった。

Ｎｏ２　野営地点にて

世界樹の迷宮は平面の地層が垂直に幾重にも続いてできている。

そして地上から二つ下の地層、つまり地下二階の野営地点にてギルド『Ｋｉｎｇｄｏｍ』の姿があった。

『野営地点』とは、冒険者が休息や野宿を行うために存在し、探索の拠点として扱われる場所、いわゆる安全地帯だ。

周囲の樹木が切り抜かれ、上の地層からみればこの部分だけがハゲ山のようになってみえるだろう。

そこでパイレーツはテントを組み建て、ファーマーは夕食の準備をしていた。

そしてファランクスが立っていた。

『立って』いるのだ。

何もせずに。

「小型とはいえテントを立てるのも骨が折れるな。」

テントの骨組みを合体させながらパイレーツがぼやく。

彼女は一人でテントを建てている。

「また便利なものだ。広げる前は折りたたみ傘と同等のサイズだっ

たのに。」

「…そうですね。」と答えるファランクスだが手が動いていない。

真面目でパイレーツ（姫）思いの彼女なら一『お手伝い致します。』一と一緒にテントを組み立てそうだが。

「骨組みもできたな、次は杭を打つか」

「…そうですね。」

「ファランクス？」

「…そうですね。」

同じ返答を返すファランクス、明後日の方向を見ている。

彼女の目線の先にあるものはファーマー……の前にある鍋であった。

細かくスライスされた野菜がぐつぐつと煮こまれておりファーマー直伝の調味料が投入されていく。

「今日はジャガイモのスープですよ～。」

「ファーマー君。お肉はいれないのかな、かな？」

「ファランクス！」

「え？」

やっとのことでパイレーツに気付く。

「そなたも手伝え！」

「『手伝う』…？」

何をすべきかわからずあたふたするファランクス。

「あ、味見をしに行けばよろしいので？」

「違う！おバカ！」

「違う？」

「もう、知らぬ！」

ぷいっ、と棒立ちの相棒から目を背け杭を打ち始める。

「あ…、…申し訳ありません。」

「もうよい。」

「お手伝いします。」

と慌てて駆け寄る。

夕食というキーワードで支配された脳が解放されテントに気付いたがしかし、時既に遅し。

「私1人でほとんど終わってしまった！」

「えっ？」

「そなたは用済みだ！」

「ああ～ん　（姫様～）。」

これまでにも説明したがファランクスは鎧と槍を装備した重戦士であり普通に歩くだけでもかなりの体力を消耗し、そして腹が減る。

もともと彼女の食に対する執着心はそれほどではなかった。

『それほど』と言っても何が基準なのかはわからないが。

しかしファランクスとして戦う（訓練）するようになると自らの体力と筋力を維持するために食生活に意識を払う必要があると実感。

男性に比べ肉体的にか弱い女性であればなおさらである。

訓練が終わればすぐに飯を食い筋力の強化と体力の回復を図る。

そしてそんな生活を続ける内に、いつの間にか食べることが楽しみで訓練を受けるようになり一日三度の食事が楽しむ彼女がいたのだった。

「まったく。そなたの悪い癖だぞ？」

「…すみません。」

「誘惑に勝てぬ者が迷宮を制することができるか？」

縮こまるファランクス。

「…あの。」

ファーマーの声が叱り叱られ中の二人へと割って入った。

その片手には湯気の沸き上がる小皿が握られている。

「ファーマー?」

「ファーマー君?」

「味見をお願いしてもいいですか?」

にっこりスマイルを浮かべるファーマー君、おそらく2人の会話が聞こえていたのだろう。

なんと気のきく。

「わ〜い。」

銀髪が宙を舞った。

「こらファラ…」

「熱いので気をつけて?」

お皿を受け取りスープを一口、「は〜。」と、なんと幸せそうな表情。

「ファーマー、あまやかすな。」

「でもファランクスさんお腹がすいてたようですし。」

「まったく…。」

「おいし～。」

「そんなに美味か？」

「はいぃ。」

ファランクスはこれ以上ない程の恍惚な表情を浮かべていた。

（美味そうに食べおって…。しかもよい香りがするではないか。）

「私も味見してみるかな。」

「パイレーツさんも？」

「ま、まぁ。別にあまえた気持ちで食べるのではないぞ？そなたの料理の腕を鍛えるためリーダーである私が直々に…。」

理屈を並べ己の欲望を隠そうとするパイレーツ、これに対しファランクスが軽蔑するような眼を向けている。

「な、なんだその眼は！？」

「私のこと叱っておいて…。」

「スープを飲みながら話すな！」

「い、今、持ってきますから…。」

蔑み、弁解中の二人の間に再び小皿を持ってくるファーマー。

なんと慈悲深い。

「お口に合えばいいんですけど…。」

「うむ。ご苦労。」

「ズルい。」

皿をかじるファランクス。

見回りをしていたシノビが戻って来たのはそれからしばらく後の事であった。

『お主ら2人の量が少ない気がするのだがそれで足りるのか？』

『あ、ああ。私は食が細いからな。』

『うぬ。私もあまり腹が減っておらぬのだ。』

『左様か？』

『（味見って言える量じゃなかったからな…。１食分は既に食べたはず。）』

その鋭い目をもってしても彼女達の胃袋の構造はわからないだろう。

シノビが戻ると四人で食事を済ませそれぞれが床に着いた。

大食の二人がテントへ入りファーマーは芝生の上で横に。

シノビは野営地の入口の壁へともたれかけ座りながら睡眠をとる。

まだ日が沈んで半刻も経たないが無意味に起きている必要などないのだ。

彼らの目的はキャンプではなく第一階層の制覇であるのだから。

ギルド『Ｋｉｎｇｄｏｍ』。

彼らが目指すのは第一階層最深部の地下四階。

現在野宿している場所は地下2階の中間地点である。

地下3階への階段を既に見つけているため、明日の早朝から地下三階の探索を開始し、四階へと進むだろう。

説明はほんの数行だが簡単なことではない。

階下へと進むたび魔物は手強くなり冒険者達の負傷率も飛躍的に上昇する。

果たして無事にたどり着けるか。

仮に地下四階まで到達しそのフロアを制覇することができても最後の最後に関門が待ち構えている。

『魔魚ナルメル』

四階最深部にて待ち構える守護獣、第一階層のボスである。

ナルメルを倒さない限り先に進むことは不可能である。

なぜならこいつが第2階層への入口に陣取っているからだ。

風が、ひゅうと吹き、樹海の木々と草花がざわざわとなびく。

数えきれないほどの星々が輝き南国の海都にも肌寒い風が吹き始める。

四人が床に着いてからどれ程時間が経っただろうか。

足音が近づいてきた。

注意しなければ聞き逃してしまうような小さな音だったが、シノビを起こすには十分な音量であった。

音がシノビの聴覚を刺激したその一瞬、あぐらをかいていた両足をはね上げ爪先を軸に身体をくるりと樹海方向へ回転。

中腰姿勢のまま野営地から樹海に続く一本道を注視する。

ここまでがその一瞬であった。

向かい側つまり樹海に三人の冒険者が立っており、その内の一人がコチラに近づいていた。

彼らも野宿が目的だろうか。

それとも物取りか。

「誰か？」

シノビが問う。

返答はない。

足音は近づく。

用心に越したことはない。

いつでも抜刀できるよう右手を腰に装着されている短刀へ伸ばす。

「得物を出す必要ないわ、襲うつもりじゃないの。」

「…。」

シノビは手を戻し相手が近づくのを待った。

予想通り相手はバリスタであった。

影の輪郭を見ただけでもわかる。

巨大な砲を背中に担ぐ冒険者はバリスタしかいるはずがないのだから。

シノビは立ち上がりながらバリスタの両手を目視し、さらに全身へと視線を走らせる。

その一瞬の挙動にも女は気付き「襲う気はないって。」と苦笑いで言う。

「すまぬ。癖でな。」

このバリスタ、闇の中でシノビの動きを見抜きさらに武装を確認する視線にも感いた。

（熟練者か。）

女であったことはこの距離でなければわからなかった。

腰まで伸びた赤毛の長髪と冒険者にしては露出の多い装備、さらにそれが女としての身体を強調していた。

顔も体も、シノビにとって久しく見る大人の女性であった。

「起こしてごめんね。どうしても聞きたいことがあるの。」

『どうしても』と言うなら起きなくても起こされただろう。

そしてくだけた言葉使い。

シノビを子供扱いしているのかそれとも誰に対しても同じ喋り方なのか。

そんな口調でバリスタが続ける。

「ここでの野宿は誰かかに薦められたの?」

質問とは大体が予想外なものだがここまで意図不明な質問も珍しいだろう。

さらにこの質問の場合『誰か』ということが重要なのか。

それとも『薦められた』という事実そのものが重要なのか。

「あん、と。何て聞けばいいかな?」

「道具屋の女亭主に薦められたが。」

頭をかく乱すバリスタにシノビは答える。

二つの要点をまとめた答えに女は合点がいったようだ。

「ああ。ネイピア商会の。」

（ネイピア商会…。確かそんな名前だったか）

「それなら安心ね。」

（安心？）

「この付近で怪しい人物が出没していてね。そいつが道行く冒険者にここで野宿することを薦めていたらしいの。」

「野宿を薦める？」

「そ。だからあんた達がそいつと接触したんじゃないかと気になってね。」

なるほど。

だからそのようなとんちんかんな質問が出てきたのか。

しかし野宿を薦めてくるとは妙な人物だ。

女の話によると危害を加えるわけでも物取りが目的でもないようだが。

わざわざ樹海の中でそんな親切を行う理由があるのだろうか。

「拙者達はその人物に接触したことはない。残念だが力添えはできぬようだな。」

「こっちの都合でお休みを邪魔してごめんね。」

（さしずめ元老院が探している人物であろう。そしてバリスタ一行は懸賞金目当てかあるいは敵討ちか。）

そしてその人物とは第一階層という熟練の冒険者にしてみれば庭も同然である場所へと引き寄せる程の注意人物ということでもある。

聞くべき事を聞き言うべき事を言い終えたバリスタはその場から立ち去ろうとする。

しかし彼女の背中をシノビが呼び止める。

女が振り返ると「こちらも一つ聞きたい」とシノビ。

「ナルメルについて何か教えてくれるか。」

相手が熟練の冒険者となれば貴重な情報を持っているはずだ。

毒トカゲを倒した時は事前に情報を集め敵の習性を理解した上での戦法だった。

しかし最深部に待ち構えるボスとなると情報収集にも骨が折れる。

「何か有利に戦う戦法があればありがたいのだが。」

「戦法ねぇ…。ギルドメンバーによりきりだけどゾディアックかモンクがいれば安心できるかしら。」

「…。」

どちらの職業もＫｉｎｇｄｏｍにはいない。

「ナルメルは逃げ回りながら戦う習性があるから長期戦は覚悟することね。それが嫌なら一瞬で勝負を決める。」

二回目のなるほどであった。

長期戦となるため回復術を持つモンクがいれば心強く一瞬で決定打を与えるためのゾディアックというわけだ。

だからと言って仲間など急に増やせるものではない。

雇うにしても上記二種の冒険者は需要も高いためすぐには見つからず報酬の相場も高いだろう。

「…。」

「不安？」

バリスタがからかうように聞いた。

「…否定すまい。」

「よかったらうちの船長を貸そうか？」

「は？」

「めちゃくちゃ強いわよ？もちろん無料ってわけにはいかないけど。」

自分達のギルドメンバーを貸し出そうとするとは。

冗談のつもりだろうと受けとるのが普通だが、それともバリスタのギルドではメンバーの貸し出しが日常茶飯事なのか。

「おい。いつまで話してる。」

バリスタの背後から男の声。

宣伝されていたご本人の登場である。

「しかも『貸し出す』ってなんのことだ?」

『船長』が呆れながら言った。

どうやら日常茶飯事という仮説は消えた。

『船長』とバリスタが言ったその男、パイレーツである。

海賊帽とベルト、拳銃、サーベル（正確にはカットラス）というお馴染みの装備。

しかし鍛えあげられた筋肉とその上に刻まれた幾多の傷痕、今まで登場したパイレーツでトーナメント戦を行えばこの男の圧勝だろう。

「邪魔して悪かったな。俺達はもう行くぜ」

シノビに軽く頭を下げる船長、悪人顔のわりには礼儀正しくその場を立ち去ろうとする。

「私達はしばらく港にいるから助けが必要なら言いに来なよ？四人でナルメルと戦うのは少し無謀よ？」

「やはりそうか。」

「難ならうちの坊やを貸してあげてもいいわよ？」

「坊や？」

「バカ野郎。とっとと行くぞ。」

船長に連れられバリスタも去っていく。

一人待っていた人物と合流し彼らは樹海の闇の中へと消えていった。

三人の姿を見送った後シノビは野営地へと振り返った。

入口から対角線方向に立てられたテント。

その中で眠っているパイレーツとファランクス。

帽子を枕代わりに草の上で眠るファーマー。

そしてシノビ。

四人だけで、そしてこの四人で魔魚ナルメルを倒せるだろうか。

（考えても仕方ない。）

翌朝に備えるためシノビは草の上へ座る。

彼の視界に灰となった鍋の焚き火が映った。

弱々しく今にも消えそうな光を放っている。

「…。」

（あのバリスタ。）

パチっと乾いた音が鳴り炎が消えた。

（なぜ四人とわかったのか。）

赤い影を最後に、シノビの視界は闇に包まれた。

翌朝パイレーツの姿が消えた。

Ｎｏ３　その女、夢遊病につき

起きた彼女はテントを出て一晩外に置いた装備へ着替える。

胸当てに頭と腕を通しそれを中心に胴回りの鎧と両肩の装備を装着していく。

二の腕まで伸びた手甲に腕を通しグローブと、後は分厚いロングスカートとブーツに足をとおせばファランクスの完成。

最後の仕上げに銀の長髪をツインテールに縛る。

ふと。

彼女に生じた違和感。

何かを忘れているような。

実戦を想定しながら体を動かし自分の姿を確認するが特に問題はない。

頭の中で自分の着替えのシーンから逆再生してみる。

『起きた彼女はテントを出』いやそのもっと前だ。

なんだかテントが妙に広く感じたような。

あのテントは広くはない。

現に昨日テントを建てていたパイレーツが『小型とはいえ…』と言っていたのだ。

パイレーツが。

ファランクスの身体に電流が走る。

起きた彼女のその隣にそこにいるべき人物がいなかった。

「パイレーツ！？」

テントを覗くと、パイレーツが消えていた。

第一階層の地下三階。

ここから第一階層の構造は大きく変わる。

立ち並ぶ樹木が少なくなり視界が開け始めるのだ。

樹木の代わりに道を仕切るのは地下一階の滝から流れ下りた清流、川だ。

環境が変化することから魔物の系統も変わり想定外の魔物の出現に命をおとす冒険者も多い。

『環境が変われば魔物も変わる。』

迷宮探索の常識である。

そしてその常識を己の身体で学んでいる冒険者の姿があった。

地下三階の入口付近にて。

巨大な蛇が少年の身体を締め上げていた。

『オオアナコンダ』

水辺に生息する蛇の魔物である。

本来は夜行性の魔物で昼間は水中に眠っている。

この蛇、水草の出す気泡から酸素を吸うため場所によっては数日間潜水できるのだ。

「うわぁぁ！」

等と魔物の説明をしている間に少年の身体はさらに締め上げられていく。

「くそぉ…！」

蛇の胴は岩のように硬く脱出はできない。

まして両腕両足が封じられた状態で何ができるというのか。

かろうじて動く指先は空をつかむ。

蛇は尻尾の先端をパシャパシャと水面で叩き苦しむ獲物の姿を楽し

んでいるようであった。

やがて獲物の生命力を感じとった蛇は口を少年の頭へと近づける。

顎の関節を外し獲物の頭部を飲み込み始める。

（…！）

粘液だらけの口内を睨みながら少年は後悔していた。

日が昇らない時刻だと油断した。

あの時、川に足を踏み入れなければ。

あの時、相棒と離れなければ。

あの時、口の中に武器を仕込んでおけば。

三番目の後悔に首を傾げる方も多いかもしれないが、冒険者の中には口内に武器を仕込む者もいる。

『含針』という技だ。

等と技の説明をしている間に少年の頭は蛇の喉へと到達し胸までが蛇の口へと入り始めていた。

もうだめだと少年は思った。

否、後悔した行動をとった時点で『既に』だめだだったのだ。

こうなることは数分前までの少年の行動によって導かれた結果なのだ。

生臭い闇に包まれていく少年の視界、これが彼の見る最後の風景だろうか。

パァン。

どうやら違うようだ。

音が鳴った数秒後、グロテスクナなトンネルの視界に光が戻った。

蛇の拘束が弱まり巻き上げてられていた身体は支えを失い始める。

体液が血が空気が、再び全身を巡るのを少年は感じとった。

助かった。

川へ倒れる少年。

もうろうとする意識の中、蛇が自分ではない別な敵へと向かっていく姿が映った。

敵。

二人の冒険者。

少年の意識はそこで途絶えた。

地下二階の野営地点。

初陣のファーマーのようにあたふたするファランクス。

シノビが彼女を落ち着かせ詳しく事情を聞いた。

「皆に言い忘れていたことが…。」

「言い忘れていたこと？」

「共に行動してから日が浅い。伝え忘れることもあるだろう。してその事柄とは？」

「パイレーツは…。」

ゆっくりと呼吸を整えるファランクス。

「パイレーツさんは？」

「落ち着いて申せ。」

「夢遊病なんだ。」

「…。」

「…。」

「最近になってそういうこともなくなったから油断していたのだが。再発するとは。」

「…。」

「…。」

再発にしてもタイミングが悪すぎる。

しかも海都に来てよりにもよって樹海の中である。

「どうしよう…。」

「えぇぇ！」

「なぜそんなそんな大事な事を忘れるのだ！」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい……。」

ツインテールの銀髪が地面を上下する。

「どうしよう～。」

重症である。

「とにかくパイレーツさんを探さないと！」

「幸いまだ日が昇り初めておらぬ。魔物も活動が鈍いはずだ。」

「もしものことがあったら～。」

「ファランクスさんしっかりして下さい！」

「おそらくパイレーツはここから地下三階へ向かったはずだ。」

「えっ？どうしてわかるの？」

「夢遊病のムは漢字の『夢』と同じ。夢を見ているということは本人が直前まで意識していた場所へいく可能性が高い。」

「な…なるほど。」

「そういえばパイレーツさんは昨日の食事の時も地下三階のことを話してましたね。」

「寝ながら歩くということは速度は遅い。ここから遠くへは行っていないはずだ。」

「ファランクスさん行きましょう！」

「あ…ああ。落ち込んでいる場合じゃないな。」

三人は野営地点を離れ、地下三階への道を走り始めた。

結果的にＫｉｎｇｄｏｍの行動は正しかったのだが、シノビの理屈は正しいものではない。

それは彼自身が理解していた。

だがたとえ嘘でも落ち込む仲間を奮い立たせ、かつパイレーツを無

事に探すために迅速に行動を決定する必要があるのだ。
どこを探すか考える時間よりも行動を優先する方が得策なのだ。
そして先頭を走るシノビの脳裏にある謎が浮かんでいた。

（拙者に気配を感じさせぬとは。）

野営地点を出るならば、入口で寝ていたシノビの前を通るはず。
昨夜にバリスタ一行の接近に唯一気付いたシノビがパイレーツの抜け出しに気付かなかったとは。

（不覚。）

そしてもう一つ気がかりなことが彼にあった。

匂いだ。

パイレーツの匂いを感じないのだ。

匂いとは人間の五感の中で最も記憶に残るものと言われ、さらにシノビはそれを鍛え研ぎ澄ましてある。

かつてファーマーと行動を共にした二人組を探し出したのも彼の嗅覚によってだ。

しかし現在。

それがまったく役に立たなかったのだ。

パイレーツの匂いを感じ取れてはいるが、別な匂いが彼の嗅覚を邪魔している。

別な匂い。

パイレーツではなく何か別の匂いだ。

それがパイレーツのと重なり彼女が歩いた正確な道筋を把握することができないでいた。

彼女の後を別の冒険者が歩いたのか。

それとも夢遊病で歩く彼女に付き添うように歩いたのか。

前者はともかく後者は普通に考えてありえない。

眠りながらフラフラと歩く人間について行く人間がいるか。

だが前者も怪しい。

まだ時刻は日が昇らない早朝でありこの時間帯を歩く冒険者は少ない。

さらにその少ない母集団の中で彼女と同じ道順を歩く事実が出来上がるとは考えにくい

（何者かがパイレーツに同行している…。）

シノビが考え始めた時、彼の鋭い目が前方の障害物をとらえた。

他の冒険者が地図を広げ屈んでいる姿に気付いた。

地下二階にて。

リーダーを探すギルドＫｉｎｇｄｏｍとは別ではぐれたギルドメンバーを探す人物がいた。

ゾディアックの女。

年齢はファランクスとパイレーツと同じぐらいだろうか。

『ゾディアック』とは襟元の付いた服を着こなす姿が一般的だが彼女の姿はかなり異質だ。

ジーンズの短パンにヘソだしのインナー。

襟元の付いた服を上着にしているが前で開かれておりそれらが露出されている。

一見わかりずらいが髪の毛も地毛を金髪に染めたものであった。

その頭にも職業上不要なはずのピンク色のサングラスというアクセサリーがのっている。

度胸のある服装とは裏腹に、彼女は不安気な表情を浮かべ樹海の中をさ迷っていた。

前述のとおり単独行動に走り出し姿を見せなくなった仲間を探しているのだ。

「…。」

彼女は適当なスペースを見つけると上着のポケットから第一階層の地図を取り出す。

それを地面に置くと次に2つのサイコロを取り出しそれを左手の中へと握る。

瞼を閉じ呪文をぶつぶつと唱え始めた。

肩の星術器がかすかに唸り微弱な光を放ち始める。

左手からサイコロを落とした。

占星術師が使う長方形の四面サイコロが二つ、地図の上を転がり止まった。

『∴』『▲』。

結果を見た彼女は右手を開き地図の真上を水平に泳がせる。

彼女の右手が地下三階が書き記された場所で止まる。

「…。」

再び瞼を閉じ集中する。

脳内に地図が映しだされその図上に赤い点がピンポイントで現れる。
地下三階へ下りた階段の周辺に一つ。
一本道を移動する点が二つ。
それ以外に頭の中の図上に現れるものはなかった。
確信したゾディアックは地図とサイコロをポケットへ戻す。
（地下三階への階段はここから南。）
立ち上がり行く先を見つめた時、こちらへと近づく足音に気付いた。
「？」
音の方向へ顔を向けると別のギルド一行が走ってくる姿が見えた。
「今のは？」
女のゾディアックと目が合いシノビが立ち止まる。
「占星術？」
シノビの後ろからファランクスが前に出てきた。
「…あなた達は？」

不良のような第一印象を取り払うゾディアックの言葉使い。

さらに脅えたように後退りをする。

「驚かしてすみません。私達は『Ｋｉｎｇｄｏｍ』と申します。」

ファランクスは彼女を刺激しないよう柔らかく言葉を放つ。

「…。」

かなり警戒しているようだったためか、少しの間をおいてゾディアックも名乗った。

「私は…。ギルド『ムロツミ』のメンバーです…。」

Ｎｏ４　二人だけのギルド

「Ｋｉｎｇｄｏｍ…。」

ゾディアックは三人の顔を見る。

シノビをファランクスをそして目線を下げてファーマーを。

「あの。」

「え…？」

見た瞬間ファーマーが口を開いた。

「この近くでパイレーツさんを見ませんでしたか？」

「パイレーツ…さん？」

「髪がブロンドで青い目の女の人です。」

期待を込めて説明するファーマーだが

「…ごめんなさい。ここに来るまで誰とも会っていないんです。」

「…。」

俯くファーマーに申し訳ないと女。

他の冒険者に会えば何かの手がかりが得られると期待していたであ

ろうが、残念なことに収穫はないようだ。
しかしファランクスが気落ちすることなく彼女に話しかける。
「先程のは占星術の一種ですか？」
と。
占星術の中には迷宮内の魔物や人間の位置を特定する術も存在する。
今の術でパイレーツの位置もわかるなら教えてほしいと頼もうとしたその矢先。
「ごめんなさい！」
謝られた。
まだ何も頼んですらいないのだが…。
三人からさらに距離をとった彼女は「私、すぐに行かないと…！」と言い残しＫｉｎｇｄｏｍの逆方向へと走り出していった。
「あの…！」
ゾディアックの背中を呼び止めるも取りつく島もなく、彼女は三人の前から姿を消した。
「…かなり警戒されていたようだ。」
「占星術を使っていたということは誰かを探しているのだ。故に先

を急ぐのだろう。」

シノビがゾディアックが屈んでいた場所へ立ち彼女と同じように屈み目を閉じた。

「シノビ？」

ゾディアックの匂いを記憶したシノビ。

さらにかすかだがパイレーツの匂いを察知。

そして例の匂いも。

「パイレーツは確実にここを通った。」

二人へ言う。

となれば地下三階に向かったという推測にも説得力が増していく。

道はいくつも分かれているがこの地点からたどり着ける場所は来た道を除いて２つ。

地下三階へと続く階段とアイテムの採取ポイントだけだ。

シノビを頼りにＫｉｎｇｄｏｍは再び走り始めた。

方向はゾディアックと同じであったが、目標は彼女ではなく地下へと続く階段だ。

パイレーツは地下三階にいるはずだ。

Ｋｉｎｇｄｏｍが目指す場所に先程のゾディアックがいた。

そこは普通の樹海と大して変わらない風景。違いと言えば歩いていた道よりもスペースが広いことと、フロアを仕切る壁の一面だけが石の壁であること。

そしてその壁に四角く切り開けられた道があった。

階下へと続く石の階段である。

ゾディアックはそこへ足を踏み入れていた

石造りのためか、通路にはヒンヤリとした冷たい空気が流れ樹海からの音も遮断されていた。

鳥のさえずり。

風に揺れる草花のざわつき。

滝から流れる水音。

それらが届くことはなかった。

響く音は彼女一人の足音。

それを聞くのも彼女一人。

今朝に迷宮内へ入った時点でも彼女は一人であった。

『なに暗い顔してんだ?』

『…。』

『なんだよ地下三階に行くのが恐いのか?』

『…。』

『楽勝楽勝!難なら俺一人で下調べしておくしさ!』

『そんな!無茶なことしないで・・・。』

ゾディアックは昨夜の相棒との会話を思い出していた。

彼女の気持ちは彼に伝わらなかったのか。

いやしっかりと伝えるべきだっただろうと後悔していた。

彼女のギルド、『ムロツミ』は駆け出しのギルドだった。

メンバーは彼女と相棒の二人。

相棒は同じ祖国で一緒に育った男。

一人で突っ走る無鉄砲な性格で彼女は常に振り回され、海都に来てもその日常は変わらなかった。

ある時は他のギルドに喧嘩を売られ、相手のメンバーを病院送りに

してしまい衛士達の世話になり、またある時は『己の限界が知りたい！』と突如言い出し酒場で酒を飲みまくり病院送りとなり、さらにある時は樹海でアイテムを乱獲し…。

断片的なそれら事実を振り返れば相棒は、負けず嫌いで、単細胞で、無鉄砲な男といえる。

だがある時のこと。

迷宮で傷つき歩けなくなった彼女を背負い海都へと帰還したことがあった。

途中何度も魔物に襲われながらも相棒は自分を見捨てはしなかった。

断片的な事実の上にその事実を加えると相棒は一途な男といえる。

かもしれない。

互いに支えあい、運命を共にしてきた彼の身に何かがあれば彼女は。

「…！」

螺旋状の階段が終わるとスロープ状の通路に変わる。

その先に地下三階の景色が映り始め

樹海の音と光があふれ、彼女へと届いた。

ゾディアックは我が目を疑った。

石の通路の先に一人の少年が倒れていた。

駆け出したゾディアック。

探していた相棒は彼であった。

だが我が目を疑いたかった。

相棒は地面にぐったりと倒れていた。

「待て！」

背後からの声を無視し彼女は彼の身体を抱き起こす。

彼女に続いて地下三階へと下りた声の主。

シノビだった。

少年を診ることなく短刀を抜き周囲を警戒する。

「…。」

茂みの音を聞きつつ、川の波紋を見、空気の匂いを嗅ぐ。

魔物の中には傷ついた冒険者を囮として使う種も存在する。

殺さずに、血を流させ、傷ついた声を叫ばせ、助けを求めさせ、他の獲物を集めさせる。

（実際のところ少年は血を流してはいなかったが。）

シノビ自身が一度迷宮で経験したことのある事実であった。

遅れてきたファランクスもシノビの隣へと立つ。

「気配は？」

「感じず。」

「痕跡は？」

「見られず。」

「任せるぞ？」

「承知。」

シノビから確認をとるとゾディアック達へ向かう。

少年は地下三階の樹海の地面と石の通路の境目に倒れていた。

彼の名前を耳元で呼びかけるゾディアックだが反応は返ってこない。

気を失っていた。

「ファーマー君、薬草は使えるか？」

自身が調合した薬草袋を見つめていたファーマーが残念そうに首を振る。

「症状がわからないので薬草が選べません。」

「そうか…。」

「治療なら一度海都に戻った方がいいと思います。」

ファランクスとそしてゾディアックへと告げる。

ファランクスはギルド『ムロツミ』の姿を見た。

意識不明の少年と混乱しているゾディアック。

少年を救うには海都へ戻る必要がある。だが、負傷した少年と共に彼女一人で樹海を歩かせるのは危険。

同行した方がいい。

だがしかし、パイレーツを無事に探し出すためには海都に戻る時間はない。

悩むファランクス。

その間も時が流れ日が昇り始める。

「我々は先へ行くぞ。」

「シノビ…。」

死活的な時間を断ち切ったシノビ。

そして目先の感情にのまれることなく彼は語る。

「我らも人を探している最中だ。お主の状況はわかる。さすればお主も我らの状況はわかるであろう。」

頬を伝う涙を拭い「わかっています。」とゾディアックは答える。

それはシノビの言うＫｉｎｇｄｏｍの状況がわかっているということなのか。

「迷宮の中で他の冒険者に頼るのは正しいことではないんです。」

自分に言い聞かせるように話すと「それに…。」と少年の背負った。

「私達の約束なんです。仲間を助けられるくらいにお互いに強くなろうって…。」

とＫｉｎｇｄｏｍに笑ってみせた。

（あの…。）

無理をするゾディアックへファーマーがリュックから荷物を取り出す。

その手に握られていた物は『魔除けの鈴』。

鳴らし始めるとしばらくの間魔物を遠ざけることのできるアイテムだ。

「使って下―。」

「ダメだ。」

シノビの鋭い目が逃さず止める。

「許可も無く勝手にアイテムを渡すな。」と。

「でも・・・。」

「ファーマー。」

「大丈夫です。」

再び笑顔を見せるゾディアック、なんと彼女の手に魔除けの鈴が握られていた。

彼女自身も事前に用意していたようだ。

「ありがとうファーマーさん。だけどシノビさんの言う通りです。生きて帰るためにもアイテムは自分でちゃんと準備しておくものですから。」

無意識の相棒を身体にしっかりと密着させ階段をのぼり始めた。

後にわかる事だが相棒の少年は同年代の男性平均身長よりも十五ｃｍ程低い。

見かけはファーマーと同じだがゾディアックと同年代である。

「どうかお気をつけて…。」

彼女の背中を見送り、Ｋｉｎｇｄｏｍは先へと進むのであった。

パイレーツは近くにいる、本当か、間違いない、そうか、日も昇り始めた急ぐぞ・・・。

『私達の約束ですから。』

ゾディアックが言ったその言葉がファーマーの心に残っていた。

ムロツミの過去に何かあったと感じさせるその一言、それを思い出していた時に気付いたことがあったのだ。

Ｋｉｎｇｄｏｍの過去。

自分が加わる前までＫｉｎｇｄｏｍは何をしていたのか。

なぜ海都に来たのか。

最初出会った時に聞くべきことをムロツミという他のギルドを鏡にすることで気付いたのであった。

離れていく二人の背中を見つめる。

「遅れるなファーマー。」

足音を聞きわけ振り返ることなく、シノビが指示を出した。

今は質問する時間はないと、足を速めた。

Ｎ０５　なぜここに

北側に立ち中の様子を見る三人。

地下三階　南東のエリア。

そこは第一階層で『部屋』として知られる場所。

北と南に樹海への道が続きそれら以外に道の無い広間である。

広さという面もしかりだが、石柱等の障害物が存在せず北か南のどちらかの入口に立てば四方八方が死角なく見通すことができる。

そういった迷宮には似つかないことがこの広間が『部屋』と言われる、一つの由縁である。

その部屋のちょうど真ん中に彼女は倒れていた。

「パイレーツ！」

真っ先に駆け出すファランクスに「待たぬか。」とシノビが声をかけるも、今の彼女に忠告は届かなかった。

枕元で彼女の顔を覗き、そうしてようやく安堵に胸を撫で下ろすのであった。

パイレーツは体を猫のように丸め眠っていた。

スー、スー、と息をする度に彼女の体は柔らかく上下する。

目立った怪我もなく、無事に（？）ここまで来ることができたようだ。

夢遊病。

厄介なものだが、ファランクスはそれを煩わしく思うことができなかった。

「ん～ん。」

膝元で寝返りをうつパイレーツに自然と笑みがこぼれてしまっていた。

（これがなければ、私達は出会えなかったのですから。）

樹海にいることを忘れ彼女の寝顔に魅入っているのだった。

（ファランクスゥ！）
（姫様？）
（勝手に私から離れるな！）
（いや、あの、姫様の寝相が…。）

そしてその僅かな間。

ここから遠く離れた二人だけの日々を思い出していた。

（ファランクス。）
（はい？）
（そなた、私のミルフィーユ食べたな？）

（…。）

（チェック。）
（…。）
（チェック。）
（…。）
（チェック。）
（…。）
（…まいりました。）
（そなた弱すぎるぞ？）
（いや…姫様が強過ぎます。）
（私がか？）
（姫様には兵を動かす才能があるのかもしれません。）
（才能等と言うな…。）
（？）
（親譲りの力では、誰も認めてはくれぬのだから。）

「姫様…。」

仲間達の足音が近づくにつれ彼女の記憶は遠ざかり、海都へ、そして樹海へと戻ってくるのであった。

「大丈夫だ。怪我もない。」

そうか、よかったと同じく安心する二人。

「せんきん…」
「え？」

膝元でパイレーツが何やら呟いた。

「いっかくせんきん。私は姫様、主人公～。」

寝言である。

どこかで聞いたことのある歌のフレーズを自流にアレンジしていたようだ。

だがまたしてもタイミングが悪すぎる。

夢遊病再発に比べれば可愛いものだが、特に我が身の秘密を語るその内容が。

（まずい！）

「パイレーツさん？」

「今なんと？」

もちろん二人にも聞こえていた。

「ふ、二人共！お、乙女の寝言を盗み聞くと、バチが当たるぞ！？」

あっちへいったいったと、有無を言わさず遠ざける。

（乙女って、しかも盗み聞きだと？）

（僕の歌を気にいってもらえていたんだ。）

遠くからその乙女達を見守る二人。

最初は別々のことを考えていたようだが共通していたことが、一つだけあった。

（確かに姫と自称したな。）

（お姫様って言っていた気が…。）

二人の視線が集まる中、ようやくパイレーツは立ち上がった。

起きたのかと思いきや。

目をつむったままファランクスへタックルをかまし再び地面へと横になる。

どんな寝相だ。

（聞き違いか。）

（夢でも見ていたのかな?）

「痛たた…。」

「ファランクス?」

やっとのことで蒼い目が開かれ、身体を起こし部屋全体を見回す。

「よくぞご無事で。」

「…。」

今の彼女の思考回路。

（野営地ってこんなにも広かったか？）
（というかテントで寝ていたはずだが。）
（眠い。）
（『ご無事で』？なぜそんな事を言うのだファランクス？）
（あと五分。）
（…。）
（ここはどこだ？）

ピッカーン。（電球）

「そうか！私は夢遊病で野営地を抜け出し一人でここまで歩いて来てしまったようだな。そしてそなた達が探しに来てくれたと言うわけか！」

合点のいった彼女に、呆気に取られた。

「だいたいそんな感じですけど…。」

コイツ本当に寝ていたのか。

遠くに立つ二人に気づき「シノビ、ファーマー。申し訳なかった。だが感謝するぞぉ。」。

（というかなぜそんな遠くに立っているのだ？）

あんたの寝言のせいだ。

「やっと起きたみたいですね。」

「ああ。やれやれだ。」

その言葉を聞き改めて気付いたことがあった。

（シノビさんも知らなかった。）

さらに先程のムロツミという他のギルドの言葉が頭に再生される。

『私達の約束。』

あの二人がギルドを結成した時の誓いのようなものだろう。

ではＫｉｎｇｄｏｍに誓いはあるだろうか。

そもそもＫｉｎｇｄｏｍとは、何なのか。

この場で聞くことかわからないが、今聞くべきことかもしれない。

振り返るとシノビは崖を見下ろしていた。

この部屋の東側は断崖によって仕切られているのだ。

なんらかの原因で地下の一部が吹き抜けになり、地面が崩れ落ちたと推測されている。

「かすかに焦げ臭い…。」

「あの、シノビさん。」

「？」

崖を見下ろしていたシノビが今度はファーマーを見下ろす。

「『Ｋｉｎｇｄｏｍ』の皆さんはどうして海都に来たんですか？」

単刀直入、藪から棒の質問であったがシノビは冷静に答えた。

「元々『Ｋｉｎｇｄｏｍ』はあ奴等が築いたギルド。迷宮制覇が目的と聞くがその経緯はわからず。」

シノビと二人の雰囲気からか、シノビはＫｉｎｇｄｏｍが結成時からの一員のように思えたのだが。

「当然だ。お主よりも早くＫｉｎｇｄｏｍに加わったのだから。」

「シノビさんはどうしてＫｉｎｇｄｏｍに？」

「あ奴等に惚れたからだ。」

答えの準備が整っていたのか即答だった。

って、おい、惚れたってどういうこと。

「拙者自身が海都に来た理由は仕事を求めて。祖国が天下泰平、つまり平和になったため戦いに関する仕事が減った。故に拙者は海都へ来た。仕事を求めてな。」

祖国。

そうだシノビにも祖国があるのだ。

「ギルドなどどこでもよかったが、あの二人に命を救われたことがあってな。」

「命を？」

「樹海でネコの魔物に襲われ、間一髪のところを救われたのだ。後にパイレーツから勧誘を受けＫｉｎｇｄｏｍの一員となった。」

そうだったのか。

シノビの身の上を知ることができ、ファーマーはなぜか安心することができた。

しかし疑問が一つ残っていた。

「あの…」とおそるおそる聞いてみた。

「『惚れた』ってどういうことですか？」

「好いているということだ。」

当然と言い返すシノビは「お主はあの二人が嫌いか？」と逆に聞き返す。

「そんなわけないです！お二人のことは好きです！」

「そうであろう。」

「はい！」

「つまりそう言うことだ。」

「はい…？」

どうやら恋愛感情ではなく言葉のニュアンスが違うだけのようだ。

「して。」

と仕切り直すように言い、

「お主は一攫千金の一旗を上げるために海都へ来たのだな。」

と今度はシノビが聞き役になるようだ。

「えっ、どうして知っているんですか？」

「…。」

どこかで聞いたこのやりとり。

だがその時とは話の展開が変わっていくようだ。

「でも今は少し違います。」

「今は？」

「えへへ。」

照れれながら自分の靴を見つめる。

「冒険者の皆さんに…」

「シノビィ！ファーマァー！」

そこへよこから割り込むかけ声、ファーマーの会話はパイレーツによって中断された。

「準備ができているなら先へ進むぞぉ！」

装備を整え、どうやら先へ進む気満々のようだ。

「…。」

「それはこっちの台詞だ…。」

「あはは…。また今度お話ししてもいいですか?」

「ああ、拙者もお主の話を詳しく聞いてみたい。」

「えへへ。嬉しいです！」

「お主にも惚れておるぞ。」

「えっ?」

Ｎｏ６　予感は来たか？

地下一階から流れ下りた清流が大河をつくり、地下三階のフロアを駆け抜ける。

流れが速く足を踏入れれば下流へ流され、崖へと一直線、蛇はこんな所で寝ているのだ。

「橋がかかっているとは気がきくではないか。」

「お足元を気をつけて。」

大河が面積を占めているため樹木が少なく見通しきき、探索が容易であった。

「なんだか安心して進めますね？」

加えて先程パイレーツが眠っていたような広間が多いため、構造も単純なのだ。

「迷うことは…ないか。」

そのため探索は順調に進み、昼過ぎに地下四階への入口を発見することができたのだった。

流れる大河を見下ろし、シノビは考えていた。

地下三階。

事前に集めた情報とは違う。
ここには毒トカゲに匹敵する巨大な魔物が生息していると聞いたのだが。
踏破してもそのような魔物の姿はなかった。
そして気がかりがもう一つ。
『かすかに焦げ臭い』。
先刻の部屋での臭いは何だったのか、おそらくは火薬の臭いと考えられるが。
「どうした?」
振り返るとパイレーツが立っていた。
「何を難しい顔をしているのだ?と言ってもそなたは常にそんな顔だがな。」
「何か覚えていないか?」
「何を?」
「いや。」
そもそも寝ていたのだから覚えているはずなどないな、と一人納得し、彼女を横を通り過ぎようとするが。

「はっきり申せ！」

一喝を受けた。

「隠し事をするな！職業柄仕方ないかもしれぬが、今は我がギルドの一員だろう！」

正面に回り込み彼女はシノビの両肩を揺らし始める。

隠し事。

メトロノームのように揺らされるシノビの頭に妙に引っかかるその言葉。

「ほれぇ、申せ！」

「お主、本、当に、一人、で、だった、のか？」

「はぁ？何を言っておるのだ？」

「お、主、は。」

「聞・こ・え・ぬ！」

だったら揺らすのやめんかい。

「お主本当に一人でここまで来たのか？」

ようやく首が止まりまともな会話が始まる。

「そんなことか。」

「わからぬ。」

とため息をもらす。

「だとは思う。」

「私も不思議だ。よく一人で、それも眠りながらここまで来れたものだ。」

唇を噛み、何か嫌な事を想像しているかのような表情。

「まるで誰かがお主を守っていたかのようだが。」

確信を持っていたシノビは第三者の存在について掘り下げた質問を投げかける。

「…。」

「覚えているなら隠し事せずに申せ。」

隠し事をせずに、と。

「覚えてはおらぬのだ、本当に。」

「そうか」とシノビは頷いた。

どうやら覚えていないのは本当のようだ。

「して、もう一つ気がかりなことがあってな。」

「何だ？申してみよ。」

「地下三階には巨大な魔物が生息すると聞くが、その姿が見られぬと思ってな。」

「そんなことか。おそらく他の冒険者達に討伐されたのだろう。」

「しかし数日も経てば、新たな命を得て同じ場所で復活するのが魔物であろう。」

迷宮の常識を指摘するシノビにパイレーツが面倒そうに答える。

「我らが来る直前に討伐されたのだろう。今日の深夜か前日であれば説明がつく。」

「なるほど…。」

「なんだシノビ？そなたもかなり頭が固いな？」

そんなことは承知済みであり、知りたかったのはそんな常識ではない。

魔物へと話題を変えた途端パイレーツの表情が一変しその内容へと食いついたのだ。

覚えていないことは事実であるとわかったが、どうやら第三者の正体に心当たりがあるようだ。

それに触れてほしくなかったのだろう。

後ろで揶揄されながら前を見るとファーマーと地図を持ったファランクスが戻ってきていた。

どうやら道作りが終わったようだ。

迷宮に深く潜ることができても、装備や体力の面からいずれ海都に帰還しなければならない。

その際、地図を頼りに迷宮内に最短ルートを作ることが迷宮制覇を目指す冒険者の常なのだ。

例えば『迂回路の途中で樹木の壁を切り開き反対側へ続くルートを確保する。』といった具合だ。

こうして近道を作っておけば海都に戻る時にも、再び探索をする時にも、時間と体力を節約できる。

戻ろうと歩き出そうとするシノビを彼女によって止められた。

「？」

ぐいぐいと後ろから彼女に腕を引かれる。

そこにはさっきまでの偉そうなどや顔が消えていた。

「どうした？」

「誤魔化さなくていい、そなたは勘がいいから気づいているだろう。」

「誤魔化す？」

彼女とてバカではない。

シノビが自身の出生を猜疑心を持っていることぐらいは感づいている。

言葉を無視し彼女は言葉を続ける。

「私の身の上はかなり変わっている。私が海都に来た理由は…複雑だ。」

無駄に自信を持って喋るのが常だが、今の彼女にはそれがない。

まるで罪を告白するような口調。

そして彼女の瞳は今にも涙が溢れそうに悲しげに輝いている。

「だが今はそれを教えることはできぬ。はは…。笑えるよな？自分で隠し事をするなと言ってこの様だ。」

自分自身をあざ笑うかのように笑ってみせる彼女に言い返せる言葉はなかった。

「だが私の、いや、Ｋｉｎｇｄｏｍの目的は世界樹の迷宮を制覇することと。それに嘘はない。」

「では今まで語ったことに嘘があるということか？」

と、喉に込み上げたが抑えた。

「迷宮制覇のため、Ｋｉｎｇｄｏｍにこれまで以上の苦難が待ち受けていると思う。だからシノビ、その時はそなたの力をかしてほしい。」

「…。」

「これからもずっと…。」

と蒼い目をシノビへと向ける。

「シノビ？」

「拙者は迷宮制覇などに興味はない。以前にも申したが、拙者は仕事を求めてきたのだ。自分が生きるために。」

「そう…だったな。」

「お主の隠し事も気になる。」

その言葉を受けビクリと身体を震わす彼女だったが、

「だがいずれ、真意を話してくれるよな。」

と優しげな彼の口調になぜか彼女の顔に安堵の色が浮かんでいた。

「…いつになるかわからぬぞ？」

「かまわぬ。」

彼女の手を握り、潤んだ瞳を見つめ返す。

「本当に？」

「拙者の力を必要とするギルドは他にもあった。だがその中で拙者自身が共にいたいと思ったのはお主らだけだ。」

溢れる涙が頬をつたい、シノビが指先で受け止める。

「それに比べれば隠し事の一つや二つ、取るに足りぬ。」

「シノビ…。」

「お主らが望むなら、迷宮であろうと海底であろうとついて行く。」

伝えることを伝えると、シノビは何事もなかったように「話は以上だ。」と言い、ファーマーとファランクスの待つ場所へと再び足を向ける。

この小道から大河の下流へと少し歩けば広間へと繋がる。

対する二人はそこにいた。

「あ、シノビさん。道作りは終わりましたよ。」

「そうか。」

「シノビ、パイレーツは？」

「拙者の後ろだ。」

（シノビ。）

「？」

囁くような声に振り向くとパイレーツが続けた。

その表情。

先程と同じようだが、肩の荷がおりたような、どこか楽な風に見えた。

「実は、私は…」

言葉を続けたその瞬間、水しぶきが彼女の背後から噴き上げた。

「え？」

そして水面から白い甲殻が姿を現す。

「下がれ！」

「パイレーツ！」

「魔物だ！」

奇襲であった。

ぶぅぅぅん。

振り返る隙なく、続けて背後から聞こえたのは棒を振り回すような空気の揺れ。

ファランクスが駆ける。

振り上げられた魔物の腕が下ろされパイレーツの身体を貫く。

その瞬間。

黒い影が魔物の視界を走り、獲物が消えた

空を斬った腕。

そこへ踏み込みからの強力な槍の一撃がとび、思わず後退する魔物。

『ノコギリガザミ』

大河に生息するカニに似た外観を持つ巨大な魔物。

白い甲殻に覆われた強固な身体と、両腕のハサミを武器に獲物を襲う。

攻撃を逃れたパイレーツ。

「話の続きが気になるな。」

シノビは抱き抱えていた彼女の身体をゆっくりと地面にねかせる。

足が震え立ち上がることすらできない彼女。

無理もない。

あの一撃で彼女は死んだ。

初めての経験だろう。

命を奪われる一撃を受けたことが。

（恐いのだな。）

今のパイレーツを凍らせているのは死への恐怖だとシノビは思った。

あと一歩、立ち位置が川に近づいていれば間に合わなかった。

それは助けた本人が一番わかっていた。

その僅かな違いで辛うじて彼女は生きているのだ。

「パイレーツさん！」

呼びかけにも彼女は反応ができなかった。

「どうしたんでしょう？」

「初めて感じたのだろう。自分だけに向けられた殺気と一撃を。」

「殺気？パイレーツさん、すごい震えてる？」

「ファーマー！」

「はい！」

「彼女を頼む。」

「わかりました！」

「拙者は加勢に行く。」

シノビが見ると、魔物は左腕を身体の正面に密着させていた。

そして右腕を高く振り上げ、じりじりとファランクスとの距離を縮める。

身体を守りつつ獲物を襲うつもりだ。

カツンと一度自慢のハサミを鳴らし楽しげに笑っているかのようなその表情。

（手強いな。）

相手の力量を判断し、白銀の鎧の側へと駆けた。

『パイレーツさん！』

（ファーマー？）

『どうしたんでしょう？』

（…？）

『初めて感じたのだろう。自分だけに向けられた殺気と一撃を。』

（殺気…？この胸をわしづかむような苦しさがか…？）

『ファーマー！』

『はい！』

『パイレーツを頼む。』

（『私を頼む』…？。私は生きている？）

『わかりました！』

（シノビが助けてくれた？）

『拙者は加勢に行く。』

（加勢？）

（……！待て！）

叫ぼうとする彼女だが身体は一切の命令をきかない。

彼女の身体は死への恐怖に支配されているとシノビは思った。

それは半分正解であった。

（行くな！）

がうぅぅぅんん。

魔物が自慢気に鳴らしたハサミの音が、彼女だけには地響きのように聞こえていた。

彼女の中だけで。

彼女の心中は無視され刃がぶつかり合う音が聞こえ始めた。

彼女1人だけがこの戦いの結果がどうなるか、『予感』できたのだ。

（どうして…。）

本来の彼女ならばノコギリガザミが出現する前から予感できたのかもしれなかったが。

今の彼女にそれは訪れなかったのだ。

彼女の身体を縛るもう半分の答え。

それは死への恐怖以上に、彼女を押し潰そうとしていた
その正体は未来への望みが絶たれることへの恐怖、絶望への恐怖だった。

噴き上げた鮮血は魔物か、それとも。

残り六十一日にて。

彼女達の冒険に不吉な影が現れ始めるのだった。

第三章
垂水の樹海より愛をこめて。
完

ひとやすみ　ｐａｒｔ３

もう少し個々のシーンのつながりを書かないと分かりづらいですね・・・。

なんかビー○たけしさんの映画みたい・・・。

こそこそと修正していきます。

作品を描く中でよくあることなんですけど、本当にそのキャラクターが必要かとわからずに出しちゃうことが多くて苦労しちゃいます（恥）。

でも登場させたキャラクターが自分の予想以上の役目を果たしてくれることも多いんですよね（笑）。

ファーマーも当初は登場させる予定がなかったんですけど、彼のおかげでこの作品が支えられていると頻繁に思います（嬉）。

キャラクターを生かすも殺すも、自分の力量次第と痛感する瞬間です。

第四章　王女の過去

黒い箱が三つ並んでいる。

彼女が別れを告げると、箱の下に並べられた薪から炎がパチパチとわき上がる。

左の棺桶に少年が、

右の棺桶に黒い装束の男が、

そして真ん中の棺桶に銀髪の女が眠っていた。

皆両手を交差し手を胸の中心にそえて眠っている。

左の少年、薬草の知識や料理の腕前で樹海の生活を常に支えてくれていた。

右の男、冷静な判断力と迅速な行動力を駆使し戦いや探索を支えてくれた。

そして真ん中の女、不屈の闘志と勇気で魔物を引き付けメンバー達を守ってくれた。

では私は何ができたのだろう。

一度でも彼らを支えることができただろうか。

炎が三人の身体を飲み込み、黒い煙がわき上がる。

胸が熱くなり、胃液が食道を一気に登り口の中へとあふれ、鼻を突き刺す臭いに涙も流れる。

「…！」

汚れた口元を拭い、彼らの最後の姿を見送る。

彼女の心には魔物への憎しみも、怒りもなかった。

あるのは罪悪感だけ。

己の無力を呪い、己の軽率な行動を呪い、己の言葉を呪い、そして己の運命を呪った。

（皆…許してくれ…。）

Ｎｏ１　水辺の処刑者

ベッドから飛び起きたパイレーツだったが、すぐにベッドへと引き戻され、彼女の身体は柔らかいベッドの上で弾むこととなった。

気付けば腕に手錠がはめられ隣で寝ているファランクスと繋がれていた。

「パイレーツ？」

何事かと、隣で寝ていたファランクスが起きあがる。

「どうしました？」

荒く息をするパイレーツ、寝汗で髪もシーツもぐっしょりと濡れていた。

「…夢？」

ベッドの上から部屋を見回す。

カーテンのかかった窓と隙間から部屋を照らす月明かり。

放置されたコップがのった机と、着替えがかけられた椅子。

部屋の隅に置かれた刺々しい観葉植物。

ここは冒険者達が寝泊まりする海都の宿屋、『アーマンの宿』の一

室だった。

「怖い夢でもみたのですか？」

「…！」

震える彼女の手を握ろうとしたファランクスだったが、彼女はその手を払い相棒の身体へと抱きついた。

「姫様？」

鎧のないファランクスの身体、背中に手を回すと、分厚い包帯が背中から肩を通しタスキをかけるように巻かれ、膏薬の匂いが彼女の鼻に届いた。

「許してくれ…！」

Ｋｉｎｇｄｏｍ一行が宿に泊まる前日に話は遡る。

「…はぁ…はぁぁあ…。」

息が途切れ、全身の筋肉が疲れきったように命令を受けない。

ファーマーに支えられながらようやく顔を上げると、ノコギリガザミと戦う二人の姿が見えた。

遠距離からありったけの手裏剣を打ちこみ、怯んだところを槍の一撃。

甲殻に守られた部分ではなく、守りの薄い関節を攻め続けていた。

予想外の抵抗力だったのだろう、魔物はあきらめたように背後の川へと後退していた。

あと少し。

ガザミの足が川へと入る。

川へと入り沈んでいくガザミを見て安堵したのか二人の攻撃が緩んだ。

『緩んだ』。

いや。

油断したのだ。

構えを解いた二人と、それを見たガザミは体位を真横に変え始める。

ちょうど片足側の付け根をこちらに見せるような体勢だ。

そして足の先端を地面に深々と突き刺したと見えた瞬間、飛んだのだ。

地面スレスレの横飛びを放ち、一気に二人を自分の間合いへと入りこませる。

跳躍を終えたガザミは右腕のハサミをシノビへ向ける。

「な…！」

声を上げた時には遅い。

だがまたしてもガザミの狙いは外れた。

右のハサミが捕らえたものは白銀の鎧。

ファランクスだった。

「う…！」

シノビを突き飛ばし彼を庇ったファランクスだったが、ガザミにとって獲物はどちらでもよかった。

「あぁぁぁぁぁぁ！」

ガザミの右腕に捕らえら悲鳴をあげた。

しまりをきつくしたと思えば緩め、さらにハサミを左右に振り回し彼女の身体を蹂躙する。

ぎちぎちと鎧が圧迫されハサミの刃が彼女の身体へと届く。

槍は振り回される中で手元から離れ、彼女に抵抗するすべはなかった。

「ファランクス！」

シノビがガザミの目を狙い最後の手裏剣を打つ。

しかし攻撃を読まれていたのか左腕のハサミで弾かれる。

あきらめずガザミへと駆け短刀を一閃するが、ガザミの装甲に通用するはずもない。

刀が折れ、お返しの左腕のアッパーがシノビを投げ上げる。

「シノビさん！」

しかしその直前、シノビは口に隠していた針をガザミの目に吹き飛ばしていた。

『含針』。

数本の針がガザミの目を襲いそのうちの一本が深々と突き刺さった。

悲鳴をあげるガザミ。

ファランクスはその隙を逃さない。

地面を踏みしめ、ハサミに捕らえられたままガザミの右腕を押し返し、胴体へとタックルをかます。

関節へのダメージが残っていたのか、腕は難なく押し戻せた。

猛攻に倒れるガザミ。

力の緩んだハサミから脱出し激痛を忘れ、槍へと駆ける。

宙に足をばたばたと動かすガザミだったが、両腕を振り回す勢いで起き上がり体勢を立て直す。

しかしファランクスの方が早かった。

ガザミがガードを固める寸前、大地を踏みしめたファランクスが怒号と共に己の槍を投げる。

それが銃弾のごとく一直線にガザミの身体を射抜いた。

Ｎｏ２　傷痕

その後、ファーマーの切り開いた近道と魔除けの鈴を頼りに野営地点まで戻り体力を回復、辛うじて海都へ帰還し今に至るのであった。

「魔物の殺気を恐れ、足腰が立たなくなるようでは皆のリーダーとして務まらぬ。許してくれファランクス。」

「姫様…。」

「後でシノビとファーマーにも謝っておかなければ…。」

モソモソと枕に顔を沈める。

「もっと強くなりたい。」

くぐもった声でファランクスにも聞こえた。

「明日からしばらく休息をとろう。」

「休息？」

「連日の迷宮探索で三人とも疲れているだろう？さらに今回の一件だ。身体を休めた方がいい。」

（三人…。）

「姫様も休息を取るおつもりですよね？」

「私は大丈夫だ。」

パイレーツの頭を撫でるが手応えがない。

（いつもならこれで泣き止むのですが…。）

さらに彼女はこんなことを言い始めた。

「後悔…しているだろ？」

「えっ？」

「私についてきたことを。」

耳を疑った。

「そっ―！」

彼女と出会った時からこの瞬間まで。

後悔という単語を聞いたことがなかった。

「そんなことはありません！私は姫様と共にいることを後悔など―！」

「もういい。」

「もういい？」

「私は稽古場所を探す。そなたは怪我の治療に専念しろ。」

ベッドでの寝顔は樹海で見せてくれたものに比べ、黒く沈んでいた。

『後悔…しているだろ？私についてきたことを。』

その言葉にファランクスの心が揺れていた。

どれほど傷つこうと、ファランクスは彼女といることに迷いなどなかった。

（姫様がそんなことをおっしゃるなんて。）

彼女の寝顔を見守り、手錠を確認するファランクス。

『私は稽古場を探す。』

（姫様…。どこへ行かれるおつもなのですか。）

パイレーツの言葉に目が冴えてしまったファランクス。

悶々と考え始めてしまっていた。

百日経過まで、残り六十日。

パイレーツの寝顔を見つめ、樹海での夢遊病の一件を思い出し、いつの間にか祖国での日々を思い出していた。

それを止める足音は聞こえず、彼女の記憶が大きく巻き戻されていくのであった。

そういえばかつて一度だけ、彼女が後悔と言ったことがあった。

ＮＯ３　乳母と護衛

王国が崩壊した後。

皇国は生き残りである王女を引き取ると申し出た。

帝国は快く思えなかったがこれを承諾。

一方で王国領土周辺の地域に砦を築上しそれを拠点とする布陣を展開。

王女の実権が皇国に奪われないよう、物理的に王国の資源を囲い込む行動にでるのだった。

『今日からここが貴女のお部屋ですわ？』

初めて目にしたその部屋は五歳の少女とっては大きく、そして広すぎたかもしれない。

『今日のところはゆっくりとお休みなさい？』

『…！』

お休みと言った瞬間、若い乳母のスカートを鷲掴みにする少女。

乳母は少女の事情を察して『今夜は私がお側におりますわ。』と笑顔を向ける。

不安気な少女をベッドに寝かせ卓上の蝋燭に火を灯す。

『可愛い寝顔を見せて下さい？乳母としての楽しみなのですから？』

『…。』

だがその僅かな光では闇を消し去ることはできなかった。

王女が皇国に引き取られて一週間がすぎようとしていた、そんなある日。

『王女様に護衛を？』

洗濯物を干していた乳母に届いた一報。

『皇王殿のご命令であり、兵士を王女の側にお仕えさせる予定だ。』

『兵士？』

『安心してくれ。皇国の数少ない精鋭だ。』

『今の王女に必要なのは兵士ではなくお友達と思いますが。』

『は？』

『できれば同じ年頃の女の子です。』

『王女様は未だに心を閉ざしております。慣れない場所と大人達に

恐怖感すら持っているかもしれません。ここで兵士のような人相の恐い大人を側におけばますますあの子は怯えてしまいますわ。』

別に兵士の全てが人相の悪い人ではないのだが。

『しかし皇王殿は。』

『では私が直接皇王にお話をつけて来ますわ。』

『直接って、しかも呼び捨てですか?』

洗濯板を武器に乳母は城内への進撃を開始する。

『そういえば皇王はどちらにいらっしゃるのでしょう?』

後日、見習い兵士の少女が王女の護衛を務めることが決まった。

『中途半端に生き残りがいるよりも全滅してくれた方がよかったかもな。』

七歳になる王女の耳に、度々そのような話が聞こえていた。

『そうすれば王国の資源は皇国と帝国に均等に配分。こんな戦争みたいなことにはならなかっただろう。』

『幸い民には帝国の動きを知る者は少ない。混乱する事態にはならないだろう。』

『帝国の言う通りだ。王女一人で何ができる。』

『皇王殿は頭はいいが考え過ぎて結論の下せないお方だ。時間の流れに受動的に従うしかないだろうな。』

その度に彼女は護衛の胸で涙を流すのであった。

それらの言葉を否定することができない現実に、いつしか王女は自分には無い力を求めるようになった。

ある日のこと。

『ファランクス!?』

部屋に戻って来た護衛の姿、いつも装備しているはずの鎧は脱がされ、右腕から指先までギプスがはめられていた。

『どうしたのだ?』

『申し訳ありません!』

駆け寄る王女に頭を下げる。

『訓練中の不注意で怪我を…。』

『不注意…?』

『姫様をお守りする立場にありながら…お役目に不備が生じてしまい…、誠に申し訳ありません!』

自分の不注意を責め、そして王女を守れない自分の姿を責めるファランクス。

『ファランクス…。』

王女は彼女の身体を少し抱きよせ、『ニボシ…。食べるか？』どこからか小袋を取り出した。

『…。』

『姫様もお勉強が大変ではありませんか？』

『そなたの訓練に比べれば大したことはない。』

ニボシをかじりカルシウムを補給する護衛を隣に、机で教材を読み解く王女。

横から文章を覗いてみるが、

（分子レベルで生命体を分析する？）

ファランクスには意味がわからなかった。

そこへドアがノックされ乳母が入ってきた。

両腕に銀のトレイと、その上に甘い香りを放つ紅茶とビスケットがのっている。

（おやつだぁ！）

王女とファランクスの心中。

この頃から、既に二人の胃袋は立派に成長していたのだ。

『お勉強は、はかどっていますか？』

『うぬ。そなたが用意してくれた教材は教科書よりも面白い。』

『それは何よりですわ。あら？ファランクス？そのお怪我は？』

『訓練中に怪我をしてしまい…。』

『あらあら。大変ですわ。』

乳母はトレイをテーブルに置き、ファランクスのギプスを間近で見つめる。

『どこを怪我しましたの？』

『腕です。前腕の方を骨折してしまい…。』

乳母がファランクスの右手の爪を押さえつける。

『何を？』

『…血色の戻りが遅いですわ。』

『血色？』

『へっしょふ？』

ビスケットを口にくわえた王女が覗き込む。

『ギプスの締め付けがきつすぎて血流を圧迫しております。後で私が交換いたしますわ。』

『はぁ…。』

『このままでは腕が腐って切断する羽目になりますわよ。』

『え！？』

超ご丁寧な口調で言われた、おっかない言葉。

『ギプスもろくにできないなんて。うちの軍医にはろくな医者がおりませんのね？』

『乳母様？』

『乳母殿は数年前まで、エトリアという国でメディックをしていたのだ。』

『メディック？』

ファランクスも名前だけは知っていた。

メディックとは医学を究め、医術を体得したいわゆる衛生士のことだ。

『さらにメディックとしてエトリアに存在する迷宮に挑んだ冒険者なのだぞ。』

王女はまるで自分のことのように大威張りで話すのだった。

『……初耳です。』

紅茶をカップに注ぎ『昔の話ですわ。』と乳母は照れ笑いを浮かべた。

『この教材も乳母殿がかつての冒険仲間のお方から取り寄せてもらったのだ。』

『うふふ。』

乳母は笑いながら語り始めた。

『彼は元錬金術師でいろいろな分野のことを研究しておりましたの。迷宮で鹿の魔物に襲われそうになったところを助けて頂きそれからエトリアでは一緒におりましたわ。』

『乳母殿は未だにその人にゾッコンらしいぞ?』

『え?』

『あらあら。二人だけの約束と誓ったのに……。』

王女は勉強の合間に、ファランクスは訓練の合間に、二人で乳母の冒険談を聞くことが多々あった。

それは彼女達にとって代え難い時間となっていった。

Ｎｏ４　剣術師範

『突くべし！』
『突くべし！』
『払うべし！』

『突くべし！』
『突くべし！』
『…払うべし！』

『突くべし！』
『突くべし！』
『……払うべし！』

かけ声とともにサーベルを振るう王女。

突け、と言われれば前へ踏み込み剣を突き

払え、と言われれば腕を振り剣の刃で空気を斬る。

これが真夜中の宮殿の庭で、３０分近く繰り返されていた。

『突くべし！』『…突くべし！』『……払うべし！』

スピードが落ち始め、それに合わせてかけ声も遅くなる。

１０歳の王女には大き過ぎるサーベル。

サーベルを振るうというより、サーベルが王女の身体を振り回して

いるように見えてならなかった。

『……。』

かけ声が止まると王女も剣を構えたまま止まる。

剣を握る腕はぷるぷると震えていた。

『よろしい。』

剣術師範の許しとともに、剣を握ったまま膝を落とす。

『はぁ……はぁ…。』

そしてせきをきったように息を荒げる。

『挨拶！』

『あ…ありがとうございましたぁ！』

『稽古を頼まれ2週間。失礼にも3日で根をあげると思っておりましたが…』

師範の男が水筒を渡す。

『忍耐強いですな。王女様。』

王女は差し出された水筒を震えた手でかろうじてにぎる。

『本来ならば訓練というものは朝に行うのが一番身に付きやすいの

ですが、やはり人目につくのはお嫌ですか？』

『…はい。』

握力の尽きた手で、王女は水筒を握りしめる。

『そんなことをすれば、また物笑いの種にされるだけです…。』

『……。』

日頃から指導する兵士が相手ならば怒鳴りつけたいところだが、王女はまだ１０歳。

若くもあり、そして感情が最も揺れ動きやすい時期でもあるのだ。

『私の見たところ、王女様は焦っておりませぬか？』

『焦る？』

『夜は剣術の稽古に昼は勉強。まるで誰かに追いつこうとしている様子とお見受けいたしますが。』

『・・・。』

誰かに。

その言葉は的を射ていた。

『…実は最近、帝国の姫君にお会いしてな。』

『帝王殿の孫娘ですな？』

ため息をつき、『とても同じ年には見えなくてな。』と王女。

王女が暮らす宮殿には帝国からの来客を招く離宮があり、度々帝国からの使者がそこへ足を運ぶことがあったのだ。

帝国の姫君のことだ、正面から王女の事を戦知らずと揶揄したに違いない。

それが不安で剣術を始めたのであろう。

『素質が違いすぎる。』

夜空を見上げ不安げに呟く王女。

『こんな私で王国を復興させることなどできるのか……。』

まれに見かける昼の王女の姿とは別人であった。

（自信をなくしておりますな。）

『王女様。』

王女が見上げていて暗雲立ちこめる夜空の間に、威厳に満ちた、だがどこか優しげな笑みを浮かべる老兵の顔が映った。

『剣術の稽古も大切ですが。ご自身が持つ才能を大切にして下され。』

『才能？』

『王女様が帝国の姫君を見たとき、とても輝いて見えたことでしょう。しかし帝国の姫君も王女様を見たとき、王女様が輝いて見えたはずです。』

その言葉を鼻で笑う王女。

『そんなわけ―』

『ありますとも。誰しも生まれながら才能というものを持って生まれてきます。私とて多少の剣術の才能があるのです。残念ながら王女様には剣術の才能が無いようですが。』

『落ち込む私を見るのが好きなのか。そなたは…。』

『失敬。剣術なら努力すればある程度の力はつきます。引き続き稽古なされ。』

『……うぬ。』

『難しいことは自分の才能が何なのか見つけることです。私も若き頃は吟遊詩人に憧れていたことがあり、いろいろと努力致しました。』

『え？そなたは最初から剣士では無かったのか？』

『いえいえ。ある日のこと自分の役目と才能に気づき剣を握る覚悟を決め、そしていつのまにやら剣術師範です。』

『自分の役目と才能？』

目を丸くする王女。

実はこの教えは昔、王女の最も側にいた人物から聞かされていたのだ。

当の王女は忘れてしまっていたが。

『あと正確には。私は剣士ではなく武士でございます。』

『武士と剣士の違いがよくわからんのだが…。』

そんなことよりも、と師範は仕切り直し、

『王女様はまだ若い。長い人生の中で、剣術が役に立たず躓いた時に、今の言葉を思い出して下され。
どこかの老いぼれ武士がそんなことを申していたと。』

『才能か…。あれば嬉しいが…。』

『あまり深く考えないで下され？必要な時に思い出して下されれば結構ですゆえ。』

『うぬ。どこかの、訳のわからん老いぼれくそじじいがそんな事を言っていたと記憶しておく。』

『素振りを追加致しましょうか？』

それから数ヶ月後。

王女の剣術も上達し、その老いぼれくそじじいの紹介で王女は少し年上の、少し物言いの強い、先輩から銃の訓練も受けるようになった。

それについてはまた別の機会に語られるだろう。

Ｎｏ５　『後悔するぞ』

ドアの隙間から円卓の部屋を覗く王女。

部屋の中には四人、そのうちの二人が椅子に腰掛け二人が立ち王女の入室を待っていた。

誰しもが五感では感じとることのできない気迫を持っている。

その中でも特に存在感を放つ男がいた。

王女の祖国を奪おうとする張本人、第六代目帝国統治者『帝王』である。

その隣には帝王の重臣、右身と帝王が呼ぶ男が立っている。

そしてそこから反対側の席に座る者、第八代目皇国統治者『皇王』。

自分を引き取り、育てた人物であるが、実際に十一年もの間で直接話したことは数える程しかなかった。

正直なところ帝王に比べれば恐くもなんともない。

『逃げるなら今のうちだぞ。』

部屋から視線を外し、ファランクスへと振り返る。

『私の居場所は姫様のお側だけです。』

毅然と言い返す彼女に、うれしさを紛らわすため『後悔しても知らぬぞ?』と意地悪してみるが、

『姫様こそ?』

やはり毅然と返された。

照れ隠しに、ふん、と鼻で笑い王女はドアノブを掴んだ。

虚勢を張ってみたものの、その手は汗で濡れていた。

だが後ろで護衛が寄り添ってくれていると思えば、なぜか不安な心が少しずつ和らいでいくのだった。

『行くぞ。』

今日からちょうど一週間前が王女の十六歳の誕生日であった。

Ｎｏ６　百日評定

『百日間まっていただきたい。』

丁寧かつ敬意を払う口調だがその芯はしっかりとしていた。

帝王の気迫に圧されることなく王女は続ける。

『明日から百日後に私が王国を復興させる力があると証明いたします。』

（何を言いだすのだ？）

王女の意図が皇王には理解できなかった。

『力を・・・証明だと？』

鋭い眼光を向ける帝王だが王女は怯まない。

『王国の生き残りは私だけです。私自身の力で復興することが自らの宿命だと思っております。』

『それは筋が合うが、力を証明とはどういうことだ？』

『力があると見定めなければ、帝王殿も納得していただけないでしょう？』

つまり王女に王国の実権を握ることについてだ。

王女は現在十六歳。

性別を問わず、王族の血を持つ者はその若さで国の統治者としての実権を握ることができる。

無論、あくまで先代の統治者がいなければの話だが。

『なぜワシの納得が必要ある?』

『帝王殿は王国の資源の略奪が狙いと察しますが。』

王女の言葉で部屋の空気にズシリと亀裂が入る。

『本心では私が王国の実権を握ろうとすることを快く思っていないことでしょう。』

『略奪とは人聞きの悪―』

『隠さないでいただきたい。』

煙にまこうとする帝王の口を封じる。

『やめなさい王―。』

『王国の血を引き継ぐ者として、その横暴は許せません。』

さらに皇王の口を無視する。

『横暴とは、随分な褒め言葉じゃな?』

笑ってみせる帝王だったが、その左手は腰に差した刀へと伸ばされていた。

『国王の娘にしてはいささか異端であるな。』

柄をしぼる音が室内に響く。

『帝王様ー』

『ー下がれ右身。』

家臣の言葉を聞き捨て王女を睨む。

『帝王殿。私はあなた様と似ております。』

『似ている?』

『帝王殿は帝国とその民の生活を考え、それに基づいた信念をお持ちの方とお見受けいたします。

王国の資源を狙うのも単なる野望ではなく、自国の乱世を終わらせるためと私は存じております。

そしてー。』

『そして?』

『私も自分が生まれ育った祖国、王国を愛しております。』

『ほう。』

『その復興を邪魔する者は誰であろうと、ねじ伏せる覚悟でございます。』

それを聞き、帝王が円卓から立ち上がる。

『帝王様・・・』

『帝王殿！』

家臣と皇王の制止を無視し、ぐるりと円卓の机を一周するように、王女へと歩みよる。

『つまり王女よ。』

円をかく体とは対象に、眼光だけは王女に向けられている。

帝国の人間は自らへの侮辱や挑発に力で報復しようとする気質を持つ者が多い。

帝王とて例外ではない。

『姫様！』

『下がれファランクス。』

王女の正面に立ち、彼女の顔を見下ろす。

『ワシが邪魔者と申したいのか。』

顔には戦歴を表す幾多の傷跡が存在した。

『答えよ。』

『違います。』

『なら真意を申せ。』

『帝王殿の信念とお考えは私も十分に承知しているつもりです。それを私が成長するまで、十一年もの間、抑え続けた苦痛と憤り。察しているつもりです。』

『お世辞はいらぬ。』

『それをふまえ、本来ならば未来永劫王国に手出し無用と誓約願いたいところですが、それ以前に私自身に王国を復興する力があると帝王殿と皇王殿のお二人に証明すべきと考えました。』

『・・・。』

『私が祖国を思う気持ちは帝王殿と変わりませぬ。ならば私の'信念'を帝王殿は理解していただけると信じております。そして私に王国復興の'力'があると証明できれば略奪から手を引いていただけると考えたことです。』

『ほう。信念と力と申したな。』

信念。

これだけでは大儀をなすことはできない。

力。

これだけでも大儀をなすことはできない。

信念だけでは口先だけ、力だけでは空回り。

『信念』によって『力』を向けるべき方向が決まり『力』によって『信念』はなされる。

帝王の哲学を王女は知っていての言葉だった。

（王女を帝王の孫娘と接触させたのがまずかったか。）

皇王は一人、後悔していた。

『故に百日待てと？』

『百日後に王国復興を担う力があると証明いたします。』

『百日間で何をするつもりじゃ？』

『世界樹の迷宮を制覇してみせます。』

『ぶっ！！』

その言葉に帝王が吹いた。

『ククククク・・・。』

『世界樹の迷宮・・本気なのか？』

この場にいる全員が世界樹の迷宮を知っている。

『百日後に海都アーモロードから私の功績をお伝えいたします。』

『王女！』

『それをふまえ王国の実権を誰が担うのか再びお考え直し願いたい。』

その言葉は帝王ではなく、保守的な策略を好む皇王への気持ちが強かったのかもしれない。

『して王女よ。』

笑いを抑えた帝王が王女へ問う。

『もし百日後に十分な功績が立てられなければどうするつもりじゃ？』

『潔くここへ戻り、』

王女は息を整え、

『帝国へと嫁ぎます。』

宣言した。

『王国の血を受け継ぐ私が正式に帝国へ嫁げば、帝国が王国の資源を獲得することに何ら問題はありませぬ。』

（王女よ、それでは三国間の均衡が崩れてしまう―！）

叫びたかったが皇王はこらえた。

帝国が力を持ちすぎれば皇国の立場が危うくなるのは当然、しかし

帝国の人間を目前にそんなことを言えるはずもない。

そのような皇王の性格を察してか王女が続ける。

『三国間の均衡は崩れぬようにいたします。私が嫁げば王国の資源に関して私にも相応の実権が与えられると考え、過剰な武器ならびに兵器の製造を禁止させます。』

『ふん。いささか都合が良すぎぬか王女よ?』

『あくまで嫁ぐことは、迷宮制覇に失敗した時のことです。それはあり得ないと私は考えております。』

『王女、世界樹の迷宮を侮ってはいけません!』

皇王の家臣が前に出てくる。

『かつて皇国の精鋭達でさえもその迷宮で死にかけたという史実が・・・。』

『心配ありがとう。だが過去の事実に縛られるわけにはいかぬ。』

『は?』

『過去に何人の精鋭が挑もうと、私とは別人でしょう?』

その言葉に家臣だけでなく一同が沈黙する。

その言葉、世間知らずとも言え、勢いだけの若さだとも言える。

しかし帝王と皇王を前にここまで言った王女である。

いくら現実を突きつけても止められないだろう。

『私も知りたいのです。私という人間にどれほどの力があるのか。それがわからぬまま、生きるのは嫌なのです。自分に力があるとわかれば王国を復興し、力がないとわかれば諦めます。この言葉に嘘はありません。』

王女は深々と全員に頭を下げ、彼女の後ろでファランクスも同様にする。

『王国第九代目統治者であるこの私の願い。どうかお聞き願いたい。』

その言葉を聞き受けた、帝王が再び刀の柄を握った。

『帝王様・・・』

そして鞘から刀身が見えた瞬間、刀身を鞘の中へ戻し、鍔が鞘とぶつかる金属音が室内に響いた。

（金打？）

『百日間まってやる。』

最初に王女の願いを聞き入れたのは帝王だった。

『帝国第六代目統治者―帝王―。ここに王女の言葉を受ける。その

若さで大したものだ。気に入ったぞ。』

『して王女よ。最初から気になっていたのだが。その服装は何だ?』

王女の服装に対しツッコミが入る。

『先程申し上げた通り。自身の力を確かめるため王家の力には頼らぬようにいたしたいのです。』

王女の服装は胸元にレースのシャツに、ベストとコートベルトにブーツ。

最初からこんな格好でこの部屋にいたのだ。

『ゆえに海都では王女としてではなく、一冒険者として挑みたいのです。』

服は乳母様に作ってもらい、ベルトに差した回転式拳銃は王女が旅立つ選別として指導してくれた先輩からいただいたものだった。

改めて（どや顔で）自分の姿を見せる王女だが、

（似合わぬ。）

（変な格好…。）

（皇国では流行ないな。）

（姫様はいつものお姿の方が可愛いのに…。）

（そんなコスプレをするために育てたんじゃないぞ！）

以上の反応であった。

『…服装はともかく王女よ！皇国では一切戦いの教育などしたことはないぞ！？どうやって迷宮で戦うというのだ！？』

『これでも六年もの間、銃と剣術の訓練に励みました。』

涼しい顔で返す王女に『どういうこと？』と家臣に怒鳴る皇王。

『いえ、私も知りませんでした…。』

『皇王様に見つかれば怒られると思い、皆が寝静まった時間に稽古をつけてもらいました。』

『！？』

その言葉を受け皇王はうなだれる。

『どうりで…。』

『皇帝様？』

『どうりで、夜な夜な王女が寝室から抜け出し、その日に限って銃声と剣術の音が聞こえると思ったら…。』

『その時点で気付いて下さいよ！！』

（そなたらの国の管理はどうなっておるのじゃ。）

『異論がなければ私達は今すぐ出立いたします。』

『うん、もう好きにして…。』

『皇王！あんたしっかりしろ！』

『行くのか？王女の話を帝国の者達にも聞かせたいのだが…。孫娘にも…。』

『船の準備がありますので急がねばなりませぬ。頂き立ちですが失礼致します。』

『それは飯を食った時に言う挨拶じゃ。』

王女は護衛を連れ部屋を出ていった。

そしてその日から、王女の姿を皇国で見た者はいない。

ひとやすみ　『ほんまでっか世界樹』編（前書き）

原案『ほんまでっかＴＶ』
自己評価。
ファンの方々とＡＴＲＵＳさんに怒られそうな作品です。

ひとやすみ　『ほんまでっか世界樹』編

「実は私、休みでもリラックスできないんです…。」

ファランクスさんのお悩み。

「え～～。本日は番外編ということで、『百日間まってやる。』の出演者のお悩み相談会となります。」

「司会は私ファーマーと、ウォリアーさんの2人でお送りいたします。」

「相談を聞く方々は、エトリアから来ていただいた専門家（冒険者）の方々です、よろしくお願いします。」

「「「「「よろしくお願いしま～～～す。」」」」」（黄色い声。）

（変な企画に巻き込まれたと思ったら、まさか専門家が全員、女性とは…。それも全員可愛い…。）

（ファランクスさん、お悩み解決のチャンスですよ、がんばって～。）

司会者二人の思考が、百八十度違う。

まあそんな感じで番組は始まるわけです。

チーン（ベルの音）。

「はい、メディックさん。」

専門家はベルを鳴らしてから、相談者に質問をする。

質問の内容は専門家達の分野によって様々だが、あくまで相談者のお悩み解決へとベクトルが向けられている。

今、ベルを鳴らしたのは『メディック（乳母さんじゃない方）』という専門家だ。

（うわ、可愛いぃ。）

→ウォリアーの感想。

「え～と、ファランクスさんが『リラックスできない』って感じるのはどんな時ですか？」

とコロコロとした丸顔の少女が質問する。

「えと、冒険中は気にならないんですけど、休みの日とか、あんまり休む気になれないというか…。」

「そうですか…。」

「はい…。」

「……。」

「……。」

一同沈黙。

「えぇぇ!?、会話続いてないじゃん!?」

「えっ、あ、そっか。私が喋ればいいんですね?」

「そうに決まってんじゃん?」

「すみません、なんかこういう場所慣れていなくて・・・。」

(コイツギャラを何だと思ってんだ?)

「ご、ごめんなさい…、」

チーン(ベルの音)。

「はい、ダークハンターさん。」

(うわ、露出度高ぇ。)
→ウォリアーの感想。

「私、お化粧専門家なんですけど、ファランクス…、さんは休みの日に化粧したり、遊び服とか着ないの?」

ウォリアーの感想どうり、露出度が高い黒皮のレザーをまとっている。

「いや、私、あんまりそういうのは…。」

「だめだめ、化粧して、遊ばないと早死するよ?」

「え、早死？」

チーン。

「はいメディックさん。」

「私、メディックなんですけど、」

「いやわかってるよ。」

「え、あの、メディックなんです！」

「そんな前置きいらねぇだろ？名札に書いてあるし、」

「だから、健康とかについて詳し―。」

チーン（ベルの音）。

「はい、アルケ―…」

「まだ話してる途中ですぅ～！」

「あ、ごめん。」

「あんた足踏みトークが多いんだよ！無理にカメラに映ろうとしているだろ！？」

「アルケミストさん、ごめんなさい。まずはメディックさんの後でもいいですか？」

「はい、大丈夫です。」

（アルケミスト…、眼鏡っ娘だけあって冷静だな…。）

「メディックさん、どうぞ。」

「休みの日とかにも仕事とかのことを考えちゃう人って、早死だけじゃなく、うつ病とかにもかかりやすいんです。」

「うつ病？」

えええええええ！！！（観客の声、ヤラセ）

『休めない人はうつ病になる！？』（画面暗転状態でテキストのみのアップ）

「ファランクスさんは真面目な印象があるのは素敵なんですけど、でも休む日はしっかり休むようにしないと。」

「う～ん、わかってはいるんですけど。」

チーン。

「はい、ダークハンターさん。」

「休みと平日使いわけたいなら、休み専用の化粧道具とか、服とか買えばいいんじゃない？」

「休み専用？」

「人間って、その日のファッションによって、テンションとか変わるから、休みを満喫したいなら、まずは服装から変えてみたら？」

「そうなんだ…。」

（やっと専門家らしい意見が聞こえ始めたな・・・。）

チーン。

「はい、アルケミストさん。」

「さっきメディックの足踏みトークの途中に鳴らしてたな。」

「足踏みトークじゃありません～。」

「おいシノビ、このシーンＯＡでカットしておけよ。」

「御意。」

「うわ～ん～～。」

「アルケミストさんは…、分子生物学の専門家ですね？」

「はい、正確には生物全般ですが。」

「なんかすごい専門家だな…。」

「では生物学のプロの方から、何かアドバイスをお願いします！」

「トイレ行ってきていいですか？」

「収録前に済ませとけぇぇぇ！！」

続く

第五章　樽

海上に樽が浮かび波のうねりに逆らうことなく沖へと流されていく。

浸水しているためか水面から突き出た樽の頭が徐々に徐々に沈んでいく。

その様子を六人が停留している船上から眺めていた。

その一人が海面へ飛び込み、樽へ向かって全力で泳ぎ始めた。

波に押し返され、負傷した首がズキズキと痛むがそれに負けずにひたすら海をかき分ける。

早くしなければ彼女の命はない。

なんとか樽へと手を伸ばし、背中に差した短刀の柄で蓋を叩き割る。

開いた口に腕を潜りこませ蓋を取り外す。

しかしその瞬間、重たい波が樽と男を引き離した。

不幸中の幸いか。

海水が中を満たすと樽は水中へと沈み、

閉じ込められていた女が海面へと浮かんだ。

女は意識を失っている。

海水を飲みながら男は彼女の名前を叫ぼうとした。

がその瞬間。

遠方から海をかき分け、超高速で近づく何かの音が聞こえ彼の声はかき消されるのであった。

Ｎｏ１　シノビのお買い物　～ネイピア商会～

目が覚めた瞬間。

ノコギリガザミからのアッパーを受けた首がずきんと痛んだ。

筋を違えたのだろう。

包帯と膏薬の塗られた首を撫でてみる。

内心シノビは痛みの引き具合に安堵し、そして久々に柔らかいベッドで寝たためか心が落ち着いていた。

横目で帽子をクッションにテーブルに突っ伏しているファーマーを見た。

昨夜は宿が足りず一人部屋しか借りられなかったのだ。

いつもどうり床に座って寝ようとしたが、

『今日は僕がお床で寝ます。』

『なぜだ?』

『お怪我をしているのに床で寝るなんていけません!ちゃんとベッドで休んで下さい!』

と負傷を理由にファーマーが認めなかった。

（ますます惚れてしまうではないか。）

ベッドから出ると、寝起きにもかかわらず尻が痛まないことに感激しながら軽くなった装束に袖を通す。

戦いで忍具を使いきり衣服は本来の軽さに戻っていた。

シノビは顔を洗うこともなく、歯も磨かずただ己の準備を優先する。

武器を持たない自分ではＫｉｎｇｄｏｍの一員としての役目が果たせない。

破損したのであれば入手するまでだ。

スカーフを首に巻き付け口元を隠し、枕元に置いた折れた短刀の鍔と鞘を背中に差し外出の準備を進める。

よくよく考えてみれば昨夜は武器を持たずに寝ていたのだ。

手元に護身道具がないまま眠るなど海都に来る以前であれば考えられなかった。

机で寝ているファーマーの背中にそっとシーツをのせる。

正確にはＫｉｎｇｄｏｍに出会う以前ではか。

部屋を出ると、そのまま宿屋を出、ネイピア商会へと足を向けた。

朝五時を過ぎたばかりで朝日が昇らないためか、海都には似合わず

ヒンヤリとした空気が漂っている。

街道には冒険者の姿はなく、街を歩くのは取れたての魚を二輪車で卸売る漁師達だ。

宿を出る時にも裏口で下働きの少年が魚を吟味し購入していた。

この時間帯は海都の一日を準備するためのものだ。

宿屋正面の噴水広間をぬけ広い街道から裏路地を進むように歩くと一軒の店が立っている。

海都の雰囲気には似合わない、瓦のしかれた屋根と朱色の丸太を柱に建てられている。

そして店の入口には巨大な猫の置物が置かれている。

客を招く猫の置物らしい。

入口には扉はなく、道と店内を仕切るのは膝程に高い仕切り板だけだ。

ここがネイピア商会である。

迷宮探索に欠かせない武器や防具、魔除けの鈴鹿のようなアイテムも購入できる道具屋だ。

看板はなく道具屋であることを知らずに通り過ぎる冒険者も多い。

その異様な外観から知っていても入るのに抵抗があるが。

店内に入ると、今度は巨大な狸の置物が目に飛び込んでくる。

一体なんのために猫やら狸の置物があるのか、明らかに邪魔である。

天井からは濃色の光を放つランプが下げられ見通しが悪い。

商品も空いたスペースに適当に並べられいるというかんじだ。

商品を探すのも一苦労という道具屋としてあるまじき構造。

その道具の中にも用途不明の民族衣装や巨大なお面が壁に掛けられている…。

少々不気味な臭いの店である。

「ごめん。」

亭主を呼ぶと、リンリン…リンリンリン…と、風鈴の音とかっぽり独自の足音が聞こえてきた。

「ヒッヒッヒ、この時間帯に客とは珍しい。」

店が店なら亭主も亭主。

朱色の着物に身をつつみ頭に花の模様のカンザシをさした和風な身なり。

カンザシの他、金のクシや孫の手で髪を飾り蒼い帯で本来の長髪を

後頭部でおだんごに縛っている。

海都では見ることのない異様な服装だ。

ちなみにリンリンと鳴るのは亭主の耳から下がった小指サイズの風鈴の音である。

イヤリングのつもりだろうか。

「久しぶりじゃな、何をお求めかな?」

「短刀を探している。」

「短刀など役に立たぬぞ?思いきって刀を買うのはどうじゃ?最近いい商品が入荷しての。異国の有名なブシドーという冒険者が愛用しておった刀じゃ。見てみぬか?」

亭主の言葉を右から左に、黙って以前の短刀の鞘と鍔を取り出した。

「これと同じ大きさがほしい。」

「…なんじゃい。釣れぬの。」

亭主は渋々とその二つを受け取り、大きさを計り始めた。

短刀の鍔と鞘を使い回すには理由がある。

鍔は短刀を地面に突き刺すことで足場に使い、鞘は先端に穴を開けておくことで、水中で身を隠す際のシュノーケルの代わりにできるのだ。

俗に言う'狐隠れの術'である。（海都に来てから使ったことはないが。）

「この寸法ならいくらか在庫がある。少し待て。」

亭主は店奥に入り、戻って来るとカウンターの上に数本の短刀を置いた。

「探索の方はどうじゃ？順調か？」

短刀を選ぶシノビに亭主が話しかける。

「わからぬ。」

「わからぬ？」

鞘から刀を抜き、錆び具合を確認、刀身は綺麗だが少し重い。

「よく考えたらば、そちらは先日テントを買うていったな？その時にしばらく迷宮に潜ると言っておらなんだか？」

そうだ。

本来の予定ならＫｉｎｇｄｏｍは迷宮の中にいるはずなのだが。

「仲間が負傷し予定より早く戻ってきた。」

刀身を鞘へ収め亭主へ渡す。

「そうか。悪いことを聞いたな。」

亭主は着物の帯に差したソロバンを抜くと玉を弾き始めた。

「そちらのギルドには個人的に期待しておるゆえ、危ない橋は渡らぬでほしい。急がずに時には回り道も大切じゃぞ。」

とがめつい亭主に似合わない言葉の後で、値段を見せられた。

「少し勉強してもらえるか？」

「駄目じゃ。」

「…駄目か？」

「ファーマーに買うてやった靴のツケも払っておらぬじゃろ？」

「あれはもう払っただろ？」

「利子がまだじゃ。」

ため息をつくシノビ。

「…お主の着物かなり似合っておるぞ。」

「難しい顔で世辞を言うな。鐚一文まけん。」

「…。」

「と言いたいところじゃが、Ｋｉｎｇｄｏｍのファーマーには色々

と世話になっておるからの？あ奴の採取するアイテムは金回りのいいものばかりじゃ。」

「だろうな。」

「この値段でどうじゃ？」

ソロバンに弾き出された数字にシノビは財布のヒモを解いた。

「しかしあのファーマーがいるならば勉強する必要などないじゃろうが？」

「武器を壊したのは拙者の不手際。ゆえにこれは拙者個人の金だ。」

新しい短刀を古い鞘に収める。

「成る程。そちの職業にしては仲間思いじゃな。祖国では変わり者扱いされたじゃろ？」

「・・・まあな。」

鍔を交換しシノビは短刀を腰に差した。

「では失敬する。」

と店を出ようとしたが「そうそう、変わり者で思い出した。」と亭主が話し始めた。

何か思い出させてしまったようだ…、そうだとすればろくなことはない。

亭主が語る内容はほとんどが商品の売り込みなのだから。

早々に帰ればよかったと後悔していたが、「最近海都で変わった身なりの冒険者が目撃されとるようでの…」シノビの予想は裏切られた。

「海都での迷宮探索を許された職は全十二職と言われておるが、そのどれにも属さぬ身なりのようじゃと。」

「ここは島国だからな。他の国から来た冒険者かもしれぬ。」

『世界樹』があるのはここ海都アーモロードだけだが『迷宮』はこの広い海を探せばいくらでもあるのだ。

他国の冒険者が海都に流れ着くことは珍しくない。

「そう思うのが普通じゃ。じゃが、そ奴ら。一ヶ月近くも前からずっと海都に滞在しておるらしいのよ。」

「一ヶ月前？」

そして『そ奴ら』と言った亭主。

複数いるということか。

「他国の冒険者でが『世界樹の迷宮』に挑むことは許されぬ。挑める者は元老院によって定められた十二職の冒険者だけじゃー。」

シノビに答えを考えさせるように亭主は一呼吸入れた。

「つまり、他国の冒険者が一ヶ月も長居する理由はないのじゃ？」

確かに。

観光や海水浴に来ていたとしてもそれほど長く滞在する必要などない。

「そこで思い出したのじゃが…」

再び亭主は言葉を切り、シノビへと歩みよる。

「Ｋｉｎｇｄｏｍが海都に来たのも一ヶ月前と言っておったな？」

リンリンリン・・・亭主のイヤリングが目の前で揺れる。

反応の返さないシノビに「靴を買うた時にパイレーツの小娘が言っておった。」と告げる。

「何か心当たりはないかと思ってな。そちらが来た時期と他国の者が来た時期が一致するというのは気になる。」

「他にも一ヶ月前に旗をあげたギルドはあろう？」

亭主の言葉を打ち消すように言い放つが、それを承知で話していたのだろう、「あの小娘。」とこちらを押し返すように話を続ける。

「パイレーツ（海賊）にしてはかなり風変わりな雰囲気を持っておるの？」

「・・・。」

「そうじゃ。まるでどこか育ちのよいー」

「本当のことは当人にしかわからぬ。」

と言い捨てると亭主の言葉から逃げるように店を出た。

「これ！最後まで・・・。」

もやもやした気持ちに支配されながら、薄暗い路地から宿へと戻る。

亭主の前で無関心に装いつつも頭は高速で回転し、ある結論を組み立てていた。

野営地点から夢遊病で徘徊したパイレーツ。

それに付き添っていた第三者の臭い。

そしてＫｉｎｇｄｏｍが海都に到着してから目撃されていたという他国の冒険者。

考え過ぎかもしれないが、だが亭主の言うとおりだ。

『私が海都に来た理由は複雑だ…。』

Ｋｉｎｇｄｏｍには、否、パイレーツには疑いの要素に満ちている。

『実は私は…。』

と、奇襲直前に見た彼女の笑顔がよみがえる。

それが推測の結論を組み立て、彼の胸中を支配する曇りを切り裂いていく。

皮肉なことにその結論に、喜んでいいものなのだろうか。

Ｎｏ２　宿での朝食

高く積み上げられたサラダの山を器に盛りつけるファーマー。
海の恵みを利用したエビやサーモンが包まれたシーフードサラダだ。
それが終わると今度は小皿をトレイにのせ別の行列の後ろへ並ぶ。
その行列は焼きたてのパンの並んだ食台へと進んでいく。
次の狙いは主食、かごに並べられたハムのはさまれた黒パンとバターの塗られたバケットをのせる。
盛り付けが終わると他の宿泊客の邪魔にならないよう、素早く列を離れ自分のテーブルへ向かう。
テーブルを見ると先程まで見なかったファランクスの姿があった。
ファーマーの並んでいた最中に盛付けが終わっていたのか、皿を片手に着席していたところだった
「シノビさん？」
最初に座っていたシノビが、何やらしきりに目線を回してくる。
彼は先に朝食を終えテーブルを確保していたのだった。
なんだろうと思いつつファーマーも席につく。

「おはようございます。」
「おはよう。ファーマー君。」
「パイレーツさんは…？」
「今下りてくる。」
（？）

飯時にもかかわらず元気のないファランクス、ため息までついている。

湯飲みで口元を隠し（皿を見ろ。）と隣からシノビの小声が聞こえる。

（お皿？）
（お主のではない。）
（？）

ファランクスの皿を見た。

（！）

「どうしたんですファランクスさん！？」

「うん・・・？」

視線と違和感の正体、それはファランクスの皿と料理であった。

少なすぎる。

いつもならばハムエッグをフレンチトーストに挟み、それを三セットは平らげるはずが。

今日の朝食はバターロール1個！！

一体どうしたのか。

「お腹、痛ですか？」

「実は食欲がなくて…。」

「えっ…！」

驚きのあまり、シノビがお茶を吹いた。

（し、失礼ですよシノビさん！）

（お主も驚いておったではないか！）

「怪我の影響か？」

口元を拭きながらシノビが聞くが、彼女は首を横に振る。

痛みによる食欲不振とは違うようだ。

皿を見つめため息をつくファランクスは、「パイレーツの様子がおかしくて…。」とぽつりと語った。

「昨日の夜。パイレーツと話したのだが…。」

「パイレーツさんと？」

ノコギリガザミの襲撃後、野営地点へ戻り海都から宿屋に入るまで、

パイレーツは一言も他のメンバーと話さなかった。
そのためかシノビの目も鋭くなる。
「パイレーツは、私がＫｉｎｇｄｏｍの一員になったことを後悔していると思っているらしい。リーダーとして自責の念を持ってしまっているのかもしれないが…。」
ファランクスが二人を見つめ返すが
「あんな彼女を今まで見たことない…。」
再び視線を落とす。
二人にはその『今まで』の長さがわからなかったが、深刻な問題であると察することはできた。
皿に一つのバターロールがなによりの証拠。
「私、どう接していいかわからなくて…。」
沈んでいくファランクス、基本的にしっかり者の大人びた彼女だが、年はパイレーツよりも一つ上なだけ。
彼女もまだ若く、心は鎧のように強固ではない。
さらに朝食時にはその鎧も装備しておらず、ますます弱々しく見えてしまう。
「ファランクスさん・・・。」

シノビは少しだけ彼女の気持ちがわかる気がした。

「お主も拙者と同じで深刻に考えてしまう。もう少し気楽に考えなければ身がもたぬぞ？」

「…でも。私を突き放すように『後悔』って言ってきて・・・。それに今朝もなんだかピリピリしていたような…。」

「結論が出る前から物事を決めつけるのは愚の骨頂。お主がそう思いこみ決めつけているだけではないか。」

その言葉に顔を上げる。

「そうですよ！パイレーツさんの寝起きが悪くてご機嫌ななめだったのかもしれません。」

その言葉に「ありうるな。」とシノビが続ける。

ありうるんですか。

「本当のところは当人に聞かねばわからぬ。それを無理に考えると'術'にはまって抜け出せなくなるぞ。」

「術？」

「良くも悪くも心を縛る思い込みや先入観のことだ。それが強すぎれば仲間内での不和や裏切りを引き起こすこともある。」

「不和や裏切り…。」

「職業柄、拙者はそれを'術'とよぶ。お主のような深く考える人間がはまりやすい。」

（少々話が脱線しているか。）

シノビはお茶を手に取り、「ともかく深く考え過ぎるな?大事なことは当人に聞かねばわからぬのだ。」と告げ、それにうんうんとファーマーが頷いていた。

「そう…だな。当人に聞かないとわからないよな。」

「そうですそうです。あんまり考えすぎちゃ駄目ですよ?」

「…ありがとう、二人とも。少し楽になったよ・・・。」

パンを手に一口かじるファランクス。

それを見てようやく合掌するファーマー。

「お代わり、持ってこようかな。」

お茶を吹いたシノビ。

（失礼ですよ、シノビさん!）

（立ち直りがわかりやすい!）

うきうき気分で盛り付ける彼女の背中を見つめ、ファーマーは笑った。

「珍妙な風景であろう。」

「違いますよ。よかったなって。」

「よかった?」

「シノビさんも。」

「拙者も?」

「こうして一緒にご飯を食べられるのが嬉しくて。お二人とも大事にならなくてよかったです。もしあの後別の魔物が襲い掛かってきていたら。もしも僕が魔よけの鈴を渡していたら・・・。」

そう言うと、彼は帽子を深くかぶり直し、俯くようにシノビから目をそらした。

「ごめんなさい。僕、戦いとか、できなくて…。ちゃんと、生き抜く知識もなくて。」

少し震えた声で言い、パンに噛り付く彼の帽子にシノビは片手をのせた。

「拙者も生き延びることができてよかった。お主のおかげだ。」

「えっ!」

「感謝するぞ。」

「僕は、何も…。」

「いいんだ。もう過ぎたことだ。」

ポンポンと柔らかく膨らんだ帽子を叩き、シノビはお茶をすする。

そして目線を戻すと山盛りの皿を持ったファランクスが見え、辛うじて口を抑えた。

（あの立ち直る早さをファーマーも見習え…。）

その後方で、バイキングのホールへと入るパイレーツの姿が見えた。

口元を拭いながらその姿を見た時、またしても違和感が生じた。

彼女はトレイも皿も持つことなく一直線に向かってくる。

ファランクスが目の前の席に座った瞬間、その違和感が判明した。

朝食時ではシノビとファランクス同様に装備を外していた彼女。

しかし今朝はベルトと海賊帽をきっちりと装備している。

シノビの目線にファランクスが気付き彼女もパイレーツを見る。

「おはよう、ございます。」

「おはようファランクス。」

おはようと返すパイレーツの表情に内心は少しホッとしていた。

「おはようございます、パイレーツさん。」

「おはようファーマー。寝不足か？」

「いえ。」

彼の目を覗き込むパイレーツを止めるため、シノビが声をかける。

「お早う。朝食はとらぬのか？」

「ああ。食欲がなくてな…。」

「えっ！」

「そうか。」

お茶は吹かなかった。

（失礼だぞファーマー。）

（シ、シノビさん…！）

「皆、食事をとりながら今後の予定を聞いてくれ。」

様子はいつもと変わらない彼女であったが、先程の会話からか三人に妙な緊張が生じていた。

口の中のトーストを慌てて喉へと流し込むファーマーとファランクス。

「しばらく迷宮探索は中断しようと思う。ファランクスとシノビは怪我の治療に専念し、ファーマーもしばらく休みをとれ。」

「お休みですか？」

「拙者の傷は大事ない。休む必要はないが。」

「私も同じく。」

二人が意見するがパイレーツは認めない。

「あのあの…その間パイレーツさんはどうするつもりですか？」

「私は稽古場を探す。」

「えっ？」

「今回のように足を引っ張らぬようしばらく稽古に打ち込みたいのだ。」

パイレーツは三人に休養をとらせその間に自分を鍛えようとする気のようだが。

意気込む彼女だがいったいどうするつもりなのか。

もしや、あてもなく同業者を探し、稽古を頼むつもりではないだろうか。

彼女ならばやりかねないとファランクスはハラハラしていた。

「ひょっとするとお主。熟練の同業者を探し、稽古を頼みこむつもりではないだろうな？」

彼女と同じ心配をしていた人物がもう一人いたようだ。
その言葉にファーマーも頷き、これで全員同じ心配していたと判明。
「そのつもりだ。」
毅然と返され、三人とも的中。
本気なようだ。
「あのあの。パイレーツさん一人じゃ危ないと思うんですけど…。」
「なぜだ?」
「同意見だ。熟練の海賊相手となれば危険かもしれぬ。」
「危険?」
「相手がまっとうな冒険者とはかぎりません…。いろいろな噂も海都に流れています。」
「だが。」
「…お考え直しを。」
「…。」
ファーマーに続く二人の援護射撃。

「私は…。」

三方向から口を封じられ、やり場のない目線は下へと向くしかなく、

「私は、皆に迷惑をかけぬようにしたいのだ…。それがリーダーとしての務めではないか。」

と、自分の膝を見つめ絞り出すように言葉を続ける。

ファランクスの言っていた通り、彼女は自責の念を持ってしまっている。

海都への帰還の道中で、治療を受けるファランクスとシノビの姿を見て、そしてベッドの中で、ずっと自分を責めていたのだろう。

それと同時に自分の力量も気になっていたのかもしれない。

戦闘員としてファランクスやシノビに比べ力も体力も劣る彼女、探索中も彼女を心配して休憩をとることが多々あったのだ。

「…。」

「パイレーツさん?」

潤んだ瞳を拭い、彼女は席を立つ。

「リーダーからの連絡は以上だ。皆はしっかり休め。」

言うと三人の言葉を無視し足早にホールを出ていった。

ファランクスが彼女の背中を追うとするが痛む傷口が足を止める。

「無理はするな。拙者が追う。」

「シノビ…。」

「二人は後で港に来てくれ。」

「何?」

「あてがある。」

シノビは事情を説明しパイレーツの後を追った。

Ｎｏ３　それぞれの再会

坂の上の街道から港を見下ろすと水平線が映る。

仲間からの反対を受けても彼女の心は変わらない。

傷つく仲間の姿と昨夜の悪夢、そして今朝の出来事が決していた意をさらに固める。

「行くぞ。」

と自分を勇気付けるように言うと「待て。」と背後からの声。

いつの間にか、斜め後ろに伸びた自身の影に重なるように黒い装束が立っていた。

相変わらずまったく気配を感じなかった。

「私を止めにきたのか。」

「それが理想だが、お主の意地にはかなわぬ。」

「意地だと?」

「拙者にあてがある。ついて参れ。」

シノビは彼女の肩を通りすぎようとする。

「稽古に励みたいのだろう、協力してもらえるギルドに心当たりが

ある。」

「協力？そなたの知り合いか？」

「樹海で出会った熟練のギルドだ。『私達はしばらく港にいるから助けが必要なら言いに来なよ？』と言われてな。」

シノビは女の声で台詞を再現した。

「…気色悪いぞ。」

「やかましい。ともかく、そのギルドの中にお主の同業者がいたのだ。協力してもらえるかもしれぬ。」

それはともかく、協力してくれるギルドがあるとは驚いたものだ。

そして危険だと反対しながらも彼自身が協力してくれることが彼女は嬉しかった。

「なんだ？」

パイレーツは前を歩くシノビの腕に抱きついた。

「優しいな、そなたは。」

「暑苦しいから離れてくれるか？」

「なんだその態度は？」

その時、シノビの究極の五感があることを察知した。

「お主、香水をつけているのか？」

「何を言うのだ？私は香水など付けぬぞ？」

迷宮内で香水をつければ魔物を刺激するおそれがあり、また海都では売られてはいない。

そのため冒険者が香水を付ける習慣は無い。

だが彼女からどきつい人工の香りが漂ってきたのだ。

量はかすかであったが、匂いの質はかなり強烈であった。

「そなたの鼻がおかしいのではないか。」

「やかましい。」

「ちなみにそのギルド名はなんというのだ。」

「聞きそびれた。」

「おい…！」

「臭いは記憶しておる。決しておかしくなってはおらぬ。」

「本当か？」

嗅覚が狂っていないということは、香水の臭いは何だったのか。

考え過ぎかもしれない、もしかすると宿屋で誰かとすれ違った時に臭いが移っただけなのかもしれないのだから。

「そのギルドのメンバーは三人。そのうち二人と接触することができた。一人は左目に眼帯を付けたお主の同業者だ。」

「左目に眼帯か…。」

「それと赤毛で長髪のバリスタ。女だ。」

「赤毛で長髪!?」

「心当たりがあるのか?」

「口調は先程のそなたの通りだな。」

「『私達はしばらく港にいるから助けが必要なら言いに来なよ?』」

「…気色悪い。」

「やかましい。」

三度目の台詞に、パイレーツはおでこに人差し指をあてるという、わかりやすく考えるポーズを取る。

「海都へ来る船で出会ったお方かもしれぬ…。」

「サエーナ鳥に襲われた時か?」

シノビもパイレーツ達が怪鳥に襲われたことは聞いていた。

同船していた冒険者と協力し、それを撃破したことも。

「ちなみにそのバリスタ、胸がでかかったか？」

頷くシノビに確信へと変わった。

『お怪我をしているのに鎧を着るんですか！？』

『万一のことがあっては危険ですから…。』

『駄目です！お身体に障ります！』

『しかし…。』

『めっ！です！』

『ではせめて武器だけでも…。』

『僕がお持ちします！』

ルームキーを手に二人の部屋へ入り、

言われた通りシングルベッドと床の間を覗き武器を見つけた。

手元へたぐりよせ両手で持つとその重さが伝わる。

見た目よりもかなり重い、ファランクスは常にこんな武器を扱っていたのか。

等と感心している場合ではない。

急いでシノビとパイレーツの後を追わなければならないのだ。

部屋を出て小走りに廊下からホールへと進むが、

鍵のかけ忘れに気付き再び急停止、部屋へ戻り鍵をかけ、（戸締まり、よし！）とＪＲの信号確認のごとく指差し確認。

ロスタイムを取り戻すため二倍速で進むが、後ろから呼び止められ再びロスタイムが発生。

「なんでしょう！？」

と勢いよく振り返り見上げると、見覚えのある女が立っていた。

「先日はどうも、ファーマーさん。」

「…ムロツミさん？」

廊下でファーマーはある人物と再会した。

『この近くでパイレーツさんを見ませんでしたか？』

『パイレーツ…さん？』

『髪がブロンドの女の人です。』

『ごめんなさい！・・・私、すぐに行かないと！』

夢遊病のパイレーツを追跡した時に出会ったへそ出しファッションのゾディアックだ。

『相棒を助けたくば急ぎ海都へ戻れ。』

彼女も樹海ではぐれた仲間を探し、傷ついた相棒を背中に一人で海都へ戻ったのだ。

「ご無事だったんですね…！」

再会は安堵とともに胸を締めつけた。

「あの…。相棒さんの…具合はどうですか？」

その質問に「お灸を据えておきました。」と笑顔を返す彼女に、少年の胸の鎖は消えるのだった。

「皆さんもご無事でなによりです。パイレーツさんは見つかりましたか？」

「はい（？）」

思わず、「今から探すところです」と言いそうになってしまう。

前回と今回も彼女と会うタイミングがパイレーツの追跡と一致するとは縁起でもない。

「改めて皆さんにお礼をさせて下さい。パイレーツにも。」

「そんな、僕達は何もしていません。」

「相棒が言っていたんです。『襲わたところを銃声に助けられたって』って。」

「えっ？」

「Ｋｉｎｇｄｏｍさんの探していたお方でしょう。」

まさかパイレーツが眠りながら発砲したのか？

「『応急措置もしてくれた』って相棒が。」

寝ている人間が応急措置をするだと？

誰かがパイレーツと一緒にいたということか。

Ｋｉｎｇｄｏｍのメンバーは四人。

そんなことはありえない。

だがムロツミの曰くパイレーツの隣に誰かが立っていた。

それも夢遊病の彼女の隣に。

誰が何のために。

「ところで、どうして槍なんて持っているんです？」

その言葉に現実に気づくファーマーであった。

「ごめんなさい！僕はもう行かないと！」

頭がごちゃごちゃのまま、彼女に一礼し、そしてホールへ走りだす。

不似合いな装備を持って走る彼の背中をゾディアックが見送っていた。

その頃、港では。

「誰？」

船尾で掃除していた女が呟いた。

彼女は二人が自分の船に近づく足音に気付いたのだ。

正確な人数は見てから気付いたのだが。

掃除用の布きれを持ったまま船壁から見下ろす。

この時間帯に自分達の船を訪ねる客は多くない。

最初は『誰』と聞いた女だったがその姿に見覚えがあった。

掃除していた薬室を閉じ、分解された巨砲をケースの中に収納しロックをかけると女は船から桟橋へと下りた。

一人は一ヶ月前―。

新式の武器を購入するため海都から一人で出張し、その帰りの船で出会った一人だ。

その姿と声が頭の中に再生される。

同時に嫌というほど頭に突き刺さった怪鳥サエーナの奇声も。

そしてもう一人は最近―。

野営地点で出会った用心深い冒険者。

「お久しいな、バリスタ殿。」

「また会えて嬉しいわ。探索は順調？」

「うぬ。バリスタ殿の忠告のおかげだ。」

「あらん。それは先輩冥利に尽きるわ。仲間も集まったみたいね？」

シノビを見て彼女が言った。

「拙者も貴殿の噂は聞いておったが―。」

「古風だけど、なかなかいい男じゃない？」

「―…。」

「って、ご用件は？」

察するにぶらぶらと港を歩いていたわけではないだろう。

「お主先日、『困ったことがあれば訪ねてもよい』と言っておったからな。その言葉にあまえようと思った次第だ。」

普通にシノビが言った。

さすがに本人の前では声真似はしないようだ。

「ふ～ん。」と他人事のように返すバリスタ。

特に迷惑そうな顔でも、歓迎するような表情でもなく「何を頼む気？」と聞き返す。

「船長殿にお目通り願いたいのだが？」

「船長に？」

「うぬ。」

「レンタルなら一日千ｙｅｎが相場ね。」

「そういうわけでは…。」

「私の稽古をつけてほしいのだ。」

「へ～。稽古ね。」

「うぬ。」

「稽古…。けいこ…。恵子…。戸田恵子…。」

中尾隆聖と返せばいいのだろうか。

「稽古!?」裏声。

「…う、うぬ。」

「武士じゃあるまいし稽古なんかつけられるわけないでしょ?」

「そこをなんとか…。」

「なんとかもなにも、うちの船長は剣術も射撃も我流よ。あんな戦い方をあんたが学んでどうすんのよ。」

予想通りのリアクションである。

「話だけでもー!」

「帰りな。」

その言葉でパイレーツを突き飛ばし背中を向けるが、しかし。

「船長殿!!稽古をつけていただきたい!!」

これであきらめる彼女ではない、バリスタを無視し船へと叫ぶ。

「ちょっと・・・!」

「やめぬか!」

「お話だけでも聞いていただきたい！！」

「バカ言ってな―！」

「どうしても必要なのだ！」

「他を当たりなさいよ？」

「いやだ！」

「迷惑よ！」

「これも何かの縁であろう！乗りかかった舟には乗るものだ！」

「勝手に乗りかかってきてるんでしょうが！！」

と、そこへ「いいぞ。」暴走する彼女に天からの声が聞こえた。

シノビが耳をふさぐ程のやかましさにもかかわらず、その声は自然とその場に聞こえたのだ。

パイレーツにとってその声はまるで、雲の隙間から差し込むお日様の光のように思えたことだろう。

「船長…？」

上甲板からこちらを見下ろす船長の姿。

「バリスタ、門前払いなんて客人に失礼だぞ。」

Ｎｏ４　いいクスリ

港には多種多様な船が停留している。

漁にでるための帆船、主甲板のみで構成された交易船、数本のマストを備えたシップ、さらに右舷左舷の船壁に大砲を備えた戦艦までもが。

中でも船長達のシップはかなり大きい。

船底から船壁までが高く設計され、対して船の中央部は低くさらに広く設計されている。

横から見るとコの字のような形状であり、船長曰く、大量の荷物と人間を運ぶことを追求した船らしい。

戦艦よりは小さいが同種の中では一番の大きさだろう。

主甲板からの眺めも周りの船を見下ろせる程であった。

しかしシノビ曰く、このギルドのメンバーは三人だけらしい。

はたしてそんな少ない人数でシップを動かせるのだろうか。

それとも他にメンバーがいるのだろうか。

主甲板には上へ続く階段が二つ。

舵が設置された上甲板へ続く左右対称に階段である。
その間に設けられたガラス張りのドアがある。
その中が船長室であった。
海図の作成と進路（針路）の決定の他、客人を招く部屋でもある。
招かれた部屋の壁には単発式の海賊銃が所狭しと展示され、「時代遅れの銃を集めるのが俺の趣味さ。」と船長が言った。
二連発式のモノや、細長い長距離用も並んでいる。
「これは火縄銃か？」
とシノビが呟くと「マスケット銃よ。」とバリスタが訂正し、「構造は対して変わらないかもね」と続けた。
「あんた妙に銃に興味持つわね？ニンジャはシュリケンとカタナを使うんじゃないの？」
「…。」
よくある誤解を受け、シノビは少し面倒くさそうに目をつむる。
「ニンジャは火薬や火の扱いに詳しいらしいからな。そして山中で暮らしていたから金属資源も手に入りやすく、それを加工する技術もあった。そのため流派によっては銃器を使っているらしいぜ。」
そんな彼に代わって船長が説明し、その詳細な言葉にシノビは目を

見開いた。

「そうなのかシノビ？」

「お前さんも銃を使っていたのか？」

「いや、拙者には無縁であった。」

「さて、世間話はこのへんにして―。」船長は地図の広げられた机の前に立ち、「ようこそ。俺達の船へ。」と、柔らかい口調で言うと胸に手をあて二人へ一礼する。

悪人顔なのに本当に礼儀正しい。

コートベルトに海賊帽という典型的なパイレーツ（海賊）の姿。

シノビの言うとおり左目に眼帯をつけている。

両肩まで破れたコートから露出された腕に戦いの功績を記す無数の傷跡が刻まれ、首まで伸びたぼさぼさの長髪に無精髭。

まるでたった今長い航海から戻ってきたかのような姿である。

汚くだらしがない姿ととらえることができるが、船上ではその風貌が威厳を放っている。

「稽古を頼む理由はバリスタが言ったとおりだな。」

「『魔物の奇襲で仲間が負傷、回復の間に己を鍛えたい』…。それ

だけでよく知りもしない船に乗り込んだわね。」

「乗りかかった船には乗るものだからな。それにバリスタ殿が面倒を見るといったのだ。」

勝手に乗りかかってきていることを棚に上げ、パイレーツはバリスタの言葉を盾にする。

それが効いているのか船長は苦笑いをしながらも、「稽古はつけてやる。」と了解し言葉を続ける。

「だが俺達も実のならない木を育てたくは…。」

続く言葉をそっちのけで、「稽古をつけてくれるのだな！」と彼女は一人で目を輝かせている。

「落ち着け。テストを受けてからだ。」

「テスト？」

「とりあえず今のお前さんの力量を判断させてほしい。稽古をつけるのはその後だ。」

「なぜそんなことを？」

「私達も無能な後輩を指導したいとは思わないのよ？」

嫌味にしか聞こえなかったその言葉にやってやろうじゃないかと、彼女のボルテージは上昇していく。

「侮ってもらっては困る。私も迷宮で遊んでいた訳ではない。」

毅然と言い返す彼女にバリスタは内心舌打ちをするが、その隣で船長は「ほう」と感心している。

否、感心しているように演技をしているのかもしれない。

「チャンスは一度だけ。結果は俺が判断する。結果が駄目なら稽古はつけない…。」

船長がテストのルールを説明するがその内容は語られない。

「あと。部外者は一切立ち入り禁止だ。」

言うとシノビとバリスタを軽く指さす。

随分と一方的なテストであるが、「受ける勇気はあるか？お嬢ちゃん？」とのお子様扱いの言葉に彼女のボルテージは再点火。

「そのテストに合格すれば稽古をつけてくれるのだな？」

ああ、と返す船長。

「覚悟ができているなら今すぐにでも始めてやるぜ、お嬢ちゃん。」

引き下がる理由がなかった。

その頃桟橋では。

二人の後を追いやって来た、二人の姿があった。

ファーマーと槍を杖にするファランクスである。

「いったいどの船でしょう?」

港に来てくれと言われたものの肝心の船がわからない。

「まさか今頃…。」

「どうしました?」

頭を抱え不安げな表情を浮かべ始めるファランクス。

「海賊に捕まり奴隷船に乗せられているんじゃ…。」とぶつぶつとネガティブな言葉が繰り返されていく。

「大丈夫ですよ?シノビさんも一緒ですから?」

「どうしようぅ〜。」

「ファ、ファランクスさん!?」

なよなよとその場にへたり込む。

別れてから十分も経っていないというのに。

そこへ、後ろからゴロゴロと何かが転がる音が聞こえてきた。

「ちょっくらどいてくれよ。狭くて通れないぜ。」

誰かが樽を転がして運んで来たようだ。

ファーマーは「ごめんなさい。」と言いつつ道をあけへたり込んだ彼女を隅に寄せようとする。

がビクともしない。

（ファランクスさん！邪魔になってますよぉ！）

「何やってんだぁ？」

「ごめんなさい。いまどかしまー ひっ！？」

人間相手に『どかします』はないだろう。

それはともかく、相手を見たファーマーは言葉を失った。

恐怖に引きつる少年の顔に「なんだよ？」と樽を運んでいた青年は平然と返す。

樽を運ぶ相手は全身に十の瞳を持っていた。

樽を運んでいたのは赤髪の青年、容姿は特に普通であり、何も驚くことはない。

問題なのは彼の体に魔物がしがみついていることだ。

それも四匹も。

青年の両腕、両足にしがみつき、四匹がギラリと光る黄色い目をこちらに向けてくる。

「おいおい。どうした？」

そしてその魔物達、怯え始めたファーマーを見るなり青年から飛び下りたのだ。

「え、えぇ～。何ですか？」

後退りするファーマーにじりじりと近づき始め、彼の動きに合わせ襲いかかる間合いを調節している。

魔物はファーマーの膝程の身長しかなく、蹴り飛ばせる程に小さい。

だがその四匹が一糸乱れぬ隊列を組み、接近する姿には異様な迫力がある。

「何やってんだお前ら？戻れよ？」

青年が魔物に命令するが彼ら（？）はそれを無視し、距離を縮める。

先頭に立つ魔物が「キュ―！」と声を上げると、それを合図に四匹はファーマーに向かって走り始めた。

「うわ、わわわわわぁあわっわぁ！？」

ファーマーは逃げ出した！

「キュー！」
「キュー！」
「キュー！」
「キャー！」

しかし魔物達は追いかけてくる。

「なんなんですかぁ～～！？」

と恐怖に叫ぶ彼の背中を目がけ、

「キュー！」
「キュー！」
「キュー！」
「キャー！」

と鳴き声を上げ、ジョギングするように続く魔物達。

いったい何の意味があるのやら。

「ファーマー君？」

さすがに彼の悲鳴に気づき、その一部始終をファランクスも見ていた。

「おいおいぃ。そっちは俺達の船だぜぇ。」

目を丸くしてその後ろ姿を見送るファランクスと青年。

ファーマーは全速力で桟橋を駆け抜けるが逃げ道がなくなり、渡し橋を上り始めた。

「ありゃりゃ。船に入っちまった。」

「どうして追われたんでしょう?」

「うちの魔物達、人見知りするタイプなんだけどな。」

まるでペットを飼っているかのように言う青年。

「魔物を飼っているですか?」

「飼い主は俺じゃないけど。」

と言いながら赤髪の青年はファランクスの身体をじろじろと見る。

「なんですか?」

と思わず着ていたワンピースの肩を直す。

「お前、」

と青年はどこか同情するような眼差しを向けた後、再び樽を転がし始めた。

「お前もとりあえずついて来いよ。おチビの引き取りと。包帯くらいなら取り替えてやるぜ。」

彼に言われて初めて、肩に隠れていた包帯が緩んでいることに気づくのだった。

四人が船長室から出るとファーマーが声を上げて逃げ回っていた。

「誰か助けてくださいよぉ～」
「あのおチビちゃんは。」
「お前さん達の仲間だな？」

冷静に話すバリスタと船長。

「魔物がぁ、ずっと追いかけてくるんですぅぅ～。」
「ファーマー？」
「よく船がわかったな。」
「ということはファランクスも来ているのだな。」

同じく冷静に話すパイレーツとシノビ。

「それじゃお嬢ちゃん。テストを始めるからついてきな。」
「うぬ。」
「うわぁ～～～。」

船長の横からバリスタが割り込み「引き返すなら今のうちよ？」と小声で言う。

だが返ってきた言葉は「意志は変わらぬ。」であった。

引き留めようとしても止められないことは、内心わかりきったことだった。

「そう。」と呟き彼女に道をあけた。

船長に続き彼女は船底への階段を下りていくのであった。

「なぜ止めようとする?」

その後ろ姿を見守りながらシノビが言った。

バリスタと船長の妙な温度差をシノビが見逃すはずもない。

突然現れたパイレーツ達に好感触（演技かもしれないが）な船長に対し、それを苦々しい顔で傍観し、時折パイレーツを引き留めようとしていた。

バリスタはため息をいれ、「私って、あまいのかな?」と呟いた。

返答になっていない、反省するかのようなその言葉にシノビは首を傾げる。

「キュー!」
「キュー!」
「キュー!」
「キャー!」

「大事だと思うけどさ。今のあの娘に船長のレッスンはきつすぎる。」

「何？」

再びため息をつき、シノビが問いかけるが答えは返さなかった。

そこへ「姉御ぉ。お客か？」と新しい声が乱入する。

樽を転がしながら渡し橋を上って来る青年とそれに続くファランクスの姿。

「あら。ファランクスも来たの？」

バリスタさん？と再会に驚くファランクスへと歩みより、

「おい。話はまだー」

「結果はどうあれ、いいクスリになるわ。」

すれ違いざまに、シノビの耳に届いた一言がそれであった。

「姉御、頼まれてた火薬買ってきたぜ？」

「姉御って呼ぶな。」

「お久しぶりでー。」

「なんで皆さん無視するんですかぁ～。」

「キューー！」

明るく話始める一行達を遠目に、シノビはその言葉の真意を分析する。

（いいクスリだと…？）

パイレーツを止めるべきか、しかしここで止めることは彼女自身が

納得しない。

ここは静観するしかないのだ、と冷静な結論を下すシノビであったが。

三人の会話と、どたどたと甲板を走り回る音が妙に煩わしく感じているのだった。

N05　テスト

船長を先頭にパイレーツ達は船底へと向かっていた。

「バリスタから噂は聞いている。『期待のルーキーだ』って褒めていたぜ。」

「期待だなんて、そんな大げさな。」

『期待の』という言葉につい嬉しくなってしまっていた。

「バリスタ殿も『無能』だなんて言っておきながら。」

と言いつつも頬がゆるんでいく彼女、先程の毅然に満ちたお顔はどこへやら。

主甲板の床は一部が網目のようになっている。

おかげで一階下の船底には、束になった四角い日の光が突き刺さっていた。

先程まで立っていた床の一つ下は、黒い塊が並び妙な静けさを放つフロアであった。

「物騒な代物だな。」

三角錐に縛られた大砲や機銃が鈍い光を放っている。

フックを縄の頂点に引っ掛け、天井を開き滑車を使えばすぐに主甲

板に配置できるだろう。

「バリスタがいるから使う機会は少ない。」

と船長の言うとおり、これらの塊には最近使われた様子がなかった。

「襲うにしろ守るにしろ、大砲を一発撃つのには時間と金と人数が必要になるからな。お守り程度にしか思っちゃいねえ。」

「お金、ですか？」

「火薬は高いからな。」

偏ったご利益がありそうなそれらの間をぬけ、二人はさらに階下へ進む。

「迷宮目当てで海都にやって来る奴らにはバカが多い。」

歩きながら船長は語りだす。

「『世界樹の迷宮を未だに踏破した者がいない。』そう聞きつけて海都にやってくる連中が特にそうだ。
そういう連中には手っ取り早く功績を立てたいと下心を持っているのさ。おまけに、なにか『裏技』があるんじゃないかと考えている。」

顔は見えないが、うんざりしているとうかがい知れるその口調。

特に最も皮肉をこめた『裏技』という言葉が気になった。

「長い歴史の中で多くの冒険者が挫折した迷宮制覇。だから新米はこう思う。『なにか特別な方法を使わなければ迷宮制覇は成し得ない』ってな。」

船長の言う通りだった。

他のギルドの中には、うさんくさい情報を鵜呑みにしてその情報だけで迷宮を見ようとする者が多くいた。

「地道な努力もせず迷宮制覇をしようなんて考えがあまい。特に最近、そういう連中が多くて元老院も迷惑しているって話だ。」

『最近の冒険者は質が悪い。』

衛士やギルド登録所の管理者もよく口にしていた。

重火器と火薬の樽の間をぬけ二つめの階段へ足が入り、ギシギシと階段を下る音が薄暗いフロアに響く。

階下へと下りるたび空気が淀み、行き場を失った湿気が身体にぶつかり始める。

「その点、お前さん達はまともなギルドだな。」

最後の段差を踏み終え船の二層目へ到着、視界はさらに暗くなった。

「毒トカゲを倒した手並みは見事だったぜ。」

「ご覧になっていたのですか？」

驚くパイレーツに「おかげで討伐の手間が省けたぜ。」と船長。

「その後、俺達は階下へもぐり、探索を中断し野営に戻ったらお前さん達が休んでいたから、海都へ戻って休むことにしたのさ。」

その時にシノビと会っていたのか、とパイレーツはシノビとバリスタが光景を想像する。

と同時に、夢遊病の一件を思い出し、ため息がこぼれてしまっていた。

「酒場でしっかり情報収集。幅広い角度から迷宮を見つめ地道に戦略を考案。そういう基本的なことができる連中は今じゃ少ない。」

「そんな。リーダーとして当然の務めだ。仲間の命を守るための…。」

「ほう。仲間を守るか。」

主甲板から二つ下は不気味なフロアだった。

薄暗い室内に大量の白い布袋が天井からぶら下げられ、波に同調してゆらゆらとそれらが揺れている。

（中で何か動いたような・・・。）

身の毛もよだつ想像をかきたてる彼女をよそに、船長はさらに最深部へ進む。

よく考えてみれば船長は，本物，の海賊である。

今更後には引けないが、下調べもなく無鉄砲に訪ねたのは間違だったかもしれない。

頭では怪しい存在と認識していたつもりだったが、彼女はこの場で怯える自身に気づき、仲間達に言われたことが身にしみていた。

しかし『今朝』の彼女にのんびりと情報収集に費やす時間はなかったのだ。

『今朝』といっても正確には食事中の仲間達と合流する前の、自室での出来事だが。

「俺達も嬉しいんだ。ひたむき優秀な後輩ができることは。」

と警戒したのも束の間、船長の言葉に「いやいや、優秀だなんて…」と再びにんまり笑顔のこの女。

少しは警戒しなさい。

「そういう若い世代に自分の技術や知恵を託したいのさ。ふっ。こんなことを言うなんて俺も年か。」

「そんな船長殿、まだまだお若いではないか?」

「おぉ!嬉しいこと言うじゃねえか?」

彼女のにんまり顔が船長に伝染していく。

ダメ中年が。

袋のフロアを通過し、ここは船底の最深部、というか物置であった。

いやガラクタ置場と言った方が正しい。

樽や酒の瓶、海水の染み付いたロープが適当に積み上げられている。

「テストの内容は簡単だ、一度しか言わないからよく聞けよ?」

「はぁ。」

よく聞けよ、と言いながら船長はガラクタをかき分けている。

「いいか?今から―。」

と船長が説明した瞬間、

「―!」

ずらされた樽の下から、足のたくさんはえた昆虫さん達、ゲジゲジやらフナムシ、が這い出てきた。

樽と床の間のジメジメした所に隠れていたのだろう、住処を奪われたそいつらは一斉にちりぢりに散っていく。

その光景に、パイレーツの顔から血の気が消える。

「おい、聞いていたのか?」

「えっ？」

彼女の様子に気付き、「なんだ、虫が苦手なのか？」。

「あ…、足が多いムシはだめなのだ…。」

船長は呆れたように頭をかき乱し、一番見栄えのよい樽を抱え壁から離れたところに置いた。

これで昆虫さん達とご面会する必要はない。

「すまぬ…。」

「もう一回説明するからよく聞けよ？」

船長は幼く蒼い目を見つめゆっくりと口を開いた。

「服を脱げ。」

「はい？」

「何回言わせる気だ。」

左目だけで、まっすぐ彼女の蒼い瞳を見つめ返す。

言葉を間違えているわけではなさそうだ。

「服を？」

「そうだ。」

本気で命令している。

「裸になれって言っているんだ。」

さらにわかりやすい説明が続く。

「どうして…。」

ムシの恐怖によって停止寸前だった心拍数が急上昇し始める。

「どうした。稽古に来たんだろ。」

「でも…どうして―。」

「こっちの事情だ。気に入らないのか。」

「…。」

「なら、他を探せ。」

背を向ける船長に

「待って・・・！」

と呼び止める。

「わかりました・・・。」

と船体の音にかき消されるような声で彼女は答えた。

「さっさと始めろ。」

血の気の引いた顔が赤くなり、日頃から意識したこともない胸の鼓動がドラムのように鳴り響く。

彼女は服に手をかけた。

海賊帽をぬぐと、収まっていたブロンドの長髪が流れるように肩にかかる。

サーベルと拳銃を樽の上に置き、コートベルトに腕をくぐらせそれも置く。

ベルトに覆われていた肩から背中に汗のラインが、肌の上にうっすらと浮かぶ。

「回転式拳銃…リヴォルバーとは、海賊が持つには少々高価だな。」

と船長は彼女にかまわず銃を見つめていた。

一通り服を脱いだつもりになり訴えるように船長を見つめてみるが「全部だ。」と突き返されるだけだった。

手に迷いが生じたパイレーツに、「どうした。仲間を守るのがリーダーの務めじゃなかったのか?」船長は一分前の彼女の言葉を繰り返した。

「それとも、強くなりたいって言ったのは、一時的な気まぐれだっ

たのか。お嬢ちゃん？」

「・・・！」

上着のベストを脱ぎ置くと、胸元にレースのついたシャツ一枚と、そこからうっすらと下着のラインが見える。

ウエストに巻き付いたスカートの革ベルトを外しそれも置く。

締め付けのなくなったスカートが腰骨のラインまでずり落ち、そのシャツとスカートの隙間から白く整ったウエストが垣間見える。

シャツに手をかけようと意を決した瞬間、「もういい。」と船長が言った。

終わりだろうか、と表情がゆるんだ彼女だった。

だが落ちつく間もなく、「後は俺がしてやる。」と宣告を受けた。

ブーツの音を響かせながら船長が震え上がる彼女の背後に立つ。

背後から耳元に船長の口が近づく。

「いいか。お嬢ちゃん。」

こそばゆい声に身体は震え、対照的に両足は石のように堅く動かない。

「海賊ってのがどんな連中か知っているか？」

沈黙する彼女に「知っているか？」先程よりも強い声で聞いてくる。

「…祖国で」

「あん？」

「…私の祖国にも海賊はいた。」

「ほう、一緒に遊んでもらっていたのか？」

「…古い伝説として。」

「伝説？」

「…。」

「言ってみろ。」

背後から伸ばされた指先が彼女の柔らかい頬をなで、思わずビクリと身体が震える。

「私の国は海と湖からなり、古い時代に『ヴァイキング』という民族がいた…。」

「ヴァイキング、確か北国の海賊達の総称だったかな。」

ヴァイキングとパイレーツ。

国や海域によって呼び名は違うが共に海賊を意味する言葉である。

「勇猛果敢な誇り高き民族だったと語りつがれている…。」

「なるほど。だから海賊の真似事なんてしているのか、お姫さん？」

お姫さんと呼ばれ自身の正体が知られていると確信し彼女の心が揺れる。

さらに今の彼女に自分を偽る服もない。

しかし「真似事、ではない。」と言った彼女の声には、少しだけ力が戻っていた。

「王家の力を借りず、自分自身の力を確かめたかったのだ。」

「確かめる？」

「私の国は崩壊し他国がその資源を奪おうとしている。」

「そりゃ大変だな。国同士のトラブルってのはよくわかるぜ。だが海賊になる理由じゃねえな？」

「だから、自分の力で…。」

「嘘だな。」

芯の揺れる彼女の声とは対照的な言葉だった。

「俺が祖国を取り戻すなら、どんな手段を使ってでも取り戻す。王家の力だろうと銃の力だろうとなんでも使う。」

「王家の力では他国は私を認めてはくれぬ。私は自分の力で…！」

「認めてくれない、認めさせたいのか。自分の望む姿よりも、自分に与えられた役目に徹することが大事だとは思わないのか、お姫さん？」

「役目…？」

「祖国を取り戻したい思いと、自分を認めてほしい思いがごちゃごちゃになってやがるな。お前さんをそうさせているのはなんだろうなぁ。」

と船長は少し間を置き、こう言った。

「お前、自分に誇りを持ってないだろ？」

「誇り？」

「いっておくが、自分自身に持つ中途半端な自尊心（プライド）のことじゃないぜ。誇りってのは、自分の宿命に対してもつものだ。」

決して大きな声ではないが、彼女の声をかき消すような強い言葉であった。

「誇りを持ってないだろ、お姫さん。」

「ちがー」

「何が違う、故郷の伝説を真似することでそれにすがりつくことで自分を偽ろうとしているんだろう？」

自分を偽るための帽子もベルトもない姿では徐々に口も開けなくなる。

そこへ今まで目を背けていた事実を船長が暴き、それが突き刺さっていくのであった。

「自分を信じられず、そして海賊を演じることで目を背けてきた。」

「…！」

「剣術や銃の訓練に没頭し、自分を知ることを避けて生きてきたんじゃないのか。フンッ。現実逃避の努力している奴こそ面倒くせえ奴はいないぜ。」

その言葉は彼女のこれまでの生き方を否定するものだった。

「その結果がこれか。王族としての自分を受け入れる自信はなく、そして海賊としての力も中途半端。そして仲間が傷ついてもまだ気付けない…。」

「違う……！」

「祖国奪還だろうが観光だろうが、海都に来た理由なんざどうでもいい。ここでくらせば理由なんて変わってくる。だがな、ここは自分の役目もわからない、自分探しの人間が来るところじゃねえ。」

『海都に来る理由なんてどうでもいい』

ファーマーが出会った二人組も同じことを言っていたが彼女が知る

わけがなかった。

それよりも、迷宮を歩いた日々を軽々しい言葉で片づけられたことに黙っていることができなかった。

「私は命をかけて今日まで生きてきた！その日々を『自分探し』という言葉で決めつけないでくれ！！」

ここで反論することは、勇気であろうか、それとも、ただの無知であろうか。

「ふん。口で言ってもわからねえ…。」

船長の手が彼女の首にかかる。

「う…。」

「じゃあ、今からお前に本物の海賊になる素質があるかどうか、試してやる。」

「ああ……。」

「それができなきゃ、あきらめて国へ帰りなお姫さん。」

「な、何をするのだ…。」

「海賊ってのが、どんな風に生まれるか教えてやる。それをクリアできれば稽古をつけてやる。」

ガクンと彼女の視界が揺れたと思った次の瞬間、臭く湿気った床の

上に事切れたように倒れるのであった。

「自分で人生を変えるよりも、与えられた人生を迷わず進めることが一番素敵だと思うぜ。それが誇りだ。」

そしてゆっくり丁寧に彼女の身体を抱き起こすのであった。

Ｎｏ６　赤と黒

「いいかげんにして下さいよぉ！」

メインマストの周りをグルグルと走り続けるファーマーと、後ろに縦一列に続く四匹の魔物達。

彼らは出会ってからこの瞬間まで、彼の背中を永遠と追い続けていた。

紺色の皮膚とギラリと光る黄色い目をもつその魔物は『ひっかきモグラ』と命名される二本足で歩き、両腕に鋭い爪を持つモグラである。

どうやらこの船で飼われている魔物のようだ。

「どうして追いかけてくるんですかぁ！」

もう十分近くも追いかけられている。

「キュー！」
「キュー！」
「キュー！」
「キャー！」

「お前コイツらに好かれてるぜ？」

「見てないで助けてくださいよぉ！」

息を切らしながら叫ぶ彼に「そいつらの飼い主は外出中だ。俺じゃあ止められねえ。」と樽を運んでいた赤髪の青年が言う。

「うわぁ～ん。シノビさぁ～ん！」

と助けを求めたが、本人にその声は聞こえていない。

シノビは左舷の船壁にもたれかけ、ボーっと遠くを見ていた。

遠くといってもすぐ隣には戦艦が停泊し、海の景色は隠されているのだが。

「おいそこの黒い服のツンツン頭。仲間が助けを求めているぞ？」

赤髪の青年が近づくが、黒装束のツンツンした髪型のシノビは反応しない。

「おいって？」

声が耳に入らないのか、シノビは反応することなく難しい顔を維持している。

いつもと同じ表情だがどこか違うその硬い表情。

もっとも今日初めて彼と会う赤髪の青年には知るよしもないが。

『いいクスリになるわ。』

と言ったバリスタの言葉を考えているのだったが、そのことについても赤髪の青年が知るはずもない。

「おい。」

「・・・。」

「何カチカチな表情しているんだよ?」

ゆっくりと振り返るカチカチな表情に「おチビを助けてやれよ?」とメインマストのメリーゴーランドを指差す。

だがシノビ、ファーマー達を見るなり「別にいいではないか。鬼ごっことは楽しいであろう?」と意地悪な反応。

「ええぇ~そんなぁ!」

「好かれているのだろう?」

「シノビさんの意地悪ぅ!」

「残念だったなおチビ?」

「はぁ・・・、はぁ、おチビじゃないですぅ!」

しかしさすがに可愛そうになったのか、シノビは「あの魔物達、お主の命令は聞かぬのか?」と赤髪の青年に止めるように暗示させた

が「無理だな。」と間を置かずに否定された。

「あいつらは主人の命令しか聞かない。付き合いの長い姉御と船長の命令なら聞くが、俺は最近この船に乗ったからほとんど言う事聞かないぜ。」

最近ということは彼があの魔物達と出会って日があさいということだろうか。

ふとシノビは野営地でのことを思い出していた。

あの夜に話したのはバリスタと船長だけだが、もう1人野営地に入らず、2人を樹海で待っていた人物がいた。

その影の輪郭から察するにかなりの高身長であったことは覚えているが、目の前の青年の身長では足りない気がする。

「それに、俺は祖国じゃ狩りで飯を食っていたんだ。」

硬い表情のシノビとは対照的な顔で青年は話を続ける。

彼は床に置かれていた角材をつま先で蹴り上げ片手でキャッチし、それを指先の動きと手首のスナップでバトンのように回転させ始めた。

そして「海都では『ウォリア―』って名乗っているんだ。」と回転する棒越しに自己紹介をするのだった。

『ウォリア―』

迷宮探索を許された十二の職業の一つ。

防具を身につけることを好まず、己の肉体と武器を頼りに魔物と戦う冒険者の総称。

いわゆる攻撃特化型のバーサーカーだ。

「祖国じゃ、でっかい動物を殴り倒してそれを糧に生きていたんだ。だから魔物が嫌いな臭いが体に染み付いていると思うぜ。」

言うとウォリア―は回していた手首を止め角材を地面に倒すのだった。

狩人が海都に来る理由は推測できないが、少なくとも戦闘員の需要はいくらでもある迷宮である。

噂を聞きつけてやってきたのだろうとシノビは思った。

「そう言えば、お前らどうしてこの船に来たんだ?」

「実は、拙者達のリーダーが稽古を一。」

「お話してないでなんとかして下さいよぉ!」

まだまだ追われているファーマーの声が割り込んでくるが、二人はそれを無視する。

体力が尽き速度が落ち始めており、モグラ達に追い抜かれてもおかしくないペースなのだが、当のモグラ達は彼のペースダウンに合わせて、明らかに速度を落としている。

どうやら逃げまどう彼を見て楽しんでいるようだ。

それはさておき。

「稽古ぉ？」

とムンクのように口を開いたウォリアーが聞き返す。

「お主らの船長に稽古を頼みに来たのだ。」と、ため息混じりにシノビが言葉を吐く。

「なんでそんな嫌そうに答えるんだよ？」

シノビは再び船壁にもたれるように腕をのせ、遠くを見つめる。

「…あ奴のわがままに振り回されるのも疲れる。」

「だよな？」

「先日は、夢遊病でいろいろと振り回されてな・・・。」

「夢遊病？」

二度目のため息をつくシノビに、再びムンクのウォリアー―。

「夢遊病って、寝ながら歩く癖みたいなもんだよな？」

よくそんな厄介なものを抱えてまで迷宮に挑もうとしたものだ。

それともそれほどの理由があるというのだろうか。

それはもうじき彼らも知ることとなるだろうが。

「かといって一人にさせるわけにもいかまい。お主らには悪いが船を持つ海賊とはいささか危険な集団だと沙汰があるからな。」

思わず言ってしまったその言葉、久々に自分の心中を聞いてくれる相手と出会い、つい気分が緩んでしまっていたことに気付いたが後の祭りであった。

当人とその一味を前に『危険な連中』と素直に言えばどうなることか。

しかし横目で相手を見ると、ウォリアーはシノビと同じような姿勢をとり彼の横顔を見つめ返し「お前優しいな。」と笑みを浮かべていた。

それが杞憂であったことがすぐにわかり、シノビは息を整え言葉を続けるのだった。

「リーダーと言っても、拙者よりも若いのだ。守ってやらねばなるまい。」

「ふんふん。よくできた兄貴分だな。」

「兄貴？」

シノビの鋭い目が、感心していたウォリアーのまん丸い目を見つめ返す。

おそらくただの褒め言葉として言ったのだろう。

「だって、妹みたいなもんだろ？お前にとってそのリーダーって奴は。」

だがその言葉がシノビの奥深くに封じていた過去を引きずり出すことになると彼には知る由もなかった。

「・・・。」

「だろ？」

「・・・そうだな。」

と答えると、嬉しそうに「お前外面は冷たく見えるけど実はいい奴だな？」と言うのだった。

微笑む彼に「お主も、一見ただの阿呆に見えるが、よいカンをもっているではないか？」と安心して皮肉めいて返すシノビ。

「おいおいぃ…ストレートに言うなよ。」

笑い出す彼を前に硬まっていたシノビの表情も少しだけではあったがゆるむのだった

それはギルドを影で支える彼にとって久々の笑顔なのかもしれない。

黒い装束をまとった鋭い目つきのシノビを、赤髪に赤いタンクトップ姿のウォリアーの優しげな丸い目が見つめ返す。

視線を戻した二人の先に戦艦の上で出航の準備を整える水兵達が映っていた。

Ｎｏ７　失いかけた能力

その反対側の右舷では、包帯を交換したファランクスとバリスタが立ち、メインマストのメリーゴーランドを見ていた。

「あの子面白いわね？優しそうで純心な感じで、だから魔物にも好かれるのかも。」

「あれは好かれているんでしょうか？」

心配そうに言うファランクスだが助けようとはしない。

むしろ、きゃあきゃあと叫びながら逃げ惑う姿に笑いを押し殺している。

意外なところで薄情であり、意地悪である。

「ねぇファランクス。ちょっと聞きたいことがあるんだけど。」

その言葉に鎧をまとわない少女が一瞬だけビクリと体を震わすのだった。

「何よその反応ぅ。アタシと話したくないの？」

「いえ、そんなことは・・・。」

冗談まじりに口をとがらせるバリスタにファランクスが訂正するも、冷静にはなれなかった。

男達に隠れ、二人っきりで包帯を交換していた時から内心ヒヤヒヤしていたのだ。

なぜならこの先輩が相棒の正体を知っているのだから。

「それにしても鎧を着てないあんたの姿って女の子そのものね？」

「は？」

「可愛いじゃない。」

『聞きたいこと』はどこへ言ったのやら。

バリスタはグレーのワンピース姿の彼女をまじまじと見つめる。

ちなみにその肩のラインには締め直した包帯が見えている。

「換えの服がこれしかなかったもので。」

「いいじゃない。日頃見せない女の子らしさを見せたら、男の子達も喜ぶでしょ？」

ちらりとメインマストを走り回るファーマーと、赤髪とたそがれているシノビを見た。

「はぁ…。」

と言いつつ、宿での朝食時の会話を思い出してみるが。

「…。」

特にそんな言葉は記憶になかった。

「そうとは限らないわ、女の見てないところで男同士で盛り上がっているかもしれないわ。」

バリスタの言葉に、真面目な彼女はがらにもなくそんな事を想像してみるが、目の前のバリスタの体を見つめ、対照的な自分のボディラインに自信を無くしていくだけであった。

「何よ、ジロジロ見て?」

「いえ…。」

「そんな大した方じゃないわよ?」

とバリスタは子供をからかうのだった。

「べつに殿方の知り合いを作るために海都に来たわけではないですから・・・。」

「あら。そうだったわね。」

と仕切り直したバリスタは「それで聞きたいことだけど。」と本題に戻り、ファランクスは慌てて心の準備を整えた。

「ノコギリガザミの奇襲を受ける直前まで、あの娘は敵に気付かなかったの?」

「気付かなかった?」

いまいち説明不足な質問に、ファランクスはおうむ返しをする。

「あん、と…。どう言えばいいかな。」

頭をかき乱し質問を整え「サエーナ鳥の時はすぐに気付いていた。」と説明を加える。

「つまり、サエーナ鳥の時は襲撃に気づくことができたのに、どうしてガザミの時に気付かなかったのかって聞きたかったの。」

最初からそう言っていただきたいものである、とファランクスは内心思いながら、

「ガザミの時は―。」

と言い出すが言葉が続かなかった。

「あの娘の直感力なら奇襲される前に気付きそうなのに。」

と言われ、彼女はパイレーツの本来の力を思い出していた。

『無事に海都に着けばいいが…悪い予感がするのだ。』

海都への航海でパイレーツが告げた言葉を。

確かに彼女はサエーナ鳥の襲撃を直感していた。

だがガザミの時は。

「それともう一つ。私の忠告をちゃんとあの娘に伝えたの？」

「―！」

何を言っているのかすぐにわかった。

『初心者が二つの職業をこなすことは困難、無理をすれば体力が続かない…』

海都への航海時、別れ際に言われたバリスタの忠告である。

「確かに伝えました。・・・でも。」

「でも？」

「あくまで自分の力だけで、迷宮に挑みたいとのおおせで。」

ため息が返ってきた。

「予想していたけどね。ガザミの奇襲を直感できなかったことぐらい。だからあなたも怪我をした？」

「私の傷はそんな大したものでは。」

「あなただけの問題じゃないのよ。シノビ君も怪我したでしょ。」

そうだ、仲間がいる以上これは彼女達だけの問題ではないのだ。

「はっきりいって、あなた達のギルドはバランスが悪いわ。攻撃職が多くて、それぞれの統率が取れきれていないと思うわ。それに集団をまとめ上げるために必要優位な力よ。」

「は？」

「個人差はあるけど『プリンセス』っていう職業は仲間や自分に危険が迫る前にそれを予期する能力があるのよ。」

「バリスタさん…！」

慌てるファランクスに「仲間達にも秘密にしていたのね。」と冷たい視線を返すのだった。

ファランクスはただ黙って固く口を閉ざしスカートを握るだけだった。

「今回は怪我で済んだけど、次はどうなるかわからないわよ」

図星だ。

「海都に来る前のあの娘なら気付いたはず。ガザミの奇襲に。あの娘が自分を捨てなければね。にもかかわらず、海賊（パイレーツ）として強くなろうと稽古に来るなんて。大バカね。」

ふと気付くとファーマーとモグラ達の足音が聞こえず、船上を包みこむのは波の音だけであった。

ゆっくりと振り返るとシノビと、モグラが両腕両足にしがみついたファーマーがこちらを見ていた。

（聞こえていた？）

思わず目をそらそうとするファランクスに、「テストが済んだみたい。」とバリスタが何もなかったかのように呟いた。

バリスタの声につられ再び向き直るファランクス、下手にオドオドしていては本当に気付かれてしまうかもしれないと、クルリと素早く向き直った彼女であった。

そして主甲板に上る樽が見えた。

海賊帽の男が肩に担ぎ上げ甲板との段差にぶつけないようにゆっくりと運ばれている。

（あれが船長。）

稽古を引き受けてくれた・同業者・。

その言葉は正確ではないが。

だが稽古を申込んだ当人の姿が見当たらない。

そもそも彼女を追うために港まで来たというに。

船長はユーターンするように船首へと近づくと、樽を海へ投げ捨て

た。

そしてその瞬間、バリスタが声を荒げた。

「船長!?」

その声に一同の視線が船長へと向く。

「どうした?」

と間の抜けた声を返す片目の船長。

「あの娘は・・・!」

「樽の中。」

何の抑揚もなく平板な口調で返ってきた。

Ｎｏ８　樽は投げられた

「―ちっ！」
「―何だと！？」
「―離れて下さいよぉ！」
「―おいおい。」
「―…へ？」

バリスタとシノビ、ウォリアーが駆け出し、モグラ達を振り払いファーマーも駆け出す。

そしてファランクスは言葉の意味がわからず、未だに一人凍りついていた。

海面を見下ろす一同。

樽は波のうねりに逆らうことなく沖へと流されていく。

「誰か泳いでお嬢ちゃんに伝えてやってきてくれ、自力で出ることができたら海賊として認めてやるってな。」

船長は一同の背中に言伝を頼むと船長室へと入っていった。

「やりすぎよ。アイツに任せるんじゃなかった。」

バリスタが装備を外すが、それよりも先にシノビが船壁へと足をかける。

「あんた―！」

「これがお主の言ういいクスリか？」

「そんなつもりじゃ。…」

「クスリってなんのことだ？なんだか危ない香りがするぞ。」

ボケるウォリアーを無視し、「拙者が行く！お主らは小舟を下ろし救い上げてくれ！」文字通り助け船を頼むと靴を脱ぎ捨て、彼は海面へと飛び込んだ。

吸い込まれるように海面へと消え、水しぶきから数秒後に波紋から遠く離れた場所に姿を現した。

波に逆らい、ひたすら海をかき分け櫓へと泳ぐ黒い装束。

「姉御、おチビ。見てないで舟を下ろそうぜ！」

「姉御って言うな！あんたに言われなくてもそのつもりよ！」

「あ、あのあの！あれを！」

「なんだよおチビ？」

おチビ…、否、ファーマーが指差す方向を見ると、沖からこちらに急接近する何かの姿が見えた。

「なんだか、背ビレみたいなモノが見えますけど…！」

「まさか…魔物か！？」

距離が遠いため正体はわからないが。

確かに海面を切り開くその中心に背ビレのようなものがそりたっていた。

波をかきわけ、急接近してくる影にシノビも気付いていた。

（くそっ！サメか魔物か！？）

音と速度に相手が人間でも小舟でもないことを察し身体に鞭を打つ。

飛び込んだ衝突から痛みが再発し、波がぶつかる度に首がズキリと痛み始めていた。

それを耐えなんとか樽を叩き割り、彼女を救出する。

彼女の身体を抱きよせ、海水を飲みながら呼びかけるが反応がない。

水面から彼女の顔を起こし往復ビンタをおみまいすると、わずかに意識が戻り始めたのか彼の身体に抱きつこうとする。

その最中、シノビは動かせない首のため身体を反転し音の主を見た。

牙のないマンホールのように開かれた口と、六つの目を持つ魔物が彼らに迫ってきた。

『コロトラングル』

エイに似た平らな身体をもつ魔魚であった。

抵抗する気力を奪うその圧倒的な大きさ、迫り来る翼のようなエラは浮かんでいる二人の数倍の長さはある。

雑魚な魔物とはわけが違う。

「南無三…！」

背中を盾にパイレーツを包みこんだシノビだが、守る彼女の身体は石膏のように冷たかった。

そしてその盾が役に立つことは無かった。

急接近していた魔物が速度を落とし、動きが止まった。

「何？」

音も消え二人に波が衝突する。

足で水をかき回し、再び身体を反転させると魔物と目があった。

鋭い目を向けてくるものの、（シノビとお互い様だが）、襲いかかってくる気配はなかった。

「つかまりなさい。」

頭上からの声に首を少し上げ、足りない分は目を上げて、見上げる

と魔物の背中に獅子の仮面をつけた男が屈んでいた。

「安心しなさい。コイツは人を襲わない。」

男が手を伸ばし、シノビも片手を返す。

シノビと彼が抱いたパイレーツを魔物の背中へと引き上げる。

「すまぬ。」

と、シノビは感謝の言葉をのべると横たわるパイレーツの様態を診る。

コートを脱がされ身につけているのはシャツとスカート。

胸に耳を、手首に指をあて脈拍を調べる。

「様態はどうだ?」

と仮面の男が聞いた。

「大事ないが…。」

彼女の身体を起こし背中から両腕を回し、下腹部を押し上げた。

ゴホッ、ゴホッと咳き込む口から飲み込んだ海水が逆流する。

力無くぐったりとしていた身体がわずかによみがえり始める。

それを見ていた男は、「行け」と下に命令し魔物は再び泳ぎ始めた。

「急いで港に向かおう。」

「み…なと？」

意識を取り戻した彼女が呟いた。

「シノビ…？」

「―。」

シノビは言葉を返せず、黙って彼女を見つめ返すことしかできなかった。

「キキュー！」

とモグラの一匹が船壁に腰かけ、短い手をパチパチと叩いている。

他の三匹も嬉しそうに「キキュー！」と鳴き互いにハイタッチをしあっていた。

「モグラさん？」

「あれはうちの甲板長よ。」

双眼鏡をしまいながら隣に立つバリスタが言った。

「職業は『ビーストキング』。この魔物達の主よ。」

二人を救った魔物を操る男は『ビーストキング』

迷宮探索を許された十二の職業の一つ。

魔物と心を通わし彼らと共に戦う冒険者である。

操れるのは人を無意味に追いかけることが大好きな小さなモグラの魔物から、熟練者になれば巨像すらも操るという。

「港に向かっている。行こうぜおチビ。」

「お、おチビじゃないです！」

と言いつつウォリアーを見上げながら彼の背中に続く。

「あれ…？」

「どうしたおチビ？」

薄っぺらい桟橋に足をかけた瞬間、おチビ…、否、ファーマーはファランクスの姿が無いことに気付いた。

甲板を見回しても無造作に立てかけられた槍は見つけたが、彼女の姿はなかったのだ。

自室の横いっぱいに広がるガラス張りの壁から船長がパイレーツ達を見守っていた。

ちょうどビーストキングが2人を救出し終え、ゆっくりと椅子へ腰掛けようとした。

そこへ、バタンとドアが勢いよく開かれ、振り返る間もなく激しく響く足音が近づいてきた。

無遠慮に入室してきたのはワンピース姿の王女の御守り役であった。

「きっ…！」

怒りに支配され船長に掴みかかるファランクス。

「貴様！」

「…。」

船長は彼女にされるがまま、一切抵抗しない。

「よくも姫様を！！」

冷たい片目の眼差しで彼女を見つめ返し、「だめだこりゃ」と呟いた瞬間、ベルトの海賊銃を抜き手元でクルンと回転させたと見えた瞬間、グリップ部分で密着寸前の彼女の顎を殴った。

「うっ…！」

彼女が怯んだ瞬間、彼女の背後にひねり込ませた踵で足を払い、押し倒す。

鎧のない彼女の身体がじゅうたんへと叩きつけられる。

久々に感じる地味な痛みであった。

見上げる彼女の視界に、銃口が眉間へ迫ってきていた。

「これが本当の海賊（パイレーツ）だ。」

「…！」

頭がビリビリとむずかゆくなり、本能が命の危険を警告する。

「お前のご主人様に伝えておけ。」

妙に静かで、やたらと響く声だった。

「命が惜しかったら、あきらめて国へ帰れ。」

言うと船長は胸元をつかみ上げ、無理矢理に彼女を立たせると部屋から外へ突き飛ばした。

ファランクスは背中から両開きのドアをつき抜け甲板へ倒れる。

ワンピースの布越しに床の摩擦が肌をヒリヒリと熱くする。

「だらしがねえな。」

「くっ…！」

「お前みたいな乳臭い女じゃ御守り役は務まらないぜ。」

「なに…！？」

「お姫様の危機に何もできず、怒りにかられて俺の所に来たんだろ？」

「…！」

「少しはあのシノビを見習いな？」

船長が彼女に告げ扉はゆっくりと閉ざされていった。

彼女に言い返せる言葉はなかった。

王女を守れず、そして助け出したのも自分ではないのだから。

「くそぉ…！」

彼女は意味もなく、振り上げた拳を床に叩きつけるのだった。

ひとやすみ　『マヨナカテレビ』編（前書き）

原案『ペルソナ４』
自己評価、世界樹ファンとやっぱりＡＴＲＵＳさんに怒られそうな
作品。

ひとやすみ　『マヨナカテレビ』編

「エビリディ、ヤングライフ、ジュッネッス♪」

「なんだファーマー、新しい歌を覚えたのか？」

「エヘヘ、この前テレビに出ていた女の子が歌っていたんです。」

「テレビだと？」

実は最近、海都に四角い箱が漂流していたのである。

偶然にもＫｉｎｇｄｏｍのファーマーがそれを見つけ、持ち出したところそれは『テレビ』という電化製品であることがわかった。

※ちなみに防水性能がめちゃんこ抜群だったため、海に漂流していたも、一切の故障が無かったようである。

電気を使って動かすということから、Ｋｉｎｇｄｏｍ一行は設定を無視し、第二章で登場した二人組を呼び寄せ、ゾディアックに発電させていたのであった。

『雷の練星術ぅ。（なんで俺がこんな事を…。）』

『おぉ、映ったぁ！』

『ゾディアックさんすごーい！』

『さすゾディ！本当便利だよなお前の力って！』

『姫様！テレビを見るときは部屋を明るくして離れて見て…、あ、何これ？グルメチャンネル？』

『こら、ファランクス！私の前に立つなぁ、そしてヨダレをふけ！』

テレビはいつの間にやら、アーマンの宿のロビーに設営され冒険者達はプロレスやら特撮映画、さんま御殿、笑っていいとも、などで毎夜のごとくどんちゃん騒ぎだった。

（本業を忘れた冒険者を叱りに来たギルド長すらもＫ－１観戦にのめりこむ始末であった。）

それから数日が過ぎたころである日。

宿泊していたファーマーが一人でトイレに行こうと廊下を出た時のこと。

ロビーから青白い明かりが漏れていた。

電力であるゾディアックも眠っているはずなのに。

不審に思ってロビーへ行くと、テレビがついていた。

寝ぼけているのかと目をこすったが。

確かにテレビはついている。

試しに頬をツネってみた。

痛かった。

「え？」

と声を上げたとたん、砂嵐だった画面がどこかの家の食事風景を映し出した。

食卓の回りには三人。

黒い服のお兄さんと、シワクチャシャツを着たオジサンと、自分と同じ年くらいの女の子が映っていた。

そしてその食卓のなかにもテレビがあり、何やら楽しげな曲と共に歌が流れていた。

そりに合わせ女の子は箸をとめ、

「エビィディ、ヤングライフ、ジュッネッス♪」

体で音頭をとりながらと歌っていたのだ。

ファーマーがそのことを報告するとパイレーツは「何かの番組だろ。なぁゾディ？」と相棒へ言うが、返答は無かった。

「ゾディ？」

「俺も見た。」

「ゾディアックさん？」

「てめえらがテレビの前を陣取るから、夜中にテレビを満喫しようと思ってつけたら、変なモノが映り始めたんだ・・・・。」

「それも番組だろ？」

「いや。そんな雰囲気ではなかった。」

「何を見たんですか？」

「……ヌイグルミが映った。その…すごく可愛い喋るヌイグルミが・・・。」

「え？」

ゾディアックの顔が少し赤いのは気のせいだろうか。

「みんなからクマって呼ばれて、片手に爪をはめて戦っていた…」

「片手に爪って、バルログやウォーズマンじゃあるまいし。」

バルログ↓スト？
ウォーズマン↓キン肉マン

「いや、技から考えてウォーズマンだろう。」

「じゃあなんだよ。そのヌイグルミ、実はサイボーグなのか？」

「あのあの、よくわかんない話はやめて続きを・・・。」

話がキン肉マンに脱線しないよう、上手にツッコミをいれるファーマー君は偉い。

「ちなみにそのクマが何と戦っていたんだ。」

「翼の生えたロボット。」

「はぁ？」

「光線銃を持った白銀のロボット。」

「なんだそりゃ？」

「あの、他にどんな人がいました？」

「ネックレスをつけたメガネと、パイプ椅子を持った不良メガネと、地味な黒服メガネと・・・」

地味な黒服と聞いて、ファーマーは食卓に映った年上のお兄さんを思い出す。

その時はメガネをかけていなかったが、話の流れから考えて同一人物だろう。

「あとは、ブルース・リーみたいなメガネと、和服美人なメガネがいた。」

「全員メガネじゃねえか？」

「あと、『いけいけゴーゴー』とか『スゴーイ先輩もっと！』とか言ううるさいメガネがいた。」

「おいおい！『スゴーイ先輩もっと！』って深夜の時間帯じゃない

か？」

「え？深夜の時間帯ってどういうことですか？」

「いやいや、なんでもない。ファーマーは気にするな？」

純真無垢な少年の心を汚さぬように注意する二人であったが・・・。

「あのあの、今日三人で見てみませんか？」

「え？三人で真夜中に？」

「・・・やめておけ。子供にはまだ早い。」

「こ、子供じゃないです！」

１つ頭の下で怒り心頭する少年をなだめることができず、成り行きから彼ら三人は、今夜真夜中にテレビを見てみることとなった。

続く。

第六章　さらば海都よ

これは王女自身が忘れている遠い日の記憶である。

柔らかい風が吹き、それを受けた木々の葉がさわさわさわと笑う。

深夜の日の光が森の奥までを照らし、風が吹く度にふりそそぐ木漏れ日も揺れている。

夏だというのに流れる空気は冷たく走り回る自分の身体を冷やしてくれる氷のようであった。

南国の海都とは四季の顔が正反対である。

「王女様。」

家臣の呼ぶ声が森の中を木霊する。

かまうことはないと幼い王女はドレスをめくりあげ、さらに森の奥へと駆ける。

森といってもここは王女の暮らす城の一部、森と湖に囲まれた王国ならではの庭園である。

庭園の森を走る意味はなかった。

ただ妙に心が踊ってしまい何かしなければ気がすまないのだ。

せっかくの白夜なのだから。

と思いつつも幼い王女には白夜がどういう現象なのか解っていない。

家臣が『王国が北半球に位置するから太陽が沈まない季節がある。』と説明していたことだけは覚えていたが。

さっぱり意味がわからなかった。

理由などどうでもいい。

いつもならベッドに入らなければならない時間を自由に歩き回ることが許される、それが王国にとっての白夜であった。

日頃は歩いて通るお気に入りコースを走り抜け、王女は二重の光が待つ森の出口に立った。

空からの光と、目の前に広がる湖に反射した光、開かれた緑の道から映るのは、一面に広がる湖であった。

水面をよく見てみると不自然な波が立っていた。

ふと遠くを見ると、自分の足元から水平線までの真ん中に船が浮かんでいた。

「お―い！」

遥か彼方の船に手をふってみる。

船といってもシップではない。

細長い器のような船体にマストが一本立っただけの船だ。

船壁は低く、一度津波がくれば湖の藻屑になってしまいそうな程の小さな船であったが、王女はその船の強さと偉大さを知っていた。

いくら船底に波がぶつかろうと決して浸水することはなく、左右で回されるオールの力だけで力強く進み続ける。

その船と船乗り達が国の歴史を支えていたことも幼い王女は知っていた。

「おぉ―い！！」

ぴょんぴょんと飛びはね船へ叫ぶが気付いてくれそうにない。

その船も今は時代遅れとなり、白夜のような特別な日でなければ見る機会はない。

ましてや城の庭園にまで船が進むことなど許されることではないのだ。

オールは一糸乱れぬ動きを続け、水面をかき回す。

その動きに合わせ船は、こちらからさらに離れていった。

どうやら声は届かなかったようだ。
離れていく船を前に不満気に腕を組む王女。

「まったく。王女であるこの私の呼びかけを無視するとは。」

爪先で小石を蹴る王女の後ろから足音が近づいてきた。
森へと顔を戻すと父親と家臣の姿が見えた。

「王女様、勝手に走り回っては一。」

口うるさい家臣には目もくれず、「父上。」と王女は国王の膝に抱きつく。

「王女様。」

叱る家臣に、「よいではないか。」と我が娘の愛らしい姿に目を細めた国王が言う。

「まったく。」

ため息を漏らす家臣の目に、横目でニヤリと笑う王女の顔が映る。

（な…。）

（ムフフ。）

こうすれば口うるさい家臣が黙ることを知った上での王女の策略であった。

（この娘、将来大物になるな。）

「父上。先程お船が私の前を通り過ぎていきました。」

「そうか。ヴァイキングの船だな。」

「本当にヴァイキングが好きですね王女様は。」

「でも。」膝から離れた王女は、2人に背を向け、

「お手を振って呼びかけたのですが、こちらにちっとも気づいてくれませんでした。」

と風船のように頬をふくらませる。

「私も一緒に漕いでみたいなぁ。」

と消えかけた波紋を見つめる王女。

その姿に国王と家臣は笑いだすのであった。

「王女様の細腕でお船が漕げますかな?」

「な、なんだと？」

「ハッハハハ。確かに我が娘が船にのるのは危険だ。居眠りをして船から落っこちてしまうだろう。」

「ち…父上まで。」

「王女様には船を漕ぐよりも、船員を指揮する方がお得意かもしれませんな。」

「もぅ！皆で私をバカにして！」

「痛！いたた！」

王女は家臣に向けて小石を蹴っ飛ばし始めた。

「バカにしたわけでは！」

「私に船は漕げぬと申したではないか！」

「ぐあ！」

さらに今後は家臣のスネをめがけ飛び蹴りを放つ。

「やめなさい。」

と国王は凶暴化する我が娘の両脇を持ち上げる。

「父上！あんな無礼者クビにして下さい！」

空中で足をバタバタとする王女の足が空を斬り続ける。

「クビって…。」

「うむ。検討しよう。」

「国王様！？」

「だが決して、そなたをバカにしたのではない。あの無礼者は無礼者なりにそなた自身が持つ才能を称賛して言ったのだ。」

「私の才能？」

「国王様まで私を無礼者呼ばわりしてぇ…。」

いじける家臣をよそに、国王は我が娘を首に背負い森の中を歩く。

先程までの地面に力強く根をはる木々の風景が、細く広々と生い茂る枝へと変わる。

「才能なんていりません。私もヴァイキング達のような偉大な船乗りになりたいです。彼らは新大陸を発見し王国の領土を開拓した英雄達ではないですか。」

頭上で目を輝かせているであろう我が娘の顔を想像し、国王は複雑な気持ちになってしまう。

（時には武力で侵略することもあったが。）

だがそういった歴史の事実を話すには王女はまだ幼い。

国王は胸にこみ上げる事実を押し込め、我が娘の言葉に同調する。

王女がヴァイキングがただの船乗りではなく海賊であることを知ったのは、皇国に引き取られてからであった。

「父さんはお前がヴァイキングの船に挑戦しようとすることはすばらしいことだと思う。挑戦とは自分を知る旅のようなものだからな。」

「旅…ですか？」

頭上から逆さまに下りてくる娘の顔を見上げ、国王は続けた。

「自分の強さと弱さを知り、自分自身の才能を知る。それは新しいことに挑戦しなければ気付けないことだ。」

「…。」

「だが過去の英雄や偉人を真似し学びつつも、自分を失ってはいけない。ヴァイキングとして生きることに挑戦することも大切だが、そなたにはそなただけが持つ才能があるはず。それを見失ってはいかぬぞ？」

五歳の王女には少し難しい話だったかもしれない。

だがそれでもいいと国王は思った。

いつかこの言葉が我が娘の貴重な栄養となればいいのだから。

「父上！私、絶対ヴァイキングになってみせます！」

「娘よ、話を聞いていたのか？」

はたしてこの時の会話を、今の王女は覚えているだろうか。

それから数日後。

原因不明の病が発生し、　王国の『時』は止まった。

その後、ヴァイキングの船にのり、難を逃れ、生き残った王女が皇国の領海内で発見されるのであった。

No1　俯瞰

沖から接近する魔物が見えた瞬間、武器を構えた船乗り達だったが、背中に立つビーストキングの姿を見てそれは収まった。

魔物が街中を歩いてもビーストキングが隣にいれば騒がれることはないのだ。

そして同じく魔物の背中にかがむ二人の冒険者。

シノビとパイレーツであった。

「下りられるかな？」

と、獅子の仮面が二人を見つめる。

桟橋に伸ばされ魔魚の尻尾を歩きシノビとパイレーツが背中からおりる。

シノビが膝を曲げると、彼の肩に支えられていたパイレーツも膝をつく。

息を切らしながら彼女は「―すまぬ。」ともらした。

桟橋にひざまずき身体を支える両腕はガクガクと震えている。

首にまとわり下へ伸びるブロンドの毛先からはポタポタと海水が滴り、乾いた桟橋を変色させた。

シノビは透き通る彼女の背中に装束をかける。

「礼はビーストキング殿に申せ。」

顔を向けたパイレーツに魔物とその背中に乗った主の姿が映る。

羽飾りのついた赤い獅子の仮面。

パックリと割られた獅子の口からのぞかれた細身の顔。

そして彼は複雑な顔を浮かべた。

「礼を言われるべきではない。君を海へ落としたのは他でもない私達の船長だ。」

と語った。

「船長…？」

船長と聞き、パイレーツはテストの事を思い出す。

「とりあえず宿に戻るぞ。」

「ダメ…だ！」

「なに？」

両手の拳を握り、ぬれた身体から絞り出すように言ったその一言。

「テストは終わった。結果はわかったはずだ。」

とシノビの言葉にビーストキングが聞き返す。

「貴殿の船長に稽古を頼んだのだ。船長はテストを通過すれば面倒をみると約束してくれたが。」

言葉を濁すシノビに「樽からの脱出を?」と、船長の仲間は少し驚いたように聞き返す。

「左様で。結果は不合格だ。」

不合格という言葉が彼女に突き刺さり「このままで終われるか!」と声を荒げる。

「稽古の師範を探したところで聞き入れてくれる者は他にはおるまい。」

「ならば我流で鍛えてやる!」

「馬鹿を申すな…。」

「時間がないのだ!」

「彼の言う通りだ。早く身体を休めなければ―。」

「私は強くなりたいだけだ!」

彼女はなだめる二人の言葉を聞き捨てる。

「今のお主では無理だ。」

「勝手に決めつけるな！」

「どうしたのだ、いったい？」

「そんなに…、そんなにも私が心配なのか…！信用できないのか！私が弱いから？ふがいないからか？そなたの…、そなた達の過保護な扱いにはうんざりだ！そなたらがいなくても私は一人で……！」

パン。

シノビの平手が彼女の頬を打った。

「…！」

「…シノ。」

「少しは自分を省みろ。」

「ビ…？」

打たれた頬が赤く腫れ上がる。

その一撃が彼女の思考を止め、

「『樹海の中であろうと海底であろうＫｉｎｇｄｏｍに、お主らについてゆく』と約束した。だが、拙者は己を知らず駄々をこねる者を守り抜く自信はない。」

続けて言われた言葉が彼女自身を支えていた軸をガラガラと崩し始めるのだった。

深いため息を吐き出しシノビは立ち上がる。

「待って…よぉ。」

横を通り過ぎる彼の手をつかもうとするが、

「離せ。」

と手は振り払われ、空をつかむだけだった。

「シノビィ…！」

「あまったれるな」

と、彼の背中が語っていた。

「う…うう。」

太陽に照らされ、かわき始めた頬に涙が落ちる。

「宿に戻り次第お主の出生の真意を話してもらうぞ。」

シノビは振り返らず桟橋から街道へと足を向ける。

途中で脇道から向かってくるファーマー達と、足取りの重いファランクスに目も向けなかった。

泣き崩れる彼女に駆け寄る仲間達。

「姫様…。」

最後尾を歩いていたファランクスが皆をかき分け、彼女を守るように身体を抱きしめる。

王女の悲痛な声が彼女の胸の中へと吸収されていく。

「王女…様?」

「キュ～。」

とオドオドと不安気な表情を見せるファーマーと、彼の帽子にしがみつくモグラ。

「おい、モグ助。なんでおチビの頭にのっているんだよ?」

この場にまったく関係のないウォリアーのツッコミ。

「ビースト…?」

駆け寄る砲手兼航海士の姿に甲板長は「この子達が例のギルドメンバーだな?」と聞く。

頷く彼女に「私は船に戻る。君はこの子達を送ってやれ。」

と言い残し足下の魔魚に命令すると、彼は船へと泳ぎ始めるのだった。

「…。」

彼女の泣き声を背中に受け、シノビは思わず振り返ってしまった。

首が痛むため振り返ったのは上半身だが。

彼女に駆け寄る仲間の姿を見ると、シノビはおもりのようになった包帯を首から外した。

それを握った拳にギリリと指を立てながらしばらくその様子を静観しているのであった。

なぜか彼の脳裏に、忌々しい祖国の風景と今は無き、家族の声が再生されていた。

そして記憶に意識を乗っ取られ、海水で鈍った彼の嗅覚では、その様子をさらに上から観察する2人組がいることに気づくことはなかった。

No2　煙

泣をこらえるパイレーツを連れ、一行は宿へと戻っていた。

ウォリアーと帽子にモグラをのせたファーマーを先頭に、パイレーツとその肩をだくファランクスが続く。

その四人の背中をインナー姿のシノビとバリスタが見守っていた。

無理もないだろうが、道行く人々はこの六人に奇怪な目を向けていた。

「なんか凄く変な組み合わせだよな。」

「…はい。」

「まぁ、頭にモグラをのせるおチビが一番目立っているけどな。」

「お、おチビじゃないです！」

「へへへ、冗談だよ、冗談。」

「キュ―！」

ファーマーの帽子に乗り、心地よさそうに鳴くひっかきモグラ。

帽子が気に入っているのか、それともファーマーが気に入っているのか。

小声で話していた二人の会話が、後ろのファランクスとパイレーツにも聞こえていた。

「ファランクス…。」

「はい？」

「鼻がス―ス―する…。」

「…申し訳ありません、私がついていながら。」

船長を思い出し護衛は憤っていた。

汚らわしい海賊め、と。

「皆の言った通り、稽古は諦めることにする。」

皆、というよりもシノビ一人から受けた言葉が一番きいていたが。

「パイレーツ・・・。」

「もうパイレーツと呼ぶな。皆もわかっているのだ。」

「…姫様。」

久々に公の場で、懐かしい言葉を口にする護衛に王女の涙が自然と移り始め、船長への怒りがかき消されていく。

「今日で私は海都を去る。」

王女が呟いたその言葉に、涙をこらえる護衛の耳に届かなかった。

「首は痛まない？」

と気づかうバリスタに「大事無い。」とシノビは嘘をついた。

「ごめんね、こんな事になって。」

「謝る必要はない。船長殿のおかげであ奴は自分を知ることができたのだ。」

「結果的にいいクスリであった。」とシノビは前を歩く黒い背中を睨んだ。

「少し厳しくない？」

「あまやかせば命を落とす。」

「ふふ。」

と笑うバリスタに「何か？」と問う。

「坊やかと思っていたけど、アタシより大人ね。アタシはすぐに感情的になっちゃうからさ。船長やビーストを見ているとまだまだ子供って感じちゃうのよ。」

「子供と言える歳ではないであろう。」

「あら、なんか言った？」

「いや。」

「『誰かを守るってことはただ目先の感情に流されることじゃない』ってビーストがよく言っていたわ。」

とバリスタは懐かしむように言う。

まるで親に教えてもらった記憶をたどるように。

「アンタはそんなことなさそうね。」

「・・・。」

シノビはその言葉を心の中で否定した。

彼は冷静なのか、それとも、そう見えるだけなのか。

「アタシには無理だけど、アンタみたいな人なら誰かを守れるんでしょうね。」

バリスタの言ったその言葉がシノビの心を乱す。

そしてそれを押さえ込むことで、シノビはいつもと変わらない表情を維持していた。

（リーダーって、お前にとって妹みたいな・・・。）

と甲板でのウォリアーの言葉が蘇っていた。

坂は噴水広間へと続き、のぼりきった一行の前にパラソルテーブルが広がる。

木づくりのイスとテーブルに腰かけパラソルの日影で、少し早いランチを満喫する人々の姿があった。

その間をくぐり抜け、六人と一匹は宿へと到着した。

「おかえりなさいませ！」

エントランスに立つぎこちない一行を前に、宿屋の下働きの少年が迎え入れる。

歌うファーマーに負けず劣らずのニッコリスマイルを浮かべ、一見だけでは男なのか女なのかわからない顔立ちのこの少年。

挿絵がないので上手く説明できないので、どうしても気になる方は、酒場のママさん同様に原作のｈｐで確認してみて下さい。

または『宿屋の少年』で検索。

チェックアウトの時間を延長し、王女は部屋へ戻ろうとする。

「皆はここで待っていてくれ。すぐに戻っていろいろと説明したい。」

「王女…様。無理はしないで下さい？」

「そうよ、身体を拭いてゆっくり休みなさい。」

「キュ～キュキュ。」

と気づかう二人に同調するかのように、モグラも彼女を心配そうに見つめる。

「だが、私には真意を話す一。」言いながらよろめく彼女に、

「みんなには、私から説明します。今しばらくはお休み下さい。」

何時にも増して、丁寧な言葉使いの護衛がひき止める。

「そうそう、早く休まないと風邪引くぜ。姫さん。」

その隣で何の礼儀も躊躇もなくウォリアーは話かけている。

「き、貴様！無礼だぞ！」

「なに怒っているんだ？だってパイレーツの格好した王女様だろ？だったら姫さんで問題ないだろ？」

「だから気安く姫様を…！」

「カリカリするなよ、ファラ子？」

なだめるようなしぐさで、ファランクスを『ファラ子』と名付ける。

「ファ、ファラ子、だと！？」

「ファランクスって呼びづらいからさ。お前、女だからファラ子でいいんじゃないか？」

「れ、礼儀というものを知らないのか、海賊は！」

「俺、海賊じゃねえよ。」

（ウォリアーさん僕のこともおチビって言う。）

（アタシは姉御呼ばわり。）

（拙者は黒い服のツンツン頭と呼ばれた。）

なぜ今朝出会ったばかりの男にあだ名をつけられなければならないのか。

加えてなぜこの男がついて来たのか、ファラ子、否、ファランクスには理解できなかった。

「はいはい。ここにいたら無駄に疲れちゃうわ、早く部屋に戻りなさい。」

「う、うぬ…。」

騒ぐ二人から離れ、王女は自室へ足を向ける。

その背中を見送り一同の訴えるような視線がファランクスへと向け

られる。

「ファランクスさん…。」

「キュ～ン。」

「説明してもらうぞ。」

「アタシにも聞かせてほしいわ。」

「なんか焦げ臭くねぇ？昼飯作っているのかな？」

「あんたは黙ってなさい。」

一行は人のいないバイキングホールへと進む。

宿では朝食しか用意されず、昼間からこのホールはロビーとして扱われている。

幸い他に客はいなかった。

「説明しよう。」

テーブルのイスへ腰かけた一行。

しかしウォリアーだけが椅子が見つからず、一人で立っていた。

「どっかに椅子余ってないかな。」

「姫様の祖国は…。」

「待てよファラ子。椅子がー」

「ー姫様の祖国は！」

空気のように彼の言葉を無視し彼女は語りだす。

「無視するなよ、ったく。」

「足りないなら持ってきなさいよ。」

「へ～い。」

「ウォリアーさん可哀想。」

「クワ～。」

ファーマーの頭上で大あくびをするモグラ。

「モグラさん、お眠ですか？」

ぷにぷにしたモグラのわき腹を抱え、膝の上にのせると、「クワ～」っと、もぐらは再び大あくび。

「ふぁ～。」

それがファーマーにも移り思わず口を隠したが、机の下でシノビに爪先をコツンと蹴られ注意された。

（ごめんなさい…。）

言いつつも再びアクビの欲求がこみあげてくる。

（あれれ？なんでこんなに眠くなってくるんだろう？）

とシノビの顔を見ると、彼も辛そうに瞼を開いていた。

（シノビさん？）

その隣ではバリスタが首を立て膝で支えている。

そしてファランクスは自分の手の甲をつねっていた。

まるで痛みで眠気を覚ますかのように。

（ファラン…。）

ファーマーの視界も徐々に上下に閉まり始め、やがて闇につつまれていくのだった。

一方のウォリアー。

ホールから離れ、エントランスで見つけた椅子を持ち上げた瞬間。

「ん？」

カウンター側の床に下働きの少年が倒れていたのに気づいた。

Ｎｏ３　プライベーティア

船長室を出ると床掃除をするモグラ達をよけ、渡し橋へと歩く。
船を下りると巻き上げられた帆を見上げ、葉巻を口にくわえた。
『船内で煙草を吸ってはいけない。』
海賊の掟以前に船乗りの常識である。
船を揺らす波と共にやってくる潮風が船長の顔を撫でる。
煙を口の中で転がし「ふー」と灰色の煙が風に逆らい吐き出される。
と、吸った時の光景を想像しながらマッチの火を近づけた、その時。
「珍しいな。葉巻を吸うなんて。」
と聞き慣れた声が耳に届いた。
誰もいなかったはずの船からビーストキングが下りてきた。
どうやら魔物の背中から船壁をよじ登って船に乗ったらしい。
「なんだビースト。」
マッチの火を消し葉巻を懐へしまう。

「たまには吸いたい気分にもなるさ。」

「キュ―！」
「キュ―！」
「キャ―！」

掃除をしていた三匹のモグラ達がビーストキングに駆け寄る。

「よしよし。ご苦労だったなお前達。む？ヒヨッコ？がいないな？」

いなくなったモグラを、ビーストキングは？ヒヨッコ？と呼ぶ。

「キュ～キュキュ。」

リーダー格のモグラの返答を聞き、「そうか。」と納得した。

（いつ見ても不思議な光景だぜ。）

一匹足りないことは誰にでもかわるが、どのモグラがいなくなったのかわかるのは彼だけだろう。

ビーストキングは再びモグラ達に指示を出した後、「随分と厳しい試練を与えたようだな。」と船長と肩を並べようとする。

「厳しくはねえさ。海賊や海軍の船ならあんなことは日常茶飯事だ。」

船長はそれから逃げるように船に乗り、船壁にそうように背中をもたれ空を見上げた。

「海賊なんてなりたくてなるものじゃねぇ。それを知らずに海賊に稽古を頼むなんてとんだ大バカ野郎だ。」

「たが、手加減してあげるべきじゃないか。相手は後輩、それも子供だろう。」

「口で言ってもわからなかったのさ。あの頑固なお姫様は。」

それを聞き赤い獅子の仮面から見える頬が緩んだ。

「そうか。」

「なんだよ。」

「あくまであの娘を思ってやったのだな。」

船長は答えなかったが、安心したようにビーストキングは言葉を続けた。

「心配していたんだ。船長が未だに王族の人間を恨んでいるのかと思って。」

王族（国家）の中には敵対する国の輸送船を破壊・略奪するため、海賊達を雇い敵対国の船を襲撃させていたという歴史がある。

略奪品の一部は国に捧げなければならないが、国家の公認があれば合法的に略奪が行えるということで海賊もこれを引き受けていたのだ。

船長もそれを引き受けた一人であり、彼の実力からか国家にとって特別な地位に昇りつめたのだ。

最も今は昔の話であり、船長達が王族とどう関わっていたのか、知る人は少ない。

「ガキのケンカじゃあるまいし・・・。それにもう昔のことだ、今の俺には迷宮制覇のことだけしか頭にねえ。」

「そうだな。」

「ここで帰っちまうようなら、所詮それまでの奴らだったってこと。だが迷宮に挑むとしてもあのお嬢ちゃんが今のままでいる限り犬死にするだけだ。」

だからこそ生き延びたいのであれば、彼女自身が変わらなければならない、と船長は信じていた。

「キュー！」

そこへモグラの一匹が鳴き声をあげ主の膝に駆け寄って来た。

「どうした？」

「キュキュキュ、キキュキュ。」

「そうか？」

「キュ～キュキュ～。」

「わかったよ。」

「キュキュキュキュキュ。」

（なんだ？）

モグラ（魔物）の言葉を理解できるのはビーストキングだけであるため、船長に会話の意味はわかっていない。

「というわけで船長、私も宿屋へ向かうことにする。」

「おいこら！ちゃんと説明しやがれ！」

「キキュキキュ。」

「だからわかんねえって・・・！」

「リーダーがヒヨッコのことが心配だから迎えに行きたいと。」

「ヒヨッコって、あの一番ちっこいモグラのことか。」

「キュ～。」

「わかった、わかった。さっさと行ってこい。」

船をおりる一人と一匹を見送ると、船長は船壁へともたれ直し、隣に停泊している戦艦を見た。

戦艦では炎天下の中、紺色服の水兵達が一列に並び道を作っていた。

Ｎｏ４　お迎え

王女は自らの出生を護衛に任せ部屋に戻った。

椅子に腰かけ、ボーッと部屋から窓を見つめていた。

南国のためか窓は小さく、部屋から外の景色はほとんど見えないが。

せいぜい窓枠に植えられた外から見れば彩り鮮やかな花の影しか映らない。

その風に揺れる花の影を彼女はずっと見ていた。

シノビの黒装束は膝に置き、歩く度にびちゃびゃと音をたてるブーツはドアから椅子までの距離の間にバラバラに脱ぎ散らかされていた。

装備の一部は船長のもとにある。

いま彼女が着ている服は胸元にレースのついたシャツと、ベルトの外れたスカートと。

シャワーを浴びる気力もわかず、着替える気力もない。

波の感触が染み付き、重たい身体を揺らす。

『私達も無能な後輩を育てたくはないの。』

『海賊としても王族としても中途半端。』

『少しは自分を省みろ。』

一度突き刺さった言葉がぐるぐると走り回り、海都へやってきた初心をかき消し、それへの威勢を沈める。

一人で悶々と考えるほど自分の殻にはまりそこから出られなっていく。

肉体の次は心が、樽の中に押し込められ暗い海底に沈んでいくようであった。

『あきらめて国へ帰りな、お姫さん。』

沈没から一時的に救い上げたのはドアノックの音だった。

彼女の返事を待たずドアは開かれ、一人の『男』が部屋に入ってくる。

それはシノビでもファーマーでもない。

振り返らずとも彼女はその『男』の正体がわかっていた。

既に会っていたのだから。

近づく足音がやがて止まると、落ち着いた低い声が発せられた。

「我々に従っていただければこんな災難にあわずにすんだものを…。」

彼女に返せる言葉はなかった。

「我々に嘘までついてあんな行動にでるとは。今後このような事をしてもらっては困るのですぐに同行を願います。」

押し殺すような口調で男は続ける。

逆らう余地はなさそうだ。

「わかっている。だが挨拶くらいさせてくれないか。」

振り返らずに消え入りそうな声で彼女が返すと。「宿の人間は全員眠らせました。」さらりと抑揚のない言葉で男は説明し彼女にスカーフを差し出す。

思わず男を見上げる。

ゴーグルの巻き付いたツバの長い帽子をかぶり全身を隠すように灰色のマントを羽織ったその男。

皇国から派遣された傭兵の1人である。

「特殊な樹液を発火させた煙です。三分もまともに吸えば意識を奪えます。」

「ファランクスは…」

「我々の任務は王女の保護であり、護衛については何も命を受けておりません。」

「せめて、手紙くらい…。」

「時間がありません。」

と、まるで彼女の要求を予想していたかのような素早い反応だった。

だが「頼む。」と、王女は椅子から男を見上げた。

「仲間達に最後の挨拶くらいさせて…下さい。」

訴えるような彼女の目に男は短くため息をつき、「わきまえていただけますか。」と冷たく言う。

さすがに二回は通用しないようだ。

その口調と鋭い目付きにシノビの声と頬の痛みがよみがえる。

「わかりました。」

濡れた服のまま帽子男を先頭に廊下へ出ると階下から薄白い煙が上ってきていた。

「スカーフを口と鼻に、できるだけ呼吸は浅く回数を多くして下さい。」

Ｎｏ５　胸騒ぎ

港から宿へと向かう道中。

モグラは時折振り返り、鳴き声を上げてビーストキングをせかしていた。

僕が主を急がせるとは、それほど下っ端のことが心配なのだろう。

仲間思いの僕の姿に、主人の顔にも思わず笑みが浮かんでしまう。

モグラは短い足をひたすら前後に動かし、せっせと歩いている。

靴をはいていないため歩く度にテチテチと独特な足音が聞こえていた。

太陽に照らされた石造りの道は少々熱いのかもしれない。

まっすぐは歩かず、あっちへいったりこっちへ行ったりと、急ぎつつも極力日影を歩くようにしているのだった。

その途中である。

ビーストキングは坂の上から下りていく妙な男を見かけた。

南国だというのに黒い革の上着をはおり、さらにその襟元から首にかけて毛皮の装飾がされている。

左右不対象な長さの髪型が歩く度に揺れている。

片目まで伸びたその前髪は冒険者とは思えない。

観光客だろうか。

そうとも思えない。

その目付きと、歩く度に革服の裏からかすかに聞こえる金属の音から察するに観光客ではない。

そしてその青髪の男に続くように2人の人物が歩いていた。

両者とも灰色のマントをフードのように頭からかぶり顔は見えなかった。

すれ違う瞬間、男の香水の香りがかすかにとどき、それから数歩いたところでビーストキングは一行へと振り返った。

真っ直ぐと坂を下りる様子からおそらく港へ向かっているのだろう。

マント2人の背中をじっと見つめた瞬間、坂の下から強い風が流れた。

海都ならではの潮の香りがいっそう強く鼻腔を刺激する。

その時、マントのうちの1人が、フードからあふれるブロンドの髪を直した。

その仕草から女であると直感した時、ビーストキングは海に落とされパイレーツを自称していた少女を思い出した。

よく見直してみれば背格好も少し似ているかもしれない。

だが、なぜ己の姿を隠しあのような男達と同行しているのか。

「キキュ～？」

足元から僕の声に気付き。

「先に行きなさい」

と獅子の仮面についた羽飾りをモグラの頭に巻き付ける。

「これで大丈夫だ。」

「キキュ？」

「ちょっと気になることがある。」

「キュ～。」

羽飾りをのついた頭を下げモグラは宿へテチテチと足音を立てる。

その少女が率いるギルドに義理があるわけでも、恩義があるわけでもないが。

あの2人組に同行してはいけないという、根拠のない胸騒ぎがしたのだ。

それに、もしもあのマントの正体が先程の少女だったならば自分達が何かしら関わってしまっているかもしれない。

自分たちのリーダーの独断で少女は仕打ちを受け宿へと戻ったのだから。

得体の知れない胸騒ぎと船長のための罪滅ぼしのため、ビーストキングはその一向に続くように坂を下り始めるのだった。

Ｎｏ６　消えた王女

ホッペをつねる痛みで真っ暗な闇を上下に開いていく。
四隅が白くボヤけた視界にモグラの黄色い目が映りこんだ。
それもなぜか頭に羽飾りが巻き付けいている。
「キュ―キュ―！」
モグラは短い手で机を叩き、眠りに落ちている一行を見回す。
頬づいていたバリスタが、腕を組んで俯いていたシノビが、机に突っ伏すように眠っていたファーマーが、そして２人で椅子を並べ互いに肩を並べて眠っていたファランクスとウォリア―が目覚めた。
「ちょっ！なぜ貴様私の隣で寝ている！」
ファランクスが立ち上がり支えを失った赤髪頭が床に落ちかけた。
「キュルキュルル！」
モグラのモーニングコールを受け次々と意識を取り戻していく。
「アタシ達、」
「眠っていたのか…」
「みんな、眠っていたの？」と聞くと

「僕も。」「拙者も。」「私も。」「キュー。」と続く。

そこへ「宿屋の連中も寝ていたぜ。」と、一同の視線がウォリアーへと向けられる。

「椅子探していたら宿屋のガキが倒れていてさぁ。風邪引いちゃまずいから従業員の部屋に運んだら、他の連中もみんな眠っていたぜ。」

さすがに全員運ぶのは骨がおれるから…、と話続ける。

「姫様は・・・。」

と護衛の心に不安がよぎった。

「キュルキュル！」

羽飾りモグラが机を叩き一同の目を引くと、自らの鼻を両手で抑え片足を軸にクルリと回り仰向けに倒れた。

「？」

再び立ち上がり同じジェスチャーを始める。

「何やってんだ、モグ吉？」

「臭いを…。」

なぜかファーマーだけにその意味が手に取るようにわかった。

「臭いを嗅いで倒れる…眠る？」

その言葉を聞き、ジェスチャーを止めモグラが「キュキュ―！」と拍手をする。

「まさか、」

「睡魔香・・・！」

さらにそこへ、誰かがテーブルに近づいてきた。

見ると宿屋の少年が大慌てで駆け寄ってきていた。

「よう、起きたのか？」とウォリアーの言葉に答える暇も無く、「皆さんご無事ですか！？」と突然聞いてきた。

いったいどうしたのかと聞くと「厨房から煙が出ていると通行人の方が知らせてくれて、あと少し発見が遅れたら火事になるところだったんです！」

とあたふたとしながら告げた。

「申し訳ありません！冒険者さん達の休息の場所であるにもかかわらず、こんな、こんな事故を起こしてしまって・・・！」

自分達の失態に少年は立派に頭を下げてみせた。

「火事は無事に収まりましたので・・・、僕は今から他のお客様の確認に向かいます！」

「姫様・・・！」

他のお客様という少年の言葉に、ファランクスは立ち上がった。

少年はもう一度頭を下げると、事故に対する精一杯の対処のためロビーから個室へと続く階段を駆け上っていった。

それに続いて、ファランクスも駆け出す。

一つ一つの部屋の扉を開けて確認する少年を通り過ぎ、一直線に王女がいるはずの部屋を開ける。

「姫様！」

ドアを開けると、扉からベットまでの間に点々と続く水滴が目に入った。

そしてイスにかけられた黒い装束。

それ以外に彼女の視界に映るものはなかった。

Ｎｏ７　さよなら

「何の御用だ？」

石造りの階段を下りきり、桟橋へとさしかかった時、獅子の仮面をかぶったビーストキングの前に青髪アシメの男が立ちふさがった。

服装はともかく、あくまで一般人を装って尾行を続けたつもりであったが。

「御用は？」

青髪アシメは立ちふさがるように通路の真ん中に立ち、後ろのマントの２人組を先に行かせる。

慌てずにビーストキングは答えた。

「気に障ったのならすまない。私も港に向かっているのだが、見慣れない君達の姿が気になって目が向いてしまってな。」

と獅子の仮面が答えると青髪アシメは「ヒヒッ」と笑った。

見慣れない姿というのは向こうにとっても同じだろう。

「謝る必要ねえよ。いい気分はしないが、どこへ行ってもよそ者が注目されるのは宿命だからな。」

口元を歪める青髪を相手に「君は他国の冒険者だな。」と聞くと「ああ」との肯定。

「観光で来たのか?それとも海都の迷宮に挑みに来たつもりが追い返されたのかな?」

「ヒヒッ。両方だな。両方の理由でここに来て、両方を終えたから帰るのさ。」

じきに相手が出航することは間違いないようだ。

ふと青髪の奥に目をやるとマントの2人が船へと続く渡し橋へと足をのせていた。

2人が乗った船はここ数日の間、自分たちの船のすぐ隣に停泊し、視界を遮っていた戦艦であった。

「あれは・・・。(うちの船長が品の無い船だと毒を吐いていた戦艦。)」

と足をかすかに動かした瞬間、「動くな。」と鋭い口調で警告を受けた。

「動いたら、俺はアンタに牙を向けなきゃいけなくなる。」

と青髪アシメは上着の内側に手を伸ばす。

「俺はアンタを斬りたくない。海に落ちた王女を助けてもらって感謝しているからな。」

と手を懐にいれたまま後ずさる。

「王女の警護が俺達の任務の1つだからな。万一のことがあれば金を払った雇い主に申し訳ない。」

「雇い主？」

おそらく王女の身を案じた祖国の差し金だろうと思った。

しかし聞いてみると青髪は「ヒヒッ」と笑って否定した。

「違うな。あんたが思っているよりあの王女様の立場は複雑なんだよ。こういうことを言うのはいいことじゃないが。どうせ王女はここに戻ってこないからな。」

と話を続ける。

時間稼ぎのつもりだろうか。

「国ってのは複雑だよな。内側から腐ることもあるんだから。」

男の話術に引き込まれそうになっていることに気づき意識を整えてみるが、相手の話がただの嘘には思えなかった。

「相手が外国ならこっちの正義を振りかざして一方的に攻めればいいが、相手が同じ国の人気者となるとうかつに手を出せないからな。」

話続ける青髪男。

戦艦にのせられた王女を1人で救えるわけもなく、また相手は王女の保護者である以上、もはや救出する意味もない。

だが、そうとわかっても胸騒ぎは収まらない。

何か不吉な陰謀の始まりを目撃しているような気がしてならないのだ。

青髪アシメはヒヒッと笑うと「王女はこれから枢機卿（すうききょう）の手駒にされるんだよ。」と言葉を捨て、かすかに動いたビーストキングの爪先目掛け手首を振り下ろした。

風を切る音と共に、背中を炙る光を反射する何かが足元に刺さった。

「じゃあな。獅子舞男さん?」

と威嚇で投げたナイフの軌跡を見届けることなく船へと走り出していった。

そして、脱兎のごとく、それを捕まえるかのように黒い影がビーストキングの右手を駆け抜けていった。

一方王女は、戦艦へと歩いていた。

皇王にしては思い切った判断だと思った。

皇国に2隻しかない巨大戦艦を迎えによこすとは。

きしむことのない渡し橋を渡りきると、甲板では水兵達が縦一列に並び道を作っていた。

長時間待たせてしまったのだろう。

北国とは違い、南国独自の炙るような日差しに、皆額に汗を浮かべていた。

微動だにしない壁を歩きながら、王女はマントを更に強く握り顔を隠す。

あくまで一国の統治者を迎えいれるのに当然とも言えたが、これほど多くの人間が自分のわがままに振り回されていた実感し申し訳ない気がしてならなかった。

「どうした？」

「いやちょっとトラブルがあってな。王女のお仲間が追ってきたのさ。」

後ろからの傭兵の言葉に思わず振り返ってしまった。

遅れて船に乗ってきた青髪アシメは渡し橋を引き上げ、桟橋に立つ誰かを見下ろしていた。

王女には桟橋の様子は見えず、船壁の向かい側に誰が立っているのか知ることはできなかった。

王女の蒼い瞳には傭兵達の姿と、そして揺れる海都しか映らなかった。

優しい色に包まれた家々とそれを彩るように窓枠に植えられた赤い花々。

正午間近の極まった日差しのためか、石造りの街道の先が白く光っている。

潮味のする風が吹き、湿気った髪から冷気を奪う。

都市の中央へと続く坂は大樹へと繋がり、その枝は空に浮かんだ雲

を突き刺していた。

初めてここに来たときと、同じ風景であった。

だが何かか違った。

今の自分の胸中に何があるだろう。

旅を共にしたお供と海都で出会った仲間にも会えない。

これから誰が側にいてくれるだろう。

誰が美味しい料理を作ってくれるだろう。

誰が自分の話を黙って聞いてくれるだろう。

とその時。

後ろから自分を呼ぶ女の声が聞こえた。

顔を戻すと青色の制服でできた道の先に見知らぬ1人の女が立っていた。

「王女様。」

優しく微笑み王女を迎えるその女、黒い長髪に、少し物言いの強そうなキリリとしたつり目、一枚の薄色のローブが胸から膝まで覆っていた。

王女よりも年上、もしかするとファランクスよりも少し年上かもしれない。

「おかえりなさいませ。さぁ、お召し替えいたしましょう。」

丁寧な口調で女は王女の手を取り、船の一室へと招きいれた。

そこはベッドや洋服ダンスまでもが用意された客間であった。

女は両手を腹にあて、深々と王女に頭を下げる。

「私は皇国につくまでの間、王女様のお世話係をさせていただく者です。何なりとお申し付け下さい？」

と女は自然と微笑んで見せる。

外では王女の入室を確認するやいなや、戦艦の帆が一斉に下ろされた。

「錨を上げろ！沖に出るまでラティーンセルもしっかり張れ！」

中央に赤い十字架の描かれた純白の横帆が張られ、船尾では三角形の帆がしきりに向き変えている。

皇国への出航であった。

残り６０日にて。

王女の冒険は終わりを告げることとなった。

Ｎｏ８　今朝の密会

宿屋の一室にパイレーツ一正確にはこの時まではパイレーツと名乗っていた一と、ワンピース姿のファランクスの姿があった。

『では、先に朝食をいただきますので…。』

ベッドに腰かけ、髪を整えるパイレーツの背中を不安気に見つめドアに手をかける。

その体勢のまま、ファランクスは昨日からの彼女の様子と、昨夜の言葉を思い出していた。

いつもならばうきうき気分で朝食メニューを考えている時間帯のファランクスだが、今朝の彼女はそんな気分にはなれず、緩む頬を強張らせる必要もなかった。

なかなかドアを開けられない彼女に気付き、『どうした。』とパイレーツが声をかける。

『…先に行きますので。』

『ああ。』

『…。』

背中で答えるパイレーツに黙って退室することしできなかった。

1人部屋に残ったパイレーツは荒々しく髪をとかしていた。

自分のことを気遣ってくれる護衛に内心はイライラしていた。

シノビとファランクスの2人が負傷し、自分は傷を負うことなくここまで無事に戻ってきた。

こうなってしまった責任は自分の未熟さゆえであるにもかかわらず、今朝になってもそれを気遣うような態度をどうしても許せなかった。

いっそのこと、自分を責めてくれた方がどんなに気が楽か。

と、手鏡で仏頂面を見た瞬間、ドアがノックされた。

大きなためをつき立ち上がる。

何か忘れ物でもしたのだろうか、だとしてもわざわざノックする必要などないだろうに。

この数秒後、彼女の予想は裏切られるのだが。

一応のためドアミラーを覗いてみたが、そこに真面目な護衛の姿は映らなかったのだ。

姿どころか、ミラーには何も映らず真っ暗であった。

不思議に思いながらノブを握った瞬間、扉は勢いよく引かれ、その隙間から部屋に2人の男が流れ込んできた。

「な…！」

素早く入りこんだ1人目は、左手を真横に伸ばし右手の人差し指を口に立てながら一歩一歩と近づいてくる。

（声を出すな、襲う気はない。）という合図だろうか。

そして2人目の男はドアを閉めチェーンと鍵をかけている。

『おはようございます、王女様。』

と前に立つ男が言った。

2人とも見知らぬ男であった。

だが最初の一言から、彼らが自分の正体を知っていることは確かであった。

『名刺はありませんが、我々の正体も大凡見当がおつきかと思います。皇国から派遣されました。』

と答え、『あなたの護衛として。』と続けた。

だが皇国の兵にしては随分と格好が違う。

目の前の男は、青髪の左右不対象なアシメヘアーに毛皮のついた黒革の上着。

さらに香水をしているのか、ほのかに鼻を刺激する香りがする。

奥の男はゴーグルのまきついた長いツバの帽子に灰色のマント。

兵ならば統一された服を着るのが普通であり、言う必要はないと思うが男達の格好は皇国の制服でもない。

傭兵か？

と聞くと、なんとお呼びしてもらってもけっこう、との返答であった。

用件は？

と聞くと、奥の帽子男が前に出てきた。

『即刻、我々に動向していただき皇国へお戻り願います。』

先程の質問とは違い要求と意思を持ったその言葉に王女の心は揺れた。

王女にかまわず帽子男は続ける。

『出港準備も始まり、皇国での受け入れ体勢も整っています。後は我々にお任せ下さい。』

（- お任せ下さい- ？）

自分の命運をかけた旅を終わらせ、そして皇国に従えということか。

納得できる理由はなかった。

そしてそれを拒否する後ろ盾があることを思い出し、王女は冷静に戻った。

『拒否する。王女は戻らぬと皇国に戻って伝えろ。これは条約違反だ。』

『百日評定』。

帝王は言った、待ってやる。

皇王は言った、好きにしろと。

だが、2人もそれをわかっていたのか表情1つ変えなかった。

青髪アシメの男はヒヒっと不気味に口元を歪め、帽子の男は面倒くさそうに口を開く。

『百日まで猶予があることは我々も承知です。しかし皇国が王女には迷宮制覇は不可能と考え連れ戻すことが決定いたしました。』

『勝手に不可能と―!』

『王女様は自分の体調管理もできず夢遊病で迷宮を歩き回り、さらに魔物を前になすすべもなく2人の仲間を負傷させましたね。』

王女の反撃が予想できていただけに迎撃するための言葉を装填していたのだろう。

帽子男の声はまるで用意されたセリフを読み上げているようであった。

『眠りながら歩く王女様を魔物から守ったのは、他でもないこの男です。』

と青髪の男。

『確かに王女様にはあと６０日間ほど猶予があります。しかしこのまま迷宮探索を続ければ確実に命を落としてしまい、仮に続けたとしても迷宮制覇は不可能でしょう。それは王女様がご自身を省みればわかることです。』

自分の過ちを掘り返す相手を前に言い返すことはできなかった。

否、言い返したところで無意味な時間稼ぎにしかならないのだ。

ニヤニヤといじめっ子のように笑う青髪アシメと、次の言葉を待つ帽子男。

海都に来て４０日。

集まった仲間は２人。

迷宮も未だ地下３階に到達したばかり。

現在わかっているだけで、世界樹の迷宮は最低でも地下１０階まで続いているという。

そこにたどりつくだけでも、今の探索ペースでは間に合わない。

自分でも感づいていたその結論を目の前につきつけられ、言い返せることはなかった。

『わかった。』

と苦しげに絞り出された声を聞き逃さず、

『ではまいりましょう。』

と帽子男はさっさと踵返すが、しかし。

『仲間達に最後の挨拶をさせてほしい。』

相手の要求に沿う言葉でカモフラージュされた王女の要求。

帽子男は黙り、青髪アシメの男はヒヒッと笑う。

振り返った帽子男の目に王女の蒼い眼差しが映る。

『頼む。』

頭を下げる王女に2人は動揺を隠せなかった。

わがままな小娘にため息をつきたい帽子男だったが予想外の行動に言葉を失う、仮にも一国の統治者が使いの兵に頭を下げているのだから。

『…。』

青髪アシメが笑うことなく、帽子男へと耳打ちする。

それに頷くと今度は丁寧な口調で語り始めた。

『３０分猶予を与え３５分後に迎えに参ります。しかし迷宮の入口に近づけばすぐにでも貴女を連れ戻す。』

言われ王女が顔を上げると帽子男は既にドアへと足を向けていた。

これ以上は問答無用と背中が語っていた。

青髪アシメの男はなおも不気味に口元を歪め、最後にゆっくりと王女の顔を鑑賞すると

『ヒヒッ。』

と笑い、帽子男に続いた。

『（さっさと出ていけ。）』

と。

王女は言葉に出さなかったが心の中で叫んでいた。

兵達の後ろ姿に皇王の背中が重なる。

（誰が言いなりになるか。）

青髪男はドアミラーに貼り付けられたガムを口に含み、後ろ手にド

アを閉めていった。

2人の退室後、王女は挨拶の言葉を考えることなくベストとコートベルトに腕を通しサーベルと拳銃をはさむ。

『稽古場を探しに行く。』

と昨夜の言葉に変わりはなく、むしろ帽子男の言葉に王女の決意はさらに強固なものとなった。

（確かに私は未熟だが、だからこそ強くならねばならぬ。）

兵達が戻ってくればどうするか。

今の彼女は考える気分になれず、ただ突き進むしかない。

そもそも自らの力を証明するための迷宮制覇であったにもかかわらず、皇国から兵が派遣されていたことにも腹がたって仕方がなかった。

初めての子供のおつかいに親が尾行するようなものである。

それも保守的な皇王のことだから王女が消えることで帝国が横暴にでると警戒し
たための護衛兵だったのだろう。

これなら我が子を心配するために親が同伴する方がまだ好感がもてる。

（護衛はファランクス1人で充分だ。）

昨夜から怪我を気にせず我が身を気遣ってくれたファランクス。

（それなのに、私はー。）

最近忘れがちになっていたが、彼女が心の支えになっていることに実感がわき始めているのだった。

海賊帽をかぶると一国の王女からパイレーツへと変わる。

（不可能に近いことはわかっている。だが1%でも可能性がある限り私はあきらめない。）

決意を新たに、パイレーツはドアを開けた。

部屋の空気に青髪アシメの香水が漂い、廊下に出てもその臭いが彼女の鼻にこびりついていた。

ひとやすみ『メタ〇ギア編』（前書き）

原案
『かくれんぼするゲーム』
自己評価
なんかもう、いろんな人を怒らせてしまいそうな作品です。

ひとやすみ『メタ〇ギア編』

誰がなんと言おうと、ここはＡＴＲＵＳ本社の廊下である。

そしてその廊下の隅に不自然なダンボール箱が置いてあった。

ちょうど人が一人入れるほどの大きさの四角いダンボール箱である。

案の定、そのダンボールの中に一人の男が入っていた。

窮屈なダンボールの中でその男は胸元の無線機を操作し、周波数を本部に合わせた。

ピリリ、ピリリと、電子音が鳴り、無線画面が開く。

『こちらシノビ、ＡＴＲＵＳ本社への潜入を完了した。』

『うぬ。ご苦労だ。』（相手は金プリ。）

『これより、世界樹の迷宮？の開発室へと潜入する。』

『了解した。そなたに与える任務は、世界樹？の情報を収集することだ。くれぐれも本社の人間に見つかってはならない。以上だ。』

『御意。』

通信が切られた。

シノビはダンボールの隙間から廊下を覗き、前方に人がいないこと

を確認するとダンボール箱を脱ぎ捨てた。

だがそれは間違いだった。

脱ぎ捨てた瞬間、「誰だ！」と背後からの声、前に気をとられ、背後をまったく見ていなかったのだ。

忍者のくせに意外とうっかり者である。

まさか本社の中に忍者がいるとは思わないだろう、見つけた社員は応援を呼ぶこともできず、あたふたと混乱している。

シノビは背後へ駆け、相手の足を払うと、打ち身をくらわし意識を奪った。

相手が気絶したと確認するや否や、シノビは相手の服を奪い、都合よくたっていたロッカーの中に、半裸になった社員を隠した。

黒装束の上に社員の服を着、シノビはＡＴＲＵＳ本社を堂々と歩くのであった。

一方、ここはシノビに指示を与える本部である。

本部と言ってもアーマンの宿の一室であるが。

円卓の机に手を組んでいるレギュラーメンバーの姿があった。

「さっそく見つかってしまったではないか・・・。」（金プリ）

「でも、シノビなら上手くやってくれるでしょう。服を奪うとは流石です」（ファランクス）

「ウォリアーさん、こんな時に何をしているんですか？」（ファーマー）

「いや、いろんなサイト見ているんだけどさ、『私の聖騎士様』の在庫がどこにもねえんだよ。」（ウォリアー）

「なんですかそれ？」

「仲間を守るパラディン君の勇姿が描かれた・・・。」

「こらウォリアー！暇だからって勝手に変なサイトを開くな！」

ウォリアーが広げているのは、超偶然にも海都に流れついた『パソコン』であった。

なんとまぁ都合よく電化製品が流れてくるものだ。

ちなみにこのパソコン、前回のテレビ同様に防水性能がめちゃんこ抜群だったようで、浸水による故障はなかった。

このパソコンには無線機能の他、スカイプ機能もついているため、一同はシノビの見た映像をパソコンで見ることができたのだ。

ちなみに電源はゾディアックである。

「雷の錬星術ぅ…。」

「ゾディアックさん可哀想…。」

しかし今回はゾディアック自らが志願したらしい。

いったいどういう事情があるのやら。

「姫様、シノビからの通信が来ました。」

『こちらシノビ。ゲームソフト開発室を発見した。』

「おお、もう開発室を見つけるとは。」

「早速潜入だな。」

「待て。開発室といっても、部屋の中はいくつかの部署に区分されているはずだ。その中から世界樹？の開発室を探すには時間がかかる。」

ゾディアックが発電しながら冷静に言った。

「それに、開発室となると外部に情報が漏れないよう、立ち入りが厳重になるはずだ。」

「本当なのか？」

『その通りだ。警備兵が二人、開発室の入り口に立っている。』

シノビの映像がパソコンに映し出されると、そこには黒い制服にサ

ングラスをかけ、そして銃を持った二人の男が立っていた。

「おっかねえな。逃走中のハンターみたいだぜ。」

「ＡＴＲＵＳさんってこんな人を雇っているんでしょうか？」

※　注あくまで著者の想像です。

「変装していても、直接侵入するのは危険だ。別の侵入経路を考えた方がいいだろう。」

『御意。』

シノビは通信を切った。

何食わぬ顔で開発室のドアを横切るとき、天井に通気ダクトが設置されていることに気づいた。

ダクトは開発室から廊下へと続いている。

これを使えば開発室へ潜入できるかもしれない。

シノビは廊下へ伸びたダクトの先を追った。

「世界樹？ってニンテンドー３ＤＳで発売するんだろ？」

「そういう噂ですけど、３ＤＳってゲーム化するのが難しいって聞きましたよ。」

「難しいってどういうことだよ？」

「ええ・・・、つまり・・・。」

「難しいわけじゃない。ただ、ゲーム機本体が高性能過ぎると作り手である人間がその容量を満たすのに苦労するらしい。」

「容量って、本体を活かしきるってことか？」

「そういうことだ。まぁ、活かしきったところで、必ずしも面白いゲームができるとは限らないがな。それにこれからはスマホの時代だからな・・・。」

「何を難しい会話をしておるのだ。シノビからの映像は届いたのか。」

主人公の一喝を受け、一同は再び業務へ戻った。

「雷の錬星術ぅ・・・。」

「ゾディアックさん、がんばって！」

「シノビからの映像は・・・、お！今ちょうど届いたぜ！」

「何？」

「天井から世界樹？の映像撮影に成功したらしい。映像が届いたぜ。」

「内容は？」

「こ、これは・・・・。」

「ひ、姫様・・・・。」

「な、何が見えたんですか」

「雷の錬星術ぅ・・・・。」

「世界樹？の・・・・

新たな、十二職のイラストだ！！」

たぶん、続く。

ひとやすみ『メタ〇ギア編』（後書き）

ごめんなさい。

第七章　船はどこだ。

『今日でＫｉｎｇｄｏｍは解散だ』

ファランクスが言った。

大切な人との別れ。

それは唐突に日常に現れ残された者を苦しめる。

時に残された者は、失って初めてその別れが『大切な』別れと気付くこともあるのだが。

後から気付こうと、最初からわかっていても別れが苦痛をもたらすことはかわらない。

残された者には涙にくれ、悲しみの周辺には無力さへの苦痛が広がる。

大切な人と二度と会えない悲しみ。

昨日までそこにあった日常が消え、いくら元通りの日々を渇望しても戻らない。

昨日に戻ることができたら。

少しでも過去をやり直すことができたら。

記憶の中だけではなく、もう一度会って、たわいない話をしたい。

心から無限に溢れる渇望は、その存在自体が現実を突きつけるが、それでも渇望は止まらず、いたずらに時間が流れていく。

そして周囲に広がるは悲しみを和らげることのできない無力さへの苦痛。

いくら悲しみを癒そうとこの世の摂理を話しても。

いくら希望に満ちた言葉をかけようと。

いくら気晴らしに誘おうと。

悲しみは消せず、同時に苦痛も消えない。

それが残された者の悲しみと苦痛である。

だがこの部屋に悲しむ者はおらず、そのため苦痛も生じることはなかった。

ファランクスは気丈に笑っていた。

笑いながら一行に説明したのだ。

その日は宿で小火騒ぎがあったが、炎自体に大した危険性はなかった。

問題だったのは発火されていたもの、樹液にあった。

そこから生じるかすかな煙の中に、吸入者を眠りに誘う鎮静剤と意識を奪う物質があったと気付けるものはいなかったようだ。

王女を乗せた船が水平線の彼方へと沈んでいくのを見たその日、西日が差し込む宿の一室にて。

シノビとファーマー、そしてバリスタとウォリアーは王女の出生について聞かされた。

ちなみにモグラも。

王国が彼女一人を残して崩壊したということ。

その領土と資源を狙う帝国が、王女が実権を握ることを快く思っていないこと。

それを認めてもらうため自らの血統をかけ、世界樹の迷宮に挑んでいたということ。

秘密にしてすまなかった、とファランクスは二人へ謝り、今までありがとう、と続けた。

帆から察するに王女を連れ戻したのは皇国の戦艦であることは間違いない。

最初から皇国からの差し金が『Ｋｉｎｇｄｏｍ』を監視していたのだろう。

野営地から離れた王女を守り、そしてギルド『ムロツミ』のメンバーを救い、そして宿の時間を止め、王女を連れ出したのも彼らと考え間違いない。

彼らは今回の一件を皇国に報告したためか、あるいは事前に王女の探索に危険が見え始めれば連れ戻すように指示を受けていたのだろう。

王女がいない以上、いや、連れ戻された以上、もう迷宮探索を続けることはできない。

そして迷宮に挑む意味もない。

王女は迷宮制覇に失敗し、自らの力を証明できなかったのだから。

という旨の言葉をファランクスは途切れ途切れに告げた。

彼女は悔しそうな顔もせず、これが当然の結果のように納得しているようであった。

皆に会えてよかったと姫様も思っているだろう、

私も感謝している。

ありがとう。

今日で、『Ｋｉｎｇｄｏｍ』は解散だ。

話し終えるその瞬間まで。

彼女は虚ろな瞳で、笑っていた。

Ｎｏ１　華のない三人

一人の男が桟橋に立ち、誰かを待っていた。

この男が桟橋にいるとは珍しい。

道行く市民がここに立つ彼を見れば首をかしげ、見間違いと思い直すだろう。

それ程この男がこの場所にいるとは珍しいのだ。

しかし辺りは暗くなり人の姿はない。

仮に誰かが通り過ぎそして柱を背に街道から隠れるように立つその男が見つかることはないだろう。

男は辺りを見回すことなく周囲の様子を気配から察していた。

風の動きとそれに流され伝わる音をターバンに覆われた耳でとらえる。

だが帆船に繋がれたロープが軋む音と足元一枚下でぶつかり合う波しか聞こえず、呼び出した本人の足音は聞こえない。

男は腕を組み時折片指で引き締まった腕の裏を叩いている。

昼夜を問わず自分の職場で業務をこなしているこの男が、職場から

離れることを快く思えるわけがなかった。

男の職場はギルド登録所である。

そこではギルドの登録や抹消に加え冒険者同士での求人の仲介を受け持っている。

海都は冒険者によって潤う国家である。

迷宮から無尽蔵に得られる資源を地上へと運ぶ冒険者と、それに乗じて儲けようとする商人達によって国は発展してきたのだ。

そのため迷宮を挑むギルド数と冒険者の数を記録することは海都にとって成長率を示す指標となる。

それを記録するのも男の職場である。

聞いただけでは事務的な仕事に思えるが、あくまで冒険者を相手にする職場である。

気性の荒い冒険者を相手に、頭でっかちの理論派の人間に仕事を任せられない。

そのためか、登録所を担う人間は過去においてそれなりの実績のある冒険者の中から選ばれるのだ。

この男もかつては世界樹の迷宮に挑んだ冒険者であり、その名残からか左右の腰にはそれぞれサーベルが差さっている。

最も今は剣ではなく、登録所でペンを握ることがほとんどだったが。

時には過去を懐かしむこともあったが、今の仕事も悪くないと思っていた。

記録は海都に、未来永劫残り続ける。

対して剣を握り魔物をいくら倒しても、数日もすれば復活する。

束の間の達成感か、それとも未来に残る記録か。

今の自分には後者の方があっていると自覚していた。

さらにその記録は海都にとって貴重なものなのだ。

男は今の自分の役割と、『ギルド長』という与えられた立場に誇りを持っていた。

さて、そういった国家レベルの情報記録を担う男を呼び出せる者となると、やはり国家レベルの人間となる。

「やっと来たか。」

と男は髭面の顔を上げた。

現れた男は頭から全身にかけてマントをまとい、上半身はマントに

隠されているがその隙間からは鈍い光を放つ鎧の一部が見えている、そんな姿だった。

右手に持った額から爪先まで伸びた長い槍を杖のようして歩き、左手には海都の国章が描かれた盾が巻き付いていた。

現れた男は海都の自治をあずかる元老院の私兵、衛士であった。

「遅れて申し訳ない、師範殿。」

マントで隠された顔からは表情も読み取れないが、その声と自分を師範殿と呼ぶことから相手の察しがついた。

「久しぶりだな。早速だが用件を聞かせてくれるか。」

「いえ。その前について来ていただけませんか。」

「なに？」

二人分の足音と、歩くたびに地面をつく柄の音が桟橋に響く。

衛士を先頭にギルド長は海都の沿岸に沿うように桟橋を歩いていたが、たどり着く先は彼も知っていた。

そこでギルド長は、衛士もとい、それを使役する元老院の用があるのが自分だけではないと察した。

桟橋の道は終わりをつげ、仕切りのない窓からランプの明かりが漏れる、石造りの小屋が彼らの前に現れた。

ドアをノックすると「入りたまえ。」と優しげな言葉が返ってきた。開いたドアから明かりが漏れ二人の足元に四角く黄色い幻影ができる。

「すまないな、私の都合で無理を言ってしまって。」

声のする方を見ると、港の管理者は椅子に腰掛け樽の上で乗船記録をつけていた。

国章のメダルのついた海賊帽をかぶり、そこから長髪が溢れている。もみあげから顎髭までが融合しどこが境目なの判別できないほどに長髪である。

まるで顔の輪郭に沿うように毛皮が張りついたようである。

管理者は帳簿を閉じると金に縁取られた上着のポケットへと手を伸ばした。

「少し遅かったようだが、そのためにも早速元老院からのご用件を聞こうかな。」

取り出した懐中時計をしまうが、左手はポケットに入れたまま。

これが港の管理者のお約束のポーズである。

申し訳ありません、と頭を下げる衛士を責めることなく管理者は髭に覆われた顔に笑顔を浮かべ、そして表情を崩すことなくギルド長と目を合わせた。

「君がここに来るとは珍しいな。まぁ場所を指定したのは私だが。おっとすまない。話をうかがおうかな。」

職場を離れ、その上連れ回されるのは快く思えなかったが、管理者の要望ならば仕方ないとギルド長は頷いた。

港とは海都（島国）にとって入口。

そこを守り管理する仕事はすなわち、国防に匹敵する仕事である。

この小屋に兵隊も火器もないが、海都の居住区に立ち港を見下ろす元老院からはこの小屋を常に監視する衛士の姿がある。

沖合に何か異常を見つければ、照明弾という連絡手段で管理者は監視者に危険を知らせる。

そして港とは真っ先に攻撃をうける場所であるため、ここに過剰な兵力は配置されていない。

兵力は敵が上陸するまで温存し、港は捨てる覚悟で迎え撃たなければならないのだから。

「では単刀直入に。お二方とも『Ｋｉｎｇｄｏｍ』というギルドを

ご存知でしょうか。」

「知っている。」

「私も。」

ここで知らないと言われれば一から説明するところだったがその心配はなかった。

「ではギルド長殿に伺いたいのですが、最近の彼らの様子はいかがなものでしょうか？」

あくまで公の場では『師範殿』とは言えない。

例えかつての師弟同士であっても、今は元老院に仕えているのだから。

「様子ね。」

とランプの明かりはギルド長の不機嫌そうになった顔を照らし始めた。

Ｎｏ２　御輿

滝から水の落ちる音と共に湿気った臭いがシノビの鼻に届いた。

東からの日の光がかすかな虹を作っていたが、立っている彼にはそれを目にすることはできなかった。

彼は目を閉じているのだから。

瞼を閉じ両手をだらりと下げているその様子から、全神経を耳と鼻に集中させているのかもしれない。

彼の周囲に障害物はないため今の彼は格好の獲物に見えることだろう。

だが逆に言えば襲われる側からも相手を察知しやすい立ち位置でもある。

通いなれた地下一階の花畑。

ほんのわずかだが水気を含んだ空気中に、眠りを誘うような甘い香りも混ざっている。

夜の間に養分を蓄えるため朝は最も花の臭いが強い。

妖艶な臭いにひきつられた昆虫達を相手に贅沢な甘酒を振る舞う花々。

他人の子種を託されている運び屋になったとも知らずに彼らは飛び去っていく。

中には運び屋など求めず昆虫を食らうだけの花もいるが。

そして世界樹の迷宮となれば、人間相手にそれを行う花も出現する。

頭上に伸びた青々しい枝葉にツツジのような形の赤い花が咲いていた。

そしてそれを踏み歩く不気味な影が二つ、無防備な獲物の後頭部を見下ろした。

そして間をおくことなく二匹は固い体皮を武器に獲物へと飛び下りるのだった。

三百六十度を見渡せる立ち位置であろうと真上だけは死角である。

だがそれは視覚に頼る者にとってであり、シノビには無関係であった。

振り返ることなくシノビは完治した首を揺らし二匹の軌道から頭をそらす。

予測できなかった獲物の動きに、頭を通り過ぎた着地が二匹の姿勢を大きく崩した。

それは無数の突起の生えた甲羅をまとう植物の魔物であった。

柄を握っていたシノビは、踏み込むと同時に抜刀し甲羅に隠れた魔物の本体を斬りつけた。

そして着足の瞬間のほんの間に動きを止め、片手を反り返ったミネに添え、返す刀の先を背後で転げ回っていた二匹目の胴体へと突き刺した。

貫通した刀身を抜くと、刀を降り下ろし、返り血を緑へと叩き捨て鞘へと収めた。

そしてシノビはナイフを取り出し、甲羅のような魔物の体皮をはぎ取り始めた。

全てを取り終えるとそれを皿のように重ね縄で縛り、そして再び瞼を閉じ魔物が迫るのを待った。

これを、採取を終えた仲間達が戻ってくるまでひたすら続けていた。

「最近は浅い階層でアイテムを採取と手頃な魔物を倒して金を稼いでいる。今頃換金した金で安酒でも飲んでいるな。

筋のいい連中だと思っていたのに俺の眼鏡違いだった。あいつらも日銭を稼ぐルーチンワークに明け暮れるギルドに成り果てるのか。」

「…。」

「落ちたものだ」ギルド長はとため息をつく。

「そうですか。」

特に落胆したような声でもなく、ただあくまで情報を集めたかったことが衛士の口調から読み取れる。

「私が話してもいいかな。あれは三日前だったよ。」

ギルド長に続き、部屋の明かりが管理者の顔を照らし始めた。

桟橋にて。

短刀を持った手が青髪の喉につきつけられていた。

黒革の上着からかすかに香水が漂い、それが自分の腕に抱きついた彼女から届いた臭いと一致した。

もしかすると彼女は、自分に何らかのメッセージを伝えたつもりだったのかもしれない。

しかし考えても仕方ない。

本当のことは当人に聞かねばわからず、そして今朝を振り返るのではなく、今をどうにかしなければならないのだから。

『おいおい。俺達は王女の保護者の命令で動いているんだ。何も悪いことはしちゃいないぜ。』

シノビは言葉を返すことなく、さらに短刀を突きつける。

『感情的になるなよ。お前、あの王女様のことが好きなのか？』

『黙れ。』

『よく考えてみろ。俺を止めても保護者は納得しないぜ。お前達と王女様は一生離ればなれさ。』

『ならば今連れ戻す。』

ビーストキングが止めに入ったらしいが、彼は止まらず、騒ぎに気付いた管理者が駆け付け事なきを得たというが。

「私の港で暴力行為を見逃すわけにはいかないからね。それにいかなる事情があろうと準備を整えた船への出航妨害など言語道断だ。」

いつもは優しげなレンズ越しに見える管理者の目が鋭く光っている。

『いかなる者も出航を妨げてはいけない』

という掟はこの男の長い経験に基づいて作られたものであった。

港の管理者と呼ばれるこの男。

かつて海賊王の再来とも言われたクルーの航海士を努めた乗組員である。

船において航海士は船長に次ぐ地位を持つことから、この男の肩書きがただの『元海賊の一味』で片付けられるものではない。

そんな彼がなぜこの港の番人をしているのか。

少なくともこの場には関係の無い話なので詳しくは語らないが。

「まさか彼らのリーダーが祖国に連れ戻されていたとはね。」

と管理者はレンズの隅を磨きながらこうきりだした。

「Ｋｉｎｇｄｏｍのリーダーはパイレーツを名乗っていたが、どうやら身元を偽ってのことらしいね。」

「昔、とある国の王女がファーマーを名乗って海都に来たことがあったが。海賊になりすますとは俺も初耳だ。しかもそれなりに剣術と銃の扱いも訓練されていたようだ。」

「お二方の意見をまとめるとＫｉｎｇｄｏｍはリーダーを失い、残ったメンバーは資金を調達しているということになります。そして元老院が集めた情報によると彼らは船を探しているとのことです。」

元老院の情報ということは二人に会う前から衛士、つまり元老院の方では結論がついていたのだろう。

ではなぜ白々しくこのような議題を二人の重役者を呼んで話すのか。

「彼らはリーダーを連れ戻すつもりだろうか。資金を集めるのは乗船料のためとうかがえるね。」

「なるほどな。そういう事情があったのか。好きにやらせりゃいいと思うが、そうさせたくないから俺達を呼んだんだろう。」

ギルド長に睨まれ、衛士は内心ではその眼光を懐かしみながら言葉を続ける。

「元老院では即刻彼らの帰還を望んでおり、可能な限りその支援を行うと決定しております。」

その言葉に平静を装いながらもギルド長と管理者は耳を疑った。

「おい、元老院（政府）が一冒険者に加担しちゃまずいだろ。」

「私も同意見だ。一体どういう事情があるのか知りたいね。」

「実は元老院では彼らに『魔魚ナルメル』の討伐任務を与えようとしていたところでして。」

『魔魚ナルメル』。

第一階層の最終地点に巣くうボスであり、コイツを倒さなければ迷宮の先には進めない。

数多くのハクのついた冒険者がコイツを相手に命を落としてきた。

ある程度優秀なギルドに対し、元老院から調査任務や討伐任務が出されることは海都では周知の事実であった

だがなぜＫｉｎｇｄｏｍに対し魔魚ナルメルの討伐任務が出されるのか。

討伐が目的ならば熟練ギルドに依頼すれば確実な事ぐらい元老院もわかるだろう。

「個々の冒険者の質が低下し、海都にいる大半のギルドが安全な階層で身銭を稼ぐことに没頭しております。

わずかに存在する意欲的な冒険者達も、褒められる点はせいぜい『意欲的』である点だけ。自らの力量も考えず魔物に挑み朽ちていくばかりです。このためここ数年の海都の繁栄も滞っているのです。」

「そこで少しでも将来性のあるギルドに留まっていてほしいと言うことだね。」

「若く有望なギルドは他のギルドへの刺激となり、彼らがナルメルを討伐すれば再び錆び始めた冒険者達の心も戻せるかもしれません。そこで一。」

と衛士が続けようとしたところにギルド長のため息が割り込む。

ギルド長があきれる理由は昔からの付き合いであった衛士自身がよくわかっていた。

「一つまり『Ｋｉｎｇｄｏｍ』を御輿に上げることで他のギルドを鼓舞したいというわけだな。」

ギルド長は腕を組み、二の腕の裏を指で叩き始めるのだった。

確かに最近の冒険者は質が悪く、Ｋｉｎｇｄｏｍの姿を見ることが最近のギルド長の楽しみでもあったが。

だからといって彼らを見せ物にすることは納得できなかった。

迷宮制覇に心を踊らせる冒険者を政治のために利用する手法には昔

から好きにはなれなかった。

「確かに、我々（元老院）の狙いはそうしたことにあります。しかし海都には冒険者に頼る他繁栄するすべはありません。このままの状態が続けば海都は衰退していく一方です。」

「一理あるな。」

「だが百理は無いぜ。」

「そして『オランピア』と『深都』のことがあります。」

その二つの単語に、部屋の中に遠くからの波の音が聞こえ始めた。

『オランピア』

『深都』

元老院では海都衰退と並行し進められている議題であった。

地下へと続く世界樹の迷宮の果てに―果てと言っても現在たどりつける範囲においてだが―海都とはまったく異なる海底都市が存在し、その入口を守る番人の一人が『オランピア』と名乗る女であった。

その実態をつかみたいところだが、元老院単独では難しく迷宮に慣

れた冒険者達の力添えが無ければ不可能であった。

しかし衛士の言ったとおり、最近の冒険者は危険を犯して生きるよりも、身銭を稼いで暮らす安定志向が多く、難航しているのだった。

深都についてはともかく、

『若いギルドが錆びた冒険者達の心も戻せる。』

という衛士の言葉にギルド長も同感はしていた。

彼が働く登録所でもＫｉｎｇｄｏｍの噂は流れ始め、それに刺激され始める中堅ギルドもいたのだ。

Ｋｉｎｇｄｏｍの迷宮探索のスピードという面もしかりだが、四人で地下三階まで到達したというのは異例である。

ギルドは本来五人のメンバーで構成されるにもかかわらず彼らは四人、そしてメンバーの中にファーマーという非戦闘員を加えているにもかかわらず。

そして彼らの大きな特徴が、先人達から学ぶ姿勢。

冒険者として基本的な勉強方法だが、最近の新米ギルドにはなぜか

そうした基本姿勢が欠け、底の浅い経験だけで突っ走るのがほとんどであった。

日々の鍛錬を嫌い手っ取り早く功績を立てようとする。

時代が時代なためか、そんな連中ばかりなのだ。

だがＫｉｎｇｄｏｍを率いるリーダーは違った。

彼女は上っ面では無い敬意を払い、臆することなく先輩達へと飛び込んでいく。

先輩の中には見ず知らずの相手に、自分の経験と知識を提供するのは抵抗を持つ者もいるが、彼女のひたむきな姿勢がそういった人間の懐へ入り込む武器になっているようだ。

ギルド長はそういった光景を職場内でさんざん見せつけられていた。

「懐かしい光景だった。」

「は？」

「なんでもない。ともかくＫｉｎｇｄｏｍを連れ戻すのが元老院のお望みだな。そこで俺達にどう働いてほしい？」

「ギルド長殿には、しばらくの間ギルドＫｉｎｇｄｏｍの抹消を待

っていただきたい。」

「その心配はない。よっぽどのことが無い限り、勝手に俺が抹消することはない。」

「それで、私はどうすればいいのかな。」

「管理者殿には、彼らに船の仲介を頼みたいのです。」

「やはりそうか。国防が脅かされない程度に協力しよう。確か彼らの祖国は北国だったかな。」

「ああ。ここから北だと、確かに言っていた。」

「北か。」

「何か問題が。」

「衛士君。Ｋｉｎｇｄｏｍの帰還を望むのはわかるが、彼らを送る船乗り達を危険にさらすわけにもいかないのだ。私の仕事として。」

「北は最近荒れているんだよ。」

「そう、でしたか・・・。」

「気にすることはない。ともかく私は元老院の希望を、自分の仕事を守れる範囲でやらせてもらうよ。」

「よろしくお願いします。」

一礼した衛士と共にギルド長は石造りの小屋を出るのだった。
そこから少し歩いてギルド長が口を開いた。
「最近どうだ。」
「最近、ですか？」
「あの若造の仕切る職場はどうだ。」
「いえ、現在私は迷宮の番兵を任されており、お会いする機会は減っております。」
「そうか。」
衛士と命名されている元老院の私兵は、元々ギルド長が育て訓練をしていたのだ。
衛士の中には未だにギルド長から助言をもらう者もおり、この衛士もギルド長を『師範殿』と呼ぶことから、師弟愛が残っているとうかがいしれる。
だが現在、元老院では深都とオランピアへの早急な対策が叫ばれ、現場で働く兵力への迅速な指令のため、衛士達はギルド長の手元から離れているのだ。
衛士達の指導と編成も、元老院に仕える若い剣士―ギルド長に曰く若造―へと移行されているのだった。
「連隊長殿は決して悪いお方ではありません。あのお方自身も迷宮

へと足を踏み入れ我らの指揮をとっております。」

その若造剣士を衛士達は『連隊長』と呼んでいるらしい。

「ふん、浮気者が。」

と毒づくギルド長に衛士は慌てて訂正する。

「まあいい。ところでお前はＫｉｎｇｄｏｍに会ったことがあるのか？」

「新人君のギルドには何度か、お会いしたことがあります。」

「え、新人君って誰だよ？」

我が耳を疑うギルド長に衛士は再び訂正する。

「とにかく、個人的に彼らに期待しています。新人君・・・、いや、Ｋｉｎｇｄｏｍのファーマーとはよく話す間柄で、彼からよく冒険談を聞かせてもらっていました。」

「おい、その制服はなんのために着ている。個人的な感情を持ち過ぎるな。」

今のお前は衛士だ、とギルド長の叱責に彼は頭を下げた。

しかしギルド長は安堵していた。

元老院はともかく、少なくとも目の前にいる衛士はＫｉｎｇｄｏｍに対し政治的な期待はしていないようであったから。

Ｋｉｎｇｄｏｍという一冒険者に求めているものはたわいもない、冒険談。

師匠のもとを離れても、まだ自分の色に染まっていてくれることが安心と同時に、どこか嬉しかった。

といっても、そんな事を堂々と言えるわけもないが。

こみ上げる感情を隠すようにギルド長は鼻で笑った後、衛士に別れを告げた。

『Ｋｉｎｇｄｏｍの登録抹消を待つこと。』

弟子からの指令を頭の中で繰り返し、肌寒い夜風を受けながら、足早に自分の職場へと戻るのであった。

Ｎｏ３　ママさんからの手紙

逆さにされ、足を天井に向けた椅子が机の上に並べられている。

それらの足元を磨き終えると、今日一日の汚れや足跡を吸い取った床が黒く光り始めていた。

内心その光具合に満足しつつ、続いて机に隔てられたカウンターへと足を踏み入れる。

モップを手に床から生えた木を回るように歩く。

カウンターの床からは一本の木が生え、そこから伸びた枝葉が酒場の天井を覆い隠しているのだ。

いったいどこに根をはっているのやら。

おかげでごつごつした根本にそうようにモップを小刻みに動かさなければならないのだ。

建物と融合するこの木を『世界樹』の一部であると主張する者もいるが、根拠は無い。

稀に熱弁をふるい考察を唱える者もいるが、この木の正体に興味を持つ者は皆無に等しかった。

ここは難しい話をする場ではなく、冒険者が心を休ませる憩いの場

所、酒場なのだから。

まれに料理やグラスの中に木の葉が落ちることもあるが、建物の持ち主とここを訪れる客はこの木に親しみを持っていた。

酒場に来れば、ここを切り盛りするママさんと、この優しげな緑が迎えいれてくれる。

樹海で見かけるような肉食植物や二本足で襲い掛かってくる花とは違い、この小さな普通の木を見ることで、現実世界に戻ってきたことを実感し安心できるのかもしれない。

そして魔物の奇襲を恐れることなく楽しげに談笑し、やがてそれが広がっていくことで酒場は賑わうのである。

だがそれも営業時間ならばの話。

看板となった深夜は閑散とし、聞こえるのはモップが地面をこする音。

時折、ガラスの無い窓から肌寒い風が流れ、それに合わせて床から生えた木と、その枝に引っかけられた青い蝶の立て看板がかすかに軋むが、それもほんの僅かなものであった。

モップを浸すと、バケツの中へ全ての汚れが移っていく。

そして水の中へと中和されていった。

ウォリアーは床掃除を終えると、手垢と笑い声にまみれた机を磨き始めた。

彼が海都に来てから三週間が過ぎようとしていた。

ここへ来る船が魔物に襲われ沈没し、漂流していたところをバリスタ達に拾われそのまま居候させてもらっているのだった。

昼はキャビンボーイ（船の雑用）として船で働き、夜は酒場で働き身銭を稼ぐ。

それが海都に来てからの彼の日常だった。

このような生活サイクルを営むために海都に来たわけではないのだが。

彼は世の中が自分の思いどおりにならないことは痛いほど知っている。

一人で迷宮に挑めば命を落とし、この生活を止めれば居場所がなくなる。

とりあえず今は身銭を稼ぎ、狩人として鍛えられた肉体で『ウォリアー』としての自分を招き入れてくれるギルドを待つしかなかった。

気長に生きてチャンスが来るまで準備して待ち続ける。

それが祖国を捨てた時点で彼が決めたモットーであった。

否、捨てたというのは間違いかもしれない。
捨てるしか道が無かったという方が正しい。
彼は祖国で『狩人』として生き続けたかっただろう。

だが彼は大昔のことよりも目の前の仕事にしか頭に無いのか、悶々と考えることなくひたすら机を磨いている。
大方片付くとそれを見計らったように雇い主であるママさんの声が聞こえるのだった。

「ヨウ、ボーイ。掃除はオカタヅイたか？」

おかしな言葉に振り向くと、ガウンをはおったママさんが二階から下りてきた。

「フンフン、なかナカのお掃除上手ダナ。オマエ筋がイイゾ。」

「ママさんの台詞って読むのが大変だろうな・・・。」

「何言ってンだオマエ？ほらヨ、今日のお金だ。」

ほらよと、勢いよく言うもののママさんは手に持った硬貨を決して投げず、ほどいたウォリアーの手にそっとのせるのであった。
礼を言うウォリアーに、「礼をイウ相手がチガウゼ！」とママさん

はこれでもかというくらい元気よく返す。

「ソノ金は私のジャナイ。この店に来てクレル大切な連中からイタダイタモノだ。ダカラ仕事スル時は、常に金を払う連中の事を考エテヤリナ。給料ハ雇い主ジャなくてお客からモラッテんダゾ。」

『お客』を『連中』というのは失礼かと思うが、ウォリアーはこうしたママさんの教えが好きだった。

夜の仕事でここよりも給料が高いところはあったが、この仕事場を変えるつもりはなかった。

この仕事場では給料よりも、もっと大切なことを勉強させてもらっているような気がして変えようにも変えられなかったのだ。

「おっト、忘れナイうちに。今日はもう一つ仕事を頼みテエンダ。」

ママさんはガウンで隠れていた手からあるものを渡した。

「これは?」

「見てワカルだろ?手紙だ。ソレをお前んとこの船長に渡してほしい。」

「船長に?」

「ナンダ?嫌そウな面シヤがッて。」

船長と聞き、内心では断りたかったがママさんの頼みとなると仕方がない。

ここ数日、居候している船にどこかビリビリとした空気が漂っていた。

姉御（バリスタ）は半ば部屋に引きこもり、一部のモグラも覇気が無くなり思いつめた表情（？）をしているのだ。

どんよりとした雷雲が、船全体を包んでいるような気がする。

その元凶はおそらく片目のオッサン、（船長）にあるとウォリアーは思っていたが。

「船長に渡してくれ、頼んダンゾ。」

どうやらその元凶に近づかなければならないようだ。

そういった諸事情をママさんは伏せ、しっかりと返事をするとウォリアーは掃除道具を片付けた。

「気をツケテ帰れヨ。」

挨拶を済ませ店の明かりから離れると、両手に持った手紙を月明かりに照らしてみた。

しかし中身は見えなかった。

「コラ！覗くンじゃねえ！」

「あれ、見られていました？」

わざとらしく言いつつもママさんが自分を見送っていてくれていることは知っていた。

いたずらっ子のように笑い、少し歩いてもう一度、頭の上に手紙を持ち上げてみた。

だが。

「・・・。」

ママさんの声は聞こえなかった。

振り返ってみても、ママさんの姿は映らない。

いつもなら店からもれた明かりにママさんが立って見送ってくれているのだが、今日はその姿がなかった。

翌日の朝。

手紙を読み終えた船長はどこか不機嫌そうな顔をしていた。

それをウォリアーと、リーダーモグラと、どこか落ち着きのないビーストキングが見守っていた。

「まさか恋文かな？」

「いや、そうでないことを願いたいが…」

「え・・・。もしかしてビーストの兄貴、ママさんのこと好きなの？」

「キキュ～？」

「勘違いをするな。私は先代の女将一筋だ。」

先代の女将とは今のママさんの師匠にあたるお方である。

直接会ったことは無いが、ウォリアーもそのことは知っていた。

「おぉぉ。兄貴も恋したことあんのか。」

「キュゥゥ！！」

「どんな人？」

「お美しく、それでいて強いお人だった。」

過去を懐かしむビーストキングさんの横顔、といってもそれは仮面

に隠れてしまっているが。

「うるせぇぞ、お前ら。ていうかいつまでも俺の部屋にいる気だ？」

「なぁ船長。手紙の内容は？やっぱり恋文？」

「キュキュ！キュキュ！！」

「先代女将の弟子と逢引しようなどと言語道断だぞ、船長。」

「逢引ぃ！？さっすが大人は違うぜぇ。」

「射撃の的になりたくないならすぐ出ていけ。」

野次馬払いをすませると、船長は再び手紙を読み返した。

日頃からの言葉使いからは想像もできない正しい言葉で、そして綺麗に文字は記されていた。

船長は手紙と重ねてあった薄紙を元どおりに綺麗にたたむと真っ白な封筒の中に戻した。

椅子にもたれ壁に並べられた旧式のピストル達を眺めながら、船長は初めて羽ばたく蝶亭に行った夜のことを思い出していた。

当時の店は今のママさんの先代がカウンターに立っていた。

そして当時は幼く、先代女将の手伝い係だった少女が現在の酒場を切り盛りしている。

それが通称（自称）、酒場のママさんである。

先代と比べ幼さの残る顔に頼りなく思えてしまうが、彼女は一人で先代と同等の仕事をしていた。

ママさんは決して自分を女将とは言わず、そして客にも言わせなかった。

女将と言われるべき人は先代だけだと頑なに信じているのかもしれない。

柔らかい表情と物腰からは想像できないが、彼女の芯が強いことは長年の常連である船長が知っていた。

そんな彼女は先代の最も近くで学びその色に染まっているはず。

にも関わらず、彼女は自分に今日明日中に酒場に来て欲しいという旨の手紙をよこした。

先代の女将は酒場へ来る冒険者に優しく寄り添うものの、自ら個人に肩入れをしたり、誰かに頼み事をするような女（ヒト）ではなかった。

女将は相手が元奴隷であろうと王族であろうと、誰しもに平等に接する。

その女将の不文律をママさんが知らない訳がない。

それを承知で彼女は育ての親の教えに背き自分に何かを頼もうとしている。

いったい何を頼むつもりか。

ふと、ピストルを鑑賞していた目が机の引き出しへと向いた。

そして中を開き、その奥から連発式の拳銃を取り出してみた。

回転式弾倉も火縄もない。

無駄のない美しい構造。

弾丸は銃口からではなく、グリップの底から装填しリロードも数秒で終わる。

この近辺では手に入らない代物だが、それゆえ弾も手に入りづらいため実戦で使ったことはないが。

引き出しをしまうと再び、今は鑑賞用でしかないピストル達へと視線を合わせた。

銃口から弾を込め、縄に火を付け引き金を引き発砲する。

縄が湿気るため海上では使い勝手が悪く、一発撃てば棍棒代わりにしかならない。

自身のコートベルトにある銃もそれと同様の形状であった。

相手を圧倒するため連発する事への有利性と、いかなる状況下でも使用できる信頼性への渇望。

古いモノは捨てられ、新しいモノがそれを受け継ぐ。

世代交代という言葉が浮かんだ。

思い直してみると先代女将と話していた頃。

自分はまだ若造であった。

そのためか、女将と一部の熟練ギルドは妙に距離が近かったような気もする。

『大人は違うぜぇ。』

と言った居候の声と当時の視界が船長の脳裏によみがえってくる。

大人達と女将の妙な親密さ。

もしかすると女将も時には大人達のギルドに裏で何かを頼んでいた

のだろうか。

現に冒険者同士が集まる酒場では、いろいろと仕事の依頼が飛び交うことが多い。

それに乗じて小さな依頼を頼むこともあるかもしれない。

もしもそうだとするとなんのことはない。

そういった役目を担うのが自分に回ってきただけなのだ。

そう考えると思い上がった自分が恥ずかしくなり、自嘲の笑みがこぼれてしまっているのだった。

Ｎｏ４　超利益的な経営者

「一度開けた以上、全額返金は無理じゃ。」

あきれたように亭主はウォリアーへため息を吐き出した。

がめつい亭主の口から望んだ返答が聞けるとは思わなかったが、最悪の結果だけは免れたようだ。

二日前、砲主に頼まれ火薬を買いに来たが、火薬の種類を間違えてしまったのだ。

火薬とは用途によって発酵のさせ方や長さが違うらしく、ウォリアーが買ったのは弾丸用ではなく爆薬用の火薬であった。

どおりで渡されたお金が足りなかったと思えば。

ウォリアーは樽に入った火薬を恨めしそうに見下ろした。

「本来ならば全額を返金してやりたいが、湿気の多い船の空気にふれた以上商品の質は下がる。七割までしか返せぬ。」

自分の不手際である以上、不足分は自分で払わなければならずこれで彼が昨夜の酒場稼いだ硬貨がこわされることとなる。

帯から取り出した算盤の玉を弾き、亭主は金額を見せた。

はじき出された価格の意味がわからずとりあえず黙って頷くのだった。

「なんだいこりゃあ？」

亭主が紙とペンを置き、首を傾げながらもとりあえず握る。

「返品となるといろいろと手続きが必要。ここにサインがほしい。」

それを聞きクルクルと回していたペンを止め、亭主の指したところをサインする。

そしてカウンターに顔を近づけると、反対側に立つ亭主の足元に巨大な袋があることに気づいた。

赤い斑点と泥に汚れた白い袋。

「それはなんだい？」

「どれじゃ？」

「それだよ。」

と亭主の足元を顔で指す。

「少し前に売られた戦利品よ。安物ばかりじゃがかなりの量。これでしばらくうちの鍛冶職人達も困らぬわい、ヒッヒッヒ…。」

戦利品と聞き、樹海でアイテム採取に励む冒険者一行の姿が脳裏に浮かぶ。

「じゃがここ最近似たような品ばかりが届いておるのでどうも退屈じゃ・・・。安定するのはいいが。」

そして最近出会ったギルド、『Ｋｉｎｇｄｏｍ』の姿がそれに重なるのだった。

「Ｋｉｎｇｄｏｍの連中か？」

「ほ、なぜわかった？」

「なんとなく。」

「乗船する資金にしたいらしいが…。」

亭主に言われずともそのことを知っていた。

用紙に名前を書き亭主に渡した。

「確かに。では弾丸用の火薬を買うか。」

「いや。上からは返品以外に何も言われてないからさ。このまま帰るぜ。」

少し重くなった財布を手に店を出ようとした時、亭主がこんなことを言い始めた。

「ソチの乗っている船をＫｉｎｇｄｏｍのために使えぬのか？」

「船を？」

「あの片目に頼めぬか？」

「居候の立場じゃ、頼みたくても頼めねえ。」

「そうか。ヒッヒ。確かに居候では買い物一つにも命令を待ち、意見を言うことも許されぬよな。」

亭主の言葉が妙にひっかかった。

まるで今の自分を嘲笑するような嫌味にしか聞こえない。

だがその事実を言い返せるわけもなかった。

亭主はペン先で机をトントンと叩き言葉を続けた。

「いつまで居候を続ける。漠然と身銭を稼ぐ毎日では、我が身を滅ぼすだけじゃぞ。『現状維持では後退するだけ』じゃ。前へ進んではどうじゃ？」

亭主の言葉が昨日まで充実していた彼の日常を砕いていく。

だが前へ進もうとする気にはなれない。

そんな事をしても上手くいく自信が今の彼にはなかった。

「『駄賃』を頼りに生きることも大切じゃが、それに身を沈めるのはソチには勿体ないと思うが。」

「いいよ、俺はこのままで。のんびり強くてでっかいギルドを探すさ。」

「そうか。残念じゃな。」

「何が。」

「ソチの考え方が陳腐なことに。」

「陳腐？」

「小さく若いギルドに入り、自らの力でそれを大きくしようとする勢いはないのか？」

「・・・大きくする力なんてねえよ。」

「そもそもソチ。なぜ海都に来た？目標を忘れるな。」

「目標だと？」

目標は。

そもそも自分が海都に来た理由。

彼自身が望んだことではなかったが、ここへ来た理由は世界樹の迷宮に住む、ある魔物と戦うこと。

亭主の言葉が鏡になり、彼は祖国のこととここへ来た理由を思い出す。

そんな彼を見て何やらニヤニヤと笑みを浮かべている亭主。

ウォリアーは何も言うことなく、足場を牛耳る狸の置物と入口に置かれた猫の置物をよけ、自分の居場所へと戻るのであった。

「ヒッヒッヒ。安物を稼ぐ冒険者はいくらでもおるからの。素質のある者にしっかりと伸びてもらわねば、店もつぶれるわ。」

Ｎｏ５　二人の依頼者

夜の町は暗い。

それはこの海において全ての国で同じことだろう。

真っ暗な海に浮かんだ国。

点々と明かりはあるものの、遠くからみれば無人島と見分けがつかない。

しかし、海都の夜は決して静かではない。

特にここ。

酒場、羽ばたく調停では。

街道からその明かりの中に入っていく者がいた。

そしてその男は酒場の賑わいに加わることなく中央のカウンター席に座るのだった。

「ヨクモいらしてくれたな?」

「ラム以外で頼む。」

「カシこまッタゾ。」

ラムは飲みたくなかった。

日頃から船で嫌というほど飲んでいるのだから。

ママさんは三種類の酒を取り出した。

それをカップの中に注ぎシュガーシロップを入れ軽く振った。

完成したそれを氷の入ったタンブラーグラスに注ぐとグラスにチェリーとレモンスライスを飾った。

片目で、ピンクに近い赤い液体を見つめ、「確かスリングだったか。」と男は言った。

「ご名答ダゾ、船長。」

とママさんは笑った。

船長は少し息を潜め「用件は」と聞いた。

「会ッテほしい連中がイル。」

特に周りを気にすることもなく、ママさんは堂々と言ってのけ、船長は苦笑いを浮かべながら彼女の指す方を見る。

店の隅のテーブルに腰掛けた三人が映った。

カウンターからは離れているも、船長には彼らが異質な存在を放っているように思えた。

それは船長一人だけが感じているのかもしれないが。

三人は数日前に見た顔。

Ｋｉｎｇｄｏｍ一行であった。

正確には一人欠けているが。

気まずい思いの中「会ってどうする。」と聞くと、彼女はここ数日の彼らの様子を語ってくれた。

朝から夕方まで、ひたすら迷宮でアイテムを採取しそれを換金していること。

そして夜は酒場で船をだしてくれる人間を探しているということ。

そしてママさんはこう付け加えるのだった。

「あのファーマーとかいうガキがな。この前ヒドイ目にアッタんだ。」

船長はモグラ達に追いかけられた少年の泣きっ面を思い出た。

「ある二人組がアイツを傷つけチマったんだ。その二人組、迷宮で仲間が行方不明になって自暴自棄にダッタらしくてナ。

ソイツラも常連だったのに私気づいてやれなカッタ。二人の話を聞いてやりゃあアイツラもあんな悪いことをしなかったロウ…。」

その二人組のことを船長は知らなかった。

だが海都では新人を相手に身包みを奪うのは稀にあることであった。
特にママさんが気にする必要もないと思ったが。

「ママさん失格だ、女将さんが見たらなんていうか…。」

ママさんの顔には暗い影がおちていた。

「嫌な気持ちを持っちまうと回りを傷つけちまう。ここはそういう気持ちを消せる憩いの場であってホシい。」

決意を改めるように言う彼女を冷静な片目が見つめていた。

「私でも気づいたコトがあったら助けてヤリテエ。もう二度と同じことは繰り返したくネンンダ。ソコデ頼みだアイツらに船を出してやってホシい。」

「まさかそんな理由で呼び出したのか。」

皮肉な話である。

いくらママさんが知らないとはいえ、彼らをバラバラにした原因を作った一人に船を頼むとは。

「船のことは私チンプンカンプンだ。ソコデ馴染みのアンタの力添えがホシイ。アイツらの話を聞いてやってくれないか。」

「それが頼みか?」

あざ笑うかのような船長の態度に、ママさんは黙ってしまった。

「女将が聞いたら怒るんじゃないか。」

「女将さんも時にはヤッテイタゼ。」

「そうか。」

タンブラーをつかみそれを口へ流し込むと、舌の上に苦いスリングの味が広がった。

「船を出してアイツらを王女様の国に届けてどうする。城から連れ去るのか。童話じゃあるまいしただの若造どもに国の鎖が断ち切れるとでも思っているのか。」

「船長、どうしてあいつらの事知ってイルンダ?」

スリングを飲み干すと、船長はテーブルの上に硬貨を置いた。

「帰らせてもらう。」

船長は席を立ち、堂々と出口の闇へと歩いていく。

「船長!」

呼び止める彼女の声に店内はほんの少しだけ静かになった気がしたが、それもつかの間だった。

気にとめず、彼は店を出て行った。

酒場のプロであろうと世の中のことなどわかっていない。

いくら足掻こうと国には勝てないのだ。

それは船長自身が嫌というほど知っている。

彼は酒場から、夜の闇へと消えていった。

二人目。

ふと薄暗い桟橋を見ると誰かが立っていた。

月夜の光を反射させる装飾付きのコートと、同じく反射する丸いレンズが二つ。

光の輪郭から、相手が港の管理者であることはすぐにわかった。

「やあ、船長。」

波の音に紛れ、ブーツの足音と近づいてくる。

「待っていたんだよ。夜でも出歩くわけにはいかないから、そろそろ引き上げようと思っていたがね。」

船長は港の管理者の笑顔に一礼する。

「申し訳なかった。港を監視する以上、貴方も忙しいでしょう。」

「わかってくれて嬉しいよ。先程まで酒場にいたそうだね。バリス

タ君から聞いているよ。」

バリスタと聞き、数日前から妙に不機嫌だった砲主兼航海士の顔が浮かんだ。

粗相をしないでくれていればいいが。

「酒場に呼ばれまして。」

「ほう。君も海都では一目置かれる存在だからな。信頼されているんだろう。どんな用件だった？」

「いえ。大した事では。」

「気になるな。」

「そうですか？」

「特にさっきからの君の表情が。」

片目を照らすのは月夜だけであったが管理者は見逃さなかった。

「大した用件でなかったとその表情で言われても説得力がないよ。」

思い悩んだ表情を浮かべていた船長は少しの間沈黙し、話しを続けた。

「とある若輩ギルドに船を出してやってくれと頼まれまして…。」

と言った途端、管理者はまるでそれが狙いであったかのように「Ｋｉｎｇｄｏｍ君かね？」と目を見開き、「で、どうしたのかね？」と催促する。

「リーダーが祖国に連れて行かれたらしく、そいつを取り返すため船を探していると。」

船長は苦々しく続けた。

「しかしリーダーの祖国は遥か北の大陸。そこへ向かう船は少なく、そして海賊達が横行しているため普通の船では出港できない。といったところかな。」

言ったのは船長ではなく管理者である。

沈黙する無表情な片目に管理者は種明かしを始めるのだった。

「私も彼らのリーダーが連れ戻されたのは知っている。どういう事情があるか知らないが、残されたメンバーが連れ戻そうとしているのならば、『連れ戻された』というより『誘拐された』という方が正しいかもしれない。」

「貴方もＫｉｎｇｄｏｍを戻ってきてほしいと？それで俺を探していたのですね。」

「そうとも」と肯定される前から船長は確信していた。

「私だけじゃないさ。ギルド長にも頼まれていてね。ここ最近、質も意欲もない冒険者が溢れ始めている。ここで有望な若手に解散してほしくないらしく、彼らの船を探してくれないかと言われたんだ。」

あのギルド長までがＫｉｎｇｄｏｍに肩入れするとは。

どうも話が上手すぎる気がしたが管理者が嘘を言うような人間でないことは知っていた。

事実、それは嘘ではないのだ。

「さて改めて頼もう。Ｋｉｎｇｄｏｍ君に船を出してやってくれないかな。」

「お言葉ですが…。」

「これは君にしかできない仕事だ。」

管理者の声が、波の音をかき消した。

「客人を海賊から守り彼らの望む大陸まで連れていく。そういう仕事は君が適任だ。それに我々のような薄汚れた人間達の職場はそこにあるとは思わないかね。船乗りとしても、海賊としても。まぁ、プライベーティア（国家公認海賊）であった君と私では格が違うがね。」

『自分の役割。』

自分が彼女に教えたつもりの言葉だった。

それをまさかこの場で突きつけられるとは。

「君ならやってくれると期待しているよ。」

一礼する船長を通りすぎ、振り返ることなくその場を去った。

管理者はＫｉｎｇｄｏｍの復活が元老院の希望でもあることを伝えなかった。

そんなことを伝えてしまえば政治に蹂躙された過去を持つ船長が快く思えるわけがないと判断したからだろう。

だが同時に彼自身がＫｉｎｇｄｏｍに戻ってくるチャンスを与えたかったのかもしれない。

活路を開けるのは船長以外におらず、彼が引き受けなければＫｉｎｇｄｏｍは終わったも当然。

数日前。

鬼のような形相で出港を妨害したシノビを止めたのは、管理者自身であった。

掟を遵守するではあったが、そのために有望な若者達を妨げたことに葛藤していたと捉えることもできるかもしれない。

Ｎｏ６　酒場の三人

管理者と別れ、悶々とした気分で船に戻ろうとすると居候がコチラに向かって歩いてくるのが見えた。

「仕事か？」

「ですけど。」

「早くないか。」

「ちょっと会いに行きたい連中がいるんで。」

とウォリアーの答えを待たず、船長は懐から一枚硬貨を取り出した。

「駄賃をやるから仕事が終わったらあいつらに言伝てにいけ。」

「アイアイサー。」

と間の抜けたような声で返すボーイに「誰のことかわかっているか。」と確認する。

「おチビとファラ子とツンツン頭でしょ。夜は酒場にいるらしいんで場所もわかります。」

「どうした？」

ウォリアーはもらった駄賃を船長に返した。

「余計に歩くわけでもないんで駄賃はけっこうです。」

「なんだ突然?」

不気味に思いながら船長は伝言を託した。

それを聞いた、ウォリアーは少し驚いた顔をしたと思うと、突如笑みを浮かべるのだった。

「ヒヨッコも連れていっていいっすか?」

「それはできないな。」

重々しい口調で、懐かしい顔の船乗りは言った。

「助けたいのはやまやまだが、下請けの身分で勝手に航路を変えるわけにはいかない。それに最近西の大陸から流れた海賊船が北の海域を荒らし回っている。」

彼らが操る船がただの交易船であることは、ここへ来るために乗船していたファランクス自身が知っていた。

そんな船が海賊船に襲われればひとたまりもないだろう。

頭を下げる交易船のリーダーにそれ以上頼めるわけがなく、彼女は二人が待つ席へと戻っていく。

冷水の入ったグラスが三つ並んだ隅の席。

そこに腰かける二人へ、船乗りの返答を告げる。

彼女の表情から察していたのか、あるいは日々の披露がたまっているためなのか、返答が否であったことを告げても、二人が今以上に表情を崩すことはなかった。

これで何度目だろうか。

パイレーツとファランクスを乗せた船ならば、救いの手を差し伸べてくれるかと思ったが、あまい期待はつかの間の希望でしかなかった。

不意にファランクスの腹の虫がなる。

頬を赤らめ恥じるように「すまない」と謝る彼女に「何か頼みましょうか」とファーマーがメニューを開く。

だが彼女は首を横にふり、「少しでも節約しましょう」と中身を見ないように目を背け、大きな絵本のようなメニューを閉じる。

心配する彼ら二人に「今はそんなにお腹もへらない」とワンピース姿の彼女は笑ってみせた。

傷物とはいえ、重金属の鎧は融してしまえば再利用ができるため高

く売れる。

ここ数日間で一番大きな収入が彼女の売った鎧であった。

昼は迷宮の浅い地点でアイテムを集め換金し、夜はこうして酒場に集まる船乗り達を見つけては船を頼む。

その繰り返しの日々が続いていた。

そしてその様子を遠く離れたカウンターから酒場のママさんはずっと見ていた。

毎日同じ席に座り、酒は頼まず、まれに比較的安い料理を頼むことも。

日に日に空気が沈んでいく隅の席を思うと、ママさんはため息が出てしまう。

そんな思いから長年の顔馴染みである船長に頼んでみたが、結果は今の三人の様
子が物語っている。

どうしたママさん？

と目の前のカウンター席で一人飲みしていた客が口を開いた。

我に返り「今夜は客が少なくて淋しいと思って」と笑ってごまかしママさんは店内を見回した。

危うく自分の役目を忘れてしまうところだった。

ここは迷宮の危険を忘れられる憩いの酒場である。

その中心に立つ以上、お客に不安な顔など見せてはならない。

先代からの基本の教えを忘れかけていたことに気づき、ママさんはいつもどうり鼻歌を歌い、そして再び店内の様子を見回した。

視線を手元に戻したその時。

妙な音が聞こえ始めた。

ペチ、ペチ、ペチ、ペチと。

固い地面に柔らかいモノがあたる音。

いつの間にかそのような音が、客達の談笑に紛れ店内に響いていたのだ。

やがてその音が止み、店内を見回してみた。

すると例の三人に目が止まった。

いつの間にか少年の頭の上に乗る魔物と、その席に近づく見慣れたアルバイトの青年が映った。

「キュ―！」

一匹のモグラがファーマーの足にしがみつき、一気に膝から背中をよじ上った。

そして帽子の上で正座する。

「モ、モグラさん…？」

「よう。やっぱり好かれているなおチビ。それと久しぶりだな、ファラ子とツンツン頭。」

「ファ、ファラ子って呼ぶな！」

「お、おチビじゃないです！」

「はっは、元気になってくれてよかったぜ、特にファラ子。」

「う、うるさい…。」

訂正を求める二人とは対照的にシノビは彼を迎えいれるようにイスをずらす。

「拙者もお主に会いかったところだ。」というシノビにファーマーとファランクスは目を丸くする。

一見水と油のような性格の二人であり、そして自身のことをツンツン頭と命名する相手に対しずいぶんと友好的である。

「『会いたかった』なんて嬉しいけど俺の要件から言わせてくれ。お前ら船を探しているんだろ？」

「いかにも。」

「うちの船長から伝言だ。」

船長と聞き、ファランクスの目がいっそう鋭くなるが、ウォリアーは気付かない様子で続けた。

「船を出してやるってさ。」

その言葉にテーブルが揺れた。

「気が向いたらいつでも船に来いってよ。」

「そうか。」

と冷静さを取り戻したシノビが漏らした。

「お前の要件は？」と聞き返されるとシノビは首を横に振り「忘れてくれ、さしたる用ではない。」と告げた。

まさか自分から頼もうとしたことを先に言われるとは思わなかっただろう。

「だ、誰が海賊の船に乗るか！」

「俺は海賊じゃねえよ。」

「姫様をおとした張本人だぞ！」

「で…でもファランクスさん！」

「頼るべきであろう。」

「ふ、二人とも！」

「ここ数日。北まで船を出してくれる船を探すが手応えがなかったのは事実。そして今し方船乗り達の返答、海賊船が横行していると言っておったではないか。海賊船に立ち向かえるのは本物の海賊だけであろう。」

「そ、そうか。」

冷静な判断力にファランクスに返せる言葉はなかった。

「そ、そうですよ！急がないと王女様がお嫁にいって、連れ戻せなくなるかもしれませんよ！」

「そ、そうだな・・・。」

モグラをのせた少年の言葉に返せる言葉はなかった。

「キューキキキキュー！キュルルル、キュー！」

「・・・。」

モグラの熱弁に返せる言葉はなかった。

「いや、なんて言っているかわからない。」

そうですか。

「今から行ってもかまわぬか？」

「いいと思うぜ。」

「ぼ、僕、準備をします！」

「・・・私も。」

会話は一切聞こえなかったが。

三人の駆け出す姿と、その表情から。

ママさんは心の中で船長に感謝しているのだった。

Ｎｏ７　それぞれの決意

荷物をまとめ部屋を出る準備が整った。

もうここに用はない。

そしてこれからしばらくの間、この宿屋に泊まることはないだろう。

三人一部屋での共同生活に終わりを告げ、彼らを待つのは船での生活。

「準備はいいか。」

とシノビが聞くと「はい！」と元気よくファーマーが答えそれに続き「キュー！」とモグラが鳴いた。

「お主はあの船の乗組員であろう・・・。」

「キュー。キュキキキュ。」

とモグラは頭をボリボリとかいている。

「『あ～。そうでした』って言っていますよ。たぶん」

「はは、そうか。」

シノビは一人と一匹を見下ろし、そしてファランクスを見るのだった。

海賊の船に乗ることにそれほど戸惑いを感じているのだろうか。

この宿へ来る時も荷造りをする時も。

ファランクスの動きが鈍いことを見逃さなかった。

「ファランクス。」

「ファランクスさん？」

「キュルンルル？」

「…。」

「海賊船に乗るのは嫌か？」

「そんなことは関係ない。私は姫様を連れ戻せるなら、いくらでも乗ってやるさ。」

「ではなぜそのような顔をしている？」

「・・・。」

彼女は思いつめた表情を浮かべ、やがて口を開いた。

「あの時の二人の言葉、信じていいよね。」

三人での生活が始まる前日。
この部屋で三人は決意したのだった。

『今までありがとう、今日でＫｉｎｇｄｏｍは解散だ。』

『解散…。』

『キュ・・・。』

ファーマーが今にも泣き出しそうな表情を浮かべ、モグラが心配そうに彼の顔を見上げていた。

『…ちょっと。』

『バリスタさん。あなたのおかげで海都まで無事に来ることができました。感謝しています。』

『姉御のおかげ?』

『…。』

『シノビ、君には―。』

『すまぬが、二人は席を外してくれるか。これは拙者達の問題だ。』

『だそうだ。出ようぜ姉御。』

シノビはバリスタとウォリアーを退室させ、そして彼女を睨んだ。

『なぜ笑っている。』

と苛立ったように虚ろな笑みに問うのだった。

『これでよかった。』

『よかっただと？』

『‘乳臭い護衛’の私に姫様は守れない。皇国に連れ戻されたなら姫様の身も安全だろう。私の役目は終わった。』

安心しているんだ、と彼女は笑った。

『これからどうするつもりだ。』

『皇国からの命令が来るまで、私には何もできない。何もせずここにいるさ。』

そうか、とシノビは頷きこう言うのだった。

『拙者は連れ戻すぞ。』

『なんだと。』

『あ奴を連れ戻し、ギルドを続行させる。』

耳を疑うファランクス。

『シノビさん…。』

『もうＫｉｎｇｄｏｍは終わったんだ。二人の実力なら他のギルドでも雇い先があるだろう。なぜそんなことを言い出す。』

『約束を破るわけにはいかぬからな。』

『約束？』

『あ奴との約束を。』

海都に来た理由は複雑だ。

だが私の、いや、Ｋｉｎｇｄｏｍの目的は世界樹の迷宮を制覇すること。それに嘘はない。

迷宮制覇のため、Ｋｉｎｇｄｏｍにこれまで以上の苦難が待ち受けていると思う。

だからシノビ、その時はそなたの力をかしてほしい。

それは迷宮の地下三階にて。

ガザミの襲撃前にシノビと王女の会話であった。

『自らの出生を偽っていたが、迷宮制覇が目的ということに嘘はないと言った。そして拙者はそれに力をかすと約束した。』

『嘘も何も。姫様が連れ戻された以上、それももう終わりだ。』

『置き手紙一つない事をみると、奴の意思に反し連れ戻されたのではないか。まぁ、結論が出る前から物事を決めるのは愚の骨頂、本当のことは当人に聞かねばわからぬのだ。直接会って聞けばよい。』

『またその言葉か。』

一度はその言葉に救われたファランクスだったが、今は煩わしいとしか思えなかった。

『僕、シノビさんに賛成です！』

そこへファーマーまでもが彼女へもの申し始めるのだった。

『ファーマー君まで。…君は自分で商売するのが目的だろう？』

『そ、そうですけど。』

『ここにいる必要はないよ。』

突き放すような言葉に、とうとうファーマーの瞳から涙がこぼれる。

『そういえばお主、‘今は違う’と言っておったな。』

ファーマーのまん丸い帽子に手をのせ、シノビが優しい声で語った。

『たしか夢遊病の王女を探し出した時。海都へ来た理由は商売が目的だったが、今は違うと申したではないか。』

『そうです！』

それに勇気づけられたようにファーマーは涙を拭った。

『僕は、冒険者さん達に…、皆さんに憧れたんです！』

『憧れ？』

『ほう。』

『ファランクスさんの言うとおり、初めはここでお金をためていつか自分で商売を始めるつもりでした！だけど、それも大切だけど、皆さんと一緒に冒険したい！お側で皆さんの活躍を見て、もっとお手伝いしたいんです！』

『憧れたなんて…。私はただの駄目な護衛だよ。』

嘲るように微笑を浮かべる彼女だったが、ファーマーは怯まない。

『僕、ファランクスさんの槍を持ちました！重かったです！すっご

く重かったです！駄目な人があんなモノを持てるわけありません！
僕はシノビさんと一緒に王女様を連れ戻して、Ｋｉｎｇｄｏｍを元通りにします！そこで僕が毎日ご飯を作ってお世話をします！』

『キューキュー！』

真っ赤な顔で語る少年と、それを支えるモグラのエール。

『頼もしいな。』

『王女様は、皇国っていうお国の都合で連れ戻されたんですよ！きっとまだ冒険したかったに決まっています！』

『そうだとしても国から連れ戻すなんて。・・・できっこないよ』

『結論が出る前に物事を決めるのは骨頂の具です！』

『それを言うなら愚の骨頂・・・。』

『僕は…尊敬する皆さんの冒険をお手伝いするため！王女様を連れ戻します！』

『拙者は、あ奴の迷宮制覇を手助けするため。』

二人の決意にファランクスはただ黙っていたのだった。

「信じていいんだよね？」

と不安気な声を出すファランクス。

心は鎧のように強固ではない。

最も長く王女と生きてきた彼女なら、これからのことが不安になるのは当然だろう。

はたして自分の大切な人を連れ戻せるか。

そして連れ戻したとして、これからその人を守りぬくことができるだろうか。

そんな彼女を後押しするように、二人は頷くのだった。

「ありがとう。二人のおかげだよ。」

「それと、ウォリアーのおかげだ。」

「ですね。」

悪戯っぽく笑う二人に、ファランクスは赤面した。

『おい、こら！逃げるなモグ吉！帰るぞ！』

足をわしづかみ、ウォリアーはベッドの下からモグラを引きずり出した。

それを肩に担ぐと『モグ助が心配しているぞ。』と一喝する。

『モグラさん・・・。』

モグラはファーマーに助けを求めるように鳴き声を上げ続けていた。

Ｋｉｎｇｄｏｍ一行の前に立つのは退室したはずのウォリアー。

モグラを連れ戻すため、この部屋に戻ってきたのだ。

『悪いがコイツは連れて帰るぜ。おチビ?』

『お、おチビじゃありません!』

眼下で怒る少年にウォリアーは少し笑みを浮かべた。

『そうだな。チビのくせに格好いいこと言うからな。ただのおチビじゃねえかもな。』

『え?』

『憧れた人について行きたいって?』

『聞いていたんですか。』

『聞いていたもなにも・・・。』

かなり前から部屋に入ろうとしていたが、ドア越しに聞こえる三人の会話に入るタイミングを待っていた、とウォリアーは告げた。

『は、恥ずかしいです。』

『恥ずかしがることねえよ。むしろ・・・』

ウォリアーは覇気のないファランクスを見つめた。

『ファラ子って悲観的だな?』

『・・・ファラ子って呼ぶな。』

弱々しい反応に、ウォリアーは不満げなしぐさを見せる。

『自分のことを駄目とか、国から連れ戻せないとか、私の役目は終わったとか・・・。おチビとツンツン頭が必死で励ましているのによぉ。』

『・・・。』

黙る彼女にウォリアーはため息を漏らし、『邪魔したな』と部屋を出ようとする。

そして部屋を出る直前、彼はこう言ったのだ。

『お前はどうしたいの?』

その言葉が誰に向けられたものか、ファランクス以外にはすぐにわかった。

『首突っ込んで悪いけどさ。ファラ子は‘役目’とか、‘無理だ’とか口にしてさ。気持ちを全然話さないよな。』

『気持ち？』

『お前が一番姫さんと一緒にいたいだろうにさぁ。どうしてその事を言わねえのかなって・・・。』

『そ、そうですよ！ファランクスさんはどうしたいんですか！』

『私？』

『意外と薄情だな。姫さんと会えなくてもいいんだろうぜ。』

『そんなわけ―！』

突如声を荒らげた。

『そんなわけ・・・。』

それに一番驚いたのは彼女自身だった。

『私は・・・。』

皆が皆、次の言葉を祈るように待っていた。

『私は、姫様と一緒にいたい。』

何か間違ったことを口にしているように、彼女は言ったのだ。

『今まで。

ずっと一緒だったんだもん…。姫様は祖国も家族もいなくなって一人ぼっちなのに…。頑張る姫様を支えて上げたい・・・。』

俯き、そして言葉が長くなるほど、彼女の声が震えていく。

『姫様と一緒にいたいよぉ…！』

その言葉と共に、声をつまらせ大粒の涙を流し始めるのだった。

『また一緒にお話しして、一緒におやつを食べて・・・、勉強して…、遊んで…、一緒におやつ食べて…、』

（今、おやつについて二回言わなかったか？）

（問うな。）

（シーッです！）

「ファランクスさんは、王女様と一緒にいるために皇国へ行くんですね。」

「ああ。」

「ウォリアーがいてくれてよかった。でなければお主の決意を聞けなかっただろう。」

「別に、アイツのおかげじゃないからな・・・。」

「とにもかくにも。お主が賛同してくれてよかった。王女を連れ戻してもお主が欠ければ意味がない。」

「え？」

「ファランクスさんだって、Ｋｉｎｇｄｏｍの一員ですからね！」

「キキュー！」

「あ、ありがとう。なんか、すごく、嬉しいなぁ。」

三人は廊下をぬけ、宿のカウンターへと向かう。

ベルを鳴らすと下働きの少年がやって来た。

「Ｋｉｎｇｄｏｍの皆さん？」

「宿賃を精算したい。」

「お船が見つかったんですか！」

「エヘヘ、おかげさまで！」

「お、おめでとうございます！」

笑うファーマーを前に、少年はいつにもまして笑顔を輝かせた。

「宿代は少しサービスさせていただきます！」

「そんな、いいんですか？」

「そのかわり海都に戻ってきても当宿屋をよろしくお願いします！」

「ほぅ。商売上手だな。」

少年の笑顔に見送られ、三人は宿屋を後にした。

それぞれの決意を胸に。

それからしばらく後に、再びウォリアーの助けをかりることになるとは誰も思ってもいないだろう。

Ｎｏ８　キャスト・オフ

薄暗い船室で白い布袋が揺れている。

天井からぶら下げられたそれらは、船体に波がぶつかる度にユラユラと揺れる。

ここは王女が船長につられて通った一室であった。

その中に一人の女がいた。

布袋の合間にひかれたハンモックの上で、真っ暗な天井を見上げている赤毛の女。

バリスタであった。

眠りに落ちるのを待つわけでもなく、ただ一人でいたいがためこうしていた。

船長がいない時には甲板に出て武器の手入れを行うが、そうでなければここでこうしている。

それがＫｉｎｇｄｏｍと別れた後の日常であった。

整理のつかない頭をかかえ、彼女は寝返りをうった。

長年仕えた経験から船長なら青い後輩に厳しい指導をくわえると予

想してはいた。

それが正しいことは彼女もわかっていた。

たが、目的が正当であろうとあの暴挙だけは許せない。

なぜなら船から落とされ大海原に飲み込まれる恐怖は、彼女が一番よく知っていた。

昔‐この船の乗組員になる前まで‐彼女はとある船で鎖につながれ海に落とされる恐怖に怯える毎日を生き抜いてきたのだ。

Ｋｉｎｇｄｏｍ達の前ではなんとか平静を装ったが、樽の中に入れられ海に落とされるなど、想像しただけで鳥肌がたってしまう。

だから船長を許すことができない。

だが許せないと同時に、憎むこともできなかった。

その生活から救い出してくれたのも船長だったのだから。

だが憤る理由は暴挙だけでない。

自分達のせいで、後輩が海都を去ったということと、それに一切の力添えもできない自分への怒りもあったのだ。

整理のつかない気持ちにイライラし、再び寝返りをうった時だった。

「バリスタ。」

と、ビーストキングの声が聞こえた。
顔を上げると、彼は船長室に来るようにと告げた。
「何の用？」
と彼女の不満げな声に「船長命令だ。」と命令が下る。
「頭が痛いから無理。」
「掟を忘れたのか。『出港は乗組員全員で決定する。』」
出港。
なぜか、その言葉が突き刺さった。
「…出港って。」
「あの子達が来た。」
ガラス張りの船尾の壁と入口側の壁には観賞用の銃が並ぶ。
じゅうたんの敷かれた床と、机の上には海図や航海道具一式が置かれている。
ここは船長室であった。
Ｋｉｎｇｄｏｍの三人はここに招かれ、乗組員が集まるのを待たされていた。

そして彼らの前に立ったのは、キャビンボーイ、砲手兼航海士、甲板長、そしてこの船の船長であった。

ちなみにモグラ四匹もいらっしゃいます。

しばらく会話が続きＫｉｎｇｄｏｍの依頼を船員達が聞くと、船長が口を開いた。

「お前さん達の決意は聞かせてもらった。だがその前にコチラの要望を聞いてほしい。」

船長は乗組員へと振り返るとこう口にした。

伸びた手は三つ。

バリスタとウォリアー、そしてヒヨッコモグラである。

対して静止するのはビーストキングとモグラ三匹。

三対四であった。

モグラにも投票権があるのには驚いたものだ。

「そうか。俺の投票権を入れても四対四。乗組員がそう言う以上、船を出してやるとは言ったがそれは難しいな。」

「え？」

声を上げたのはバリスタであった。

まさか船長が賛成とは。

いやそれ以前に、Ｋｉｎｇｄｏｍがここにいるのは船長からの誘いであったともうかがえた。

Ｋｉｎｇｄｏｍに悪い気がしてしまうが、この場で彼女は胸中が楽になっているのを感じたのだった。

一方でビーストキングが反対なのは気がかりだったが。

「お前さん達を客として扱い、俺達に給料を払うなら話は別だ。」

一度は落胆したＫｉｎｇｄｏｍであったが、再び顔を上げた。

資金なら蓄えがある。

毅然と所持金を伝えるが。

「ふぅん。一人当たり五百と考えると足りない。」

返ってきた言葉に、三人の表情は暗くなった。

ここ数日、昼夕を問わず稼いだ資金だったが、あと一歩及ばない。

だがここで引き下がるわけにはいかない。

一刻も早く王女を連れ戻さなければ、彼女の血統は奪われてしまうかもしれないのだ。

「あの！」

ファーマーはイスに座った船長を見上げこう叫んだ。

「僕…、おチビだから、乗船料を…、…半額…。にして…。」

「…なんだそりゃ？」

いただけないかな…。

最後のセリフは誰にも聞き取れないほどに小さかった。

「おチビ…。」

言葉はともかく彼の姿勢と、焦りが伝わる。

「…ダメでしょうか。」

「ダメだ。」

「…はい。」

「キュッ、キュッ、キュッ、キュッ…。」

赤面する彼に、モグラ三匹が笑い声をあげる。

思わず怒鳴りつけようとしたウォリアーだったが、それより早くヒヨッコモグラが「キュッ！」っと一喝。

モグラ三匹が黙った。

「どうしても、お願い…できませんか？」

少しぎこちなくファランクスが言う。

「お願いします。」

海賊を嫌い、そして船長を憎んですらいるであろう彼女が頭を下げた。

「ファラ子・・・。」

「・・・。」

ファラ子と呼ぶがいつもの返答がなかった。

「お頼み申す。」

そしてシノビが頭を下げる。

「難ならば乗組員として働きます故。」

「シノビさん・・・。」

「シノビ。」

彼は床に手をついた。

「ツンツン頭…。」

「そんなに、あの娘が大事なの？」

「『迷宮であろうと深海であろうとついてゆき力をかす』と約束致しました。そして。」

バリスタの言葉に一度は頭を上げたが、彼は再び平伏する。

「謝りたいのです。」

と床に向かって呟いたのだった。

その言葉の意味がビーストキング以外にはわからなかったろう。

『駄々をこねる者を守れない』とシノビが彼女を殴ったことを。

「顔を上げてくれ。金は俺達の労賃もあるが、万一海賊と戦う時の兵力を揃えるためなんだ。」

シノビに続いて二人も平伏していたが、プロの言葉に心が折れてしまった。

金はあくまでＫｉｎｇｄｏｍのためを思って要求されたもの。

どうやら感情で訴えられるもではなかったようだ。

「兵力って、海賊なら私達だけで戦えるでしょう?」

「俺達だけじゃ、コイツらの命まで保証できないだろ。」

「でも-。」

「相手がどれ程の規模なのかはわからない。万一太刀打ちできなければどうするつもりだ。」

とビーストキングの冷静な分析に、バリスタも返せる言葉がない。

三人からみれば彼女は立派な大人だが、船の中ではまだまだ未熟者である。

「お前ら、顔を上げろって。」

見かねたウォリアーが三人へと歩み寄る。

ここまでの道のりを意気高揚としていたＫｉｎｇｄｏｍ。

その姿を近くでみていたが、今はその面影すら無かった。

（コイツら・・・。）

どう声をかければいいのかわからなかった。

（お前らは、よくやった。）

違う。

そんな言葉ではだめだ、と彼の本能が告げる。

（・・・。）

言葉で救えるわけがない。

どうしようもなく思ったその時。

「キュ・・・。」

後ろでヒヨッコが鳴いた。

ヒヨッコも悲しんでいる。

よほどＫｉｎｇｄｏｍのことが好きなのだろうか。

彼をＫｉｎｇｄｏｍから連れ戻そうとした時も逃げ回り、今日の再開までずっと覇気の無い表情（？）を浮かべていたのだ。

それが一転、酒場までの道中でも妙に張り切っていた。

いや嬉しかったのはモグラだけではない。

ウォリアー自身も彼らに会うのが楽しみだった。

そのためにほんの少し早く出勤し、酒場での仕事の直前に店にいる彼らと話していたのだから。

ふと。

ウォリアーの頭にある考えが浮かんだ。

これは好都合だと。

「俺が出すぜ。」

「何？」

「俺が金を出す。」

「坊や？」

予想外の言葉に一同が沈黙する。

「俺もコイツら、いやＫｉｎｇｄｏｍの乗船料を払う。」

「ウォリアーさん？」

「お前の財布じゃ、乗船料は足りない。」

「あ、そうか。」

予想外の呆気なさに一同が沈黙する。

だがウォリアーは引き下がらない。

「じゃあ。俺がコイツらの面倒をみて船で働かせる。いざ海賊と戦うことになったら…。」

ウォリアーは三人の目を見、そして。

「一緒に戦わせる。」

と楽しげに言った。

「人を探すにしたって、船乗りならともかく海賊船と戦う度胸のあ

る奴なんざ、すぐには見つからないだろう。時間が経てば姫さんを連れ戻せないかもしれないぜ。なら手っ取り早くコイツらを働かせて、一緒に戦わせた方がいいでしょ。無駄な人件費と時間を減らせますぜ。」

船長は居候の言葉に初めて納得させられた。

「そうよ。この子達毒トカゲを倒せるんだから。」

そこへバリスタの援護射撃が加わる。

「迷宮と船上は違うぞ。バリスタ。」

「でも命かける気持ちはあるぜ。」

ビーストキングの冷静な分析に、ウォリアーは立ち向かう。

「本当に命を落とすかもしれないぞ?」

「兄貴ぃ。やってみなきゃわかんないでしょ。それにそのときゃ、そのときだ。」

「・・・。」

「お前らだってそれくらいの覚悟はあるだろ。」

頷く三人に支えられウォリアーは続けた。

「コイツらも姫さんを連れ戻したら船の一隻や二隻を買うだろ?今のうちに船のことを勉強させれば、きっと将来有望なギルドになる

ぜ。」

「この子達には早すぎる。」

「『現状維持では後退するだけ』だぜ？兄貴。」

「・・・！」

それは半日前に学んだ付け焼刃の言葉だったが、その内容と頭が少々足りないウォリアーから聞こえたということに、ビーストキングは黙ってしまった。

「挑戦させてみりゃいいじゃねえすか。」

「なるほど。」

その隣で船長は改めて三人を見た。

闇夜の足音に感づく冷静沈着なシノビ。

多少感情的になるものの腕力と体力に秀でたファランクス。

一見戦う才能は無いが、魔物相手に和気藹々（？）できるファーマー。

「たしかにな。」

ビーストキングに目を合わせると、彼はゆっくりと頷いた。

（行けるか。）

と思ったが、ウォリアーの話はまだ続くようだ。

「ただし、条件がある。」

「まだあるのか。」

「船長達じゃなくてＫｉｎｇｄｏｍ達にな。」

「私達に…？」

「そうだ。」

今度は三人がウォリアーを見た。

「もし姫さんを連れ戻して迷宮に挑むなら・・・。俺を仲間にしてくれ。」

「はぁ？」

「ウォリアーさん・・・。」

「・・・。」

「モグラ達に好かれるほど優しいおチビ…、いやファーマー。」

「は、はい！ファーマーです！」

（確かに・・・。力は無いが才能は随一。）

モグラを頭にのせた姿を思い出すビーストキング。

「まっさきに姫さんを救おうとする義理堅〜いシノビ。」

「…。」

「漢だぜぇ。」

「まあね。」

シノビを見つめていたバリスタが合いの手をいれる。

「んで。自分の気持ちを押し殺すぐらいにくそ真面目なファラ子だろ？」

「ファ、ファラ子ってよぶな！」

（相性ピッタリだな。）

船長も納得。

「最強のギルドだと思うぜ。お前達となら上手くやれそうな気がしてしてさ。船長。俺はＫｉｎｇｄｏｍと一緒に迷宮に挑みたい。だから姫さん救出を手助けしたい。」

悪戯っぽく笑う彼は、内心でネイピア商会の亭主に感謝していた。

彼女から教わった言葉と、それに基づく行動がこの場を作り上げた

のだ。

「そんな下心があったのか。」

笑いながら言う船長に「厄介払いができるわね。」とバリスタが続く。

「ま、まだ仲間と決まったわけじゃありません！みんなの意見は？」

「御意。」

「賛成です。」

「ほら。二人もこう言って…。……。って賛成なのぉ？（裏声）」

「ウォリアーさん、悪い人じゃなさそうだし。」

「あ奴の力があればギルドの火力も増すであろう。ソナタとの相性もよさそうだ。」

「私は反対だ！だいたい姫様の意見を聞かなくて勝手に仲間を増やすなど・・・！」

「じゃあ、姫さん連れ戻して聞こうぜ。」

「え？」

悪い予感のするファランクス。

王女に会いたい思いもあるが、目の前の男を王女に会わせたくなか

った。

特にこれといった理由はないのだが。

「今のところファーマーとシノビが賛成でファラ子が反対。二対一か。これに姫さんが賛成なら仲間入りだな。」

「左様。」

「ですね。」

先ほどまでの暗い表情はどこへやら、妙に楽しそうな二人である。

「ちょ、ちょっと・・・！」

「決定だな。」

「私は嫌だ！」

「なんでだよファラ子？俺のこと嫌い？」

「そういうところが嫌いだ！」

「えぇ？どういうところが？」

ギャーギャーとわめく彼女を無視し、話は進む。

「ボーイ。あいつらの面倒をみきれるか。」

「やってみせます。」

「まぁ、お前さん達のそんな大した仕事を任せる気になんてないがな。」

「では、船を出していただけるか？」

シノビからの期待の言葉に船長は船員達を見て言った。

「改めて多数決だ。北まで船を出す。条件は客を適度に働かせ、戦闘時には参加させる。そして命を保証する必要はない。賛成者は手を上げろ。」

結果を見た船長は席を立ち、シノビとファーマー、ケンカするほど仲良し二人を通り過ぎ、部屋を出ていった。

甲板から空を見上げると雲一つ無い月夜が広がった。

肌寒い程度の風が吹くが、熱のこもった部屋から出ると凍てつく吹雪に思えた。

船長は帽子をぬぎ、それを自分の胸に押しつけこう呟くのだった。

『悔い改めはその場だけ

悔い改めはその場だけ

誓いの言葉はもう忘れた

航海ばかりしている俺は

誓いなんて覚えていない

こんな哀れな船乗りを

殺してやってもかまいません

しかしどうか下っ端どもは

苦しみからお救い下さい。』

言い終わると船長は帽子をかぶり直した。

すると背後から砲手兼航海士と甲板長、そしてモグラ達の足音が聞こえてくるのだった。

船長は振り返ることなく、息を整えこう叫んだ。

『キャスト・オフ』

その言葉を合図に全ての横帆が下ろされ、白いマストが夜の港に現れた。

甲板長はモグラ達に下知をとばし、砲手は網目のロープをつたいマストを上り始めた。

そして、船底の階段から大量に出現した黄色い眼。

「あれは・・・。」

「キュー！！」

と約四十匹のモグラが一斉に鳴き声を上げる。

「ペナントラインを引け！風上のブレースとシートを緩めろ！ロープを操作して帆桁の向きを変えろ！針路を北に！船首を風下に合わせろぉ！」

モグラ達が地上でロープを引く姿に息をのむファーマー。

「アイツら小さいが力は人間以上だ。それに重たくねえから船のスピードも落ちないんだとさ。」

「そうなんですか。」

もしも彼らが一斉にファーマーを追いかけたらどうなることやら。

「おい、ファラ子。姉御の監視がすんだら、しっかりと方位を伝えてくれよ。」

「ああ、わかった・・・。（ファラ子って言うな。っていうか姫様を連れ戻してもお前は絶対仲間にしないぞ）。」

心の声はさておき。

ファランクスしか王女の居場所を知らず、この船の進路は彼女と航

海士によって決められるであろう。

「おう。そうだ。しばらく俺がお前達の指導をするからよろしく頼むぜ。」

「そうだな。拙者達も働かねば。」

「まぁ船の仕事なんて遠洋にでればかなり落ちつくけどな。」

そこへ、上へ下へと命令を叫んだ船長が部屋から出て来た四人へと振り返った。

「野郎ども、錨を上げな。」

そう言うと、帽子を取らずニヤリと笑ったのだった。

ひとやすみ『メーカー・カスメの滑らない話編』（前書き）

これなら『ＡＴＲＵＳ』さんも、日向さんも怒らない・・・はず。

ひとやすみ『メーカー・カスメの滑らない話編』

アーマンの宿の一室にて。

レギュラー五人は円卓の机に腰かけ、今回のゲストの登場を待っていた。

「メーカー・カスメじゃなくて正式な名前はカースメーカーというようですね…。」

「…カースメーカーとは、幾多の呪言を放ちその呪言を聞くと屈強な男であろうとも、膝をつくという。
中でも『畏れよ我を』と総称される呪言は、魔物すらも恐怖に陥れる。今日はその呪言の力が如何なものかを検証すべく、拙者達は集められたのだ。」

「シノビ！そういう詳しい説明は主役の私が行うものであろう！」

「もしもさぁ、魔法少女全員が一致団結していたらワルプルギスの夜に圧勝していたかなぁ？」

「ウォリアーさん！関係ないお喋りしちゃダメですよ！」

等と五人それぞれの話が飛び交う円卓の机には、椅子が一つ余っている。

そこへ座るのが今回のゲストである。

話し声は徐々に大きくなっていくがやがてそれも静まった。

リーン、リリーン…と、ベルの音がなりそれに気付いた五人は口を閉ざしたのだ。

冷たい風が部屋の中に流れ込み、卓上の蝋燭が揺れる。

部屋の中に黒い男が入ってきた。

白髪の頭を隠すようにフードを被り、胸囲から腕には何重にも鎖が縛られ、歩く度にそれが錆びた匂いと音をたてている。

そして盛り上がった鎖の頂点にベルがぶら下げられていた。

顔は痩せ細り、瞼を辛そうに目を開けている。

この男がカースメーカーである。

黒魔術師とも言うべきだろうか。

不気味なその姿にウォリアーまでもが緊張に走った。

（ただならぬ気配…。）

（これがカースメーカーか。）

（まるで亡霊だ。）

（コイツ、生きてんのか？）

（…あ、足が震えちゃう。）

カースメーカーは椅子に腰かけ重々しく口を開いた。

「あなた達がＫｉｎｇｄｏｍか？」

「う、うぬ！そなたの力が如何なものなのか、無礼を承知で見せていただきたい！」

「…私の力を見せればいいのだな？」

「…うぬ！」

カースメーカは「承知した。」と言うと、大きく深呼吸をした。

（始まるか…。）

（…！）

（なんという畏れだ！）

（ヤバイ、な…！）

（恐い・・・！）

「はい、お招きありがとうございます。改めましてカースメーカーと申します。どうぞ本日はよろしくお願いします。」

ペコペコとお辞儀をする語り手に、一同はズッコケながらもバラバラに一礼を返した。

「私嬉しいんですよぉ。実は一度南国に来てみたくて、こうして仕事を通じて実現してくれて本当に嬉しいです。これも一重に皆さんのおかげですよ、本当にありがとうございます。」

（これのどこが呪言なのだ？）

（まるで落語だ・・・。）

（ただの話上手なオッサンじゃねえか・・・？）

「実はここに来るまでに海都のお魚料理を食べてみたんですけどねぇ、やっぱり美味しいですよね。

そんなに高いお魚じゃなかったんですけど、エトリアで食べた高級魚よりも美味しいですよここのお魚。

やっぱりね、お魚は新鮮なのが一番ですよね。

綺麗な海で育った魚を新鮮なまま食べられるなんて、皆さんが羨ましいですよ。

ただね。

気をつけておいてほしいのが、海都は海水浴も盛んだから水難事故が多いらしいんですよ。

綺麗な海で泳ぐのは気持ちいいですけど、やっぱり海ですからね。一つ間違えただけで溺れちゃう。そして命を落としちゃうんですよね。」

お魚について語る時まで明るかった声の調子が、徐々に徐々に落ちていく。

カースメーカーは一同の顔を見回し、鼻でゆっくりと息を吸い、腹へと空気をためた。

そして話を続けた。

「私ね。

皆さんに水難事故に気をつけてって言ったんじゃないんですよ。

海に浮かんだ溺れた人をね。魚はエサだと思って食べちゃうんですよ。

そうすると希に、お魚が調理されて、自分が食べているお魚の中から、人間の髪の毛が絡み付いていることがあるんですってね。」

・・・

「皆さんは観光客じゃなくて冒険者だから、あまり地元料理を満喫する時間はないかもしれませんが…、そういうこともたまにあるみたいなんですよ。南国では。」

そこでカースメーカーは目の前に置かれた湯飲みを口にあてた。

（今のは…笑う所だろうか？）

（もうお魚さんを食べられない・・・。）

カースメーカーの話が続く。

「石川県のとある旅館の話なんですけどねぇ。」

（おい！石川県ってどこだよ！？）

（わ、わかりません・・・。シノビさんの出身地じゃないですか）

「最近、石川県の旅館を舞台にしたアニメが流行ったということもあって、一時的とはいえ、お客さんの数が激増しているらしいんですよね。

そこに泊まりにいった友人の話から聞いた話なんですけどね。

その友人、まぁ仮にＡさんとしておきましょうか。

Aさんはけっこう行き当たりバッタリで動く人でね。

事前に予約を取らずに、そのアニメのモデルになった旅館に泊まりにいったんですよ。

電車で揺れること三時間、私鉄に乗って一時間かけてようやくたどり着いたっていうんですよ。

旅館に着いたら、もうどっぷり日も暮れて、当たり真っ暗。

さっそく宿を頼もうと旅館へ入ったんですけど、部屋が満室だったんですよね。

ただ今から帰るにも電車が無い。

Aさんも引き返せないから、フロントで頼みこんだんですよ。どうしても今晩泊めてくれって。

さすがにそこまで頼まれると、お客さんを帰すかわにもいかないから、「じゃあ、別館の小部屋でもよろしいですか?」ってフロント係が言ってAさんも喜んだ。

「まぁ、予約をしなかったから仕方ないか。泊めてくれるだけありがたいや。」っていうことでね。

そこから係に案内されて、本館の中を少し歩いて、細い廊下をグネ

グネ歩いた先に、部屋があった。

スーッ

と引き戸を開けると、中は立派なお部屋だったんですよね。

「なんだ普通のお部屋じゃないか・・・。」

別館の小部屋っていうから、てっきり従業員が寝泊まりするようなお部屋かと思ったんですけどね、中はお客さんを泊めるような立派なお部屋。

床の間もあるし、額縁もあるし、机も柱も鏡もとても立派なものだった。

座ってみると、畳のいい香りがするんですよね。

「ここは本当に別館なんですか？」

聞くと「・・・ええ。不便なお部屋でしょう？」って案内係が答えた。

荷物を置くと、案内係は「ご夕食は食堂で。お風呂は本館に大浴場があります。ご用がありましたらお呼び下さい。」って言い残してそそくさと出て行った。

そのあと、Aさんは食事をとって、大浴場の露天風呂を満喫して、

部屋に戻った。

Aさんが例のアニメの中で一番好きなシーンが、朝日が昇る前の旅館の建物全体が映るシーンなんですね。

だから早起きして、朝日が昇る前の本物の旅館の姿を撮影したかったらしいんですよね。

タンスから自分で布団を引いて、さぁ歯を磨いて寝ようかと思って歯ブラシを取り出して、手洗い場の鏡の前に立った。

シュクシュクシュクシュク・・・。

って歯を磨いて、口をすすいで、ザーって水を流して顔を上げた。

？

鏡の中には自分の顔が正面に映っている。

そしてちょうど両肩の後ろにね、和室が映っているんです。

和室から、この手洗い場につながる板張りの廊下と、畳の床の境目の柱にね、黒くて丸い物が見えたんですよ。

見間違いと思ったけど違う。

確かにその黒いものが、まるで和室からこの手洗い場をのぞきこんでいるかのように、出ているんですよ。

ようく鏡越しに見るとね、それ、人間の頭なんですよ。

この世のモノじゃないってAさんが直感した、その時、ズズッズズズズ・・・って、後ろから畳の上を這う音が聞こえたんですよ。

Aさん逃げたかったけど逃げられない。

だって手洗い場から和室まで細い廊下の一本道なんですもん。

逃げたくたって逃げられるわけがない。

ズズズズゥ、ズズズズゥ・・・。

ソレは四つん這いで地面を這って近づいている。

ズズッズズズズ・・・、ペタン、ペタンペタン。

畳の這う音から、床板に触れる音に変わった。

後ろからどんどん音が近づいてくるけど、棒立ち状態のAさんは何

もできない。

足が震えて、振り返ろうにもまるで全身が鎖に縛られたみたいに動かない。

ペタン、ペタンペタンペタン・・・。

鏡の中を進むソレが、鏡に映るAさんの肩に隠れた。

何を思ったのかソイツは、冷たい手でAさんのふくらはぎをつかんで、身体を登り始めたんですよ。

ペタン・・・、ガッ！

叫びたかったけどAさんは叫べない。

ズズ、ズズズズゥ、ズズ・・。

ふくらはぎから、腰へ、手首に二の腕、そして肩と、ソレはどんどん上に登ってきた。

髪の感触が首筋にきた時、鏡に映った自分の肩に黒いものが見えた。

ズズゥ！！

さっきまで地面を這っていたから見えなかったソレの顔が見えた瞬

間、Aさんは初めて叫んだ。

前髪から下の部分、ソレの顔なんですけどね、両目の無い女の顔だったらしいんですよ。

叫び声を聞きつけて旅館の従業員がAさんの部屋にかけつけ、起こされるなりAさんは従業員を通りこして慌てて部屋から飛び出した。

そんなAさんの姿を見て、従業員も慌ててAさんを追って、一体何が起きたのか聞いたんですよね、そしてAさんがなんとか事情を説明する。

従業員が半信半疑なんですよね。

当たり前ですよね、突然そんな話をされても。

でもAさんの姿を見て、嘘をついているようには思えなかった。

従業員は部屋の様子を確認しようと、ちょうどそこを通りかかった中居さんを連れて、部屋に入っていった。

しばらくして二人が出てきた。

「どうだった?」

「いえ部屋の様子はなんともありませんけど・・・。」

「そんな・・・。」

「お客様に伺いたいのですが、『手洗い場で歯磨をしている時に、後ろから女が近づいてきた』と仰いましたよね?」

「ええ・・・そうですけど。」

「そうですか・・・。お客様、どちらを向いて歯磨きをされていました?」

「はあ?」

「いえ・・・、その・・・。」

「なんです?」

「この部屋の手洗い場なんですけどね。」

「はい。」

「鏡無いんですよ・・・。」

それから二秒後、ファランクスが宿中の鏡を叩き割ろうとするが、他メンバー及び従業員達に拘束されたという。

続く？

第八章　いざ皇国へ

南国とは違い、気温の低い北の海域。

決して凍てつくような寒さではないが、二日前まで南国にいたためか、寒気が強かった。

追い風が吹けばそれから身を守るように上着を握ってしまう。

船までが南国の気温に慣れていたのか、バキ、バキと木造の船体が不気味に軋むこともあった。

カーン、カーンと鐘の音が鳴った。

「見えたわ、皇国よ！」

頭上からの声が耳に届くと乗組員達は作業を止め船首に集まるのだった

船の先には、大量の岩石が並んでいた。

明らかにそれらは自然に存在したものではなかった。

岩石は皇国までの領土へ、垂直かつ、左右対称に並べられた。

二列の岩石に挟まれたスペースのみが、皇国の港へ辿りつけるようだ。

開けた港を持つ海都とは正反対である。

「近隣諸国に比べ、皇国の武力は大きくない。こうして海の入り口を狭めることで、国を守っているんだ。」

「って、港から姫さんの居場所までどれくらいかかるんだ？」

「皇国には馬車が走っていて、それに乗れれば、皇国の宮殿まで一時間もかからない。」

「よかった、それならすぐに会えますね。」

「しかし、それは王女がそこにいればの話。別の場所に連れて行かれていたらどうする？」

「…それは。」

「今の目的地はとりあえず宮殿だ。居なければそこから探すまでだろ。」

「そうですね、まずは宮殿をめざしましょう！」

「……そうだな。」

「ところでウォリアー、お前もついて来る気か？」

「当たり前だろ。姫さんを連れ戻せなきゃ、俺はまた船の下働きだ。だから俺も精一杯協力するぜ。」

「…なんだか、お前だと不安だ。」

「な、なんでだよ？」

「人数が多ければいいというものでもないし……。」

「そうでもあるまい。国が相手となれば、これでも足りぬ。ウォリアーに同行させるべきだ。」

「おお、さっすがシノビ！」

「この人数でも、足りぬだろうが。」

「シノビ…。」

（…無理とわかっても、拙者は王女を追うがな。）

「大丈夫ですよ、ここまでだって無事に来られたんですから！」

「ファーマー君？」

「ファランクスさんだって、王女様と一緒にいたいんでしょ？」

「もちろんだ…！」

「僕も命がけの迷宮生活に戻るなら、王女様と皆さんと一緒に冒険したいですから。だからぜったい王女様を連れ戻しましょう！」

舞台は海都から皇国へと移り、それぞれの決意を抱えた四人の、新たな戦いが始まろうとしていた。

…その前に、ここに至るまでのお話をしましょう。

Ｎｏ１　王女と魔女

『ある国境沿いに、二人の兵士が立っていた。

一人は北を見張り、もう一人は南を見張っていた。

今日も警備の時間となり、二人の兵士はそれぞれ見張りを始めた。

見張りを始めてからしばらく時間がたった。

すると北を見張る兵士が、「お前、どうして笑った？」と南を見張る兵士に聞いた。

笑い声が聞こえたわけでもないのに、なぜ北を見張る兵士は、南を見張る兵士が笑ったことに気付いたのか。』

「その謎解き、前に聞いたぞ。」

「あれぇ、そうだったか。」

帽子男の言葉に、青髪は間の抜けた声を返すのだった。

ここは王女を送る戦艦である。

制服を着た水兵達にまぎれ、私服を着た二人の男が船壁に寄りかかっていた。

一人は黒革の上着を着た青髪アシメの男。
もう一人はマントを着、ゴーグルの巻きついた長いツバの帽子をかぶった男。
彼らは皇国が雇った傭兵である。
なのだが、船上では特に仕事も無かった。
出港してからはただこうして、皇国への到着を待っているのだった。

「暇だな。」
「だな。」

「海都で王女の警護をするよりは楽だが。」
「だな。」

「楽だが、苦痛だよ。」
「だな。」

「おい。」
「どうした?」

「お前の意見は?」
「俺も同じく苦痛だ。時間を持て余すのは苦痛でしょうがない。睡眠時間を除いて、かれこれ十七万二千八百秒を無駄に過ごしている。」

「ヒ、時間オタクだな。」
「だな。」

「いつ着くんだろうかな。…これじゃ追いつかれるかもな。」

青髪の横顔を見つめ、帽子男は出港時の出来事を思い出した。

「お前、王女の仲間とやり合ったんだったな。」

何が面白いのかはわからないが、青髪は「ヒヒヒ」っと笑った。

「ギルドメンバーを連れ戻すために駆けつけるとは。ずいぶん義理堅い奴だったな。」

青髪は自分の首を撫でた。

そして突き付けられた短刀の痛みと共に、鋭い目付きの青年を思い出した。

「ヒヒ。あんな奴を仲間にするとは、王女様にはかなりの才能があるようだな。」

「才能か。」

帽子男は上甲板を見上げた。

その先にあるのはガラス張りのドアであり、両開きに開くドアの中は客室であった。

その中に王女と、その世話係が生活している。

出港してから今日まで王女が姿を見せることはなく、部屋の中で何

が行われているのか、知る者はいない。

「余計なモノがあれば、駒になれない。その才能も失うだろうな。」

「あの女なら洗脳もお手のものだろうな。」

「『魔女』だからな。アイツは。」

王女の世話係を、傭兵達は魔女と呼んでいた。

皇国の水兵達も口には出さないものの、彼女がただの世話係りではないことを知っていた。

彼女は傭兵達とは別枠で雇われた人間であった。

『ドクトルマグス』

それが世話係の本職である。

風が吹き、マストが揺れると、炙るようなキツい日差しが傭兵達を照らした。

「暑いな。」

「だったらその革の上着を脱いだらどうだ?」

「却下、これは俺のトレードマークだ。」

「だったな。」

「暇・・・。」

「だな。」

「…。」

「もう一問。」

「は？」

「もう一問、出してくれないか。」

「クイズをか。」

帽子男の頼みに、青髪から新たなクイズが出題された。

『ある晴れた日。

一本道を歩いていると、反対側から赤い洗面器を頭にのせた男が歩いて来た。

洗面器の中にはいっぱいに水が入れられ、男はその水を一滴も溢さないように歩いていた。

理由はなんだと思う？』

帽子男は、まるで既に答えを知っていたかのように、表情を崩すことなく、そのクイズに答えるのだった。

Ｎｏ２　キャビン・ボーイズ

船では働かせるとは言われたものの。

Ｋｉｎｇｄｏｍの三人は帆を張るわけでもなく、見張りをするわけでもなく、床掃除をしていた。

ゴシゴシとタワシでどす黒くなった床をひたすら磨いている。

船はこうして頻繁に手入れをしないと、木の板がだんだんと縮んでしまい浸水の原因になってしまうらしい。

単純作業だが手はぬけない。

しかし掃除場所はかなり蒸し暑く、そして生臭かった。

快晴の青空が広がり、爽やかな風が吹く甲板ならば気持ちよく働けるのだろう。

だが、今彼らがいるのは船底である。

窓一つない、薄暗い密閉空間だ。

風も吹かず、蒸し暑い空気がどんよりと漂う一室なのだ。

「きゃ！」

と悲鳴をあげたのはファランクスであった。

みると一匹のネズミが彼女の足を渡っている最中であった。

「どうしたファラ子？」

「ネ、ネズミィ！」

足をバタバタと振り上げ、追い払おうとするが毛皮の感触はなかなか離れない。

それをウォリアーがつまみ上げ、ファランクスはやっとのことで平静を取り戻すのだった。

「こいつらのせいでしょっちゅう穴を開けられる。」

「船の中にも、ネズミがいるとは意外だ。」

「たくさんいるさ。一匹いたら壁の後ろに百匹はいるぜ。」

「それってゴキ○リじゃないですか？」

「ネズミも似たようなものであろう。」

「なんかこのネズミ、耳の辺りがミッキー○ウスに似ている気がする。」

「な、なんでもいいから早く捨ててくれ！」

ファランクスの叫びを受け、ウォリアーはネズミを片手に階段を上った。

「コイツを捨ててくるからな、その間サボるなよ。」

「御意。」

「は〜い。」

「だ、誰がサボるか…。」

三人の返事にウォリアーは偉そうに返事をし、船底を出ていった。

二人が妙にウォリアーと話が弾んでいたのが気がかりだったが。

ファランクスは黙々と作業を続けた。

タワシをバケツの純水で濡らし、再び四つん這いで床を磨く。

自分のいる一室が、王女が服を奪われ樽に詰め込まれた場所など知る由もないだろう。

この船に乗ればいつか皇国へたどり着くはずだ。

出港時に地図と航路をバリスタに告げ、船は今のところ順調に進んでいた。

だが先に出港した王女に会えるだろうか。

王女が出港した三日後の夜に、この船は出港したのだ。

もしや既に王女は手の届かない場所にいるのでは。

考え始めてしまうと、作業をする手が荒々しくなってしまう。

「おいファラ子！」

「えっ！」

声に振り向くと戻ってきたウォリアーが彼女を見下ろしていた。

「雑過ぎる！」

と彼女の前に屈むと、手本を見せるように、ファランクスが磨き忘れた床を磨き始めた。

「全体じゃなくて、床板一枚一枚丁寧に磨いてくれよ。」

「…ああ。」

「ファラ子？」

「…。」

「どうした。いつもなら『ファラ子って呼ばないでよ！』って言うのに。」

「私はそんな変な声を出さない…！」

「大方、王女のことを心配していたのだろう。」

「シノビ？」

どうやらシノビにはお見通しであったようだ。

「ここで焦っても、何も変わらぬぞ。」

「わかってはいるけど・・・。」

「ファランクスさん、王女様のことが心配なんですね。」

「もしかしたら今頃海に落っこちているかもな。」

「なんだと…！」

ファランクスの目にニヤニヤと笑うウォリアーが映った。

「姫さんって夢遊病持ちだろ、寝っている間に落っこちたりなんて…。」

「無礼だぞ！」

「ファ、ファランクスさん！危ない！」

「な、なんだよファラ子、痛えじゃねえか！」

「落ち着けファ・・・。」

「―落ち着けるか！そしてファラ子って呼ぶな！姫様が夢遊病になってしまったのは、御家族と別れてしまったからだ！」

「へ？じゃあ家族が樹海にいたってことか？」

「ウォリアーさん、それは違うと思います…。」

「姫様は眠りにつくことを恐れている！目覚めたら、また家族が、…皆がいなくなってしまうんじゃないかと…！」

「どういうことだよ？」

「王国が崩壊したのはたった一夜の出来事。つまり生き残った王女は、目覚めた時にたった一人だったということだ。」

「…そうでしたね。」

「孤独の恐怖から未だに姫様は満足にお休みになれない！体も心を休められず、誰かを探すように歩き回ってしまう…！それを知ってか知らずか…！」

「ごめんよ、ファラ子…。」

「お前みたいな奴は、絶対姫様に会わせない！悪影響だ！」

ファランクスは一枚一枚丁寧に床板を磨き始めるが、その手はさらに荒々しかった。

「…悪かった。」

言葉を紡ごうとしたウォリアーだったが、彼女は言葉を返さなかった。

「ファランクスさん！」

「いいんだよ、今のは俺が悪かった。俺も祖国を失う辛さはわかるつもりだ。」

「お主、そういえば…。」

シノビの声を無視し、ウォリアーも黙って自分の作業に戻ろうとした。

「キュー…！キキュ……。」

一匹のモグラが険悪ムードの中に入ってきた。

勢いよく下りてきたつかの間、その場の空気の悪さに感づいてか、走るのを止め、ゆっくりと歩いて近づくのだった。

モグラはファーマーの袖を引っ張り、なにやらジェスチャーを始めた。

「キュルルンキュ。」

「何と言っているのだ?」

「どうしたモグ吉?」

「姫様の船を見つけたのか?」

それらの答えに、モグラは不満げに腕を組み、そっぽを向いた。

「怒るなよ。」

「キュ！」

「あはは…、上に行けって言ったんですよね？」

モグラの顔を覗き込みファーマーが確認すると、モグラは彼へと抱きつくのであった。

その姿に訝しげな表情を浮かべる三人であった。

「なんでおチビには解るんだよ？」

「お、おチビじゃないです！」

「珍妙だな。」

「ふ、普通ですよ！」

「ファーマー君にモグラの言葉が解らないなんて。」

「う、動きをよく見たら解ります！」

「キュー！キュルルルキュキュー！」

「ほ、ほら！話しをしている暇があったらすぐに甲板に出て、舵を取っている船長の指示を聞きに行けって、モグラさんが怒っていますよ！」

「…。」

「……。」

「……。」

いったん仕事を中断すると三人は、モグラとその通訳の背中に続き、階段を上った。

Ｎｏ３　明日に向かって走れ

甲板ではモグラ達が小さな身体に似合わない力を発揮し、マストの手縄を操作していた。

床にしっかりと足をのせ、上体をそらすことで縄を引いている。

まるで綱引きのような光景である。

引っ張られた縄は滑車を通じてマストを動かす。

縄を調整することでマストの向きを変え、船は直進するのだ。

「なんだか、ものすごく視線を感じるんですけど…。」

モグラ達はいたるとこに溢れている。

四人が彼らの横を通り過ぎようとする度、モグラ達は手を止め、その黄色い目でファーマーだけをじっと見ているのだ。

『君には魔物と心を通わす才能がある。』

いつの日か、ビーストキングに言われた言葉を思い出していたファーマーであった。

ヒヨッコモグラの言った通り、船長は上甲板で舵をとっていた。

「お呼びですかぁ？」

とウォリアーが大きめの声をかける。

波に音がかき消されないように、船上では大声で話すのが普通である。

船長は何も答えずただ前方を指差した。

その先、遙か遠くで波をかき分ける一隻の船が映った。

向こうはコチラへ、コチラは向こうに進路を取っている。

このまま進めばちょうど真横に接しすれ違うだろう。

海賊船かと警戒したが、船には海賊旗はなかった。

「よかった。海賊船かと思いましたよ。」

「私もだ。あの船は客船かな。」

「どうだろうか。」

安堵する二人とは対照的に、シノビは首を傾げた。

「客船が近づいただけで、なぜ我らを呼んだ。」

「おぉ、ツンツン頭なだけに頭がキレるな。あれは海賊船さ。」

「海賊船だと？」

「海賊旗がありませんけど…」

驚く二人にウォリアーが呆れたようにため息を吐き出した。

「海賊が、最初から海賊旗を上げて『私は海賊です』って自己紹介してどうする。正体がバレたら相手に逃げられるだろ。」

「その通りだ。普通を装うことが盗みの定石。」

その言葉にシノビが大きく頷いた。

「へ～。さすがによく解っているじゃない。」

見張り台で見下ろしていたバリスタが、四人の前に飛び降りてきた。

「海賊船って言っても普通の船よ。特別に速度が速いわけじゃないの。ギリギリまで普通の船を装って襲える距離に相手が入ったら襲うのよ。」

「そうなんですか。」

「今見ていたけど、船壁の死角に銃を持った連中が隠れていたわ。」

「おーい、無駄話してないでさっさと上がってこい！」

なかなか上がってこない四人に上から指示が投げられた。

「とりあえず詳しい指示は船長から聞いてね。」

Ｋｉｎｇｄｏｍ一行は出港時の誓約を忘れたわけではなかった。

船では働き、海賊との攻防には参戦し、自分の身は自分で守ること。

しかし船上での戦いは三人とも未経験であった。

ファーマーに至っては、戦いの経験すら無いのだが。

「いいか、敵の船と接触するには時間がある。それまでに準備を整えなきゃならない。」

「『戦う』ということですか？」

「戦うのは最終手段だ。俺達は相手の作戦を逆手にとるのさ。」

「逆手？」

「とにかく下っ端のお前達には今から俺の指示通り動いてもらう。お前らは何も考えずに働けばいい。っておい、ファランクス、俺の話を聞いているのか」

「き、聞いています…。」

船長の前に立つ一同だが、ファランクスは船長と目を合わせることを避けていた。

「フン、まぁいい。」

そして船長からＫｉｎｇｄｏｍへ五つの指示が出された。

指示その一、早急に救命ボートを隠すこと。

「はぁ？」
「どうしてですか？」
「…？」
「どうしたことか？」
「下っ端の分際でごちゃごちゃうるせぇ！タラタラしていると鉛玉食らわすぞぉ！」

銃を構えた船長に四人が一斉に走り出した。

「救命ボートってどこですか！？」
「船首の左だ！」
「あんな大きなものをどこに隠すんだ！」
「船底への金網を開けばすぐに隠せる！」

「おーい！全員で四隅持ったか！？」
「持ちましたぁ！」
「持ったぞ！」
「持った！」

「持つぞぉ！いっせーのーっせ！って持ち上がらなえじゃねえか！」

「うわ～ん！ロープが切れていません！」
「シノビ！こっちも切ってくれ！」
「お主ら、もっと早く気づかぬか！」

「おーい道を空けろモグラ共！！こっちは船長命令で運んでいるんだ！！さっさとどけよ！お前らがいたら運べねえ…ああもう腕がしびれてきたぁ！！」
「モグラさん達、どいて下さい！」
「うわぁ！ファーマー君がお願いしたら一斉に道が開いた！！」
「この機を逃すな早く運べ！」

主甲板の金網部分を開き、救命ボートは一階下にある大砲の保管庫に収められた。

そこですかさず船長から第二の指示が届いた。

指示その二、船底からありったけの木箱と樽を甲板へ運ぶこと。

四人は再び走り出す。

「急げ！急げぇ！！」
「皆さん待ってくださいよぉ！」
「中身が空でもいいって言っていたな！？」
「ファーマー、お主は軽いモノを運べ！」

「階段が狭くて、一度に持って上がれねえよ！」
「バケツリレーみたいにした方がよくありませんか！？」
「名案だファーマー君！！」
「ファーマーはそこで一つずつ荷物を上げろ！拙者達が船底から荷物を運ぶ！」

「急がねえと、海賊が来ちまうぞ！！」
「いったい何のために準備するんでしょう！？」
「きゃぁぁ！ネズミィィィィィ！！」
「落ち着けファランクス！こんな狭いところで暴れるな！！」

「ったくしっかりしろよ！あれ、このネズミ、耳の辺りがミッキー○ウスに似てる…！」
「ひょっとしてさっきのネズミさんですか？」
「……！！（失神中）」
「お主らぁ！！真面目にやれぇぇぇ！！」

主甲板がなんとか木箱と樽でいっぱいとなり、続いて船長から出された指示が以下であった。

指示その三、シノビが舵を取ること

指示その四、ファランクスとウォリアーはビーストキングの指示に従うこと

指示その五、ファーマーはモグラに追いかけられること

「拙者が舵を…！？」
「詳しい事情も含めて、アタシが教えてあげる。」

「俺たちは兄貴のところだな！」
「二人とも今から作戦を話す、ついてきなさい。」
「よろしくお願いします！」

「助けてくださいよぉぉぉぉ！！」
「キュー！」×数十匹
「詳しい事情は後で教えてやる。」
「どういう事情が、意味があるんですかぁぁぁぁ！」
「キュー！！」×数十匹
「まだだ！もっと悲痛に泣き叫べ！」

そんなかんじで、船長達とＫｉｎｇｄｏｍ一行は準備を整えるのであった。

Ｎｏ４　モブキャラの海賊達

こちらはＫｉｎｇｄｏｍ一行に迫る海賊船です。

「舵取りは見えたか？」

と一人の男が言いました。

彼は赤いドレスを着て日傘をさしています。

しかし、女装癖があるわけではありません。

この女装男は囮なのです。

そして囮はこの男だけではありません。

音楽を奏でる楽士や、綺麗な服を着こなし談笑している男達も囮です。

バリスタの言った通り、略奪目的の海賊は獲物が近づくまで普通の船を装うのです。

「舵取りは見えたか？」

最初よりも少し大きな声で女装男は再び言いました。

すると屈んでいた男が望遠鏡から目を背け「見えた。」と言いました。

それを聞き、女装男は持っていた日傘をクルクルと回し始めました。
それは合図でした。

メインマストの見張り台にいた男がそれを見下ろしました。
すると足元から銃身の長い銃を取り出したのです。

船壁の死角に隠れていた海賊達も、銃の火縄に火をつけたり、手持ちの斧を確認していました。

中には火炎瓶やマキビシをもっている男もいます。

海賊達が戦闘準備を整えると、船の速度が落ち始めました。

見張り台にいた男が望遠鏡で獲物の船を見ました。

お互いの船がだんだんと近づくにつれて、相手の船内がよくわかりました。

高い船壁に隠れた甲板には、大量の積み荷があります。

同時に、船の乗組員がほんの数人であると確認し下に合図を出しました。

合図を終えると彼は足元から銃身の長い、マスケット銃を構えました。

高いこの場所から銃を構えれば、相手の船のどこであろうと狙えます。

しかし海賊が最初に攻撃する場所は一つです。

男は舵を握っている黒服の男を狙いました。

操縦者を負傷させれば船はコントロールを失ってしまいます。

仮に狙いが外れても、舵に向けて威嚇攻撃をすることで、船員を舵から遠ざけ操縦不能にさせ混乱を招くことができるのです。

銃の標準を黒服に合わせます。

風と波の揺れから船は揺れるものです。

しかしメインマストに設けられた見張り台となると、その揺れも一段と大きくなります。

あえて狙いを足元にし、火蓋を切りました。

そして引き金にゆっくり指をあて、

パウン

と音がなり、鉛玉が放たれました。

マスケット銃を下ろすと、続けて腰のベルトにありったけ差した銃を取りだし、次から次へと舵へ向けて発砲しました。

舵を取っていた黒服は逃げたのでしょうか。

姿が見えませんでした。

どうやら舵を取っていた黒服は身の危険を感じ逃げてしまったようです。

まるで煙のように。

威嚇射撃を狼煙に海賊達は一斉に雄叫びを上げ、そこで初めて海賊旗を上げました。

黒地の海賊旗には、砂時計を持った悪魔が描かれていました。

悪魔は『恐怖』を、砂時計は『降伏すべき時間が迫っている』ということを意味しています。

それを背中に幾人もが船壁へと押しかけました。

皆が皆、悪人顔でした。

罵声を上げたり、発砲したり、爆竹をまいたりして相手の船を精一杯威嚇していました。

海賊旗とこうした威嚇は、相手の船を混乱に陥れるための心理作戦です。

ここで相手が降伏すればしめたものです。

お互いの船首がすれ違いました。

船同士が作り上げる波がぶつかり、船の揺れは一層大きくなります。

真横に接した獲物の船は、手を伸ばせば届くような距離にあります。

しかし船壁が高く、簡単には突入できそうにありません。

海賊達は自分達の船の壁に足をかけました。

自分達といっても、その船自体も略奪品かもしれませんが。

そこで斧を振り上げ、それを相手の船に思いっきり打ち付けました。

木片が飛び散るのを、頭に巻いた布きれで防御し、次々と斧を打ち付けました。

間髪入れずに海賊達は跳躍と共に、斧の柄を握りしめ、その勢いで身体を持ち上げ相手の船へと手をかけました。

船壁へとぶら下がった海賊は、両腕の力だけで身体を上げ、相手の船へと上陸しました。

力の無い者達はかぎ爪のついたロープを放り投げ、ロープを伝って上陸します。

途中、相手の船が大きく揺れ、背中に波があたりましたが、それを気にせず一気に突入しました。

高い船壁をのぼり、どれ程の積み荷をのせているのか、とワクワクしながら足を踏み入れました。

ロープやらビール瓶が地面に散乱し、誰かが生活していたかのような光景です。

しかし人の気配がありませんでした。

よく見ると、メインマストの影に一人の少年が辛うじて立っていました。

少年の足は疲れ切ったかのように震え、今にも泣き出してしまいそうな顔です。

海賊は他に人がいないか見回しますが人影はありません。

全員が乗船したことを確認すると、ドレスを着た女性男が少年へと歩みよりました。

姿に似合わず彼がリーダーのようです。

顔を引きつらせ後退りする少年に「殺しはしない。」と伝えこう聞きました。

「他の乗組員はどうした?」

すると少年は、「…。」と言いました。

「なんだと?」

「……ぁ。」

「しっかり話せ。」

「皆さん…逃げちゃいましたぁ…。」

「は?」

「逃げちゃったんですぅ!」

泣き出す少年を見下ろし、女装男は困ったような顔をしています。

「お前一人を置いてか?」

「はいぃ…。」

「…。」

「皆さん、積み荷をのせて…ボートで逃げちゃいました…。僕は乗るスペースが…無いからって…置き去りに…。」

確かに救命ボートがこの船にはありませんでした。

泣き出す少年に、後ろの海賊達もざわつき始めます。

「可愛そうに…。」

「あんな小さな子を置いて?」

「酷い…。」

「なんて白状な…！」

口々に同情の声をあげる犯罪者達、意外に人格者なのかもしれません。

海賊の中で唯一不信に思っていたのは女装男でした。

しかし少年の泣きじゃくる顔も、震える足も演技とは思えませんでした。

でもしかし、ぐずぐずしていれば海軍が来てしまうかもしれません。

そこでようやく指示を出しました。

「野郎共！！残った積み荷を運んで引き上げだ！！」

「「「「「サァーーーー！」」」」」

海賊達は積み荷を運ぼうとしますがビクともしません。

「重てぇ、何が入っているんだ？」

「お前の細腕で箱が持てるか髭野朗！」

「なんだと?髭顔はお互い様だろうが!」

「どけ、この俺のマッスルボディで運べない箱はこの海に存在しない。フン!」

「ほらな、重いだろ?」

「…台車持ってきてよ。」

箱の回りにはさらに人数が集まります。

「あ、あのあの!」

「ん?」

少年の声に振り向くと「僕はこれからどうなるんですか?」と不安げな声を出します。

「安心しろ。捕虜は傷つけずに陸地まで送り届けるのが掟だ。」

海賊の不文律を話す女装男に少年は驚いたような顔をします。

「そうなんですか?」

「そうとも。俺達も使い捨てられた人間だ。お前の気持ちもよくわかる。」

「は、はぁ…。」

ドレスは綺麗ですが、女装男の顔は、傷とアカで汚れていました。

「運ばずに中身だけを運んだ方が早いぜきっと…。」

「開けようにも開かないんだって…。」

「フン、だらしのない連中め！」

「な、なんだと！？じゃあお前がどうにかしろよ？」

「だが、断る。不男の頼みは受けぬ。」

「…何それ？」

「えらく頑丈だが、中身はいったい…。」

海賊達は濡れた手を拭きながら、やっとのことで木箱を開けました。

女装男は少年にこんな話を持ちかけました。

「そうだ。働き口が無いなら、雇ってやろうか。」

「え！？」

「海賊生活も楽じゃねえが、少なくとも身分や階級に縛られることは無い。」

「でも…。」

「無理にとは言わない。まぁ船の中でゆっくり話そー。」

その途中悲鳴が上がりました。

見ると箱から魔物が飛び出し海賊達に襲いかかっていたのです。

全て小さな魔物でしたが、力は海賊達の比では無く、あっという間にコテンパにされていました。

魔物から逃れた海賊達は、いったいどこから現れたのか、銀髪の少女と赤髪と黒装束の男の三人に懲らしめられていました。

女装男は反射的に銃を取りだしましたが、そこで気付きました。

これは罠だと。

銃の火縄が海水に濡れていたため発砲できないのです。

この船に上陸する際になぜか船が揺れ、波が当たったことを思い出しました。

現に彼らは今、水浸しなのです。

女装男は直感しましたがもう遅かったようです。

振り向くと少年を庇うように赤い獅子の画面が立ちはだかり、持っていた槍を喉につきつけていました。

上甲板からは二丁拳銃を構えた男と、巨砲を構えた女が見下ろしていました。

女装男は武器を捨てました。

海賊達は負けたのです。

Ｎｏ５　正義の分配

海賊達は両手を頭に膝をつき、横一列に並ばされていた。
コチラの兵力と戦略を見せつけられ観念したのか、抵抗する様子は見られなかった。

「頭は誰だ？」

と銃を片手にした船長が聞くと、女装男が前に出てきた。
船長が指示を出しバリスタの銃口に背中を突かれながら、女装男は反対側の船右へ歩かされた。
海賊達はドレス姿の背中を見守るように顔を上げている。
いつのまにか、頭が歩く先に渡し橋が設置さていた。
無論大海原に浮かぶ船の周りに陸地はない。
グラグラと揺れる橋の先には青空と水平線が浮かんでいるだけであった。

「あのあの、海賊のお頭さんは海に落とされるん…ですか？」

「それはこれから決まる。」

淡々と答えるウォリアーに、ファーマーも離れていくドレスの背中

を見つめた。

相手は海賊である。

今まで幾つの船を襲い、人を傷つけ、略奪したのか計り知れない。

だが女装男はファーマーへ言った。

『陸地へ送り届けてやる。なんなら雇ってやろう。』

相手は本当に悪人なのだろうか。

「あの…！」

「心配するな。船長達も掟がある」

「掟？」

おうむ返しをするファーマーを無視し、ウォリアーは目配せをする。

船長は海賊一人一人に質問していた。

「お前達の頭はどんな人間か。」

「お前達は自分の意思で船に乗ったのか。」

「報酬の分配はどうなっている。」

「捕虜の扱いは。」

と、海賊達に顔を上げさせ順々に聞いていたのだ。

嘘がないようにするためか、同じ質問を繰り返すこともあった。

指名された海賊は船長を見上げ、次々に答えた。

「頭は掟に厳しい人だが、部下を蔑むような人じゃない。」

「この俺のマッスルボディをもってしても、お頭の愛は語れない。」

「略奪の取り分は船長と航海士が二倍、俺達は均等だが、負傷した者や最初に船を発見した者には特別手当てがつく。」

「捕虜は殺さず、可能なかぎり希望地へ送りとどけるのが頭の決めた掟だ。」

目を丸くしたのはファーマーだけではない。

終始海賊達へ軽蔑の目を向けていたファランクスも、槍の先を甲板に下ろしていたのだ。

これが本当に海賊なのかと。

一通り質問を終えた船長は合図を出し、バリスタは銃を下ろした。

「お前さん達のお頭は、無罪だ。」

女装男は部下達の前に連れ戻された。

「『正義の分配』とは時代遅れだな。」

女装男が吐き捨てた。

「法に乗っ取ってお前さん達を裁くつもりは無い。だが悪徳な頭は見逃せない性分でな。」

「そうか。俺もだ。」

「捕虜に対する掟に免じて、お前さん達を見逃すことにする…。」

「それはありがたい。」

「だが船は貰う。」

「それは困る。」

船長は女装男を無視し、下っ端四人とバリスタに指示を出した。

海賊船を爆破せよ、と。

「指示が出たわ、行きましょう。」

バリスタが火薬樽と導火線を小脇に抱え船を下りようとする。

「いささか危険ではなかろうか？」

モグラ達がいるものの、その間船には船長とビーストキングしかいなくなるのだ。

「俺たちも船を壊されちゃ困るぜ。」

そして海賊達もどよめき始める。

「安心しなよ、海賊達は町へ送るし、船長とビーストなら大丈夫だから。」

バリスタは網目状のロープを下ろし、海賊船へおりた。

不安に思いながらも、四人はバリスタへと続いた。

海賊船の様子は自分達が乗っていた船となんらかわらなかったが、甲板には楽器やビール瓶が溢れかえっていた。

No6　掟

「船長さんはいつもあんなことをするんですか？」

「うちの船長だけじゃないわ。捕虜に対してああする海賊は大勢いるわ。掟の一種なのよ。」

「姉御、設置したぜぇ。」

船底から出てきたシノビとウォリア―を先にいかせ、バリスタ達は点火準備にかかる。

「まぁ、全ての海賊が同じ掟を持っているわけじゃないけどね。」

「どうしてそんな掟ができたんですか？」

「話すと長くなるわ。」

バリスタは導火線と導線の二種類の縄を取り分け、それを丁度いい長さに切り分けた。

「海軍の船や商船になると階級制度が厳しいの。中には意味も無く船員に重労働させたり暴力を与えたりもするわ。」

「海軍さんの船でも、ですか？」

意外だった。

正義のために戦うという印象のある海軍がそんなことをするとは思

えなかった。

「海軍の船が一番辛いわよ。不眠不休かつ無給労働、逆らえば海に落とされる。」

だがバリスタの言葉に嘘があるとも思えなかった。

「そ…。」

「…。」

導火線を導線に繋ぎ、それをゆっくりと甲板におく。

「ちなみに海軍の下っ端の船員は強制招集された人間ばかりよ。国が海事力を強化したいがため、有無を言わさず連れて行くの。それを拒めば、国家反逆罪になるから表面的には逆らえないのよ。むかつくわよね。」

バリスタの口調が少し感情的になっていた。

その姿が怖くなり、ファーマーは掟について尋ねたことを後悔したが、口調が荒くなったのはその時だけであった。

「商船の船乗りも同じよ。商人は船員を動力にしか思ってないからさ。鎖に繋いで船を漕がせて、疲れて動けなくなった者は使い捨てるが常識よ。」

導火線に火がつくと、端末が灰色に燃え、縄は徐々に短くなっていく。

「それが嫌で船乗りは海賊になる。そして船を襲う。すると同情のよしみで下っ端の船乗りを優遇するのよ。だけど、船長に対しては待遇をどうするか厳しく決めるのよ。」

それが正義の分配だとバリスタが言い、ファーマーは女装男が優しい言葉をかけてくれたことを思い出すのだった。

「もし僕が船乗りさんで、皆さんが逃げていたら、あの人達についていったかも…。」

ファランクスが隣にいることを忘れ、口を滑らしたファーマーだったが、彼女は何も言わなかった。

「…もしかしたらですけど。」

導火線は呆れるほどゆっくりと燃えていた。

「そうよね。ついていっちゃうわ。」

バリスタは立ち上がると、ロープへ捕まり船へと戻り始めた。

ほおっておけば火は、火薬へ到達し爆発するだろう。

「バリスタさんはどうして海賊に?」

ファランクスが初めて口を開くが、バリスタはただ笑って首を振り「急ぐわよ。」と言うのだった。

導火線は途切れ、火は導火線へと結ばれていた導線へと引火した。

カタツムリのように鈍かった火が数メートルに伸びた導線を一気に走り抜け、火薬へと引火した。

だが派手な爆発音はならなかった。

バリスタ、ファランクス、ファーマーが船に上がると、二匹の大鷲が甲板に足を下ろしていた。

五メートルはあろうか、こんな巨大な鳥をいつの間に呼び寄せたのだろうか。

海賊達は二匹の背中に分乗させられていた。

全員が乗るとビーストキングが指示を出し、大鷲は音もなく翼を広げ、甲板から足を離して飛んでいくのだった。

「トルトゥーガへ連れていったの？」

「ああ。比較的まともな連中だったんでな。更正の余地はあるだろう。」

「そう。」

ファランクス達はただ黙ってその光景を見上げていた。

「さぁ海賊退治は終わりだ。野郎共、仕事に戻れ。」

隣では船が沈んでいた。

船底を破壊された船が沈み始めると、海上に大きな渦が発生し、コチラの船も揺れ始める。

船はメインマストを軸にコマのように揺れ、海中へと沈んでいる。

透き通る藍色越しに海賊旗が揺れ、甲板は光の届かない部分にまで沈み、海賊達が奏でていた楽器だけがしばらく浮いていたのだった。

Ｎｏ７　俺達は善人じゃない

掟は捕虜に対する扱いだけでなく、生活習慣に関するものもある。

例えば

ケンカが起こった場合大陸に上陸してから行うこと、

賭け事はしないこと、

消灯時間を過ぎたら寝ること、等だ。

航海においては仲間割れが生じることが嵐よりも恐ろしいとされている。

海に孤立する船上で険悪な空気が漂い始めたとしても逃げ場がない。

もともと船上は恵まれた環境ではないにもかかわらず、そんな環境にいれば士気も下がり、進路も定まらなくなってしまう。

よって掟とは船上でのトラブルを防ぐことにも役立つのだ。

そして今、その掟を破る者がいた。

消灯時間が過ぎたにもかかわらず、船底から甲板へと上る人影があった。

階段から頭だけを出し周囲を探る。

暗雲が漂う空からは月の明かりは届かず、甲板は墓場のように静かで、目を凝らしても閉じても景色は変わらなかった。

海都から北上しているためか、懐かしい寒さが身体を包んでいた。

マストの見張り台にいたバリスタも気づくことはなかった。

羽織ったガウンを強く握り直し、船長室へと小走りで向かう。

ガラス張りの船長室を覗くと、蝋燭の明かりが揺れているのが見え、その隣に船長が座っているのがわかった。

掟を承知でここまできたはずが入室をためらってしまった。

船長に会いに来たのは間違いない。

だが冷静に考えると、彼になんと言うべきか整理がまったくついていなかったからだ。

「誰かいるのか？」

まごまごしている間に、船長に気づかれてしまった。

しまったと思うが時既に遅い。

部屋の中からブーツの音が近づき、中から握られたドアノブが目の前で回った。

乾いた音と共にドアが開き、二人の影が甲板に出来上がるのだった。

掟違反者の顔を見た瞬間、船長は驚いたような顔をした。
生真面目なファランクスが掟を守るとは思えなかったらしい。

「消灯時間は過ぎているぞ。」

ファランクスは何も言わず、ただ黙っていたが、しばらくして船長を見上げ口を開いた。

「誤解・・・していました。」

「誤解？」

ファランクスはバリスタから教わった海賊になる人々の経緯について話した。

皆が皆、悪に染まりたかったため海賊になるのでないということ。

この世界では一般常識だが、皇国での教科書教育の彼女はそれを知らず、海賊と聞けば嫌な顔を隠さなかった。

そしてそれは船長に対しても同様であった。

だが船での生活でそれは誤りだったと彼女は気づいたようだ。

『奪い取り、捕虜は皆殺し』

それが海賊の不文律であると思っていた彼女だったが、今日の襲撃とバリスタからの聞かされたことが、彼女の認識を変え、己が世間知らずであったと痛感させたのだった。

「上手く言えませんし、姫様への暴力も許せません。・・・ですが、貴方のことを誤解していました。そのことを、・・・なんというか、・・・謝りたくて。」

彼女なりの謝罪をこめ、船長へと頭を下げた。

だが返ってきた言葉は「本っ当に乳臭い護衛だ。」であった。

船長は明らかに呆れている様子だった。

「そんなことをわざわざ言わなくていいんだよ。相手を誤解して憎んじまうのは仕方ないことだ。」

「ですが・・・。」

「確かに、海賊の全てが凶悪な連中っていうわけじゃない。だが覚えておけ。今日会った連中は比較的まともな方だ。お前さんの想像している通り、退屈しのぎに捕虜を皆殺しにする連中もいるさ。」

船長の眼帯が黒く光った。

「そういうイカレタ連中は真っ先に大砲をぶっ放すし、船の雰囲気も独特だからすぐに見分けがつくが。」

「・・・。」

「いいかファランクス、相手が悪か正義か、仲間か敵か、魔物か人間か。そういう風に必ずしも区別できることなんてありゃしない。

お前の正義が悪と思われることもあるし、仲間か敵か分からない奴だっている。
お前さんの性格じゃ納得できないかもしれないが、世の中は白黒はっきりつくことばかりじゃない。俺達（パイレーツ）だって、絶対悪でもないが善人でもない。ただそれだけのことをお前が知っただけだ。中途半端な経験だけで相手を知った気になると命を落とすぞ。」

ファランクスは何も言えなかった。

「言いたいことはそれだけか？」

と聞かれ、彼女は何も言わず、その場を立ち去ろうとした。

ノロノロと歩き始めた彼女の背中を船長が呼び止めた。

「おい、こっちへ来い。」

「・・・なんでしょう？」

「頭を出せ。」

「はい？」

「いいから。」

「・・・？」

ゴン！！

船長は振り返った彼女の頭に、ゲンコツを放ったのだった。

「いった～い！！」

「硬え・・・なんて石頭だ！」

「何するんですか！？」

「掟に背いた罰だ！消灯時間が過ぎているだろ！！」

「姫様にもぶたれたことないのにぃ！」

「・・・ハン。てめえみたいなガキは殴って教育する方がてっとり早いんだ。」

わかったらとっとと寝ろ、と吐き捨て、船長はドアを閉めた。

外からは無意味にドスンドスンと大きな足音が聞こえる。

真面目で大人びてはいるが、やはりファランクスも子供だ。

だが、幼い彼女がどうして王女の護衛を任せられたのか、ふと気になった。

バリスタから聞いたが、王女の祖国は崩壊し皇国で育てられたらしい。

つまり親も家族もいないのだ。

一方ファランクスは皇国の人間のようだが、先ほどの台詞が妙に気になってしまった。

『姫様にもぶられたことないのにぃ！』

「姫様にも、か・・・。」

船長は海図とコンパスがのった机を見、皇国への進路を確認するのだった。

Ｎｏ８　不審船

北風に対向するように船は進んでいた。

もうじき皇国へたどりつくという寸前、一席の船が道を遮るかのように漂っていた。

その船は小型の帆船で、主甲板のみで構成されており、一見すると釣用のボートにも見える。

そして妙なことにその船には、黄色い旗がなびいていたのだ。

紺色の海上ではその色が目立っている。

まるで通りかかる船に気づいてほしいかのようだが、さらに妙なことにその船には誰も乗っていなかった。

あるのは木箱だけ。

ちょうど船の真ん中に、一つの木箱が置かれていたのだ。

船長の指示をうけ、ちょうど手の空いていたファランクスとシノビがその船へと下りことになった。

「気をつけろよ、ファランクス。」

網目状のロープを伝い弱々しく揺れる不審船へと下りた。

見たところ船には外傷は無く、シノビの嗅覚いわく人が乗っていた

気配も無かった。

ただ、木箱が置かれているだけだった。

警戒しながらもシノビはその木箱を開けた。

蓋はいとも軽く開いた。

そしてその中は、真っ黒な服が詰め込まれていた。

襟元のついた全身を覆うコートのような上着と、四角くい平らな学識帽が入っていた。

シノビは首を傾げ、ファランクスは目を見開いた。

「これは皇国の正装だ。」

それを聞き、シノビはさらに首を傾げた。

その四着の黒い上着と帽子からは、人の臭いがしなかったのである。

つまり、木箱に入っていた服は誰も着用したことが無いということである。

見下ろしていた船長に箱の中身を伝えると彼も首を傾げた。

だが冷静に考え直しそれらを頂戴すると決定した。

皇国に潜入する以上、それらの服は正体を隠すための貴重なアイテムとなるのだ。

だが、なぜ都合よく皇国の服を乗せた船が漂っていたのか。

服を頂戴し、船は再び北風へと進路を向けた。

そして不審船が見えなくなったころ、船上に鐘の音が鳴り響き、Ｋｉｎｇｄｏｍは王女が連れ戻された国へと到着するのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0148v/

世界樹の迷宮？　～百日間まってやる～

2011年12月28日05時53分発行